岩手県埋文センター文化財調査報告書第80集

小屋畑遺跡発掘調査報告書

国道45号線久慈バイパス関連遺跡発掘調査

(財)岩手県埋蔵文化財センター
建設省三陸国道工事事務所

岩手県埋文センター文化財調査報告書第80集

小屋畑遺跡発掘調査報告書

国道45号線久慈バイパス関連遺跡発掘調査

序

本県には数多くの埋蔵文化財包蔵地が存在し、昭和59年３月における遺跡台帳では6235個所が登載されております。

一方、地域開発促進のなかでも道路網の整備は本県の重要施策となっており、これらの開発行為と、貴重な文化財を保護・保存していくこととの均衡を保つことは私達の責務であると思います。

本報告書は、県北東部にある久慈市内を通る国道45号における交通渋滞緩和を目的として建設される久慈バイパスに関連し、昭和58年度発掘調査した小屋畑遺跡の結果について収録したものであります。

調査の結果、発見された遺構・遺物の検討や熱残留磁気年代測定の結果から遺構の奈良時代から平安時代にかけての時期的細分が可能となり、遺跡の集落変遷や文化の推移についての好資料を得ることができました。

この報告書が研究者のみならず、広く一般のかたがたにも活用され、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

これまでの発掘調査から報告書刊行にいたるまでの間、ご援助、ご協力を賜わりました建設省三陸国道工事事務所、久慈市教育委員会をはじめ関係各位に感謝するとともに、今後のご指導・ご協力をお願い申し上げます。

昭和59年６月

財団法人　岩手県埋蔵文化財センター

理事長　金　子　彰　吉

財団法人　岩手県埋蔵文化財センター組織

役　員

理事長	金子彰吉	（県教育長）
副理事長	尾沢重遠	（県教育次長）
常務理事	熊谷正男	（県立埋蔵文化財センター所長）
理　事	吉田良和	（県農政部次長）
〃	高橋健之	（県林業水産部次長）
〃	穂積昭慈	（県土木部次長）
〃	板橋　源	（県立博物館長）
〃	草間俊一	（県立盛岡短期大学長）
〃	小形信夫	（元常務理事）
監　事	佐藤公志	（県教委総務課長）
〃	小野寺英二	（県教委財務課長）

職　員

所　長	熊谷正男
副所長	宮　英一
所　付	吉田　努
〔総務課〕	
総務課長	菊池　勉
庶務係長	阿部詔夫
主　事	戸草内幸男
〃	立花多加志
技能員	佐藤春男
〔調査課〕	
調査課長	近藤宗光
主任専門調査員	昆野　靖
〃	国生　尚
専門調査員	片方宗明
〃	長沼　彬
〃	大原一則
〃	渡辺洋一
〃	田鎖寿夫
〃	佐々木嘉直
〃	栃沢満郎
〃	平井　進
専門調査員	中村良一
〃	田村壮一
〃	岩渕　久
〃	光井文行
〃	玉川英喜
〃	石川長喜
〃	三浦謙一
〃	高橋与右衛門
〃	高橋義介
〃	佐々木清文
〔資料課〕	
資料課長	名須川溢男
専門調査員	菊池利和
〃	工藤利幸
〃	中川重紀
〃	酒井宗孝

例　言

1. 本報告書は、岩手県久慈市長内第19地割に所在する小屋畑遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は国道45号線久慈バイパス建設に伴う緊急発掘調査である。調査は建設省三陸国道工事事務所と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は昭和58年8月4日から11月8日まで行われた。
4. 調査面積は、2,900㎡である。
5. 発掘調査は、田鎖寿夫、栃沢満郎が担当した。
6. 検出された遺構は、次のとおりである。

古代竪穴住居址	11棟
住居址状遺構	2棟
ピット	20基
陥し穴状遺構	6基
焼土遺構	2基

7. 発掘調査に際して、久慈市教育委員会からご協力をいただいた。
8. 本報告書の執筆にあたり、石質鑑定は佐藤二郎氏(岩手県立大船渡農業高校教諭)、熱残留磁気年代測定は松山　力氏（青森県立八戸高等学校教諭）に依頼した。
9. 遺構内から出土した土師器について、高橋信雄氏（岩手県立博物館）からご教示をいただいた。
10. 本報告書の執筆は、田鎖寿夫が担当した。住居址カマド焼土の熱残留磁気測定結果についての執筆は、松山　力氏に依頼した。
11. 野外調査は作業員として、地元民である下記の方々から協力を得た。

馬場満信、上神田武志、岩崎利八、中村寛一、勝田粕太郎、西前　実、上神田ツエ、中村キヨ、勝田リエ、上神田リヨ、岩崎テル、中村ヤスエ、林下キク、小屋畑恵子、柏崎ソデ、林下ハナ、上神田文江、上神田シモ、小屋畑ミツエ、上野ヨシエ、中村ヨシノ、川代郷子、浜坂公美子、坂下ひとみ、中野文子、柾木梅子、岩崎ユキ子、小屋畑ナミ。

11. 室内整理作業では下記の方々の協力を得た。

佐藤ヨシ、浅沼光子、藤沢成子、小笠原　淑、佐藤美知子。

本 文 目 次

序

例　言

Ⅰ．調査方法と室内整理の方法

1．調査方法 …… 3

2．室内整理の方法 …… 4

Ⅱ．遺跡周辺の地形と立地

1．地形 …… 6

2．遺跡の立地 …… 6

3．周辺の遺跡…… 6

4．遺跡調査区基本層序 …… 10

Ⅲ．検出遺構と遺構内出土遺物

1．古代竪穴住居址 …… 13

2．住居址状遺構 …… 45

3．ピット …… 46

4．陥し穴状遺構 …… 63

5．焼土遺構 …… 72

Ⅳ．遺構外出土遺物

1．土器類 …… 76

(1)　縄文土器 …… 76

(2)　弥生土器 …… 79

(3)　土師器・須恵器 …… 79

2．土製品 …… 79

3．石器 …… 80

Ⅴ．まとめ

1．遺構と遺構内出土遺物 ……100

(1)　古代竪穴住居址 ……100

(2)　住居址状遺構 ……102

(3)　ピット ……102

(4)　陥し穴状遺構……103

(5)　焼土遺構 ……103

2．遺構外出土遺物 ……103

図 版 目 次

第１図　岩手県全体図 …… 1

第２図　小屋畑遺跡位置図 …… 2

第３図　土師器・須恵器の器面調整・計測値の表わし方 …… 5

第４図　遺跡周辺の段丘区分図 …… 7

第５図　遺跡周辺地形と地形断面図 …… 8

第６図　周辺の遺跡分布図 …… 9

第７図　土層柱状図 …… 10

第８図　遺構配置図 ……11・12

第９図　AII－1住居址(1)…… 15

第10図　AII－1住居址(2)…… 16

第11図　AII－1住居址(3)…… 17

第12図　AII－1住居址出土遺物(1)…… 18

第13図　AII－1住居址出土遺物(2)…… 19

第14図　AII－1住居址出土遺物(3)…… 20

第15図　AII－2住居址 …… 22

第16図　BII－1住居址(1)…… 24

第17図　BII－1住居址(2)…… 25

第18図　BII－2住居址 …… 27

第19図　DI－1住居址 …… 28

第20図　DI－2住居址 …… 29
第21図　AII－2・BII－2・DI－1・
　　DI－2住居址出土遺物 …… 30
第22図　DII－1住居址(1) …… 33
第23図　DII－1住居址(2) …… 34
第24図　DII－1住居址(3) …… 35
第25図　DII－1住居址出土遺物(1) …… 36
第26図　DII－1住居址出土遺物(2) …… 37
第27図　DII－2住居址(1) …… 39
第28図　DII－2住居址(2) …… 40
第29図　DII－2住居址出土遺物(1) …… 41
第30図　DII－2住居址出土遺物(2) …… 42
第31図　DII－3住居址 …… 43
第32図　DII－4住居址 …… 44
第33図　DII－5住居址 …… 47
第34図　DII－5住居址出土遺物 …… 48
第35図　AII－3・CII－1住居址状遺構…… 49
第36図　AII-51・52ピット …… 50
第37図　AII-53・54ピット …… 52
第38図　AII-55・56ピット …… 53
第39図　BII-51・52ピット …… 55
第40図　BII-53・54ピット …… 56
第41図　BII-55・56ピット …… 58
第42図　BII-57・58・59ピット …… 60
第43図　BII-60・61・62ピット …… 62
第44図　CII-51・52ピット …… 64
第45図　AII-101陥し穴状遺構 …… 65
第46図　AII-102陥し穴状遺構 …… 67
第47図　AII-103陥し穴状遺構 …… 68
第48図　BII-101陥し穴状遺構 …… 69
第49図　CII-101陥し穴状遺構 …… 70
第50図　DII-101陥し穴状遺構 …… 71
第51図　BII-201・202焼土遺構 …… 73
第52図　AII-51・BII-60ピット出土遺物　74
第53図　BII-60・61ピット
　　BII-202焼土遺構出土遺物 …… 75
第54図　遺構外出土遺物(1) …… 82
第55図　遺構外出土遺物(2) …… 83
第56図　遺構外出土遺物(3) …… 84
第57図　遺構外出土遺物(4) …… 85
第58図　遺構外出土遺物(5) …… 86
第59図　遺構外出土遺物(6) …… 87
第60図　遺構外出土遺物(7) …… 88
第61図　遺構外出土遺物(8) …… 89
第62図　遺構外出土遺物(9) …… 90
第63図　遺構外出土遺物(10) …… 91
第64図　遺構外出土遺物(11) …… 92
第65図　遺構外出土遺物(12) …… 93
第66図　遺構外出土遺物(13) …… 94
第67図　遺構外出土遺物(14) …… 95
第68図　遺構外出土遺物(15) …… 96
第69図　遺構外出土遺物(16) …… 97
第70図　遺構外出土遺物(17) …… 98
第71図　遺構外出土遺物(18) …… 99
第72図　年代別住居址立地状況 ……105・106

写真図版目次

写真図版1　航空写真 ……131
写真図版2　雑物撤去作業・土層断面 ……132

写真図版 3　AII- 1住居址(1)……133
写真図版 4　AII- 1住居址(2)……134
写真図版 5　AII- 2住居址(1)……135
写真図版 6　AII- 2住居址(2)……136
写真図版 7　BII- 1住居址 ……137
写真図版 8　BII- 2住居址 ……138
写真図版 9　DI- 1住居址 ……139
写真図版10　DI- 2住居址 ……140
写真図版11　DII- 1住居址(1)……141
写真図版12　DII- 1住居址(2)……142
写真図版13　DII- 2住居址 ……143
写真図版14　DII- 3住居址 ……144
写真図版15　DII- 4住居址 ……145
写真図版16　DII- 5住居址 ……146
写真図版17　住居址状遺構 ……147
写真図版18　ピット(1) ……148
写真図版19　ピット(2) ……149
写真図版20　ピット(3) ……150
写真図版21　ピット(4) ……151
写真図版22　ピット(5)・陥し穴状遺構(1) …152
写真図版23　陥し穴状遺構(2) ……153
写真図版24　陥し穴状遺構(3) ……154
写真図版25　焼土遺構 ……155
写真図版26　遺構内の出土遺物
　AII- 1住居址 ……156
写真図版27　遺構内の出土遺物
　AII- 1住居址 ……157
写真図版28　遺構内の出土遺物
　AII- 1・2住居址
　BII- 2住居址
　DI- 1・2住居址 ……158
写真図版29　遺構内の出土遺物
　DII- 1住居址 ……159
写真図版30　遺構内の出土遺物
　DII- 1住居址 ……160
写真図版31　遺構内の出土遺物
　DII- 2住居址 ……161
写真図版32　遺構内の出土遺物
　DII- 5住居址 ……162
写真図版33　遺構内の出土遺物
　AII-51・BII-60ピット　…163
写真図版34　遺構内の出土遺物
　BII-60・61ピット
　BII-202焼土遺構 ……164
写真図版35　遺構外出土遺物(1) ……165
写真図版36　遺構外出土遺物(2) ……166
写真図版37　遺構外出土遺物(3) ……167
写真図版38　遺構外出土遺物(4) ……168
写真図版39　遺構外出土遺物(5) ……169
写真図版40　遺構外出土遺物(6) ……170
写真図版41　遺構外出土遺物(7) ……171
写真図版42　遺構外出土遺物(8) ……172
写真図版43　遺構外出土遺物(9) ……173
写真図版44　遺構外出土遺物(10) ……174
写真図版45　遺構外出土遺物(11) ……175

表　目　次

表3・4 遺構一覧表（奈良及び平安時代住居址・ピット・陥し穴状遺構一覧表）　……125・126
表5・6 石器計測表 ……127・128

熱残留磁気測定結果目次

○本文目次

久慈市小屋畑遺跡のかまど焼土の熱残留磁気測定結果

1　はじめに ……107

2　測定試料 ……108

3　熱残留磁気の測定 ……110

4　測定結果 ……111

5　永年変化曲線からの年代推定 ……113

6　おわりに ……114

住居址の土器・カマド方向から推定した年代と熱残留磁気測定結果との比較 ……115

○図版目次

第73図　地磁気の要素 ……107

第74図　永年変化曲線（Hirooka 1971） ……109

第75図　偏角一伏角図（広岡、1977） ……110

第76図　磁化方向図 ……116

第77図　磁極の位置 ……116

第78図　平均永年変化曲線とAII-1住の全平均値（①）及びNo.2.No.3
の平均値との対応 ……117

第79図　平均永年変化曲線とAII-2住の全平均値（①）及びNo.1.No.2
No.4の平均値（②）との対応……118

第80図　平均永年変化曲線とBII-1住との対応 ……119

第81図　平均永年変化曲線とDI-1住（No.2.No.3）との対応……120

第82図　平均永年変化曲線とDII-1住全平均値（①）及びNo.2.No.3.
No.4の平均値（②）との対応……121

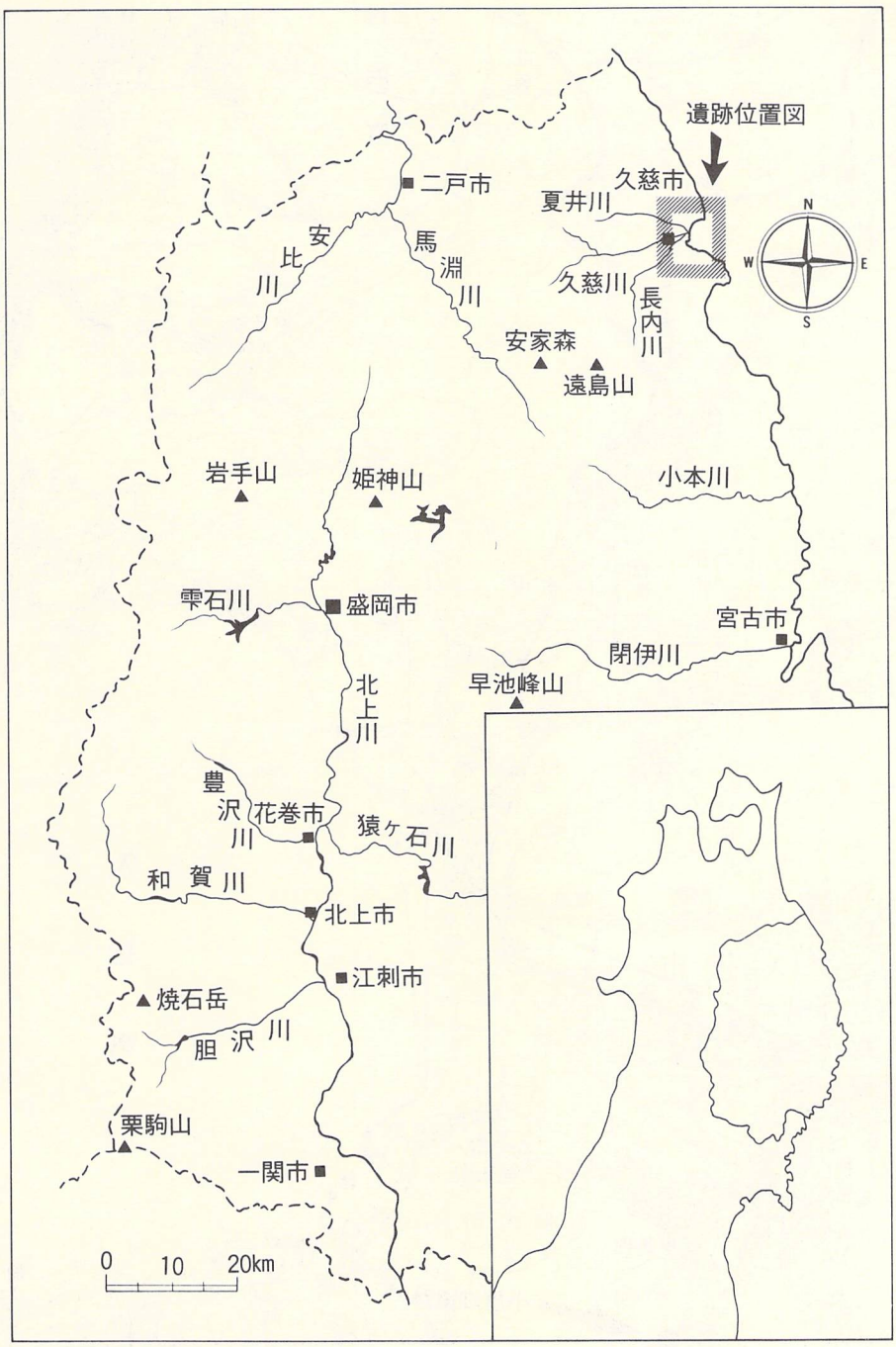
第83図　平均永年変化曲線とDII-2住全平均値（①）とNo.3.No.4の
部分平均値（②）との対応 ……122

第84図　各地点の焼土推定年代 ……123

第85図　平均永年変化曲線と測定した全焼土の平均値との対応 ……124

○表目次

第１表　測定に用いた無定位磁力計の仕様 ……111
第２表　久慈市小屋畑遺跡の焼土熱残留磁気測定結果 ……112


遺跡位置図
久慈市
夏井川
二戸市
安
比
川
馬
淵
川
久慈川
長
内
川
N
W
E
S
安家森
遠島山
岩手山
姫神山
小本川
雫石川
盛岡市
宮古市
閉伊川
早池峰山
北
上
川
豊
沢
川
花巻市
猿ケ石川
和賀川
北上市
江刺市
焼石岳
胆沢川
栗駒山
一関市
0
10
20km

第１図　岩手県全体図

第2図　小屋畑遺跡位置図

Ⅰ　調査方法と室内整理の方法

1．調査方法

(1)　座標軸の設定

調査対象区域内の三陸国道工事事務所の設定した中心杭№90を座標原点とし、原点を通り№85と結ぶ線と、原点を通りこれと直交する線を基準とした。

№90　（STAO18＋00　　X＝019741.6644　　Y＝080770.1654）

№85　（STAO17＋00　　X＝019641.8707　　Y＝080763.7459）

これをもとに調査対象区全体を30m毎に大区画した。各区画は北から南にむかって、AからDのアルファベットを付し、西から東にむかってⅠ.Ⅱのローマ数字を付した。

地区名は両者の組み合せによって、例えばAⅡ区・BⅡ区……のように表わした。

(2)　粗掘り、遺構検出

調査区内には木根及び雑物が多く、下刈り及び雑物を撤去した後、遺構検出面までの土層を短期間で除去するため、小型重機（パワーシャベル）を２台導入した。重機により土層を除去した後は、作業員によって遺構の有無を確認した。遺構がない区画は土捨て場にあてた。

検出された遺構には地区毎に、住居址・住居址状遺構は１～、ピットは51～、陥し穴状遺構は101～、焼土遺構は201～の一連の番号を付し、地区名との組み合せにより、例えばAⅡ-１住居址・BⅡ-51ピット・CⅡ-101陥し穴状遺構……のように名称を与えた。

(3)　精査方法

精査は原則として住居址は４分法、ピット及び陥し穴状遺構は２分法とし、移植ベラ、竹ベラを使用して行なった。図面の作成と写真撮影は精査の各段階において行なったが、ピット等の埋土が単層であるものについては、その性状をField･Cardに記載し図面の作成は省略した。

出土遺物の取り上げは、遺構内のものは遺構名・出土位置を、また遺構外のものは地区名を記入の上取り上げた。

(4)　実測方法

遺構が集中している北側及び南側の緩斜面は、遺構がほぼはいる遺り方を設定して実測を行なった。その他の地区の遺構については、各基準杭にトランシットを据え基準線を起こす簡易的な遺り方実測を行なった。

遺構の実測図は1/20の縮尺を基本とし、レベル計測は50cm間隔で行なった。カマド断面図は1/10の縮尺とし、必要に応じてレベル計測の間隔を細かくした。

(5) 写真撮影

撮影には6×7cm版と35mm版カメラ2台を1セットとして使用した。撮影にあたっては当埋文センター作成の「撮影カード」を使用し、整理の際の資料とした。

2. 室内整理の方法

(1) 作業内容及び分担

整理作業は、遺構図面の点検、遺物の仕分け及び復元・接合を並行して進め、その後に遺物の実測、拓本、トレース、図版作成と順次行なった。

(2) 遺構図版

㋑ 遺構図版の掲載は次のとおりである。

- ○ 住居址は原則として、土層断面図・平面図及びカマド断面図を掲げる。
- ○ ピット、陥し穴状遺構は原則として土層断面図と平面図を掲げる。ただし土層が単層の場合は土層断面図を省略し、断面図を掲げる。
- ○ 焼土遺構は原則として平面図と土層断面図を掲げる。

㋺ 図版中の縮尺は次のとおりである。

住居址・住居址状遺構 1/60　カマド断面 1/30　ピット 1/40

陥し穴状遺構 1/40　焼土遺構 1/40

㋩ 図版中のスクリーン・トーンとその他の表示は次のとおりである。

遺り方座標　磁北　焼土

炭化材　G 礫　P 土器

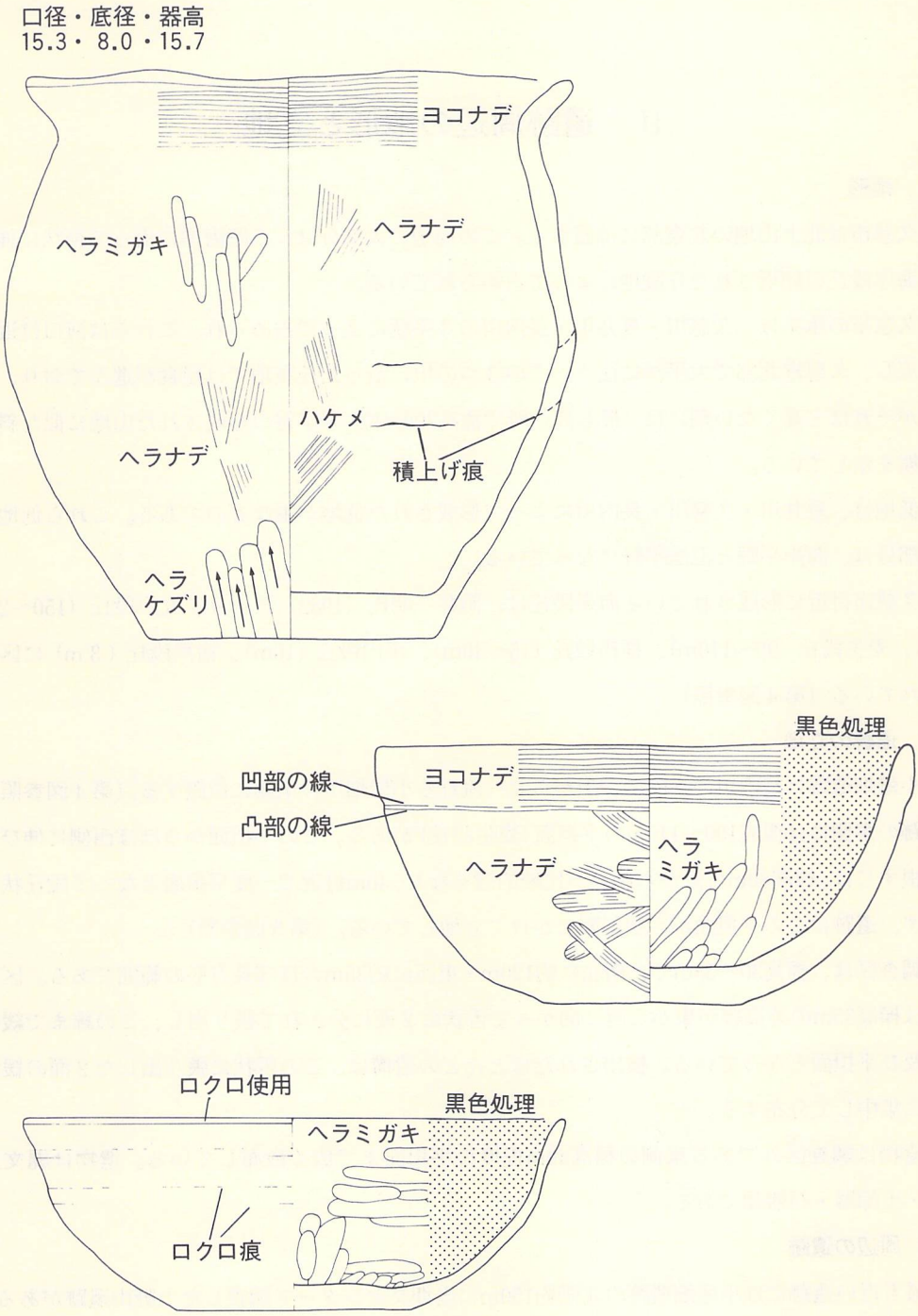
地山

掘り過ぎ部分

調査区域外

(3) 遺物図版

- ○ 遺構内から出土した土器・羽口・鉄製品・石器は縮尺1/3とした。
- ○ 遺構外から出土した土器・土製品は縮尺1/2に、石器は縮尺2/3と1/3とした。
- ○ 土器破片で1/3以上残存する口縁部・体部・底部片は原則として反転実測し、1/3未満のものは平面実測した。
- ○ 土器実測図の左上には、口径・底径・器高の順に計測値を記した。
- ○ 須恵器はその断面を黒色で示した。
- ○ 体部内面・外面に黒色処理が施されているものはスクリーン・トーンで示した。
- ○ ロクロ調整されている部分は実線で表わした。



第３図　土師器・須恵器の器面調整・計測値の表わし方

II　遺跡周辺の地形と立地

1．地形

久慈市は北上山地の北東部に位置する。この周辺の大部分は、三陸海岸に沿って帯状に伸びる海岸段丘の開析された丘陵地によって占められている。

久慈市の水系は、久慈川・夏井川・長内川の３系統によって占められ、これらは河口付近で合流し、久慈港北部で太平洋に注ぐ。この３つの川に沿った丘陵地では侵食が進んでおり、標高がそれほど高くない割には（最も高い所で標高200m位）V字谷の形成された山地に似た斜面形態を示している。

低地は、夏井川・久慈川・長内川によって形成された低地が主なものである。これら低地の大部分は、海岸平野と氾濫平野になっている。

久慈市付近に形成されている海岸段丘は、照井一明氏（1982）により、九戸段丘（150～220m）、麦生段丘（90～110m）、種市段丘（15～40m）、平内段丘（10m）、宿戸段丘（３m）に区分されている（第４図参照）。

2．遺跡の立地

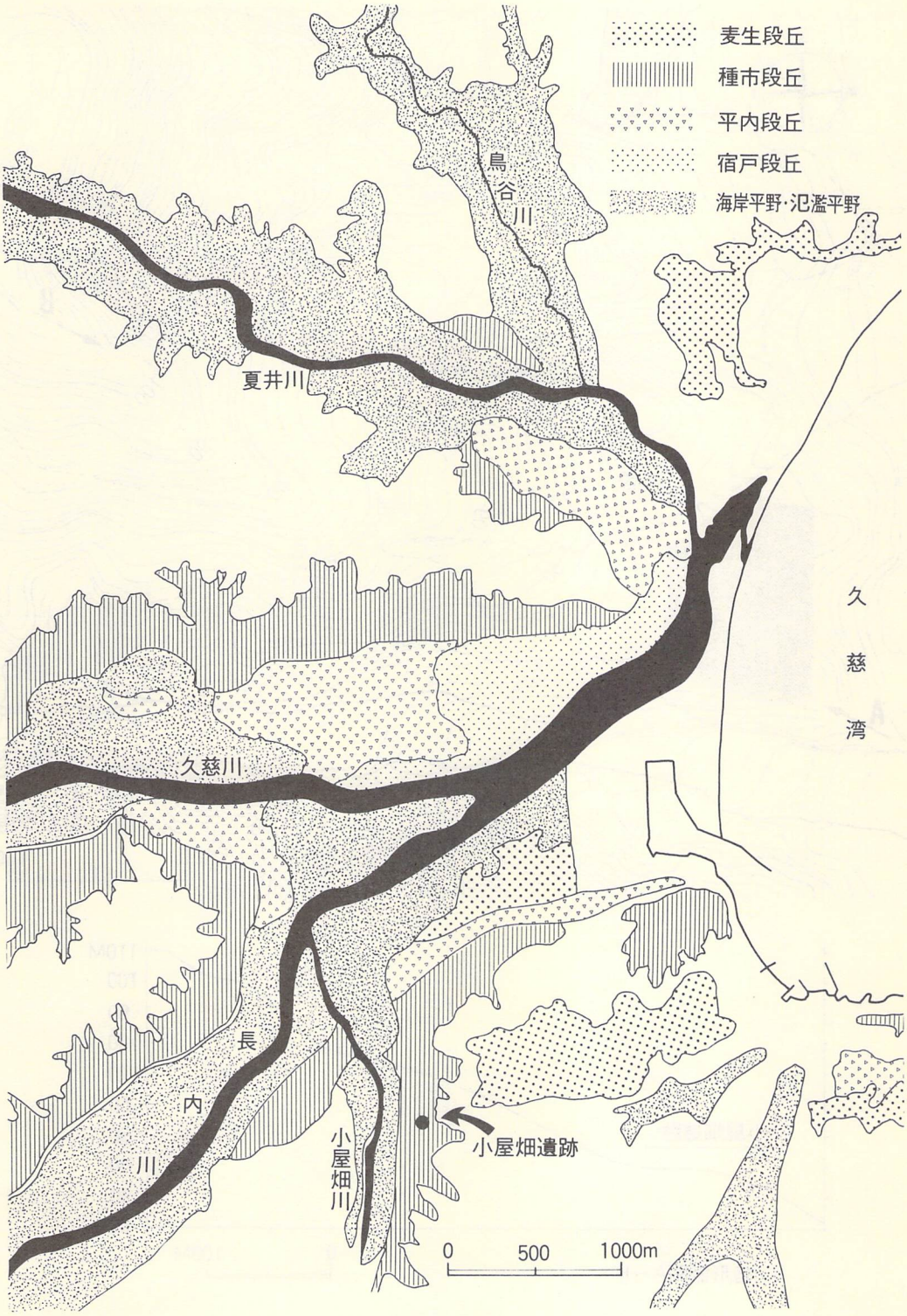
小屋畑遺跡は長内川の支流で、南から北へ流れる小屋畑川の東側に位置する。(第４図参照)遺跡の東側には標高100～110mの平担面（麦生段丘）がある。この平担面からほぼ西側に伸びる尾根すじは、標高80m付近から傾斜が比較的緩くなり、40m付近で一度平担面となって段丘状を呈す。遺跡はこの平担面から緩斜面にかけて立地している。(第５図参照)

調査区は、標高30～38mで、南北に約120m・東西に約35mのほぼ長方形の範囲である。区内には標高35mの等高線が東から西に向かって舌状に２面に分かれて張り出し、この線まで緩斜面及び平担面となっている。検出されたほとんどの遺構は、この舌状に張り出した２面の緩斜面に集中して分布する。

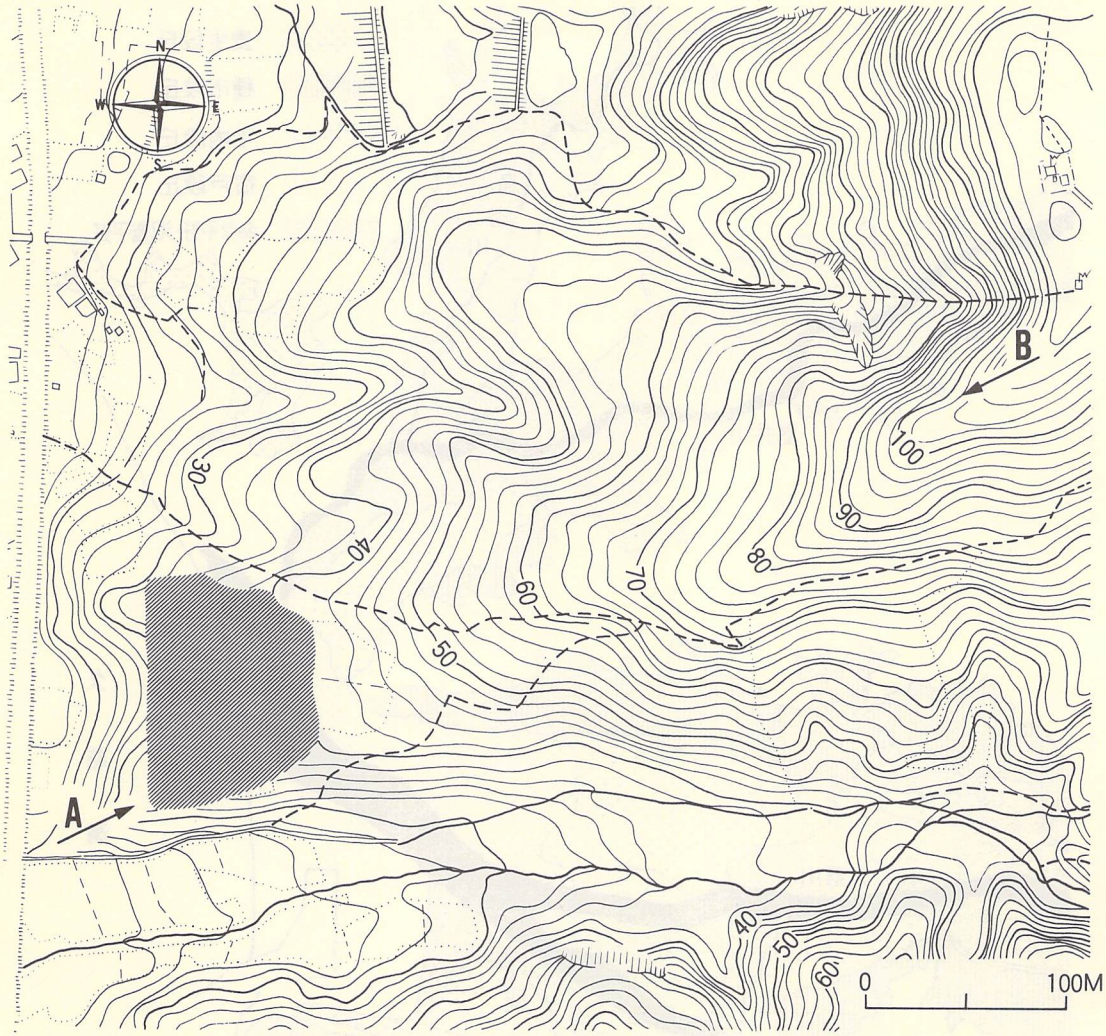
遺物は調査区外である東側の標高40m程度の平担面まで広く散布している。遺物は縄文土器・土師器・石器類である。

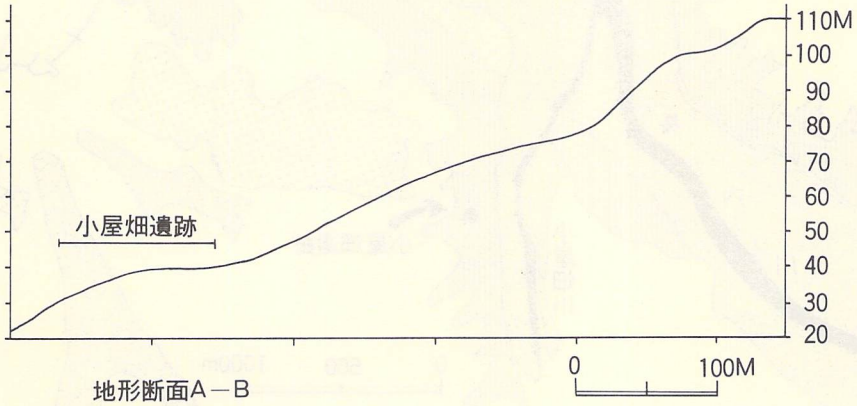
3．周辺の遺跡

最も近い遺跡には小屋畑遺跡の北側約150mに当埋文センターで調査した上野山遺跡がある。その他周辺の遺跡については第６図で示す。



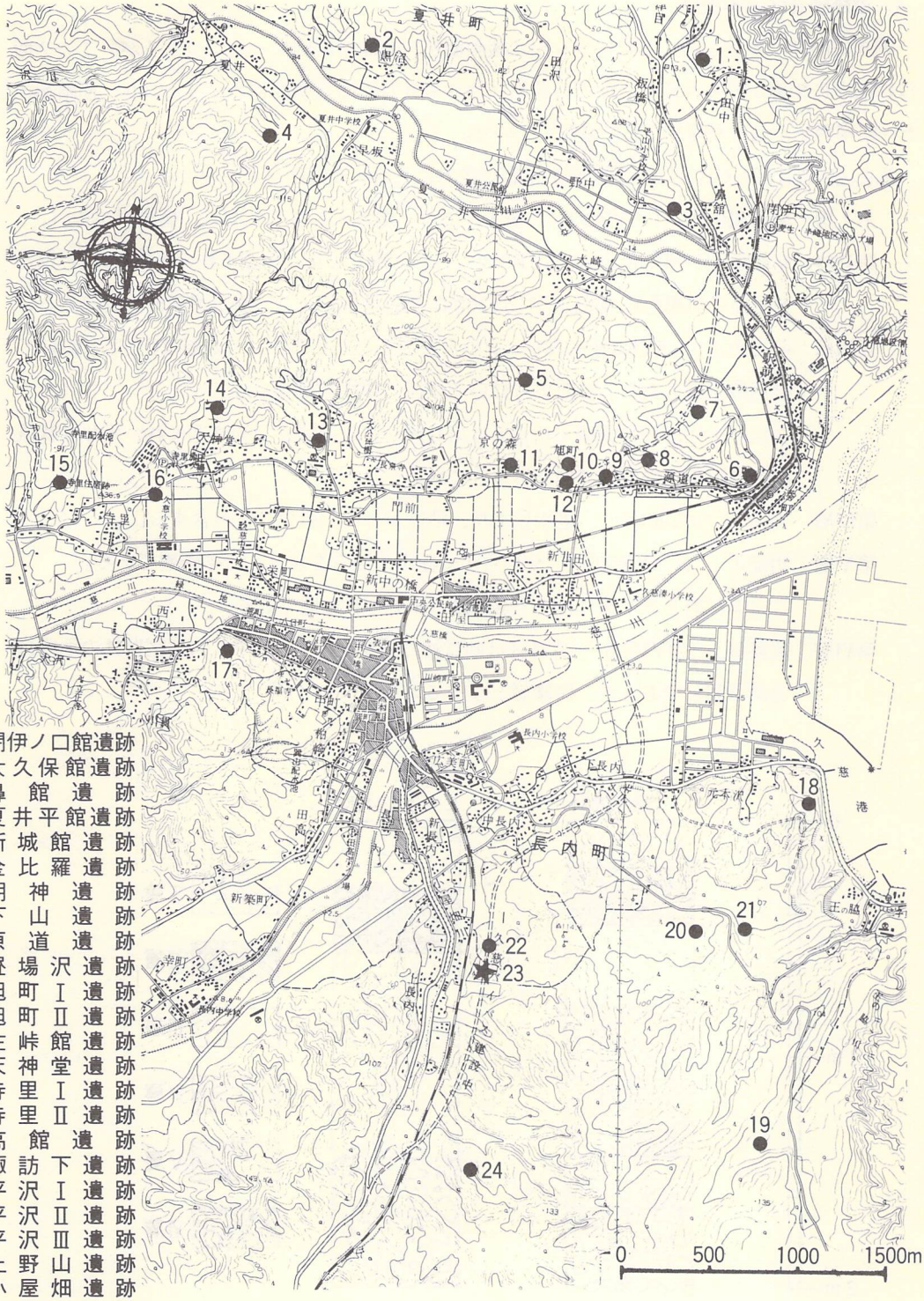
第４図　遺跡周辺の段丘区分図





地形断面A－B

第５図　遺跡周辺地形と地形断面図



1　閉伊ノ口館遺跡
2　大久保館遺跡
3　鼻　館　遺　跡
4　夏井平館遺跡
5　新　城　館　遺　跡
6　金　比　羅　遺　跡
7　明　神　遺　跡
8　下　山　遺　跡
9　原　道　遺　跡
10　昼　場　沢　遺　跡
11　旭　町　Ⅰ　遺　跡
12　旭　町　Ⅱ　遺　跡
13　左　峠　館　遺　跡
14　天　神　堂　遺　跡
15　寺　里　Ⅰ　遺　跡
16　寺　里　Ⅱ　遺　跡
17　高　館　遺　跡
18　諏　訪　下　遺　跡
19　平　沢　Ⅰ　遺　跡
20　平　沢　Ⅱ　遺　跡
21　平　沢　Ⅲ　遺　跡
22　上　野　山　遺　跡
23　小　屋　畑　遺　跡
24　上　長　内　遺　跡

第６図　周辺の遺跡分布図

4. 遺跡調査区基本層序

調査区内には東から西に舌状に張り出す緩斜面が、北側と南側に一面ずつあるが、この２面には層序に相違がみられる。２面の緩斜面にはさまれた斜面は埋没谷となっており、極暗褐色土～暗褐色土が最大層厚約２mに堆積していた。

調査区内AII区とCII区の土層断面から調査区内に共通する層序を下記のとおりとした。

第Ⅰ層　極暗褐色土（7.5YR2/3）　表土であり・粘性・しまりがない。植物根が多い。

第II層　暗褐色土～黒褐色土（7.5YR3/3～2/2）　堅くしまり・焼土粒・極小の浮石（7.5YR5/6　明褐色）・褐色土（7.5YR4/4）を包含する。この層が遺構検出面である。

第III層　明褐色土（7.5YR5/8～5/6）　シルト質でしまりがある。この層はCII区においては層厚が最もあり、斜面下方にいくに従い層厚が薄くなる。

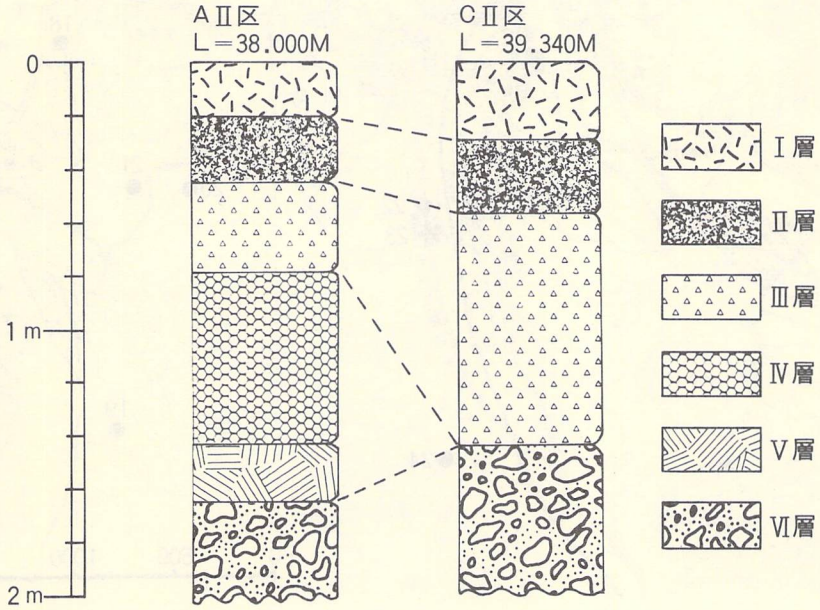
住居址・住居址状遺構・ピットは第II層からこの層まで掘り込まれ、陥し穴状遺構はこの下位の層まで掘り込まれている。

第IV層　褐色土（10YR4/6）　堅くしまり、粘性がある。炭化物を包含する。

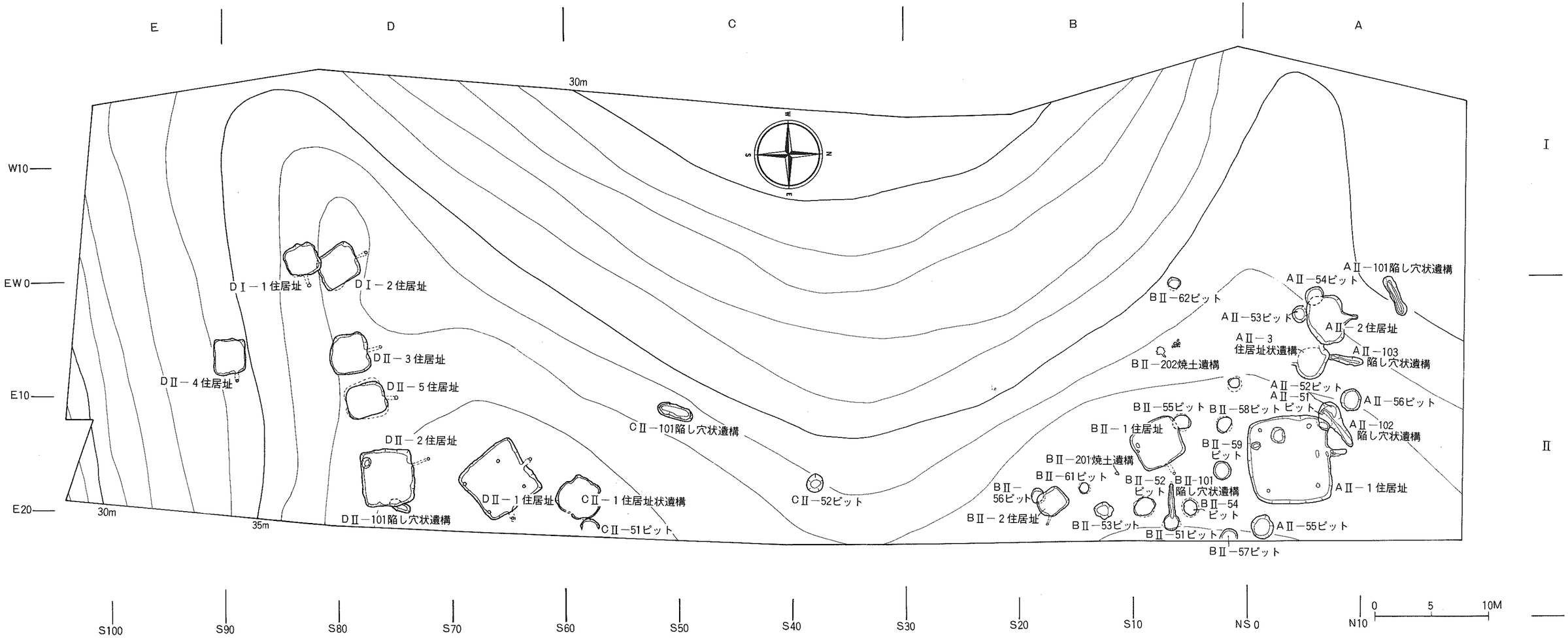
第Ⅴ層　明褐色土（7.5YR5/6）　やわらかく極小の浮石を包含する砂礫層である。

この第IV層と第Ⅴ層はAII区東側にのみ見られる層である。

第VI層　黄褐色土（10YR5/6）　AII区は砂質性でサラサラしている。AII区以外の地区は色調は同じであるが、砂礫層となっている。



第７図　土層柱状図


E
D
C
B
A
30m
W10
EW0
E10
E20
30m
35m
DⅠ－1住居址
DⅠ－2住居址
DⅡ－3住居址
DⅡ－4住居址
DⅡ－5住居址
DⅡ－2住居址
DⅡ－101陷し穴状遺構
DⅡ－1住居址
CⅡ－1住居址状遺構
CⅡ－51ピット
CⅡ－101陷し穴状遺構
CⅡ－52ピット
BⅡ－62ピット
AⅡ－54ピット
AⅡ－101陷し穴状遺構
AⅡ－53ピット
AⅡ－2住居址
AⅡ－3
住居址状遺構
AⅡ－103
陷し穴状遺構
BⅡ－202焼土遺構
AⅡ－52ピット
AⅡ－51
ピット
AⅡ－56ピット
BⅡ－55ピット
BⅡ－58ピット
AⅡ－102
陷し穴状遺構
BⅡ－1住居址
BⅡ－59
ピット
BⅡ－201焼土遺構
BⅡ－61ピット
BⅡ－52
ピット
BⅡ－101
陷し穴状遺構
AⅡ－1住居址
BⅡ－
56ピット
BⅡ－54
ピット
BⅡ－2住居址
BⅡ－53ピット
BⅡ－51ピット
AⅡ－55ピット
BⅡ－57ピット
S100
S90
S80
S70
S60
S50
S40
S30
S20
S10
NS 0
N10
0
5
10M
Ⅰ
Ⅱ

第８図　遺構配置図

III　検出遺構と遺構内出土遺物

1．古代竪穴住居址

AII－1住居址

遺　構（第9・10・11図，写真図版3・4）

この遺構は調査区北側緩斜面に検出された。床面から多くの炭化材及び現地性焼土が検出されているところから、この住居址は焼失住居址であると思われる。

規模は東西に約7.7m、南北に約7.2mのほぼ方形状を呈すが、南壁は中央部がやや外に脹らみ曲線を呈す。壁高は現高で北壁約64cm、南壁約62cm、東壁約68cm、西壁約13cmである。

埋土は上位から中位が焼土をブロック状、炭化物を包含する黒色土、下位が炭化材を包含する褐色土で構成される。

床面は粘性ある褐色土で、全体的に凹凸がある。特に南壁床面約1m四方は凹凸が激しく、ガリガリに堅くしまっている。床面中央部から南西寄りには2基の浅いピットが検出されている。№1ピットは開口部径約115cm底部径約90cm×95cm、深さ約5cmの規模をもつ。埋土は暗褐色土で大半を占める。№2ピットは開口部径約65cm×75cm、底部径約40cm×45cm、深さ約20cmの規模をもつ。埋土は暗褐色土の単層である。この2基のピットはいずれもこの住居址に伴うものである。柱穴はP_1（径約28cm、深さ約40cm）、P_2（径約28cm、深さ約40cm）、P_3（径約30cm、深さ約56cm）、P_4（径約23cm、深さ約43cm）の4個が検出されている。

カマドは北壁ほぼ中央部に位置する。残存状態はきわめて良好である。袖部は芯材として左右共偏平な砂岩を床面下約10cmに埋置し、粘土を貼り付け固定している。燃焼部には長さ約68cm、最大幅約23cmの長楕円形の板状砂岩を敷いているが、この下位から煙道部口までは、最大層厚約18cmでほぼレンズ状に赤色変化を受けている。煙道部から煙出し部には上を開く形に板状砂岩を組み、粘土を貼り付け固定している。さらに煙道部約1/2の長さには上から板状砂岩を覆っているものである。煙道部はゆるやかな傾斜をもって立ち上がり、煙出し部に達する。

煙出し部の掘り込みは上から約115cmである。カマドの規模は袖部から煙出し部まで全長約230cm、袖部幅約65cm、煙道部幅約30cm～70cmで、入念に構築された痕跡がみられるものである。貼り付けられた粘土は加熱によって土器のような硬土をもっている個所が数ケ所に見られる。

南壁西寄りには、板状砂岩が「ハ」の字状に壁に立つ形で検出されているが、この性格については不明である。

床面は約6cm～10cmの厚さで粘性ある褐色土（10YR 4/6）で貼り床されていた。

この住居址は、AII—51ピットを切って構築されている。

出土遺物（第12・13・14図，写真図版26・27・28）

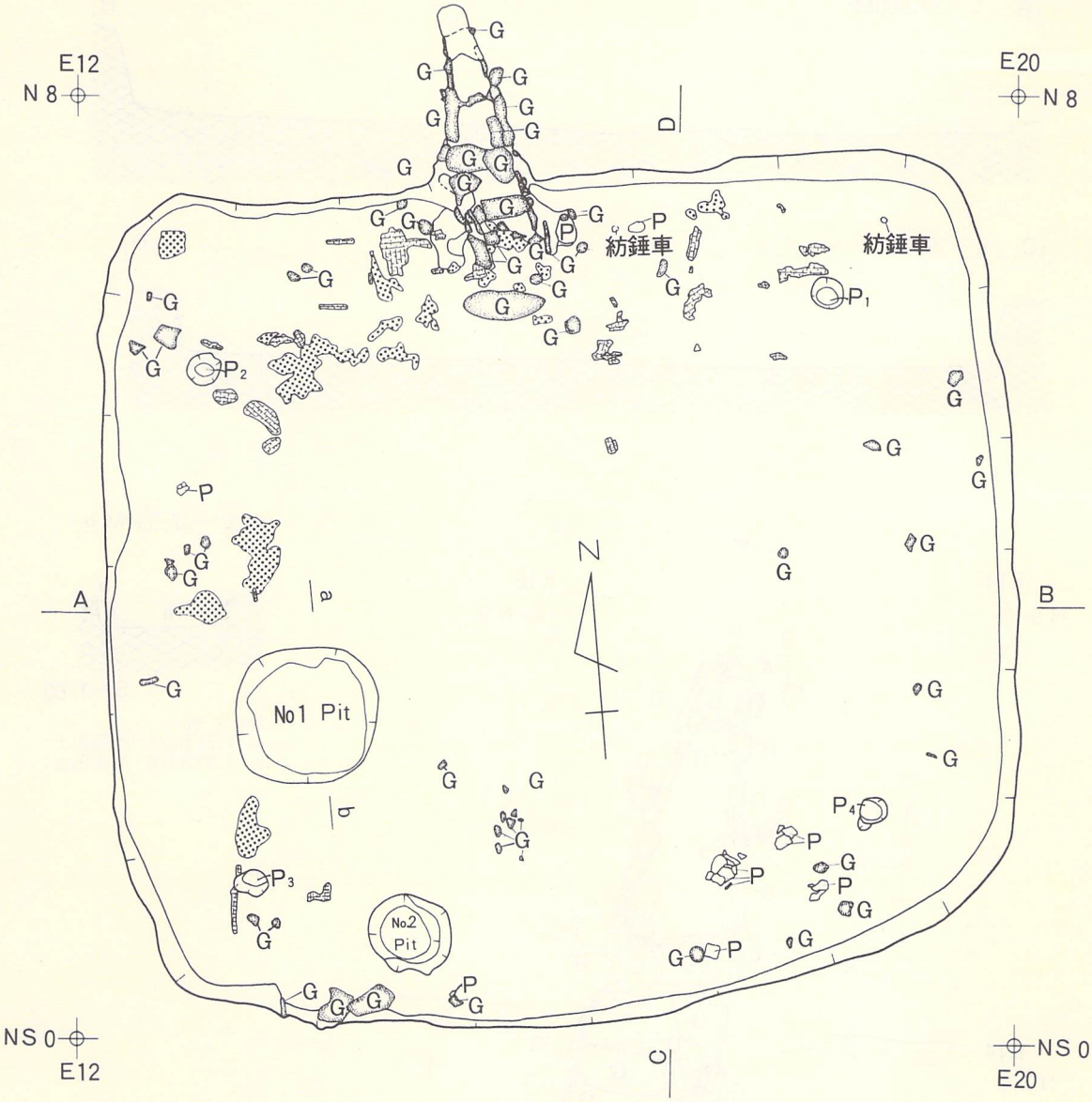
1～20が出土している。床面・カマドから得られた土器はいずれもロクロ不使用のもので、ロクロ使用のものは埋土から得られた20の1点のみである。

〈床面・カマド出土〉

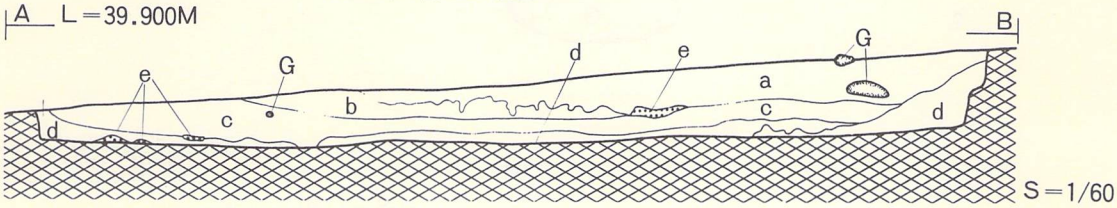
甕形土器　1・3～7・9～13が床面から、2・8がカマドから出土している。1は南壁際床面から得られたもので、器形は体部やや上半で脹らみをもち、口縁部が緩く外反する。器高約32cmのやや胴長な土器である。口縁部と体部は段をもって区切られている。器面調整は口縁部が内外共横ナデ、体部にはナデが施され、体部下半一部にヘラケズリがみられる。内面には積上げ痕が明瞭に出ている。底面には木葉痕が認められる。2はカマド右袖に倒立して出土した完形のもので、器高24.5cmの土器である。器形はやや上半で脹らみをもち、口縁部は緩く外反する。口縁部と体部は段をもって区切られる。器面調整は口縁部が内外共横ナデ、体部外面には縦位に刷毛目、内面は横位に刷毛目調整が施され、底面には木葉痕がみられる。3は1と同じ位置から得られたもので、体部下半から底部が欠損しているものである。器形は体部やや上半で脹らみをもち口縁部は緩く外反する。口縁部と体部は沈線的段で区切られている。器面調整は、口縁部外面が縦位の刷毛目を施した後横ナデを、内面が横位の刷毛目を施した後横ナデで調整されている。体部外面には縦位の刷毛目、内面に横位の刷毛目が施されている。4は口縁部破片である。口縁部は緩く外反する。器面には口縁部が内外共横ナデ、体部外面はミガキ、内面にはナデ調整が施されている。5は体部破片であり、器面には内外共細長いミガキが施されている。6は小型土器の底部破片で、内外共ミガキとナデが施され、底面には木葉痕がみられる。

鉢形土器　7は体部から口縁部にかけて順次脹らみをもちながら立ち上がり、口縁部が内彎する。器面調整は、口縁部が内外共横ナデ、体部外面には刷毛目を施した後ナデで調整されており、体部内面にはミガキが施されている。

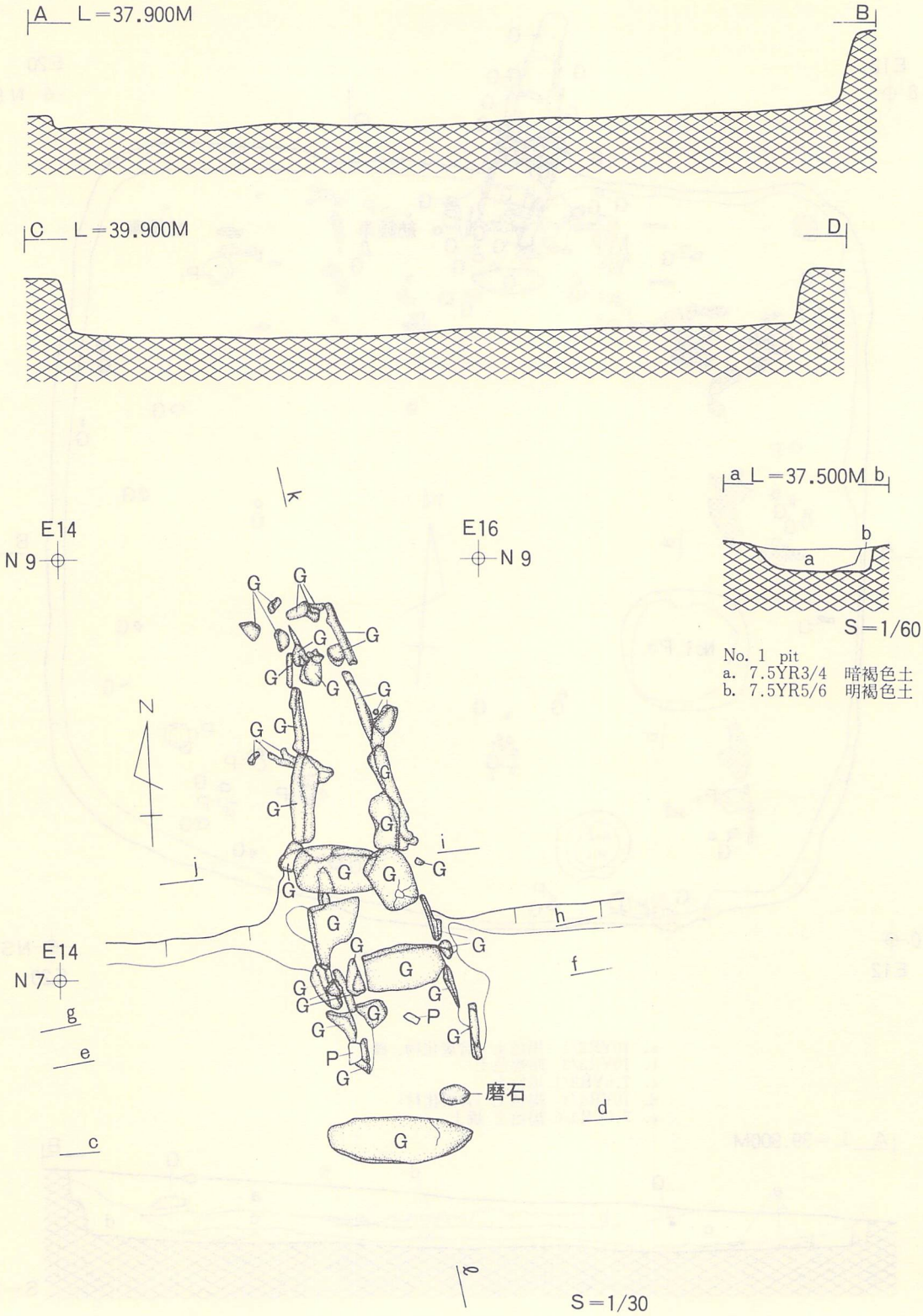
坏形土器　8は器高9.3cmの丸底の坏形土器である。口縁部は直立する。器面には外面が刷毛目を施した後ミガキが、内面はミガキが施されているものである。底面には刷毛目が施されている。9は器高約7.2cmの土器と思われ、口縁部はほぼ直立する。器面には口縁部が内外共横ナデ、体部外面がナデ調整、内面はナデ、ミガキ調整後黒色処理が施されている。口縁部と体部との堺には段がつくところがあるが、個所によって不明瞭である。10は口縁部から体部破片で口縁部と体部は段によって区切られる。口縁部外面はミガキ、内面は横ナデが、体部外面はナデ、内面はミガキ後黒色処理が施されている。11は器高5.9cmのもので、平底を呈す。口縁部と体部は段によって区切られる。器面には口縁部・体部共ミガキが施され、内面には黒色処理が施されている。



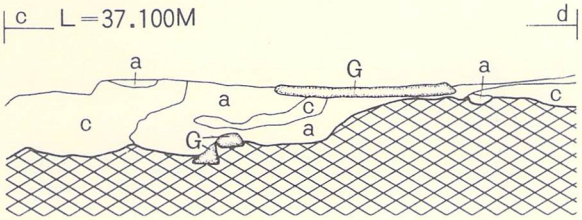
a. 10YR2/1　黒色土（含炭化物、礫）
b. 10YR3/3　暗褐色土
c. 7.5YR2/1 黒色土
d. 10YR4/4　褐色土（含炭化材）
e. 7.5YR4/6 褐色土 焼土



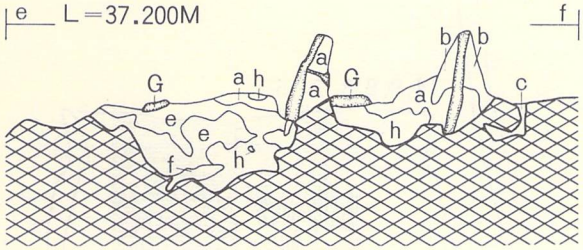
第9図　AⅡ－1住居址(1)

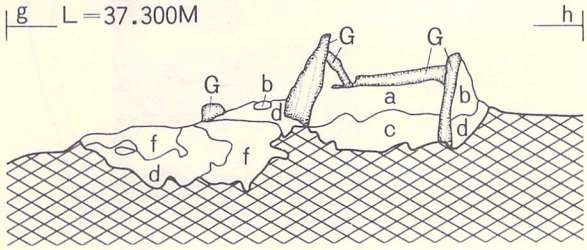


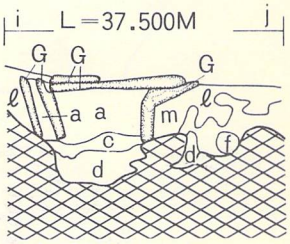
第10図　AⅡ－1住居址(2)

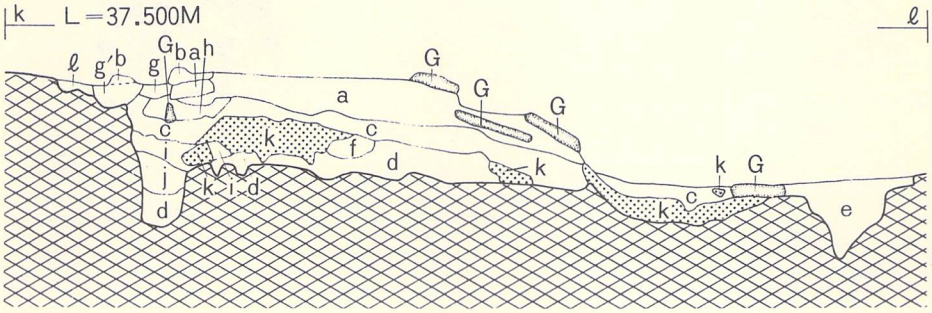


a. 10YR5/4　にぶい黄褐色土（含炭化物）
b. 10YR7/3　にぶい黄橙色土
c. 10YR3/3　暗褐色土（含焼土、焼土粒、炭化物）
d. 10YR4/4　褐色土（含焼土粒、炭化物）
e. 10YR4/6　褐色土
f. 10YR5/6　黄褐色土（含礫）
g. 10YR3/4　暗褐色土（含炭化物）
g′. 10YR3/4　暗褐色土（含炭化物）
h. 10YR2/2　黒褐色土（含炭化物、焼土粒）
i. 10YR3/3　暗褐色土（含焼土粒、炭化物）
j. 10YR2/3　黒褐色土（含焼土粒、炭化物）
k. 5YR5/8　明赤褐色土　焼土
ℓ. 10YR4/4　褐色土（含炭化物）
m. 10YR4/6　褐色土



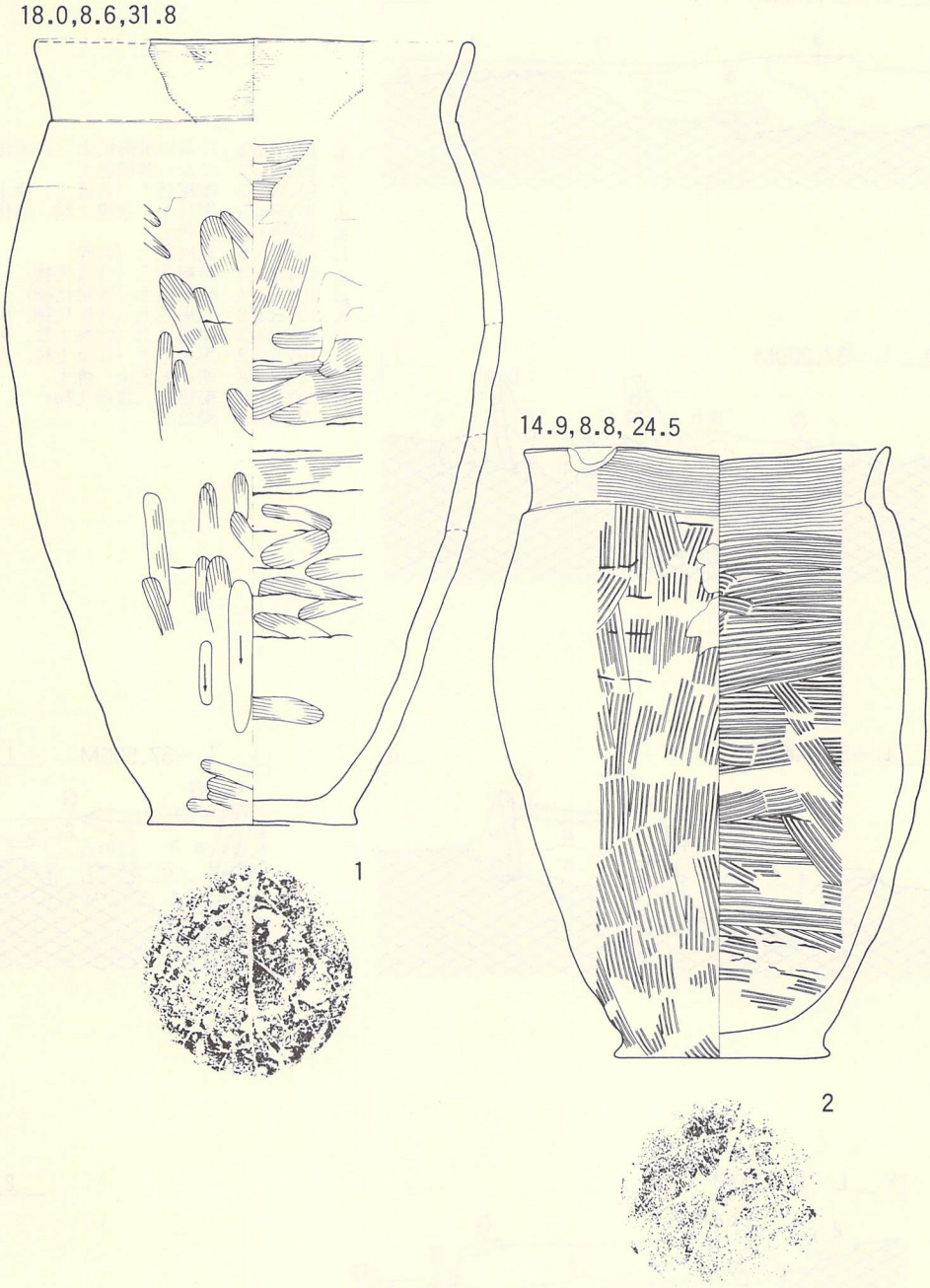




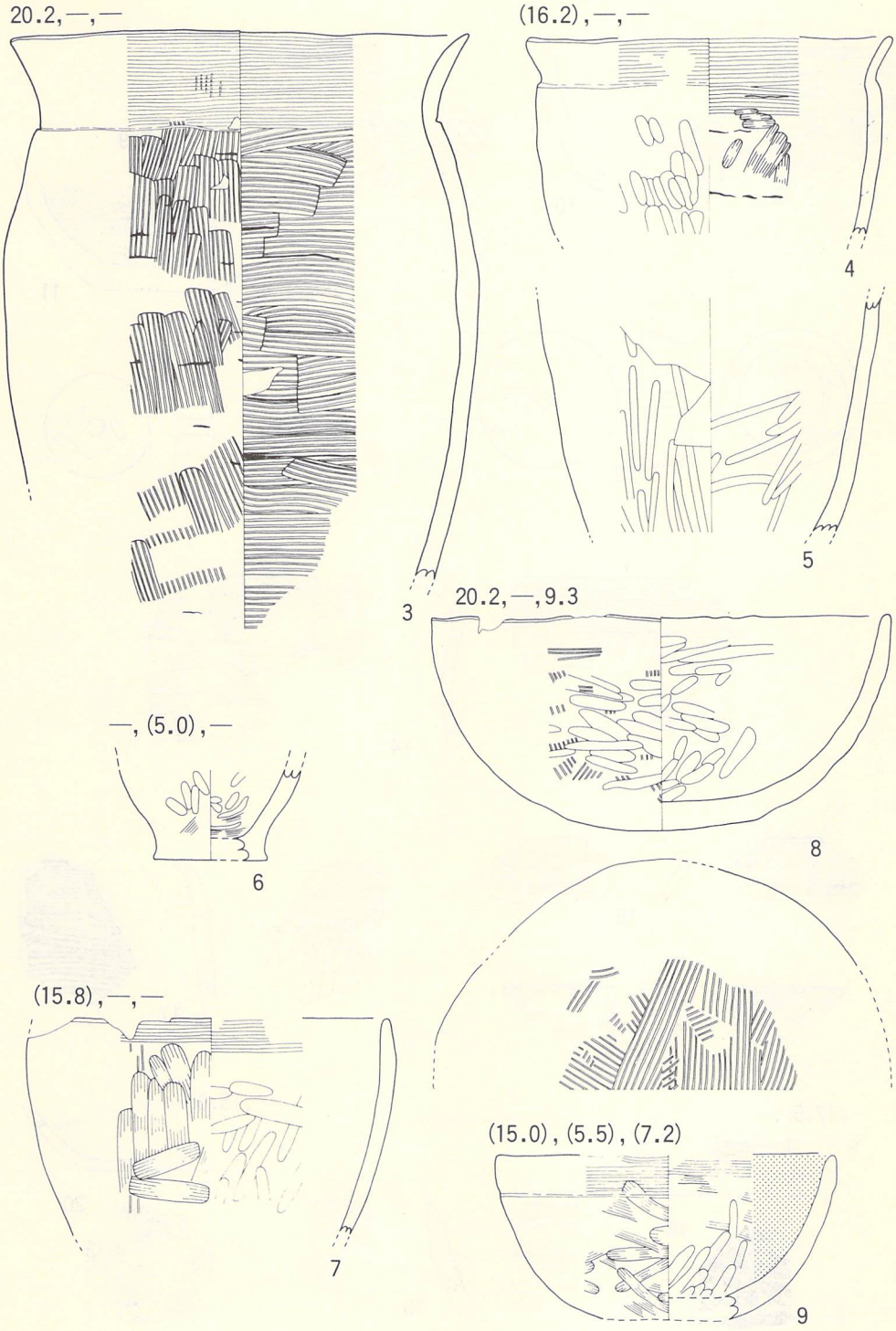


カマド断面
S=1/30

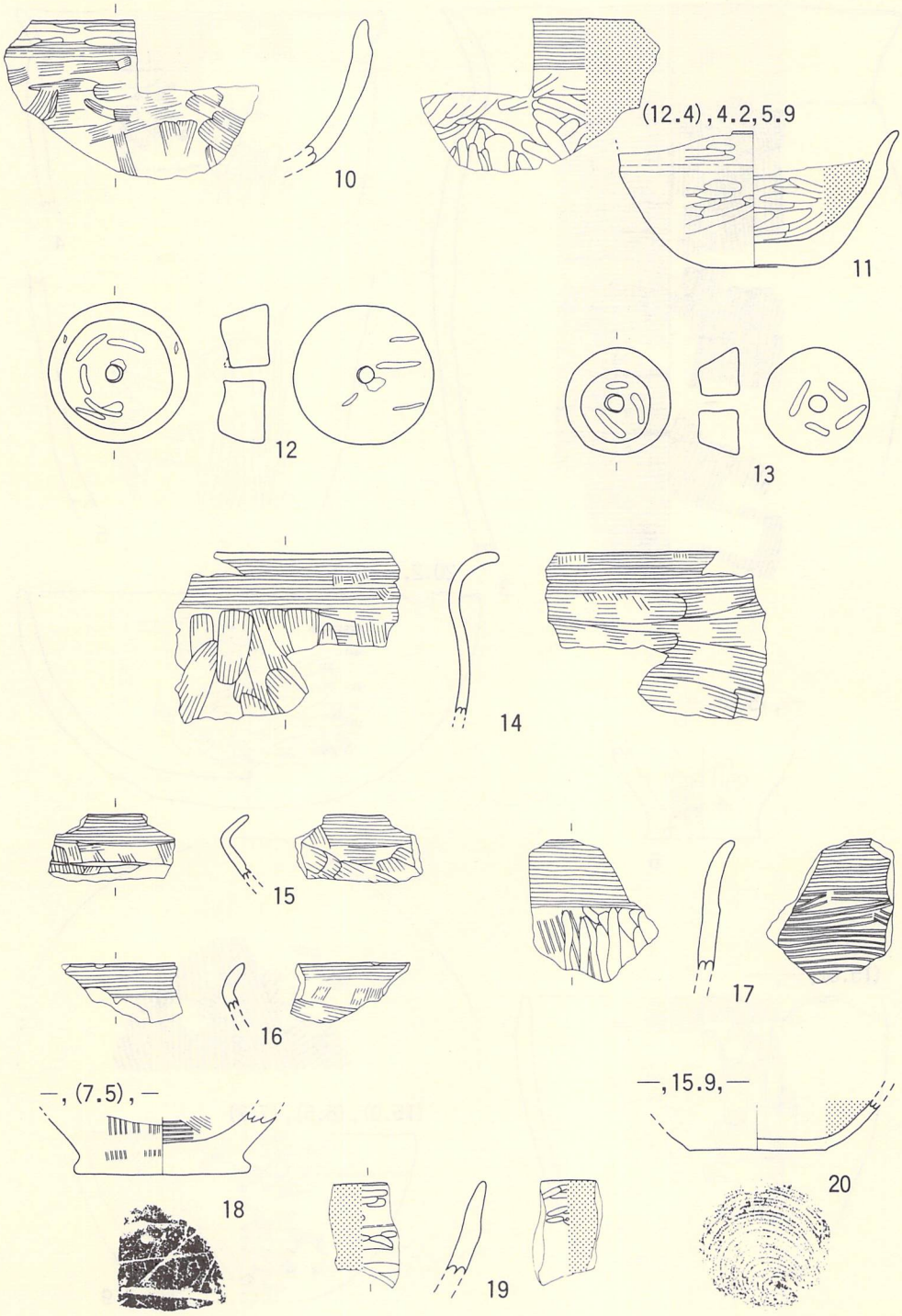
第11図　AⅡ－1住居址(3)



第12図　AⅡ－1住居址出土遺物(1)



第13図　AⅡ－1住居址出土遺物(2)



第14図　AⅡ－1住居址出土遺物(3)

土製紡錘車　床面から12・13の２点が出土している。どちらも断面形は台形状を呈す。12は上径4.9×5.1cm、下径6.0×6.1cm、厚さ2.1cm、孔径７㎜、13は上径3.1cm下径4.5×4.6cm、厚さ1.8cm、孔径８㎜のものであり、ミガキが施されている。

〈埋土出土〉

甕形土器　14は口縁部が強く外反するもので、口縁部は内外共横ナデ、体部はナデ調整が施されている。15と16は小型土器の口縁部破片で、ナデ調整が施されている。17は口縁部がわずかに外反し立ち上がるもので、口縁部は内外共横ナデ、体部外面が刷毛目を施した後ミガキが、内面には刷毛目が施されているものである。18は底部破片で、外面は刷毛目、内面には刷毛目とナデ調整が施されており、底面には木葉痕がみられる。

坏形土器　19は口縁部破片で、内外共ミガキ調整後黒色処理が施されている。20は底部破片で内面に黒色処理が施されている。底部切り離しは回転糸切りで、再調整は認められない。

AII－2住居址

遺　構（第15図，写真図版５・６）

この遺構は調査区北側緩斜面、AII－１住居址の西側に検出された。埋土下位及び床面から炭化物・炭化材が検出されているところから、この住居址は焼失住居址であると思われる。

規模は東西に約4.2m、南北に約3.1mの不正長方形を呈す。壁高は現高で北壁約65cm、南壁約52cm、東壁約51cm、西壁約16cmである。

埋土は中央部上位が極暗褐色土、上位から下位に炭化物を帯状に包含する黒褐色土で大半を占め、壁際に黒褐色土及び褐色土がはいる。

床面は粘性ある褐色土で、全体的にゆるやかな凹凸が認められ、堅くしまっている。柱穴は検出されなかったため、さらに床面を下げ検出に努めたが確認できなかった。

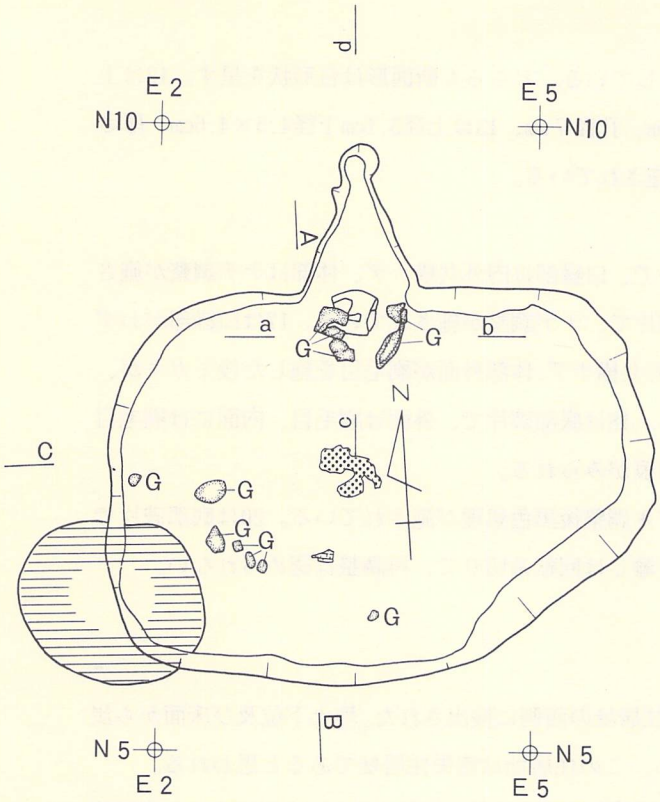
カマドは北壁ほぼ中央部に位置し、煙道は掘り込み式である。袖部には芯材として左右共偏平な砂岩を埋置し、粘土を貼り付けて固定している。燃焼部の焼土は約50cmの広がりをもって分布し、層厚最大約９cmのレンズ状に赤色変化を受けている。煙道部は煙出し部にむかってゆるやかな傾斜をもって立ち上がる。煙出し部の掘り込みは、検出面から現高で約60cmに達する。カマドの規模は袖部から煙出し部まで全長約180cm、袖部幅約70cm、煙道部幅約25cm～85cmである。

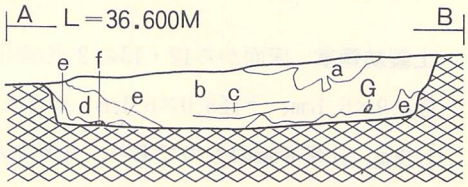
この住居址の南西隅にはAII－54ピットが検出され、この遺構と切り合い関係にある。両遺構の埋土状況から考えるに、この遺構がAII－54ピットを切っているものと思われる。

出土遺物（第21図，写真図版28）

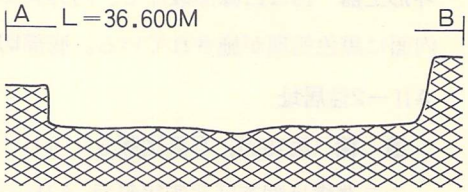
〈床面及び埋土下部〉

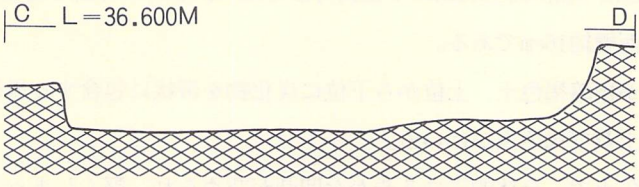
甕形土器　１の１点のみ出土している。この土器は北壁際埋土下部から床面にかけて出土した



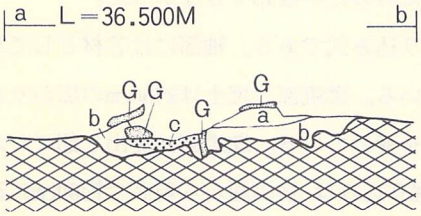


a. 7.5YR2/3　極暗褐色土
b. 7.5YR3/1　黒褐色土
c. 7.5YR1.7/1 黒色土（含炭化物、焼土粒）
d. 7.5YR3/2　黒褐色土（含炭化物、焼土粒）
e. 7.5YR4/6　褐色土
f. 7.5YR4/4　褐色土　焼土

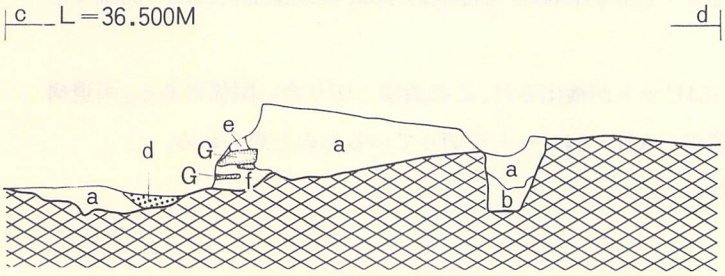




S＝1/60



a. 10YR3/3　暗褐色土
b. 10YR4/4　褐色土
c.　5YR4/8　赤褐色土、焼土



a. 10YR3/3　暗褐色土
b. 10YR4/4　褐色土
c. 10YR4/6　褐色土
d.　5YR4/6　赤褐色土　焼土
e. 10YR4/4　褐色土
f. 2.5YR8/4 淡黄色土

カマド断面
S＝1/30

第15図　AⅡ－2住居址

もので、体部下半から底部が欠損したロクロ不使用の甕形土器である。体部はやや脹らみ、口縁部は緩く外反する。口縁部と体部は段をもって区切られる。器面には口縁部が内外共横ナデ、体部外面が縦位のナデ、内面は横位のナデ調整が施されているものである。

BⅡ－1住居址

遺　構（第16・17図，写真図版７）

この遺構は調査区北側緩斜面、AⅡ－１住居址の南側に検出された。床面に現地性焼土が分布し、埋土下位から炭化物が検出されているところから、この住居址は焼失住居址であると思われる。

規模はほぼ東西に約3.9m、ほぼ南北に約4.1mのほぼ方形状を呈す。壁高は現高で北壁約22cm、南壁約33cm、東壁約47cm、西壁約16cmである。

埋土は中央部が黒褐色土、壁際が暗褐色土で占められ、いずれも炭化物を包含する。

床面は比較的やわらかく、ほぼ平坦である。柱穴は南壁際にP_1(径約30cm、深さ約45cm)、P_2（径約20cm、深さ約43cm）の２個検出され、さらに床面を下げ検出に努めたが確認できなかった。

カマドは東壁ほぼ中央部に位置する。右袖部には径約10cm×20cmの小礫が検出されているが芯材としての用途を果したものとは思われない。燃焼部は経約60cm×80cmの範囲に焼成を受け最大層厚約16cmのレンズ状に赤色変化を受けている。煙道部は刳貫き式で、壁下から煙出し部にむかってゆるやかな傾斜をもって下がった後、斜位に立ち上がりさらに直立する。煙道部及び煙出し部には炭化物・焼土粒を多量に包含する黒褐色土が充塡されていた。

この遺構はBⅡ—55ピットと切り合い関係にあるが、いずれが切っているものか確認出来なかった。

この遺構からの出土遺物は得られていない。

BⅡ－2住居址

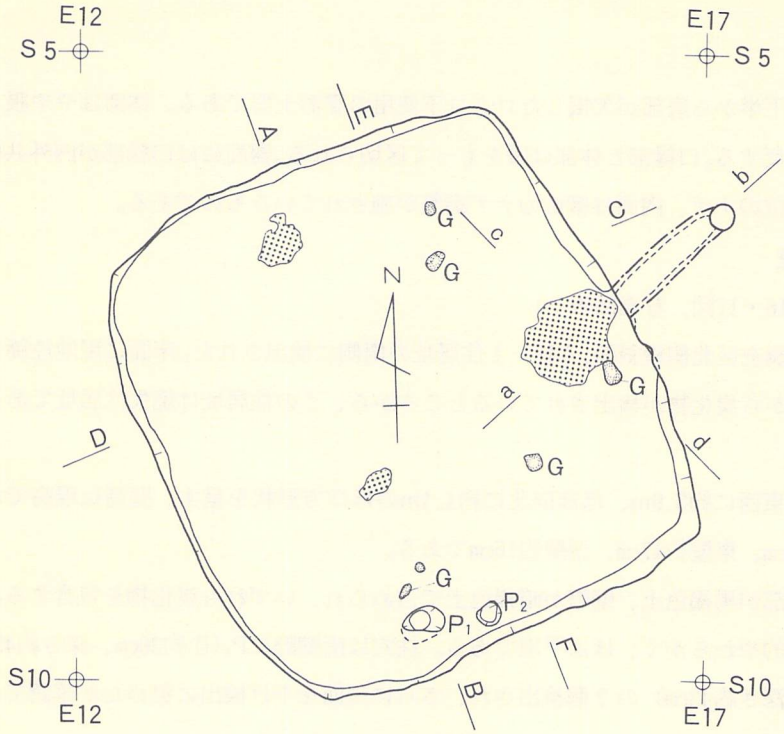
遺　構（第18図，写真図版８）

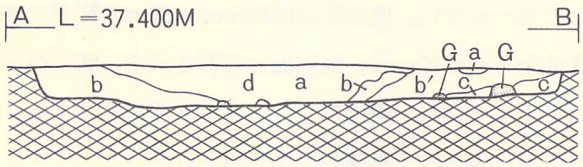
この遺構は調査区北側緩斜面、BⅡ－１住居址のほぼ南側に検出された。床面中央部に現地性焼土が分布し、埋土からも炭化物が検出されているところから、この住居址は焼失住居址であると思われる。

規模は北東から南西に約2.2m、北西から南東に約2.5mの不正長方形を呈す小規模な住居址である。壁高は現高で北西壁約16cm、南西壁約８cm、南東壁約２cm、北東壁約18cmである。

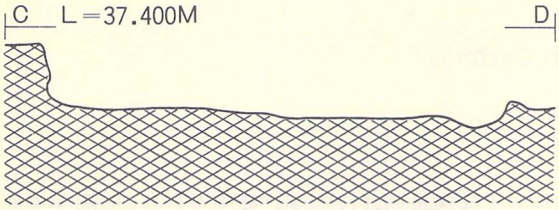
埋土は全体に炭化物を、また中央部に火山灰と思われる細粒浮石をブロック状に包含する黒褐色土で占められる。

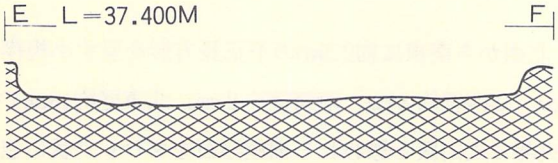
床面は小礫まじりで凹凸があり、堅くしまっている。柱穴は検出されていない。





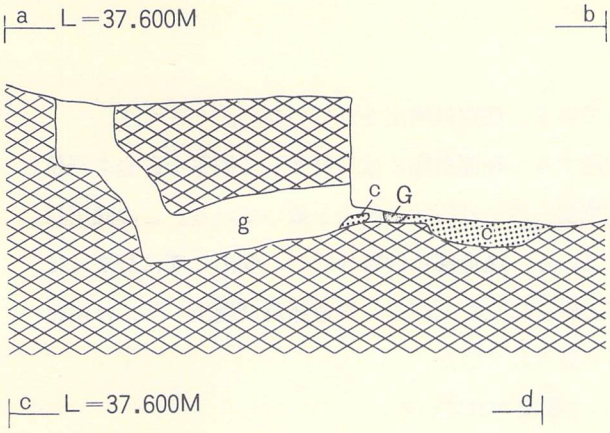
a. 10YR2/2 黒褐色土（含炭化物）
b. 10YR3/3 暗褐色土（含炭化物）
b′. 10YR3/3 暗褐色土（含炭化物）
c. 10YR3/3 暗褐色土（含炭化物）
d. 10YR4/6 褐色土



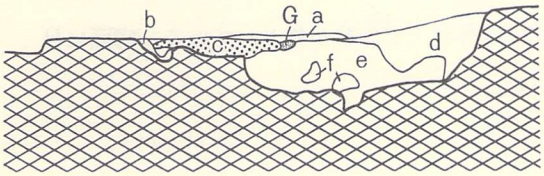


S=1/60

第16図　BⅡ－1住居址（1）



a. 7.5YR2/3　極暗褐色土（含焼土、炭化物）
b. 2.5YR3/4　暗赤褐色土（含焼土、炭化物）
c. 2.5YR4/8　赤褐色土　焼土
d. 7.5YR4/6　褐色土
e. 7.5YR3/4　暗褐色土（含焼土粒）
f. 7.5YR3/3　暗褐色土（含炭化物、焼土粒）
g. 7.5YR2/2　黒褐色土（含炭化物、焼土、焼土粒）



カマド断面
S=1/30

第17図　BⅡ－1住居址（2）

カマドは東隅に位置する。燃焼部は径約60cmの不整形の範囲に焼成を受け、層厚約5cmに赤色変化を受けている。煙道部は刳貫き式で、煙出し部にむかってゆるやかな傾斜をもって下がり、さらにゆるやかに上がりつつ煙出し部へ移行する。煙道部及び煙出し部には焼土粒・炭化物を包含する黒褐色土が充塡されていた。

この住居址はBII－56ピットの北東壁を切って構築されているものである。

出土遺物（第21図，写真図版28）

〈カマド出土〉

甕形土器　口縁部から体部の破片1点のみ出土している。ロクロ不使用のものである。口縁部は短く外反する。器面には口縁部が内外共横ナデ、体部外面はナデ調整が施され、体部下半にはケズリが認められる。体部内面にはナデ調整が施されている。

DⅠ－1住居址

遺　構（第19図，写真図版9）

この遺構は調査区南側緩斜面の最西端に検出された。

規模は東西に約2.9m、南北に約2.9mのほぼ方形状を呈す。壁高は現高で北壁約55cm、南壁約22cm、東壁約42cm、西壁約46cmである。

埋土は上位が焼土粒・炭化物を包含する極暗褐色土、下位が炭化物を包含する褐色土で構成

される。

床面は全体的に凹凸があり、堅くしまっている。柱穴は検出されていない。

カマドは東壁中央部からやや南寄りに位置する。袖部右側には芯材として偏平な砂岩を斜位に床面下約8cmの深度に埋置している。燃焼部一部には板状の砂岩を敷いている。この礫下は加熱によって層厚約14cmの赤色変化を受けている。煙道部は刳貫き式で、煙出し部にむかってゆるやかな傾斜をもって下がり、煙出し部で斜位に立ち上がる。煙道部及び煙出し部には炭化物・極暗褐色土を多量に包含する褐色土が充塡されていた。

この住居址はDⅠ－2住居址の南隅を切って構築されている。

出土遺物（第21図，写真図版28）

〈床面・カマド出土〉

甕形土器　口縁部一部が欠損した、かなり歪んだロクロ不使用の土器である。口縁部は短く外反する。器面には、口縁部が内外共横ナデ、体部は内外共ナデ調整が施されている。底面には木葉痕がみられるが、ナデによって調整されている。

DⅠ－2住居址

遺　構（第20図，写真図版10）

この遺構は調査区南側緩斜面に検出されたもので、DⅠ－1住居址の北壁と切り合い関係にあるものである。精査段階において東壁一部を掘り過ぎてしまった。

規模はほぼ南北に約3.2m、ほぼ東西に約3.1mのやや菱形状に歪んだ形状を呈す。壁高は現高で北壁約42cm、南壁約36cm、東壁約43cm、西壁約25cmである。

埋土の大半は、焼土・極暗褐色土及び褐色土を帯状に包含する暗褐色土～褐色土で占められ、壁際に炭化物を包含する褐色土がはいる。

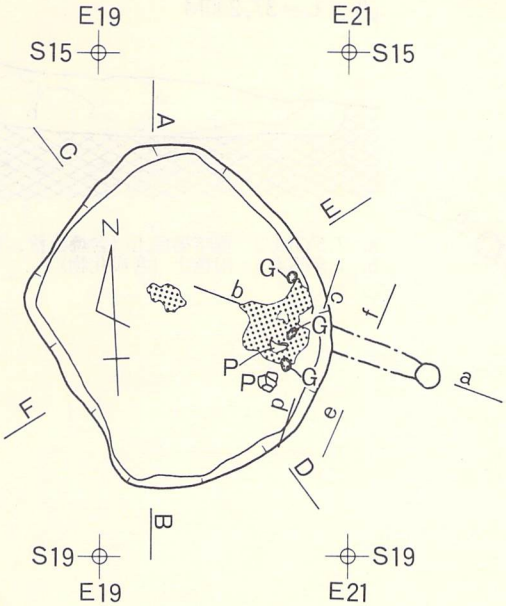
床面は比較的やわらかく凹凸がある。柱穴は検出されていない。

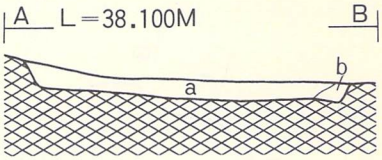
カマドは北壁中央部に位置する。右袖部には径約7cm×15cmの小礫が検出されているが、芯材としての用途を果したものとは思われない。燃焼部には偏平な砂礫を敷いている。この礫下は加熱によって層厚約6cmに赤色変化を受けている。煙道部は刳貫き式で煙出し部にむかってゆるやかな傾斜をもって下がり、煙出し部で斜位に立ち上がる。煙道部及び煙出し部は焼土・炭化物を多量に包含する褐色土で充塡されていた。

出土遺物（第21図，写真図版28）

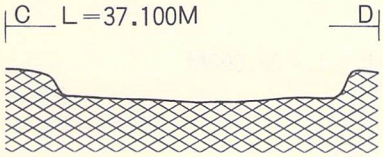
〈カマド出土〉

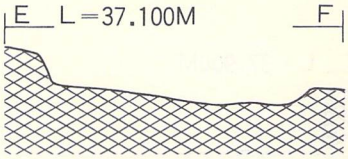
須恵器　カマド左袖から壺形土器の口縁部と体部破片が得られたが、これはDⅡ－5住居址のカマドから得られた口縁部と底部破片と同一個体で、ほぼ半個体に接合されたものであり、ロクロで調整されているものである。口縁部は短く外反する。口唇部は直線的ではなく、やや波



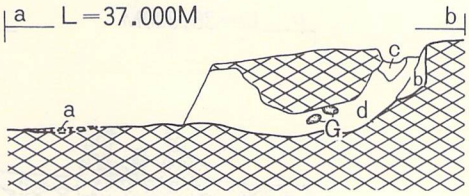


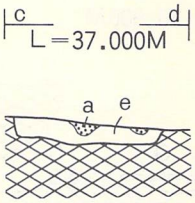
a. 10YR2/3　黒褐色土（含礫、炭化物）
b. 10YR3/4　暗褐土



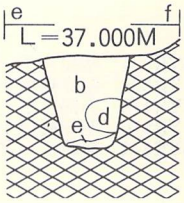


S=1/60



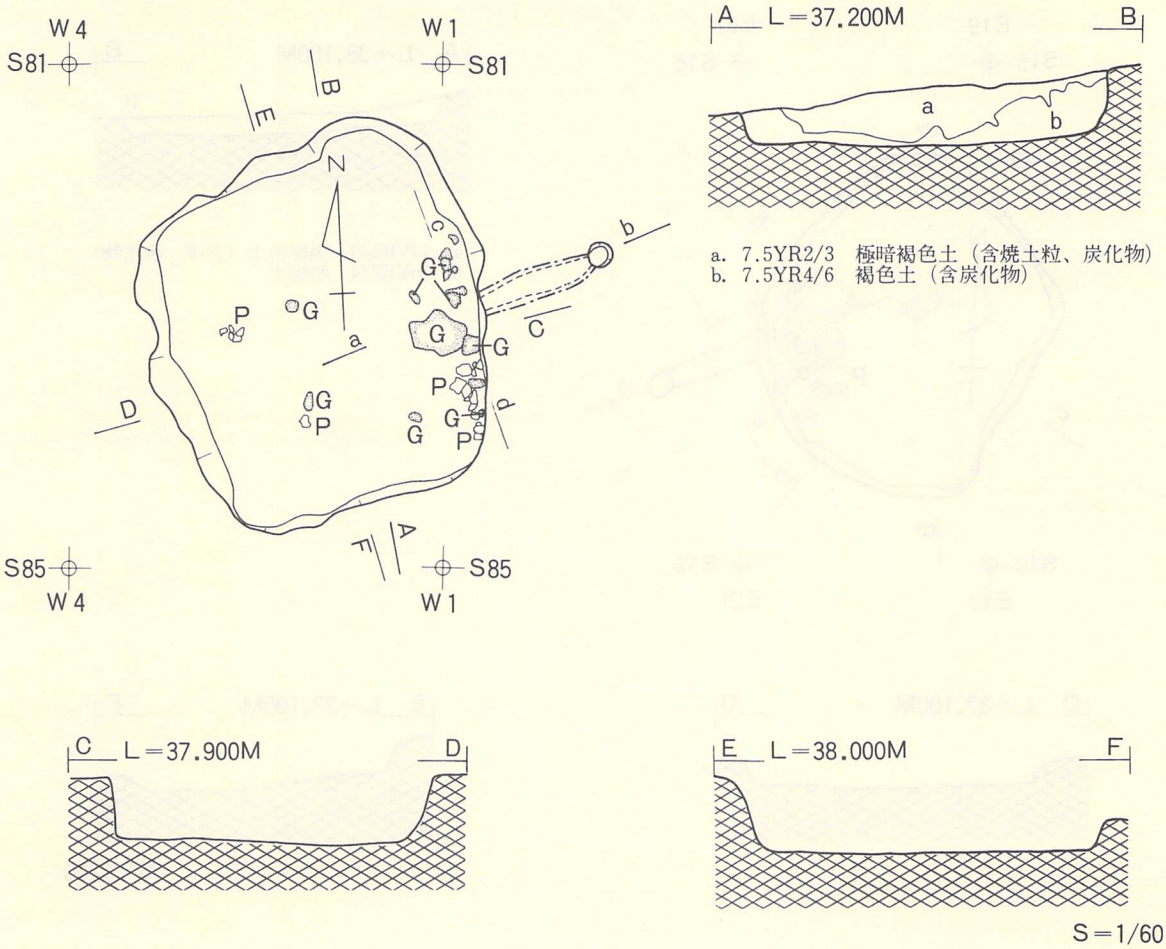


a. 2.5YR3/4　　暗赤褐色土　焼土
b. 10YR4/6　　褐色土
c. 10YR3/4　　暗褐色土
d. 10YR2/3　　黒褐色土（含焼土、炭化物、焼土粒）
e. 10YR5/6～5/8 黄褐色土（含礫）



カマド断面
S=1/30

第18図　BⅡ－2住居址

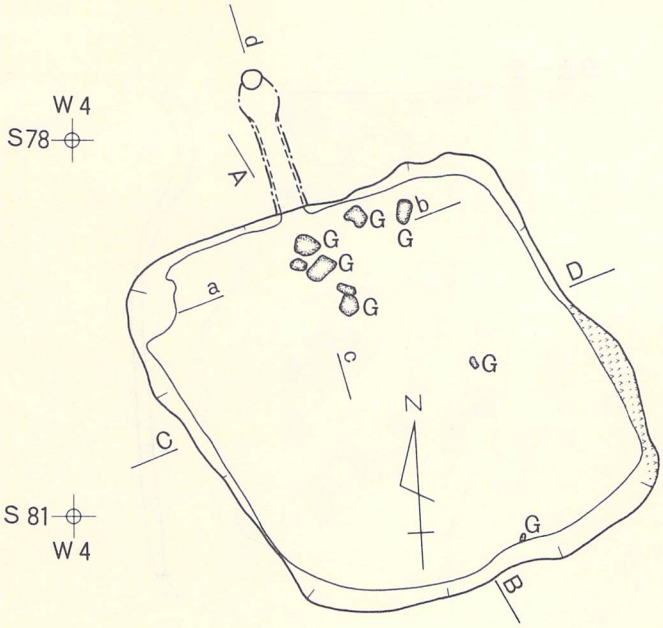


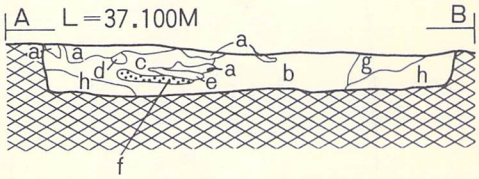
a. 7.5YR2/3　極暗褐色土（含焼土粒、炭化物）
b. 7.5YR4/6　褐色土（含炭化物）

a. 7.5YR3/4　暗褐色土（含焼土）
b. 5 YR5/8　明赤褐色土　焼土
c. 2.5YR4/8　赤褐色土　焼土
d. 5 YR5/6　明赤褐色土　焼土
e. 7.5YR4/4　褐色土（含炭化物、極暗褐色土）

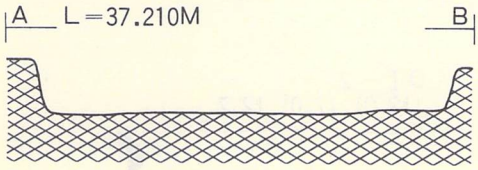
カマド断面
S＝1/30

第19図　ＤＩ－１住居址

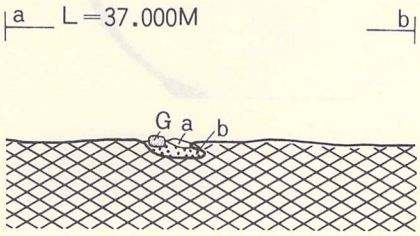


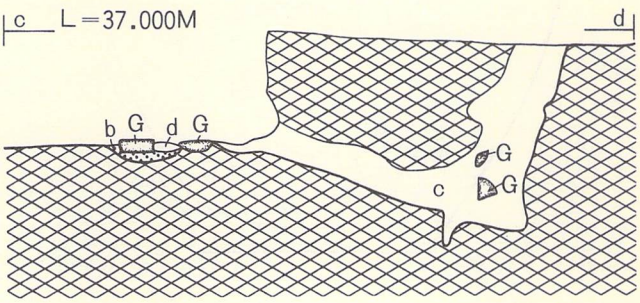


a. 7.5YR5/6　明褐色土
b. 7.5YR3/3　暗褐色土（含炭化物）
c. 7.5YR4/3　褐色土
d. 7.5YS2/3　極暗褐色土
e. 7.5YR4/6　褐色土
f. 2.5YR4/8　赤褐色土　焼土
g. 7.5YR4/6　褐色土
h. 7.5YR5/8　明褐色土（含炭化物）



S=1/60

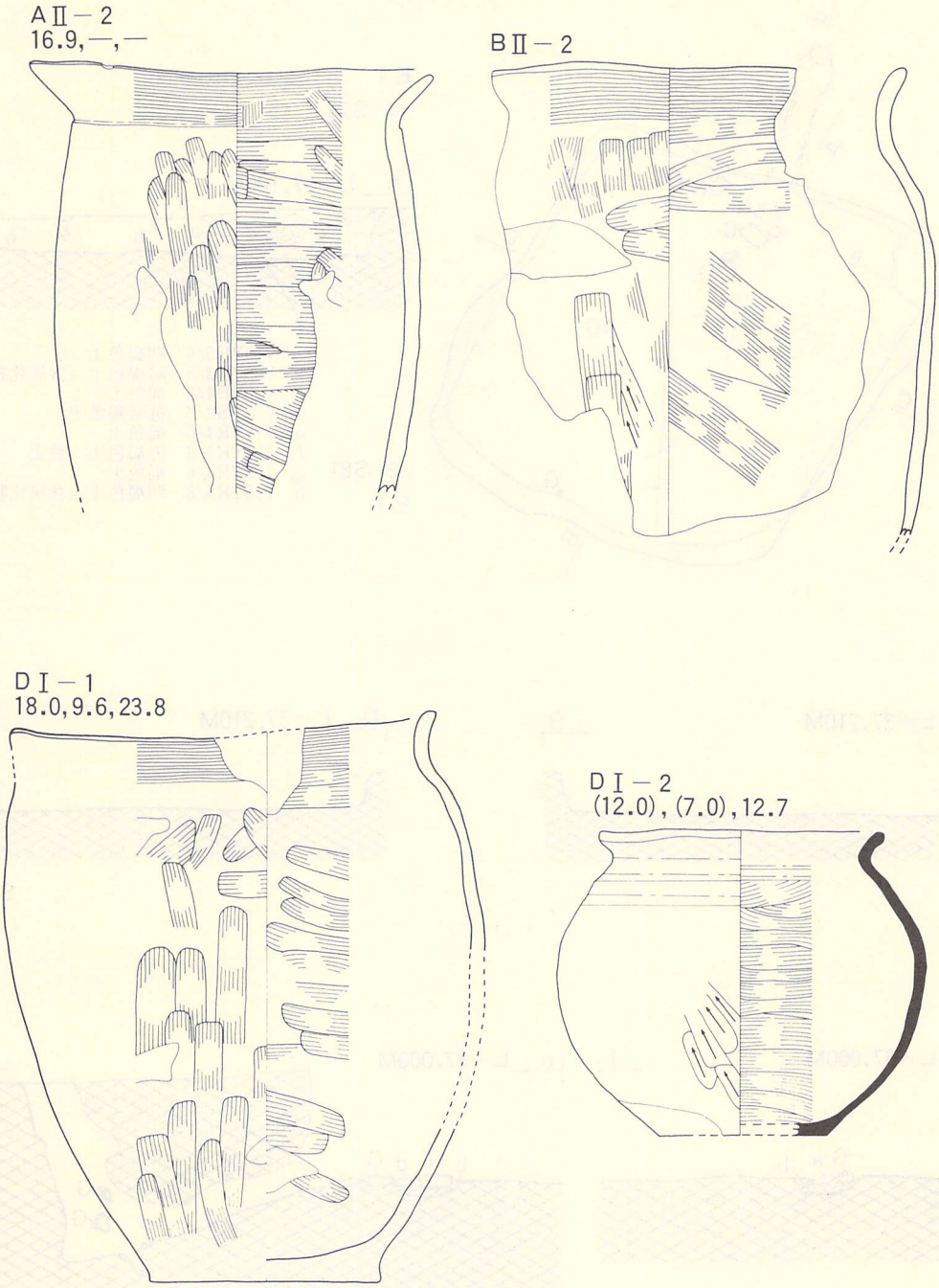




a. 7.5YR5/8　明褐色土
b.　5 YR4/8　赤褐色土　焼土
c. 7.5YR4/6～4/3 褐色土（含焼土、炭化物）
d. 7.5YR4/4　褐色土（含焼土）

カマド断面
S=1/30

第20図　DI－2住居址



第21図　AⅡ－2・BⅡ－2　DⅠ－1・DⅠ－2　住居址出土遺物

状ぎみで、口唇の厚さも一定ではない。体部は上半はロクロ調整が施され下半は浅いケズリ、内面は横位のナデ調整が施されている。

DII－1住居址

遺　構（第22・23・24図，写真図版11・12）

この遺構は調査区南側緩斜面の最も東寄りに検出された。床面上には多くの炭化材と現地性焼土が分布しているところから、この住居址は焼失住居址であると思われる。

規模は北西から南東に約5.3m、北東から南西に約5.3mの方形状を呈す。壁高は現高で北西壁約52cm、南西壁約35cm、南東壁約33cm、北東壁約35cmである。

埋土は炭化物を帯状に包含する黒褐色土で大半を占め、壁際ににぶい褐色土をブロック状に包含する暗褐色土が斜位にはいる。

床面は堅くしまり、ゆるやかな凹凸が認められる。柱穴はP_1(径約27cm・深さ約55cm)、P_2(径約22cm・深さ約54cm)、P_3（径約28cm・深さ約38cm)、P_4（径約29cm・深さ約16cm）の4個が検出されている。

カマドは北東壁南東寄りに1基、北西壁中央部に1基と北東壁南東寄りのカマド立割りの際、この直下より検出されたカマド1基の計3基が検出されている。

北東壁南東寄りに検出されたカマドは、両袖に芯材として偏平な砂礫をほぼ直立に埋置している。燃焼部には焼土が径約55cmの広がりをもって分布し、床面下約12cmの層厚に赤色変化を受けている。煙道部は刳貫き式で煙出し部にむかって下位にゆるやかに傾斜し、煙出し部へ移行する。煙出し部は直立する。煙道部と煙出し部には、炭化物・焼土粒を多量に包含する極暗褐色土が充塡されていた。

北西壁中央部に検出されたカマドは、両袖とも芯材として凝灰岩を壁に埋込む形に据えている。燃焼部には焼土が径約70cm×110cmの広がりをもって分布して、床面下約22cmの層厚に赤色変化を受けている。煙道部は掘り込み式と思われ、煙道部天井には凝灰岩を埋め込み、これに粘土を巻きつけて補強している。煙道は煙出し部にむかって下方にゆるやかに傾斜し、煙出し部へ移行する。煙出し部は外傾し立ち上がる。煙道部・煙出し部には焼土・炭化物を多量に包含する極暗褐色土が充塡されていた。

以上記述した2基のカマドは、土器の検出状況から同時期に使用された可能性が強い。

北東壁南東寄りのカマド断割りの際この直下から検出されたカマドは、左袖下に煙道部が、壁直下に煙出し部が位置するものである。燃焼部は壁直下に検出された煙出し部から南東約1.1mの床面に位置する。燃焼部には焼土が径約33cm×40cmの広がりをもって分布し、最大層厚約19cmのレンズ状に堅くしまっている。燃焼部から煙出し部までの全長は約116cmである。このカマドは、この住居址の拡張以前に使用されたものと思われ、拡張以前の住居址の規模は、カマド

及び壁の位置関係から推定するに、一辺４m程度の住居址であったものと思われる。

出土遺物（第25・26図，写真図版29・30）

〈床面・カマド出土〉

甕形土器　１は北東壁カマドから出土したもので、口縁部は緩く外反し、体部が脹らむものである。器面には、口縁部が内外共横ナデ、体部は内外共ナデ調整が施されている。底部はほとんどが欠損しているが、残存部には木葉痕が認められる。２・３・４は北西中央部のカマド燃焼部から出土した口縁部破片である。いずれも口縁部がやや強く外反するもので、２・３の口縁部は内外共横ナデ、体部外面はナデ、内面には２が刷毛目とナデ、３がナデ調整が施されている。４は口縁部が横ナデ、体部外面は刷毛目、内面はナデ調整が施されている。５は床面から出土した甕形土器底部破片で、器面には内外共ナデ調整が施され、底面には木葉痕がみられる。

フイゴ羽口　北東壁カマドから出土した羽口（６）で、長さ11cm、直径約5.5cm、通風孔径2.2×2.5cmのものである。

床面、カマドから得られた土器はいずれもロクロ不使用のものである。

〈埋土出土〉

甕形土器　７・８・９・10は口縁部破片、11は体部破片、12は体部から底部破片である。７・９の口縁部はやや強く短く外反するもの、８は緩く短く外反するもの、10は強く長く外反するものである。７・９・10の器面にはナデ調整が施され、８の外面はケズリ、内面はナデ調整が施されている。11は外面がケズリ、内面に刷毛目が、12には内外共ナデ調整が施されている。

これらの土器はいずれもロクロ不使用のものである。

坏形土器　13・14共ロクロで成形されているもので、内面はミガキ後黒色処理が施されている。底部切り離しは回転糸切りで、再調整は認められない。

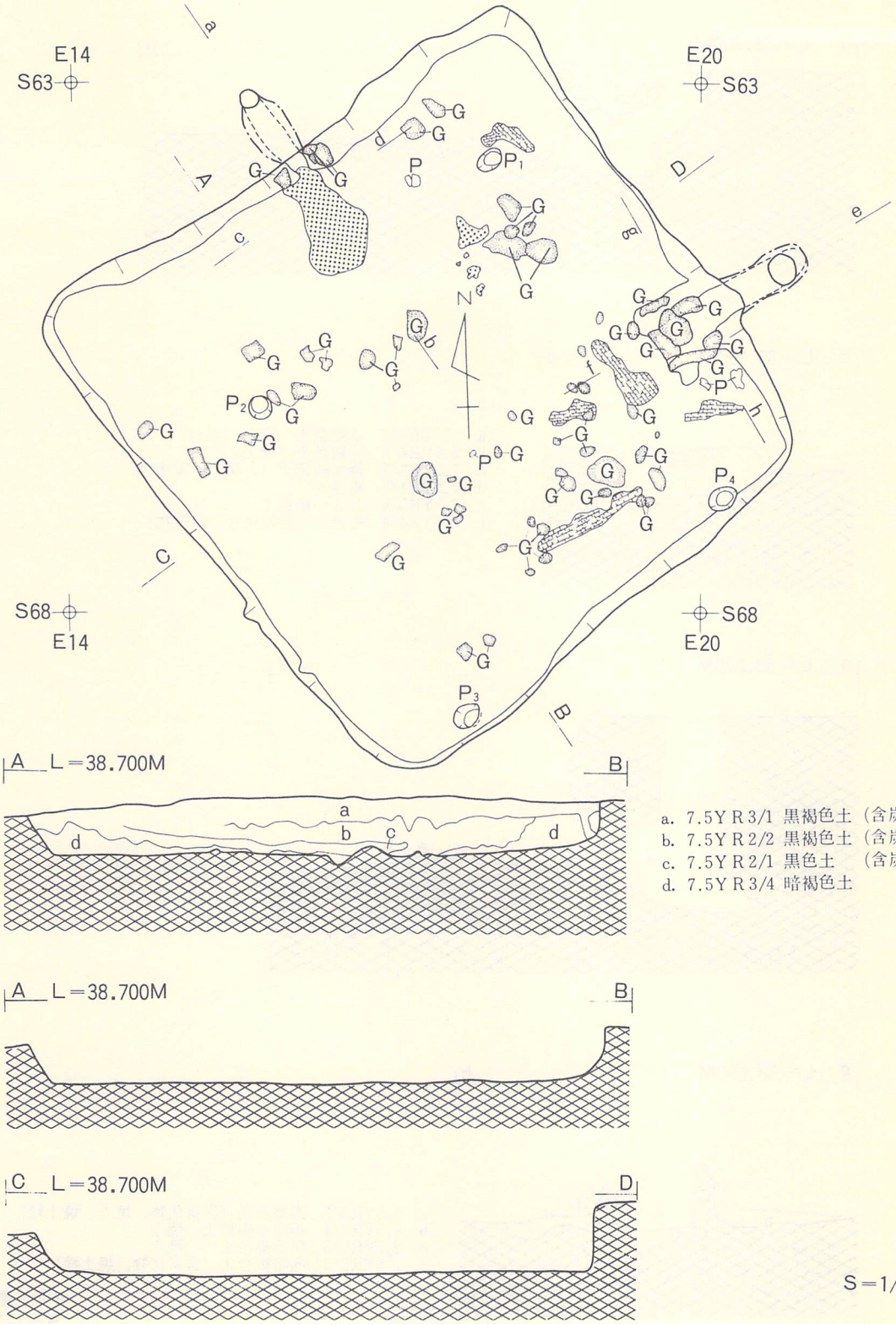
DII－2住居址

遺　構（第27・28図，写真図版13）

この遺構は調査区南側緩斜面、DII－１住居址の南側に検出された。規模は東西に約5.0m、南北に約4.5mのほぼ方形状を呈す。壁高は現高で北壁約69cm、南壁約13cm、東壁約51cm、西壁約60cmである。

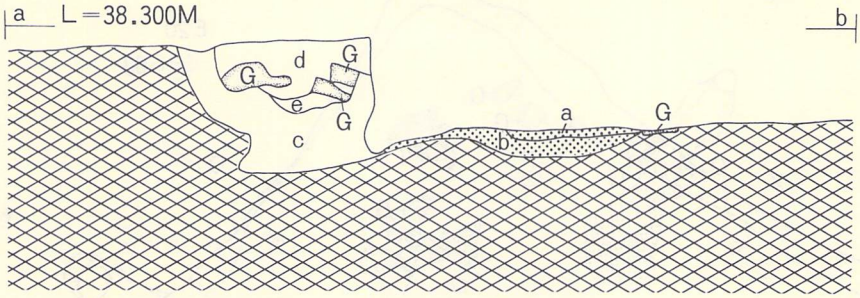
埋土は炭化物を包含する極暗褐色土で大半を占め、壁際に炭化物を包含する褐色土が斜位にはいる。

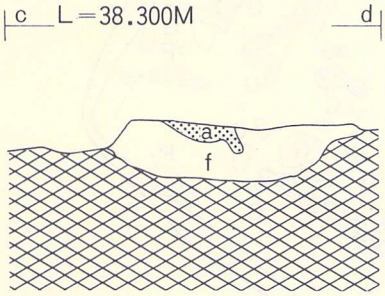
床面は小礫混じりのにぶい褐色土で、堅くしまり凹凸がある。南壁際には開口部径約75×85cm、底部径約60×80cm、深さ約４cmの浅いピットが検出されている。柱穴は床面ほぼ中央部にP_1（径約25cm・深さ約60cm）の１個が検出されている。



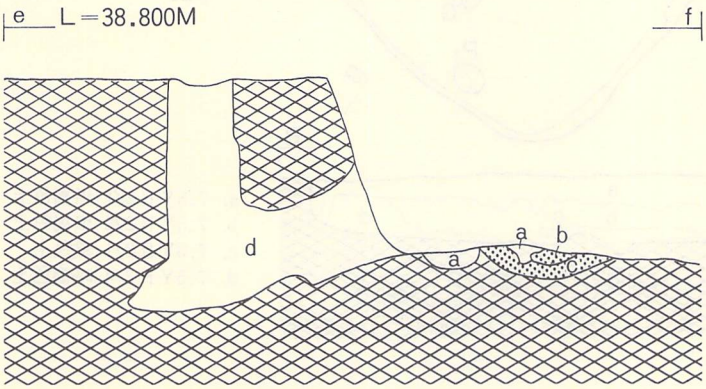
a. 7.5YR3/1 黒褐色土（含炭化物）
b. 7.5YR2/2 黒褐色土（含炭化物）
c. 7.5YR2/1 黒色土　（含炭化物）
d. 7.5YR3/4 暗褐色土

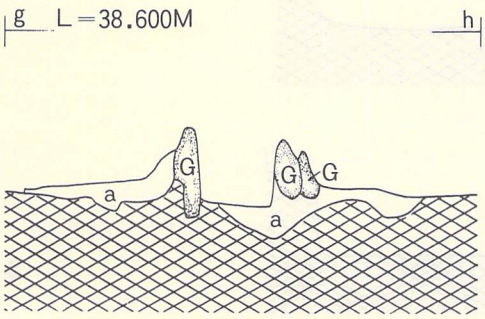
第22図　DⅡ－1住居址（1）





a. 5 YR4/6 赤褐色土 焼土
b. 2.5YR4/8 赤褐色土 焼土
c. 7.5YR2/3 極暗褐色土（含焼土、炭化物）
d. 7.5YR4/3 褐色土
e. 7.5YR5/4 にぶい褐色土
f. 7.5YR4/4 褐色土（含焼土粒、炭化物）

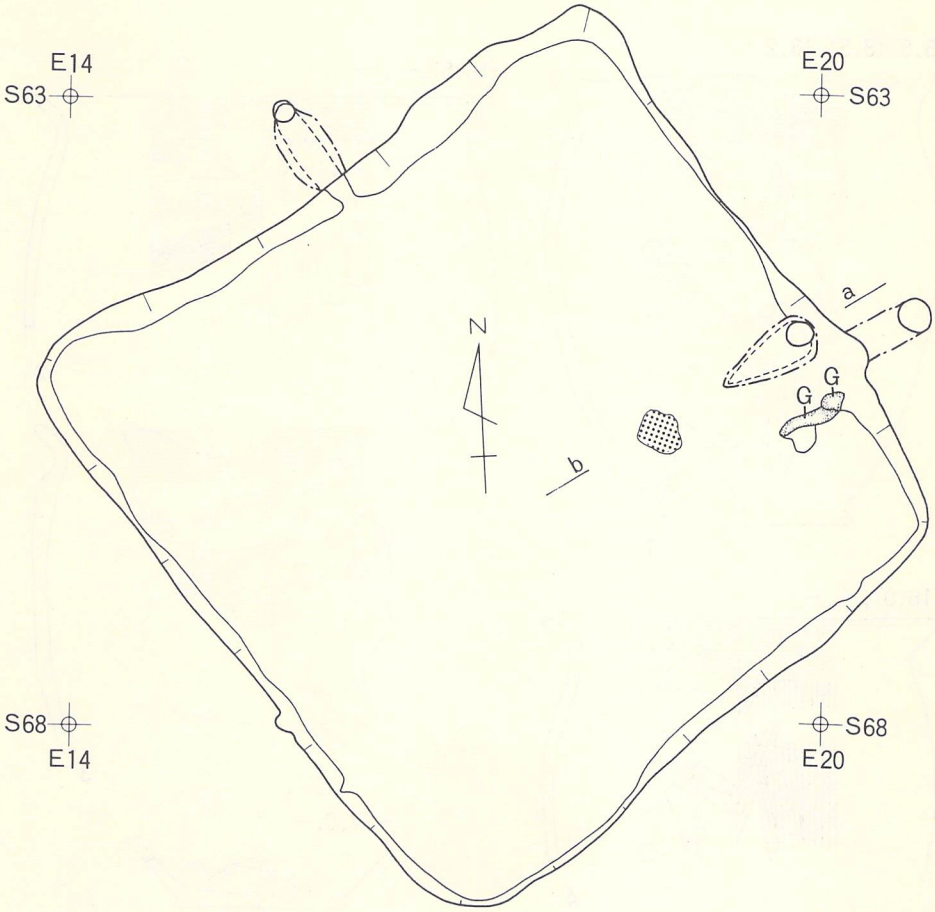




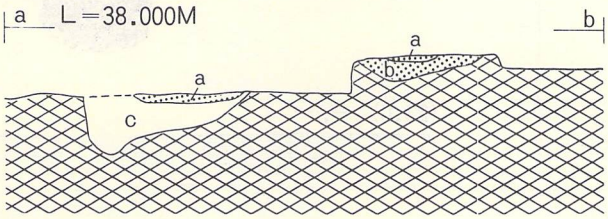
a. 7.5YR3/2 黒褐色土（含炭化物、焼土、焼土粒）
b. 2.5YR2/4 極暗赤褐色土 焼土
c. 2.5YR5/8 明赤褐色土 焼土
d. 7.5YR2/3 極暗褐色土（含炭化物、焼土粒）

カマド断面
S＝1/30

第23図 DⅡ－1住居址（2）



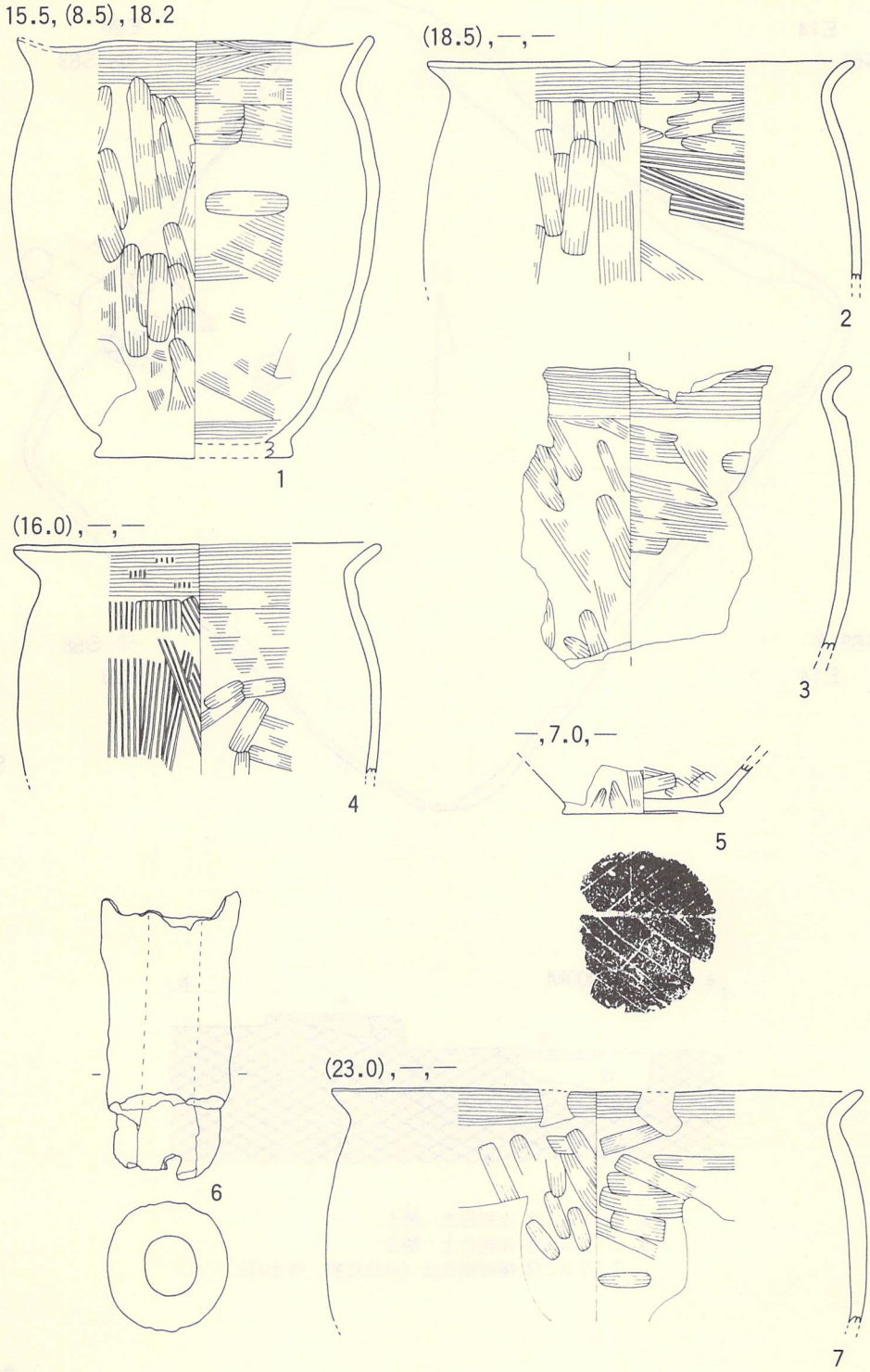
S＝1/60



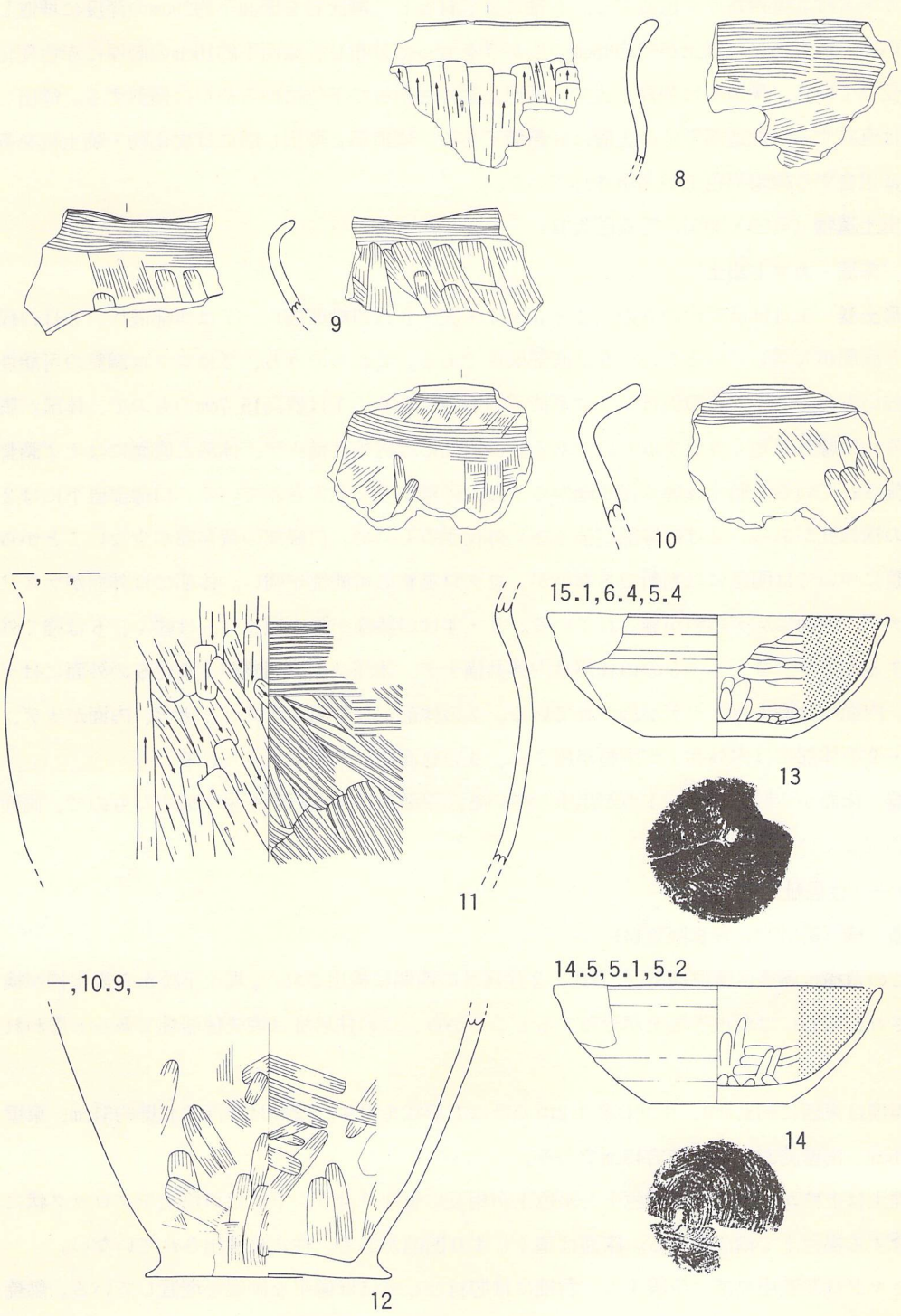
a. 2.5YR4/8 赤褐色土　焼土
b. 2.5YR4/8 赤褐色土　焼土
c. 7.5YR2/3 極暗褐色土（含炭化物、焼土粒）

カマド断面
S＝1/30

第24図　DⅡ－1住居址(3)



第25図　DⅡ－1住居址出土遺物（1）



第26図　DⅡ－1住居址出土遺物(2)

カマドは北壁西寄りに位置する。右袖には芯材として凝灰岩を床面下約20cmの深度に埋置している。燃焼部には焼土が径約45cmの広がりをもって分布し、床面下約10cmの層厚に赤色変化を受けている。煙道部は刳貫き式で、煙出し部にむかって下位にゆるやかに傾斜する。煙出し部は直立する。煙道部下位の土層は砂礫層である。煙道部と煙出し部には炭化物・焼土粒を多量に包含する極暗褐色土が充塡されていた。

出土遺物（第29・30図，写真図版31）

〈床面・カマド出土〉

甕形土器　1はほぼ完形のもの、2・3・4・5・6は口縁部破片、7は体部破片、8は口縁部と底部が欠損しているもの、9は底部破片である。これらのうち、2はロクロ調整の可能性が強いものであり、その他はロクロ不使用のものである。1は器高15.7cmのもので、体部が脹らみ、口縁部が短く外反するものである。口縁部には内外共横ナデ、体部と底面にはナデ調整が施されている。胎土は悪く径1㎜から7㎜の砂礫が多く混入されている。口縁部直下には2個の補修孔がある。2は口縁部が強く短く外反するもので、口縁部の残存部が少ないことから調整については明確には判断できないが、ロクロ調整の可能性が強い。体部には外面がケズリとナデ、内面にナデ調整が施されている。3・4は口縁部が強く短く、5は緩く、6は強く外反するもので、3・4・5の口縁部は内外共横ナデ、体部はナデ調整が、また6の外面にはナデ、内面には刷毛目とナデが施されている。7の体部には外面がケズリとナデ、内面がナデ、8・9の体部には内外共ナデ調整が施され、9の底面には木葉痕がみられる。

石器　床面から磨石（10）1点が出土している。平面形はほぼ円形を呈す偏平なもので、両面を利用しているものである。

DⅡ－3住居址

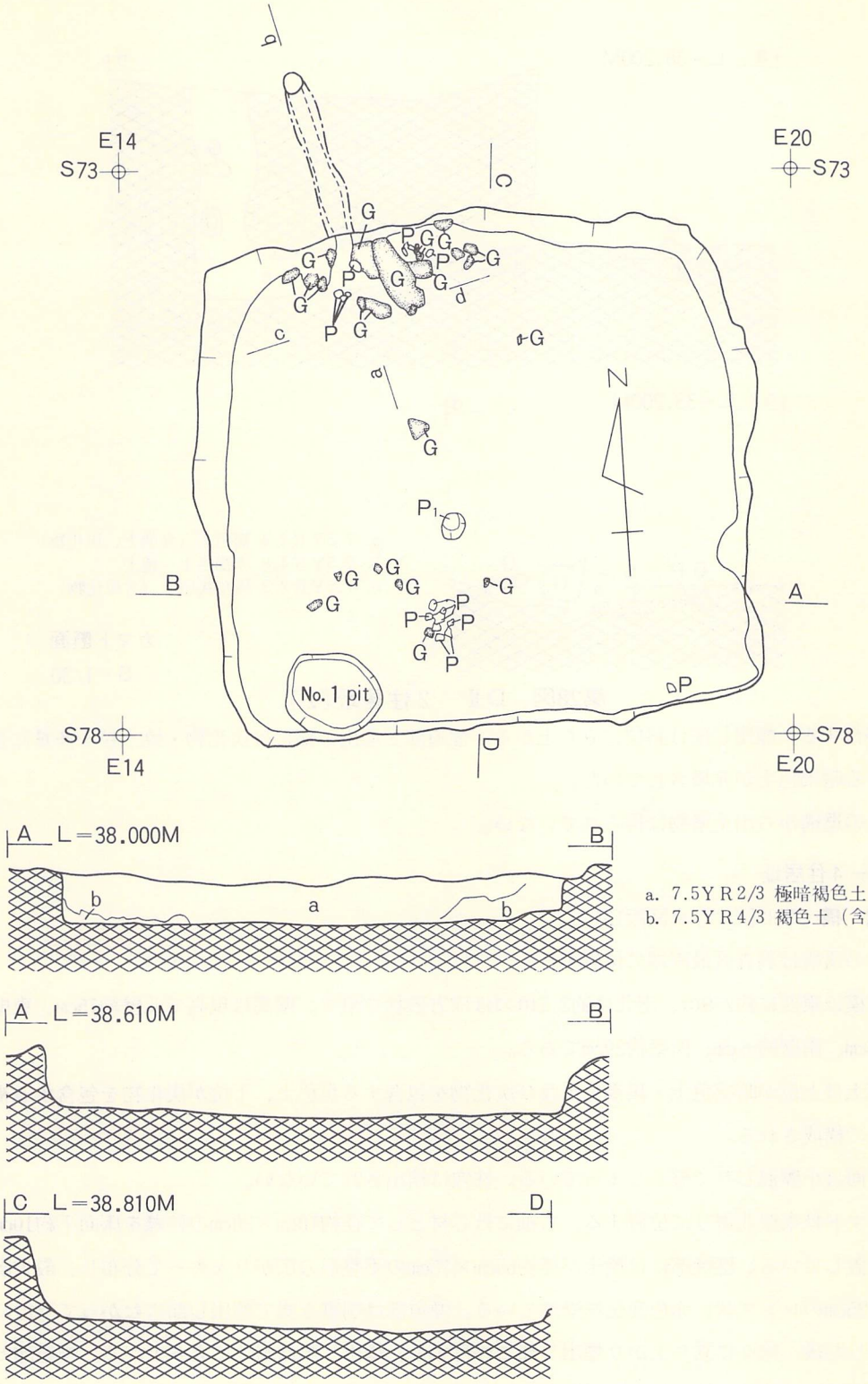
遺　構（第31図，写真図版14）

この遺構は調査区南側緩斜面、DⅡ－2住居址の西側に検出された。埋土下位から炭化物が検出され、床面には現地性焼土が分布するところから、この住居址は焼失住居址であると思われる。

規模は東西に約3.4m、南北に約3.2mのほぼ方形状を呈す。壁高は現高で北壁約51cm、東壁約46cm、南壁約22cm、西壁約43cmである。

埋土は上位から中位が黒褐色土と黒色土が相互に重なり合う。下位は黒色土をブロック状に包含する褐色土で構成される。床面は堅くしまり凹凸がある。柱穴は検出されていない。

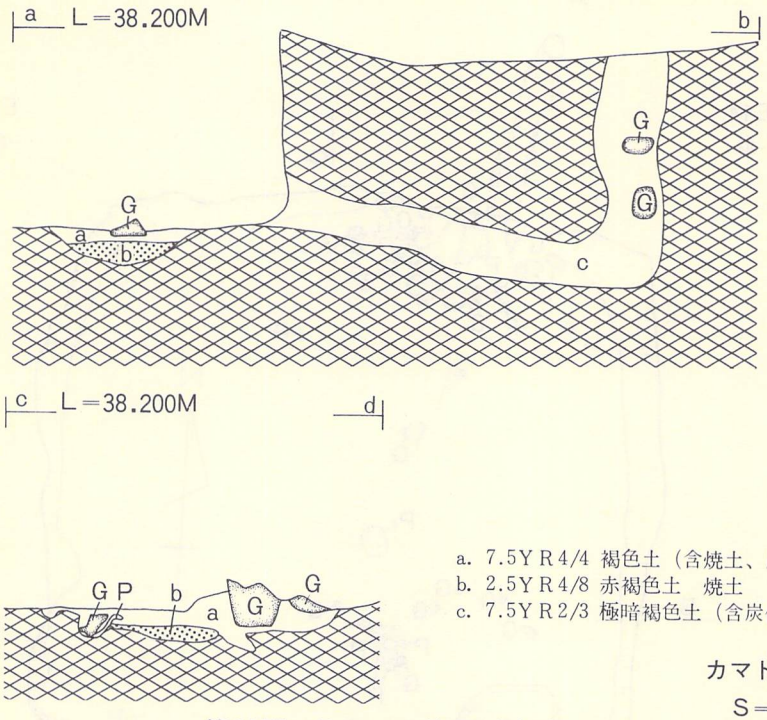
カマドは北壁中央部に位置する。右袖には芯材としてほぼ偏平な砂礫を埋置している。燃焼部には焼土が径約40cm×70cmの広がりをもって分布し、最大層厚約30cmのレンズ状に赤色変化を受けている。煙道部は刳貫き式で、煙出し部にむかって下位にゆるやかに傾斜し、煙出し部



a. 7.5YR2/3 極暗褐色土（含炭化物）
b. 7.5YR4/3 褐色土（含炭化物）

S=1/60

第27図　DⅡ－2住居址（1）



第28図　DⅡ－2住居址(2)

に移行する。煙出し部は斜位に立ち上がる。煙道部と煙出し部には炭化物・焼土粒を多量に包含する暗褐色土が充塡されていた。

この遺構から出土遺物は得られていない。

DⅡ－4住居址

遺　構（第32図，写真図版15）

この遺構は調査区最南端に位置する。

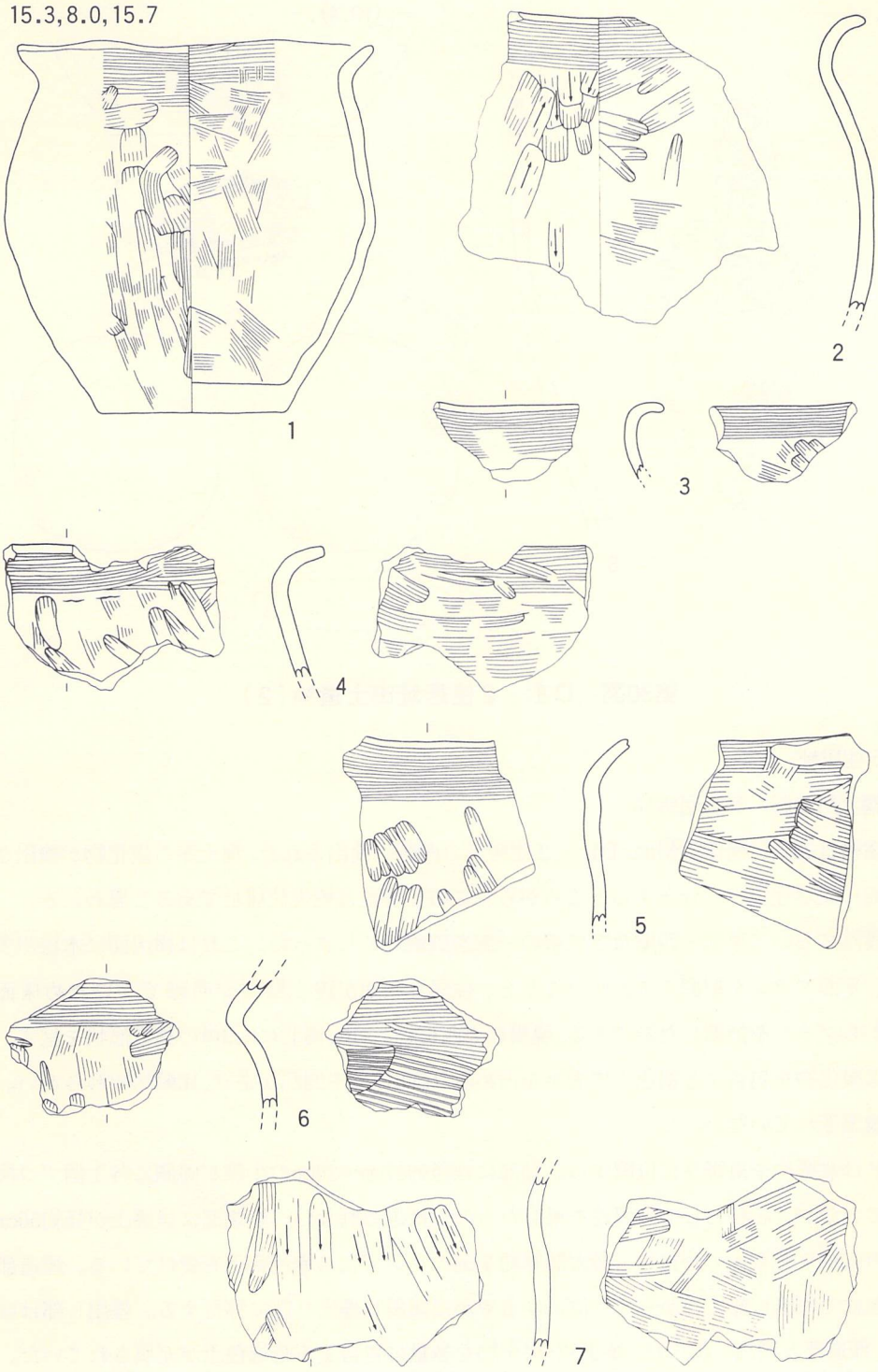
規模は東西に約2.9m、南北に約2.7mのほぼ方形状を呈す。壁高は現高で北壁約75cm、東壁約46cm、南壁約6cm、西壁約39cmである。

埋土は上位が暗褐色土・黒褐色土及び炭化物を包含する黒色土、下位が炭化物を包含する褐色土で構成される。

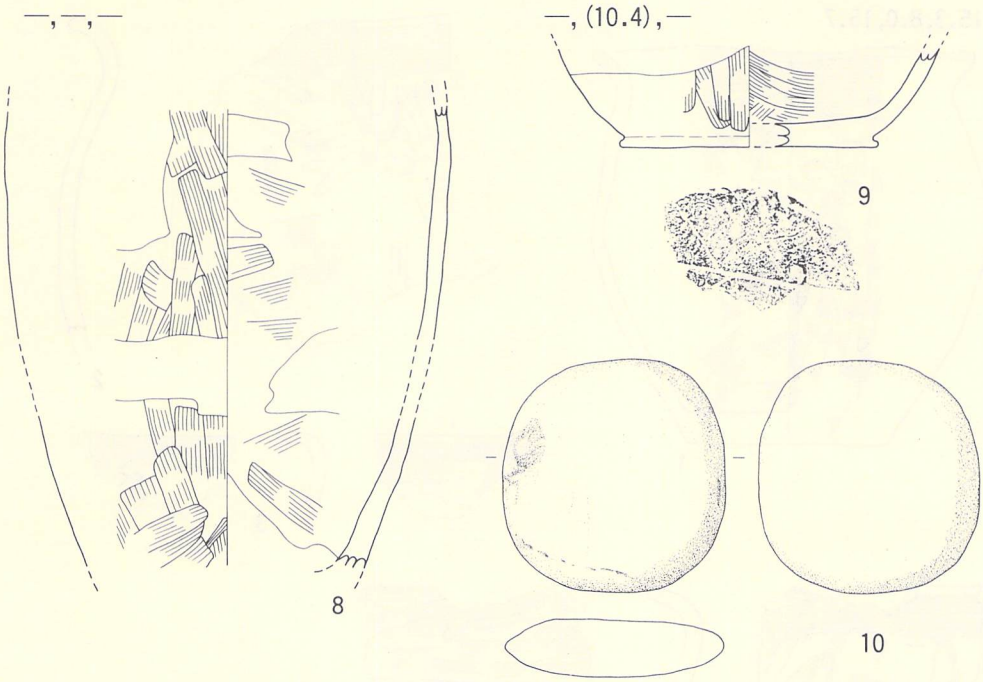
床面は小礫混じりで堅くしまっている。柱穴は検出されていない。

カマドは東壁北寄りに位置する。右袖には芯材として径約10cm×20cmの砂礫を床面下約10cmに埋置している。燃焼部には焼土が径約65cm×75cmの不整形の広がりをもって分布し、最大層厚約25cmのレンズ状に赤色変化を受けている。煙道部は刳貫き式で煙出し部にむかって下位に傾斜した後、徐々に立ち上がり煙出し部に移行する。煙出し部は斜位に立ち上がる。煙道部と煙出し部には焼土・焼土粒及び炭化物を多量に包含する褐色土が充塡されていた。

この遺構から出土遺物は得られていない。



第29図　DⅡ－2住居址出土遺物(1)



第30図　DⅡ－2住居址出土遺物(2)

DⅡ－5住居址

遺　構（第33図，写真図版16）

この遺構は調査区南側緩斜面、DⅡ－2住居址の西側に検出された。埋土から炭化物が検出され、床面に現地性焼土が分布するところから、この住居址は焼失住居址であると思われる。

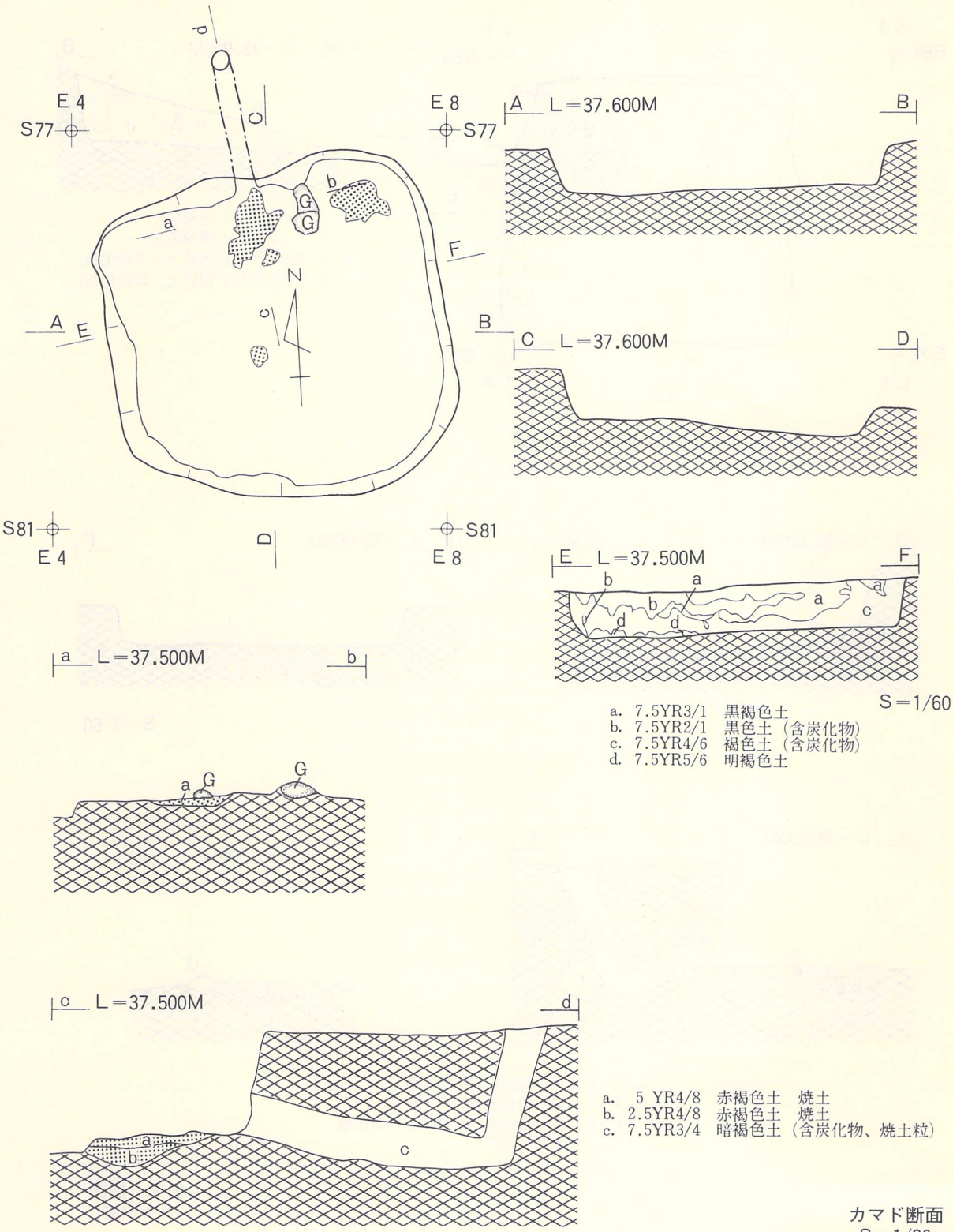
精査段階において東壁・西壁及び南壁の一部を破壊してしまった。これは検出面に木根が多くあり、平面プランを把握できかねたことと、住居址床面が浅く壁面が明確でないため床面の堅さからプランを把握した為である。規模は東西に約2.8m、南北に3.3mの長方形状を呈す。

埋土は炭化物を包含する褐色土で大半を占める。床面はやや凹凸があり、比較的やわらかい。柱穴は検出されていない。

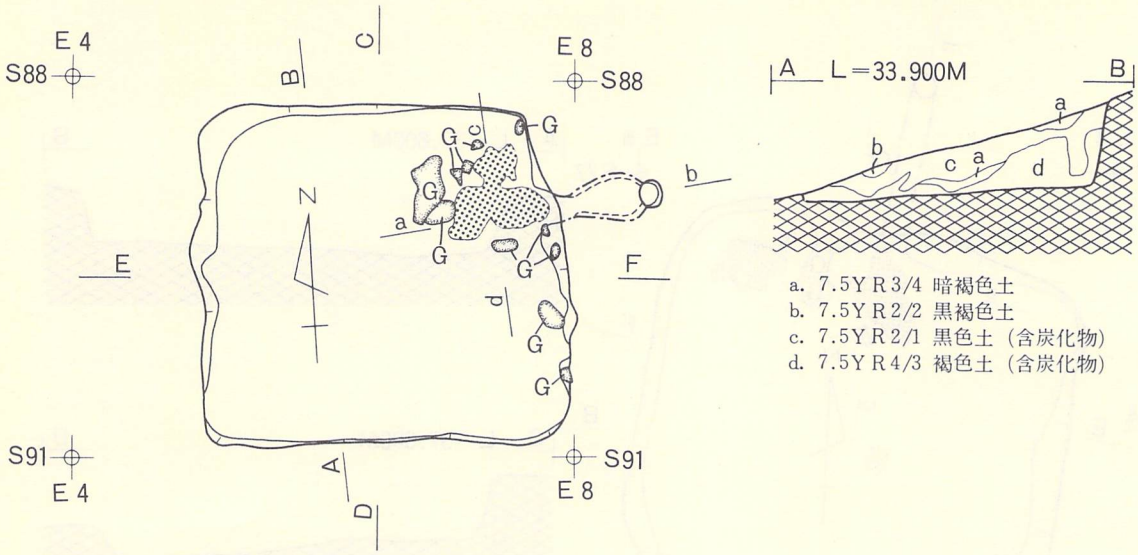
カマドは北壁やや東寄りに位置する。袖部には径約17cm～20cmの小礫が両側に各1個ずつ検出されているが、芯材としての用途を果したものとは思われない。燃焼部には焼土が径約50cm～70cmの広がりをもって分布し、最大層厚約7cmのレンズ状に赤色変化を受けている。煙道部は刳貫き式で煙出し部にむかって下位にゆるやかに傾斜し煙出し部に移行する。煙出し部は直立する。煙道部と煙出し部には、焼土粒・炭化物を多量に包含する暗褐色土が充填されていた。

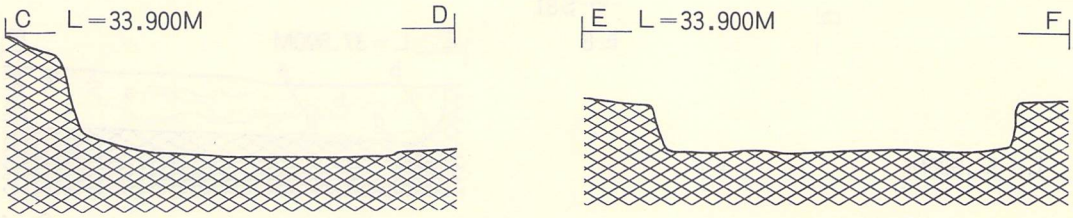
出土遺物（第34図，写真図版32）

〈床面・カマド出土〉

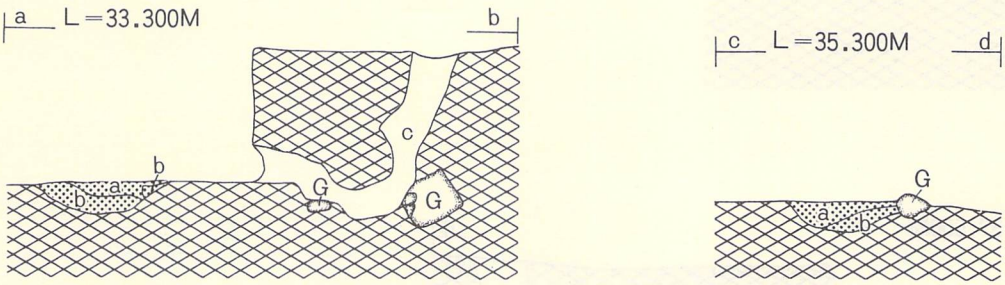

E 4
S77
E 8
S77
A L=37.600M
B
C L=37.600M
D
S81
E 4
S81
E 8
E L=37.500M
F
a L=37.500M
b
c L=37.500M
d
N
a. 7.5YR3/1 黒褐色土
b. 7.5YR2/1 黒色土（含炭化物）
c. 7.5YR4/6 褐色土（含炭化物）
d. 7.5YR5/6 明褐色土
S=1/60
a. 5 YR4/8 赤褐色土 焼土
b. 2.5YR4/8 赤褐色土 焼土
c. 7.5YR3/4 暗褐色土（含炭化物、焼土粒）
カマド断面
S=1/30

第31図 DⅡ－3住居址





S=1/60



a. 5 YR7/4 にぶい橙色土 焼土
b. 5 YR6/8 橙色土 焼土
c. 7.5YR4/3 褐色土 （含焼土、炭化物）

カマド断面
S=1/30

第32図 DⅡ－4住居址

甕形土器　1～6は口縁部破片、7～10は底部破片である。いずれも小破片であり、ナデ調整が施されているものである。

須恵器　カマドから得られたもので、DⅠ－2住居址カマドから得られた破片と接合されたものである。記述はDⅠ－2住居址出土遺物の項で一括述べたので省略する。

フイゴ羽口　カマド袖部から出土した羽口（11）で、長さ13.5cm、直径4.5～5.1cm、通風孔径2.4×2.7cmのものである。

鉄製品　12の鉄製紡錘車、13の刀子、14の刀が北東壁際床面から出土している。12は直径5.7×6.0cm、厚さ2～6㎜、孔径5㎜のものである。13は長さ4.3cmの破片である。14は刀身の長さ約20cm、柄が約9cmのもので、刀身は反る。柄の断面は長方形状、刀身の断面はほぼ二等辺三角形を呈し、平造の可能性が強い。

2. 住居址状遺構

AⅡ－3住居址状遺構

遺　構（第35図，写真図版17）

この遺構は調査区北側緩斜面、AⅡ－1住居址の西側に検出された。遺構内から炉址・柱穴が検出されなかったことから住居址状遺構と認定した。壁は東側半分のみ確認されたが、西側約半分は確認されていない。

平面形は検出された壁から推定してほぼ東西に長軸をもつ楕円状を呈するものと思われる。規模は径約2.3m×2.8mと推定される。壁高は現高で北壁約31cm、東壁約50cmである。

埋土は中央部に黒褐色土、その両側に暗褐色土を斑状に包含する褐色土で構成される。

床面は凹凸があり、比較的堅くしまっている。ほぼ中央部は径約20cmの範囲にガリガリに堅くしまった部分があり、微量の炭化物が検出されたが、焼成痕は認められなかった。

この遺構から出土遺物はない。

CⅡ－1住居址状遺構

遺　構（第35図，写真図版17）

この遺構は調査区南側緩斜面、DⅡ－1住居址の北側に検出された。遺構内から炉址・柱穴が検出されなかったことから住居址状遺構と認定した。精査段階において北西壁を掘り過ぎてしまった。

平面形は北東から南西に長軸をもつ楕円状を呈す。規模は径約3.2m×3.8mである。壁高は現高で北壁約20cm、東壁約23cm、南壁約25cmである。

埋土は上位が暗褐色土を斑状に包含する黒褐色土、下位が暗褐色土を斑状に包含する褐色土

で構成される。

床面は堅く、凹凸が認められる。

この遺構から出土遺物はない。

3．ピット

AII－51ピット

遺　構（第36図，写真図版18）

この遺構は調査区北側緩斜面に検出されたもので、AII－1住居址北西隅に南東壁を切られているものである。

平面形は開口部がほぼ円形を、底部が不整形を呈す。規模は開口部径約90cm、底部径約80cm、深さ約71cmである。壁は底部から中部にかけて内彎して立ち上がり、中部から開口部まで外傾し立ち上がる。

埋土は焼土粒・炭化物を微量に包含する黒褐色土で大半を占め、壁際に暗褐色土・褐色土がはいる。

底面はほぼ平担である。

出土遺物（第52図，写真図版33）

出土遺物は1・2が埋土から出土している。

1は深鉢の口縁部破片である。口縁は波状を呈するものと思われる。口縁部は外反する。口唇は丸みを呈す。地文には単節斜縄文が施されているが磨滅が激しく、節を見きわめることが困難である。この土器片は縄文時代後期初頭に位置づけられるものと思われる。

2は深鉢の底部破片と思われる。小破片の為、文様構成は不明である。

AII－52ピット

遺　構（第36図，写真図版18）

この遺構はAII－51ピットの南東側半分を切って構築されているピットである。AII－51ピットの精査段階において切り合い関係が判明した為、埋土断面図はとることができなかった。

平面形は開口部・底部共ほぼ円形を呈す。規模は開口部径約170cm、底部径約130cm、深さ約71cmである。壁は底部から外傾し立ち上がる。

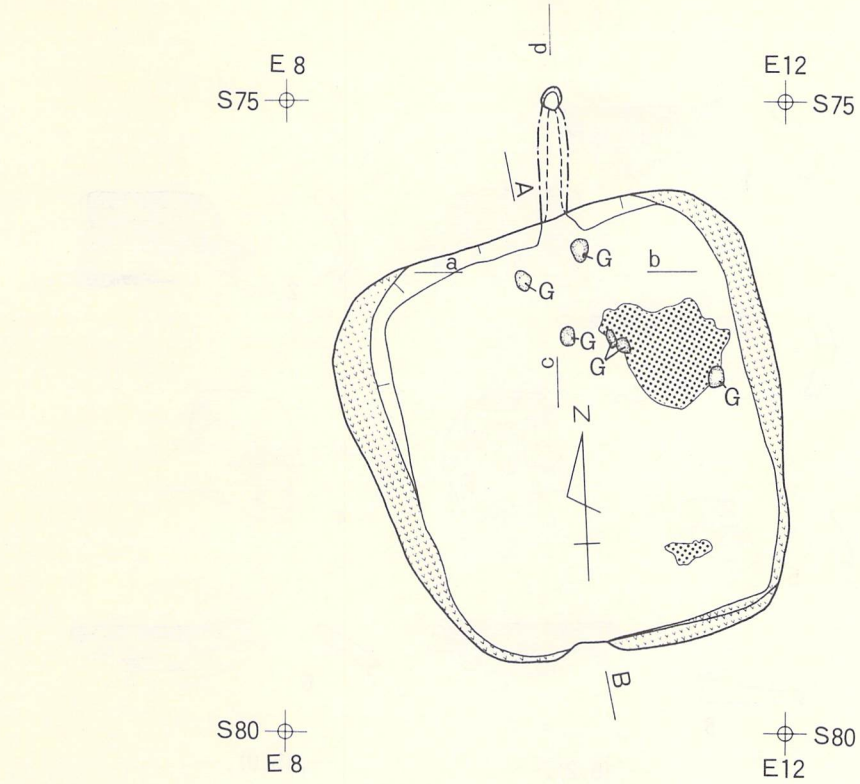
底面はほぼ平担である。この遺構は、AII－102陥し穴状遺構に切られているものである。

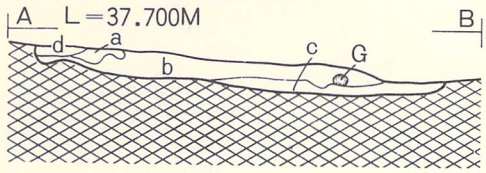
出土遺物はない

AII－53ピット

遺　構（第37図，写真図版18）

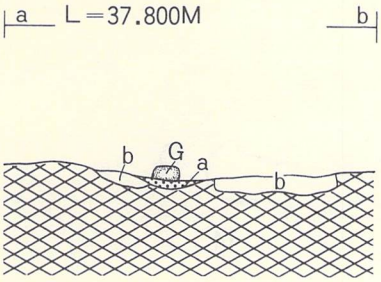
この遺構は調査区北側緩斜面、AII－2住居址の南側に検出された。検出面でのプランを明確

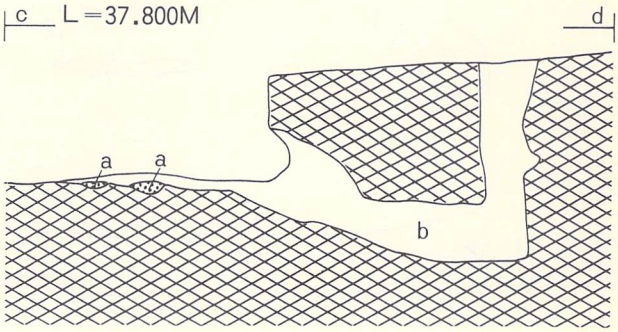




a. 10YR3/4 暗褐色土（含炭化物）
b. 10YR4/6 褐色土　（含炭化物、焼土）
c. 10YR5/8 黄褐色土（含炭化物）
d. 10YR4/4 褐色土（含炭化物）

S＝1/60

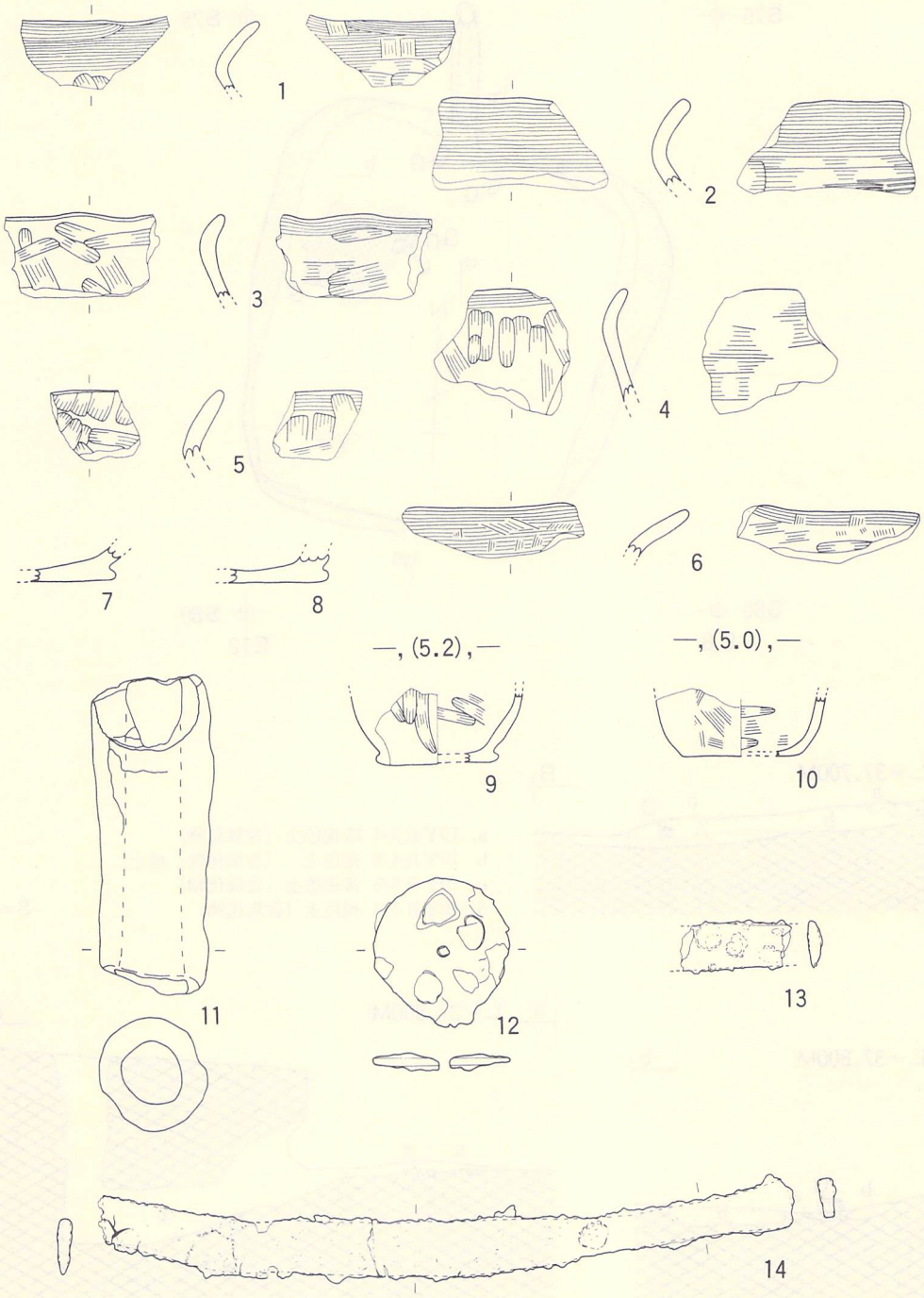




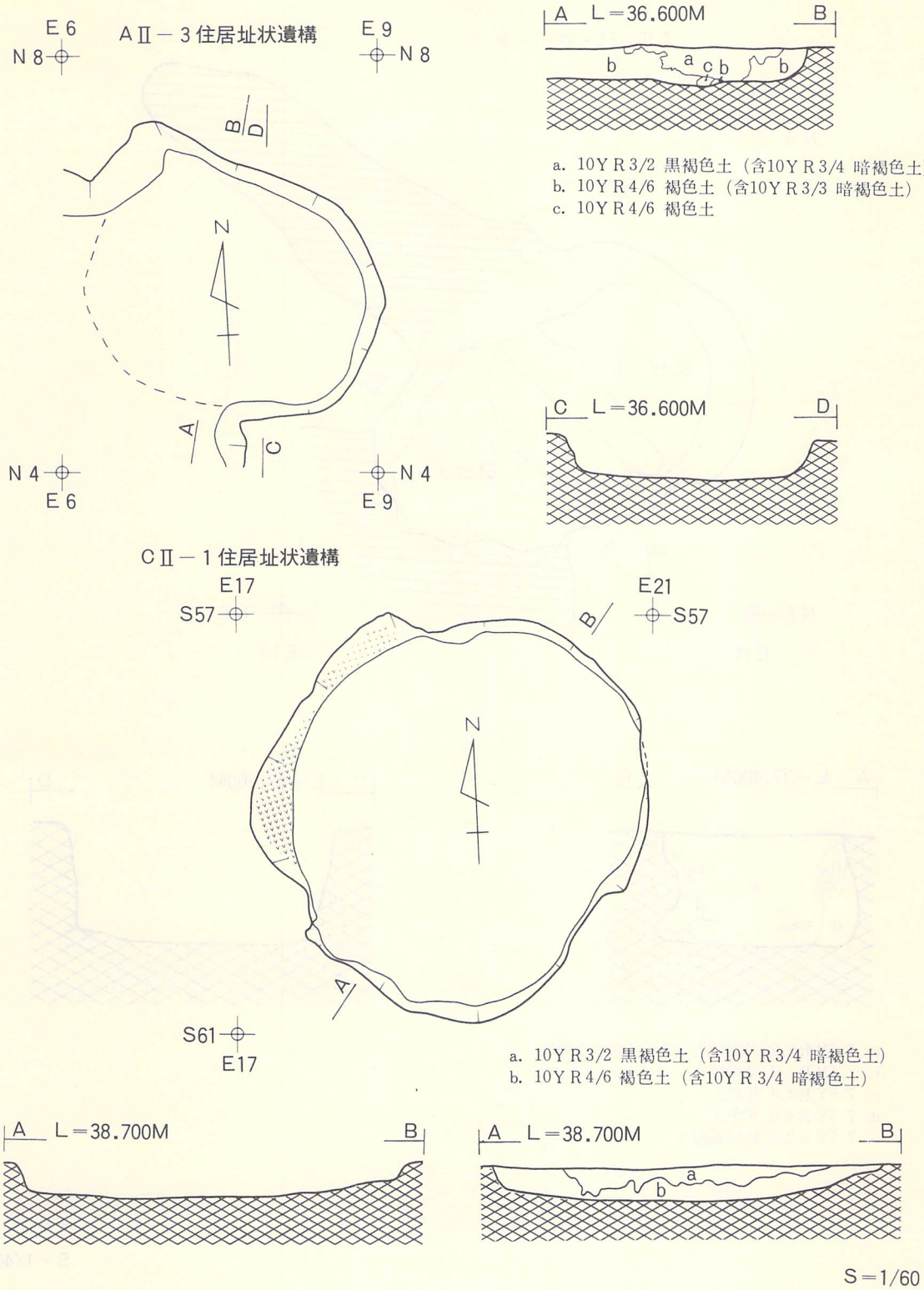
a. 2.5YR3/6 暗赤褐色土　焼土
b. 7.5YR3/4 暗褐色土（含焼土粒、炭化物）

カマド断面
S＝1/30

第33図　DⅡ－5住居址

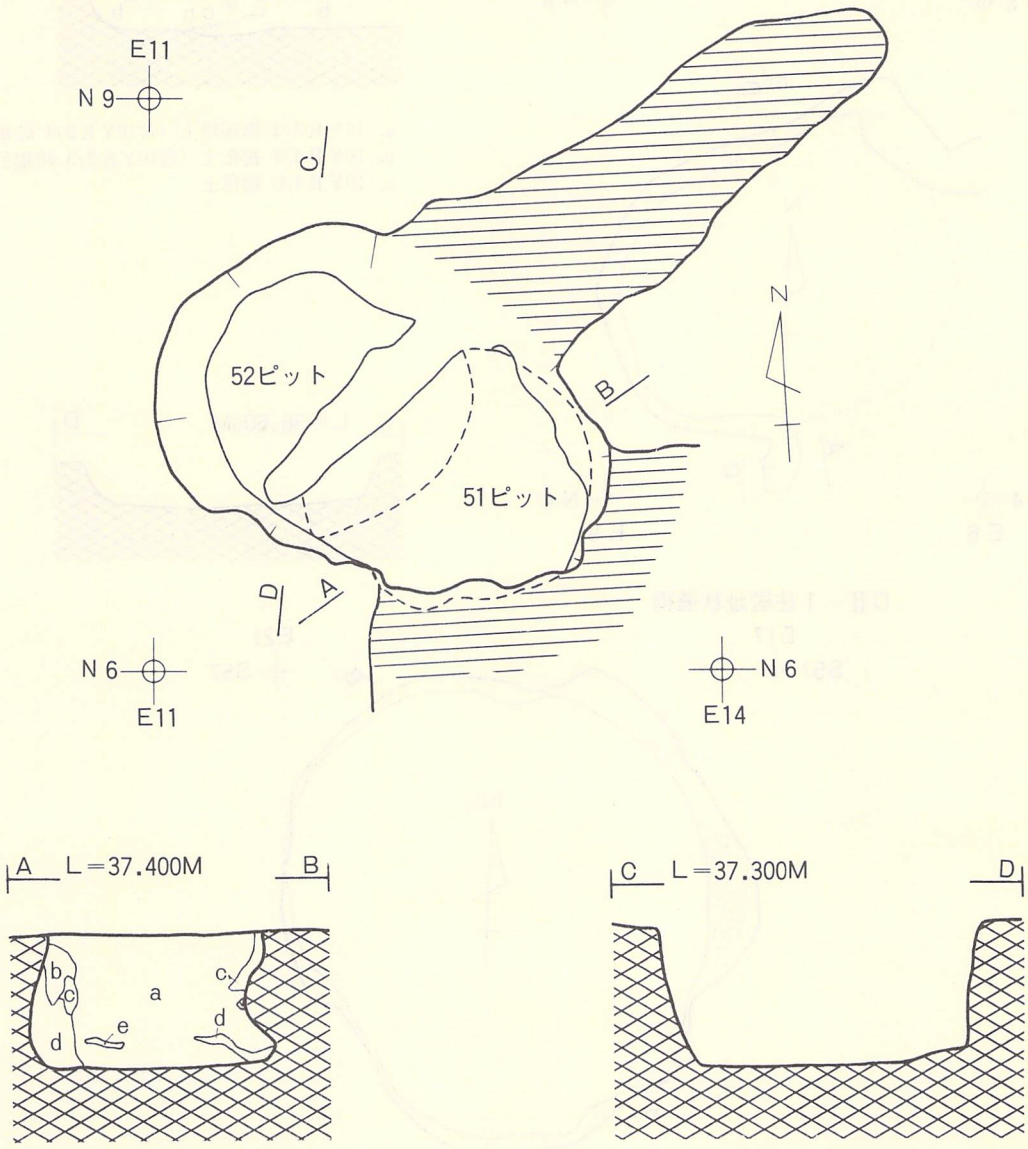


第34図　DⅡ－5住居址出土遺物



第35図　AⅡ－3・CⅡ－1住居址状遺構

AⅡ－51・52ピット



a. 7.5YR2/2 黒褐色土（含焼土粒炭化物）
b. 7.5YR3/4 暗褐色土
c. 7.5YR4/4 褐色土
d. 7.5YR4/6 褐色土
e. 7.5YR2/3 極暗褐色土

S＝1/40

第36図　AⅡ－51・52ピット

にとらえることが出来なかったため、精査段階において開口部を破壊してしまった。

平面形は開口部・底部共楕円形を呈す。規模は開口部径約115cm×150cm、底部径約90cm×110cm、深さ約38cmである。壁は底部から外傾して立ち上がる。

埋土は黒褐色土・暗褐色土・褐色土が相互に重なり合う。

底面はほぼ平担である。

出土遺物はない。

AII—54ピット

遺　構（第37図，写真図版18）

この遺構は調査区北側緩斜面に検出されたもので、AII－2住居址西壁と切り合っている。埋土から判断するに、このピットはAII－2住居址に切られているものと思われる。

平面形は開口部・底部共楕円状を呈す。規模は開口部径約125cm×150cm、底部径約115cm×130cm、深さ約70cmである。壁は底部から外傾して立ち上がる。

埋土は褐色土の単層である。

出土遺物はない。

AII—55ピット

遺　構（第38図，写真図版18）

この遺構は調査区北側緩斜面、AII－1住居址の東側に検出された。

平面形は開口部・底部共円形を呈す。規模は開口部径約180cm、底部径約160cm、深さ約55cmである。壁は底部から外傾して立ち上がる。

埋土は黄褐色の粘土粒が混入する黒褐色土である。底面はほぼ平担で堅くしまっている。

出土遺物はない。

AII—56ピット

遺　構（第38図）

この遺構は調査区北側緩斜面、AII－1住居址の北西側に検出された。

平面形は開口部・底部共ほぼ円形を呈す。規模は開口部径約190cm、底部径約160cm、深さ約50cmである。壁は底部から外傾し立ち上がる。

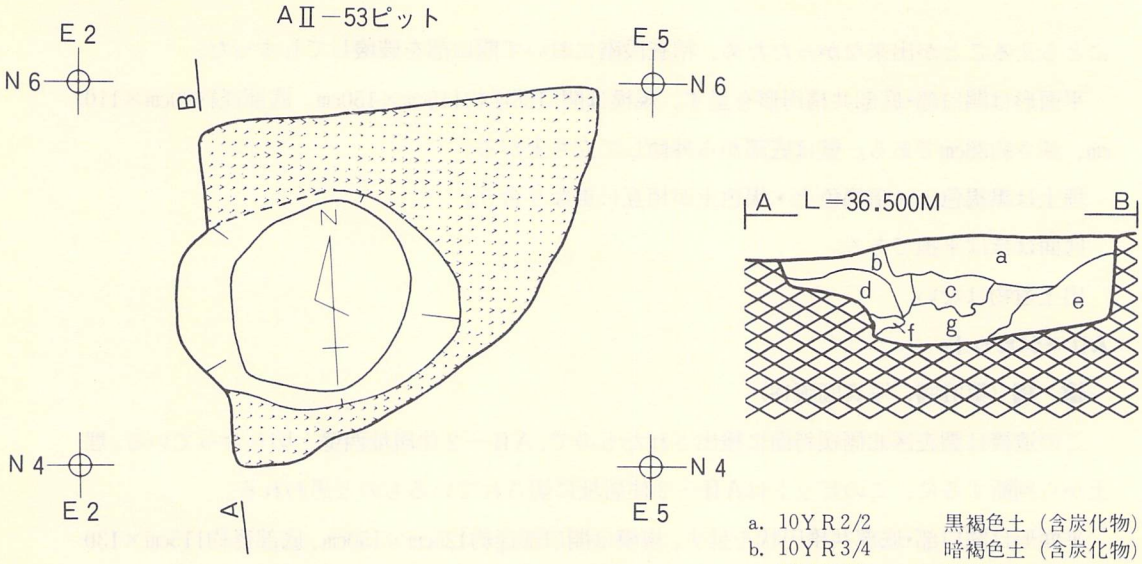
埋土は上位から中位に、暗褐色土・褐色土が相互に重なり合う。下位はにぶい黄褐色土で占められる。底面はほぼ平担である。

出土遺物はない。

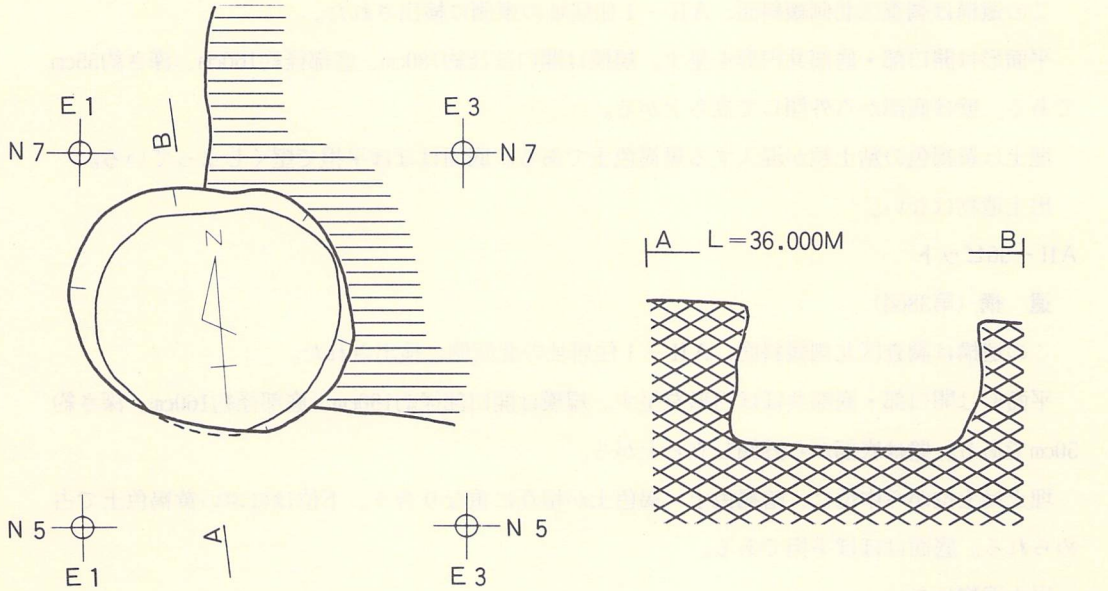
BII—51ピット

遺　構（第39図，写真図版18）

この遺構は調査区北側緩斜面、BII－1住居址の東側に検出された。

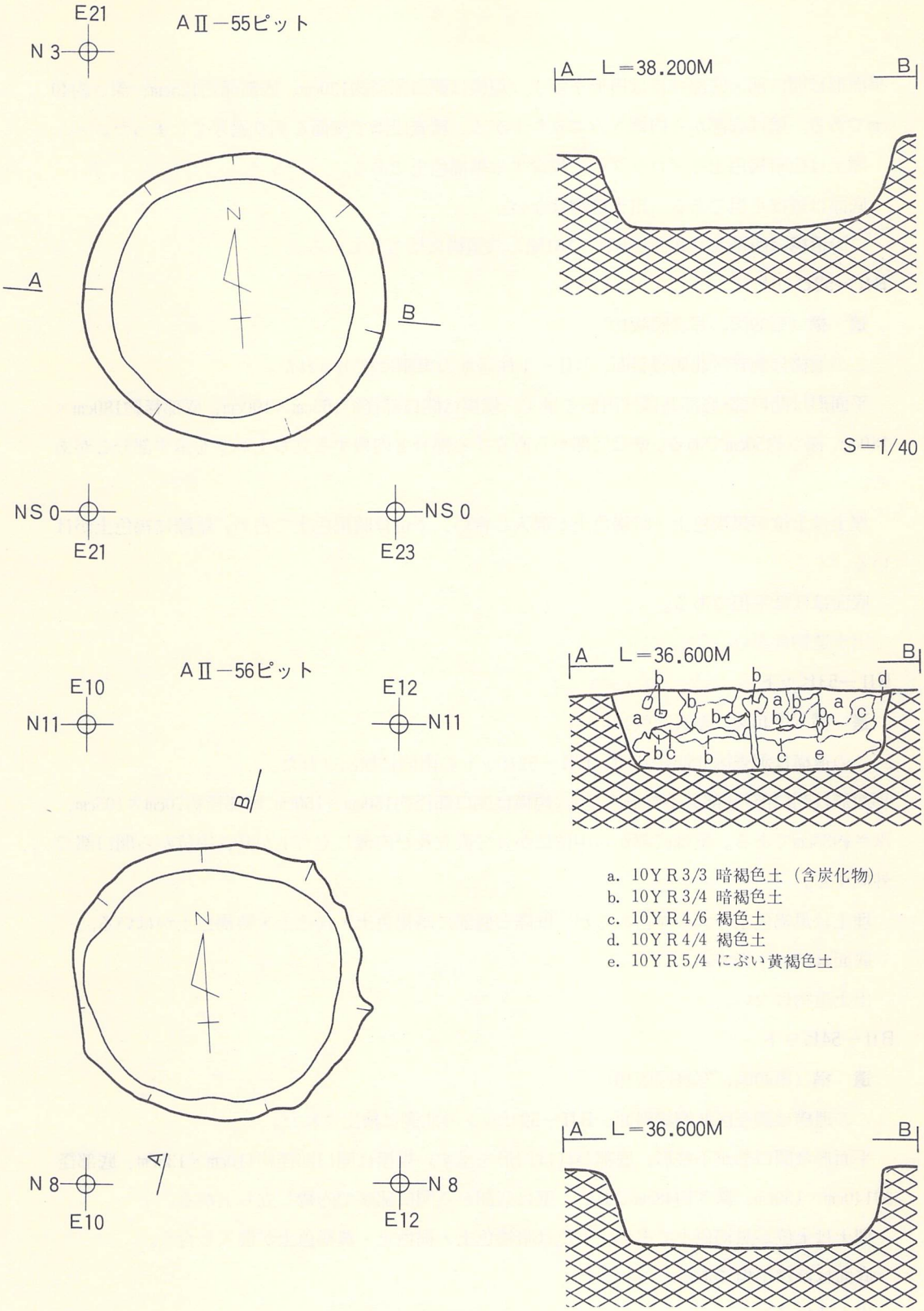


a. 10YR2/2　黒褐色土（含炭化物）
b. 10YR3/4　暗褐色土（含炭化物）
c. 10YR3/2　黒褐色土
d. 10YR3/4　暗褐色土
e. 10YR4/4～4/6　褐色土
f. 10YR4/4　褐色土
g. 10YR3/3　暗褐色土



S＝1/40

第37図　AⅡ－53・54ピット



第38図　AⅡ－55・56ピット

平面形は開口部・底部共ほぼ円形を呈す。規模は開口部径約130cm、底部径約125cm、深さ約40cmである。壁は底部から内彎ぎみに立ち上がる。精査段階で壁面を掘り過ぎてしまった。

埋土は極暗褐色土をブロック状に包含する黒褐色土である。

底面はほぼ平担である。出土遺物はない。

この遺構は西壁及び底面をBII－101陥し穴遺構に切られている。

BII－52ピット

遺　構（第39図，写真図版19）

この遺構は調査区北側緩斜面、BII－1住居址の東側に検出された。

平面形は開口部・底部共ほぼ円形を呈す。規模は開口部径約165cm×190cm、底部径約180cm×180cm、深さ約50cmである。壁は底部から直立する部分と内彎する立ち上がりを示す部分とがある。

埋土は上位が黒褐色土・暗褐色土が混入し合い、下位は暗褐色土で占め、壁際に褐色土がはいる。

底面はほぼ平担である。

出土遺物はない。

BII－53ピット

遺　構（第40図，写真図版19）

この遺構は調査区北側緩斜面、BII－52ピットの南側に検出された。

平面形は開口部・底部共不整形を呈す。規模は開口部径約150cm×150cm、底部径約70cm×105cm、深さ約33cmである。壁は底部から中位にかけて直立及び内彎し立ち上がり、中位から開口部で外傾する。

埋土は黒褐色土で大半を占めるが、壁際と底部に暗褐色土・褐色土・黄褐色土がはいる。

底面はほぼ平担である。

出土遺物はない。

BII－54ピット

遺　構（第40図，写真図版19）

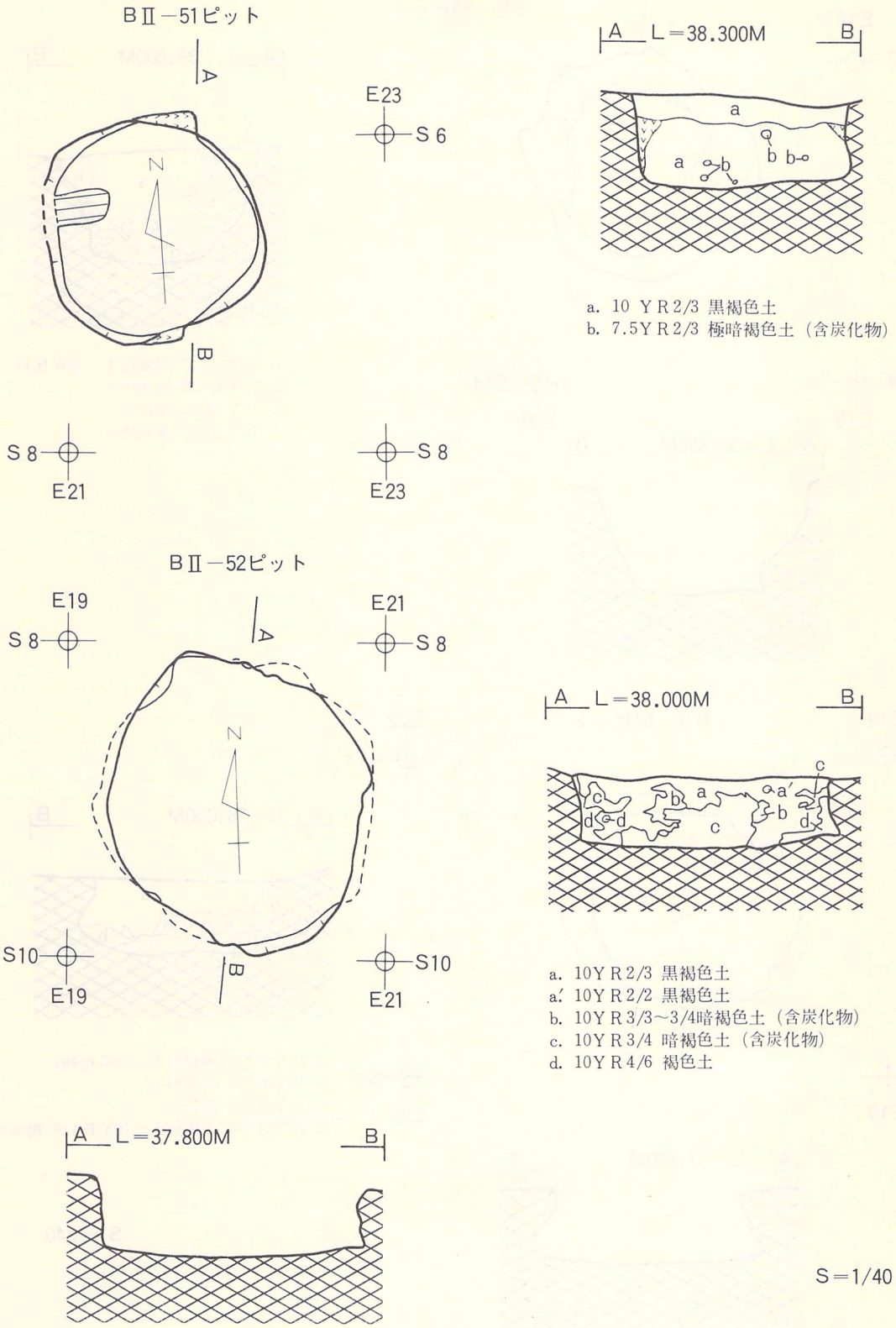
この遺構は調査区北側緩斜面、BII－52ピットの北側に検出された。

平面形は開口部が不整形、底部がほぼ円形を呈す。規模は開口部径約110cm×135cm、底部径約140cm×150cm、深さ約48cmである。壁は底部から開口部まで内彎し立ち上がる。

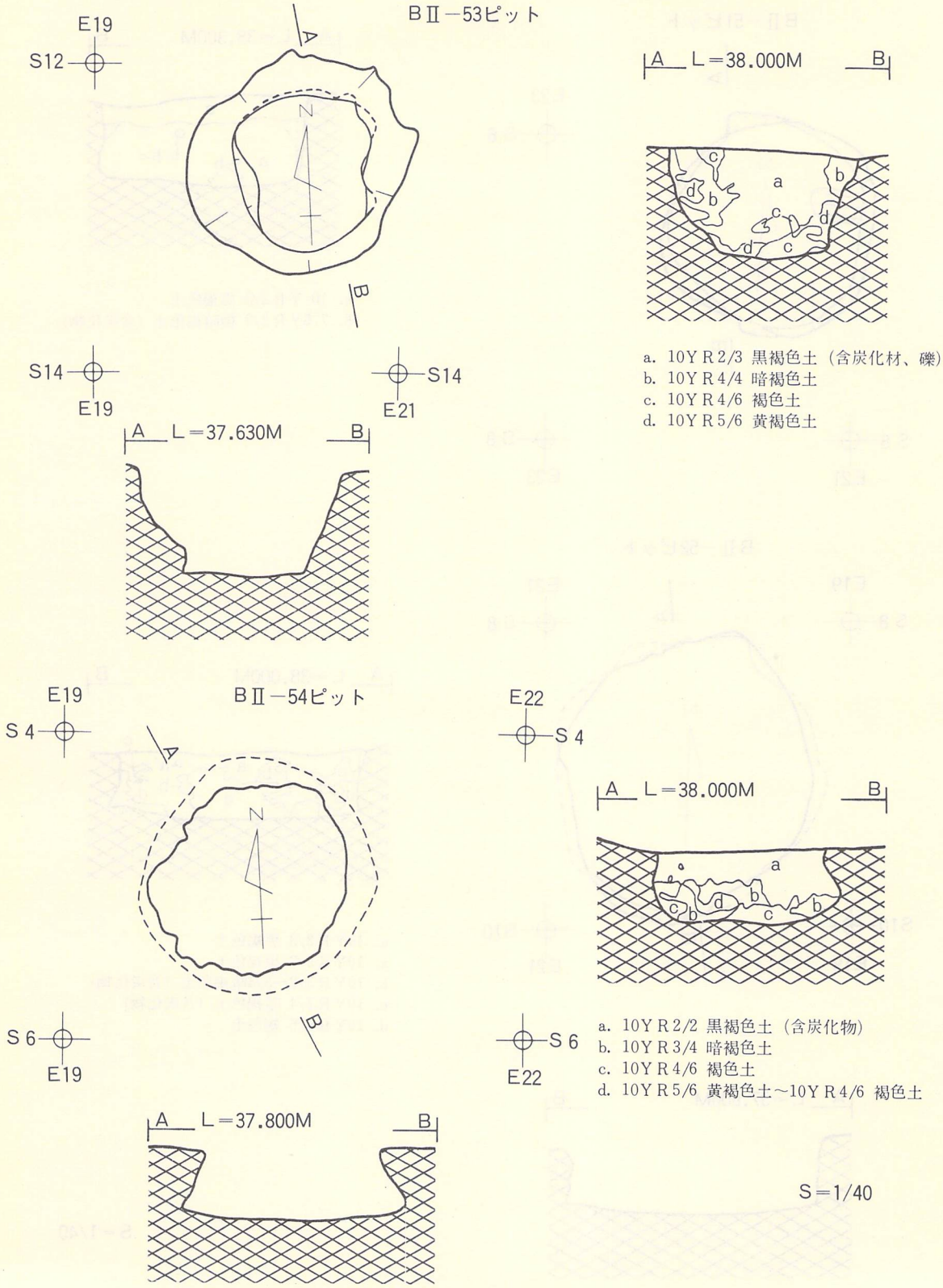
埋土は上位が黒褐色土で占め、下位は暗褐色土・褐色土・黄褐色土が混入し合う。

底面はほぼ平担である。

出土遺物はない。



第39図　BⅡ－51・52ピット



第40図　BⅡ－53・54ピット

BII—55ピット

遺　構（第41図，写真図版20）

この遺構は調査区北側緩斜面に検出されたもので、BII－1住居址北壁と切り合い関係にあるピットである。

平面形は開口部・底部共ほぼ円形を呈す。規模は開口部径約125cm×140cm、底部径約150cm×150cm、深さ約80cmである。壁は底部から開口部にかけて内彎し立ち上がる部分と外傾し立ち上がる部分とあり一様ではない。

埋土は上位から中位が黒褐色土、下位が黄褐色土で占められる。

底面はほぼ平担である。出土遺物はない。

BII－1住居址との切り合い関係は、いずれが切っているのか確認できなかった。

BII—56ピット

遺　構（第41図，写真図版20）

この遺構は調査区北側緩斜面に検出されたもので、BII－2住居址に北東壁を切られているものである。

平面形は開口部・底部共ほぼ円形を呈す。規模は開口部径約110cm×115cmである。底面は2面あり二時期に渡って使用されている。まず一時期底面は深さ約100cmに掘り込み、使用した後、中位まで黒褐色土・褐色土を人為的に埋め、砂質の黄褐色土でかため二時期の使用面としている。二時期底面までの深さは約50cmである。

壁は底部からほぼ直立する立ち上がりを示す。

一時期使用底面までの埋土は上位から黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土・褐色土・黒褐色土となる。

底面は一時期・二時期使用面共凹凸があり堅くしまっている。二時期使用面は傾斜している。

出土遺物はない。

BII—57ピット

遺　構（第42図，写真図版20）

この遺構は調査区北側緩斜面、AII—55ピットの南側に検出されたもので、東側半分は調査区外にはいる。

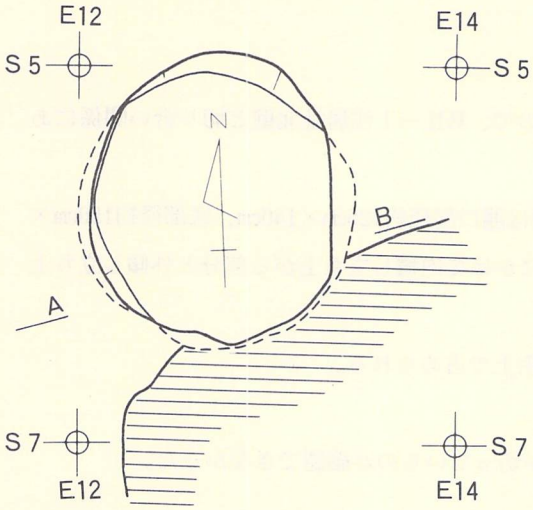
平面形は検出された壁から推定して開口部・底部共ほぼ円形を呈するものと思われる。規模は開口部径約150cm、底部径約125cm、深さ約66cmである。壁は底部から外傾し立ち上がる。

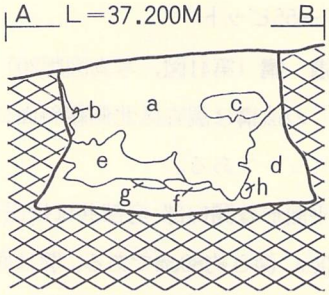
埋土は黒褐色土に砂質の褐色土が混入する単層である。

底面は平担で堅くしまっている。

出土遺物はない。

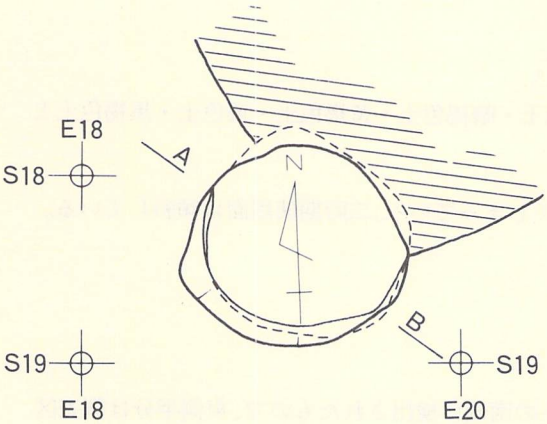
BⅡ－55ピット

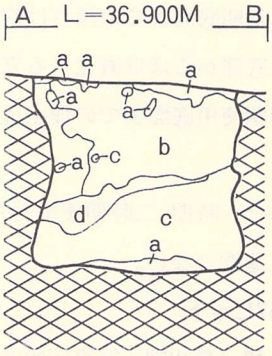




a. 10YR2/2　黒褐色土
b. 10YR3/4　暗褐色土
c. 7.5YR3/4　暗褐色土（含焼土）
d. 10YR5/6　黄褐色土
e. 10YR2/3　黒褐色土
f. 10YR3/3　暗褐色土
g. 10YR2/2～2/3　黒褐色土
h. 10YR3/4　暗褐色土

BⅡ－56ピット





a. 10YR2/3　黒褐色土
b. 10YR3/4　暗褐色土（含炭化物）
c. 10YR4/6　褐色土（含炭化物、礫）
d. 10YR5/6　黄褐色土

S＝1/40

第41図　BⅡ－55・56ピット

BII—58ピット

遺　構（第42図，写真図版20）

この遺構は調査区北側緩斜面、BII－1住居址の北側に検出された。

平面形は開口部・底部共楕円形を呈す。規模は開口部径約115cm×140cm、底部径約140cm×140cm、深さ約64cmである。壁は底部から内彎して立ち上がる。

埋土は中央部が黒褐色土、壁際が褐色土で占め、底部に僅かではあるが黒褐色土がはいる。

底面はほぼ平担である。

出土遺物はない。

BII—59ピット

遺　構（第42図，写真図版21）

この遺構は調査区北側緩斜面、BII—58ピットの東側に検出された。

平面形は開口部・底部共円形を呈す。規模は開口部径約140cm×150cm、底部径約130cm×130cm、深さ約43cmである。壁は底部から外傾し立ち上がる。

埋土は暗褐色土で大半を占め、壁際に褐色土がはいる。

底面はほぼ平担である。

出土遺物はない。

BII—60ピット

遺　構（第43図，写真図版21）

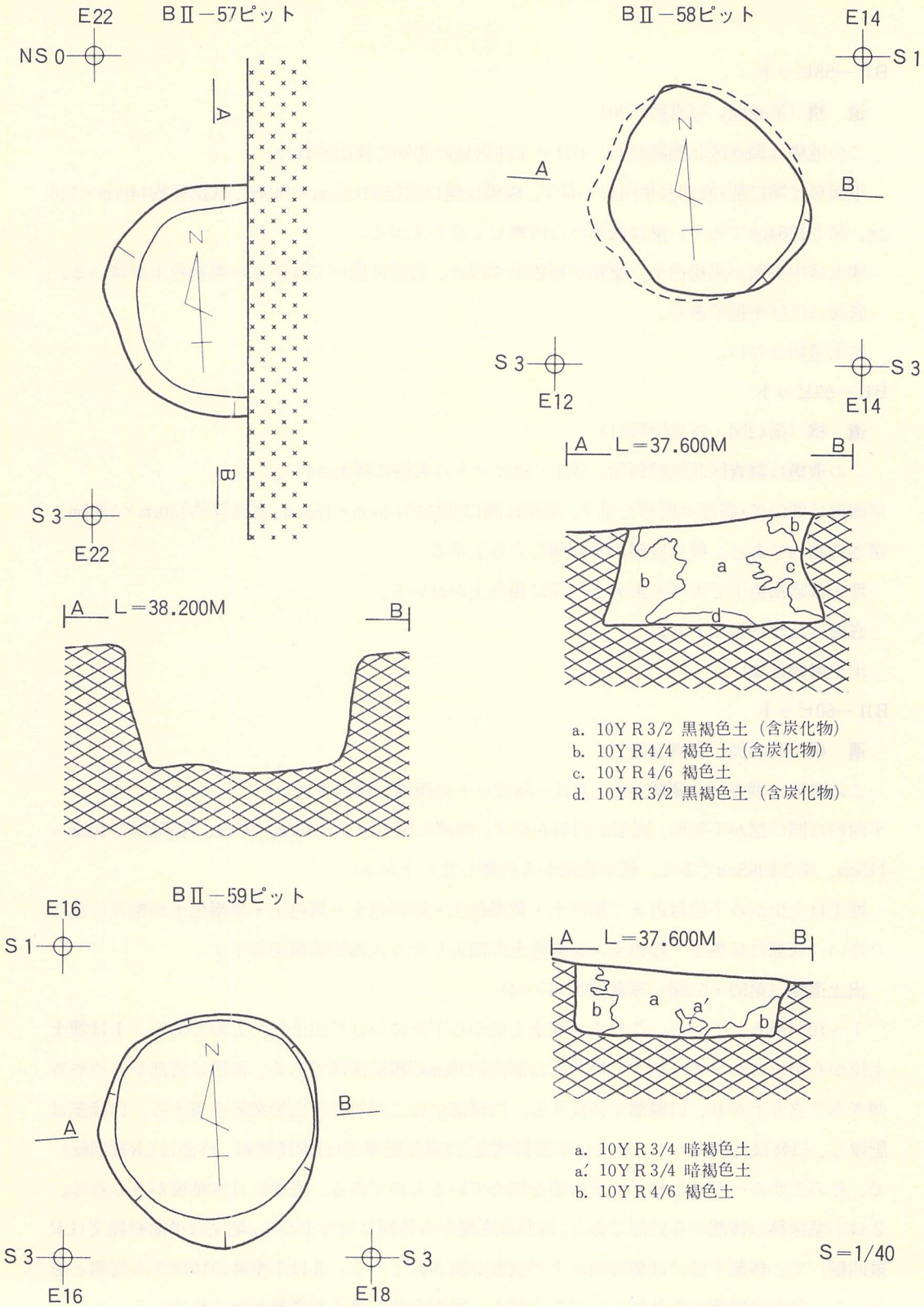
この遺構は調査区北側緩斜面、BII—58ピットの西側に検出された。

平面形は開口部が不整形、底部が円形を呈す。規模は開口部径約85cm×90cm、底部径約110cm×115cm、深さ約65cmである。壁は底部から内彎し立ち上がる。

埋土は上位から下位付近まで褐色土・黄褐色土・暗褐色土・黒色土・黒褐色土が相互に重なり合い、底部には焼土・褐色土・黄褐色土が混入し合う人為的堆積土を示す。

出土遺物（第52・53図，写真図版33・34）

1～10が得られている。これらは埋土上位から下位にかけて出土したものである。1は埋土上位から中位にかけて一括して得られた器高約39cmの粗製深鉢である。器形は底部からやや外傾ぎみに立ち上がり、口縁部で外反する。口縁部には二対対称の山形突起を有する。口縁部は肥厚し、口唇は丸みをもつ。地文は単節斜縄文（口縁部肥厚部はLR横回転、体部はLR縦回転）で、その上からヘラ状工具でナデ調整を加えているものである。底面には木葉痕がみられる。2は小型深鉢の体部から底部である。器形は底部から外傾し立ち上がる。地文は単節斜縄文（LR縦回転）で、体部下位には横方向にナデ調整が施されている。3は小型鉢の体部から底部と思われる。器形は底部から外傾して立ち上がる。器表全体にはナデ調整が施されている。4は小



第42図　BⅡ－57・58・59ピット

型鉢の口縁部破片と思われ、焼成・器形・ナデ調整が3と類似するものであるが、比較するにナデが3より入念である。5は小型深鉢の口縁部破片である。口縁部は肥厚し、口唇は丸みをもつ。地文は単節斜縄文（LR）である。6は小型鉢の口縁部破片である。口縁部は肥厚し口唇は丸みをもつ。口縁部下には横位に沈線を巡らせ、その下位及び口縁部肥厚部には単節斜縄文（口縁部肥厚部はLR横回転、体部はLR縦回転）を施している。7は深鉢の口縁部破片と思われる。口唇は平縁である。口縁部には無節斜縄文を施し、その下位にはナデ調整がみられる。8は小鉢の口縁部破片である。口縁部には山形突起を有する。文様は横位と斜位の沈線で幾可学的文様が展開されている。9・10は小型鉢の底部と思われ、いずれもナデ調整を施しているものである。

これらの遺物のうち、1・4・5・6・8はいずれも縄文時代後期初頭に位置づけられるものである。

以上の遺物からこの遺構は縄文時代後期初頭に位置づけられるものと思われる。

BII－61ピット

遺　構（第43図，写真図版21）

この遺構は調査区北側緩斜面、BII－2住居址の北側に検出された。

平面形は開口部・底部共円形を呈す。規模は開口部径約85cm×95cm、底部径約90cm×95cm、深さ約37cmである。壁は底部から内彎し立ち上がる。

埋土については、不手際から実測前に除去してしまったため不明である。

出土遺物（第53図，写真図版34）

1～4が埋土から得られている。1は深鉢の底部破片である。地文は単節斜縄文（RL横回転）であり、底面には木葉痕がみられる。2は小鉢の底部破片と思われ、ナデ調整が施されている。3は深鉢の口縁部破片で波状口縁をなすものと思われる。4は小鉢の口縁部破片と思われる。いずれも口縁部が肥厚するもので、地文は単節斜縄文である。

これらの遺物のうち、3・4は縄文時代後期初頭に位置づけられるものである。

BII－62ピット

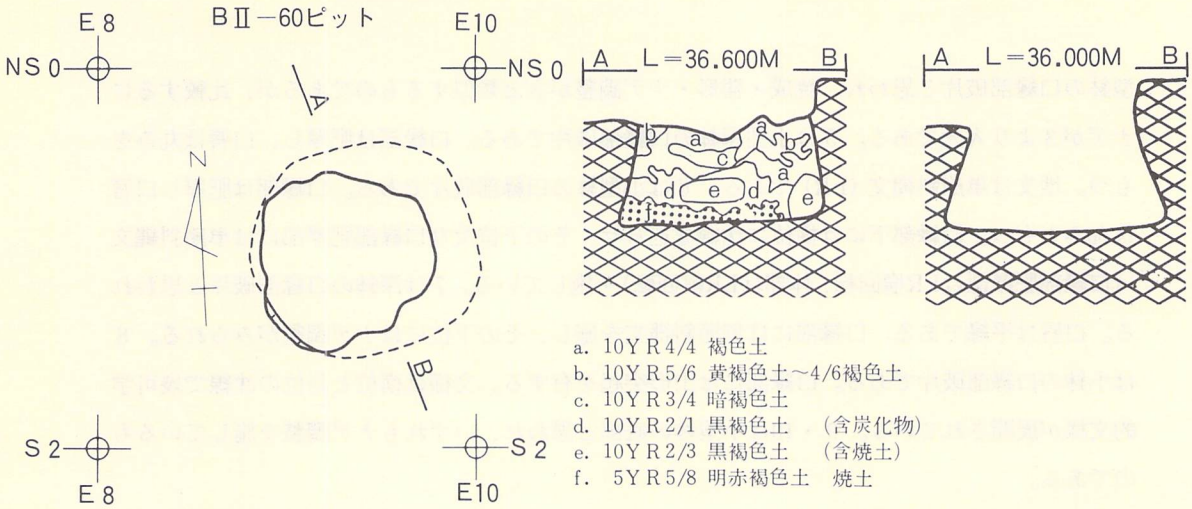
遺　構（第43図，写真図版22）

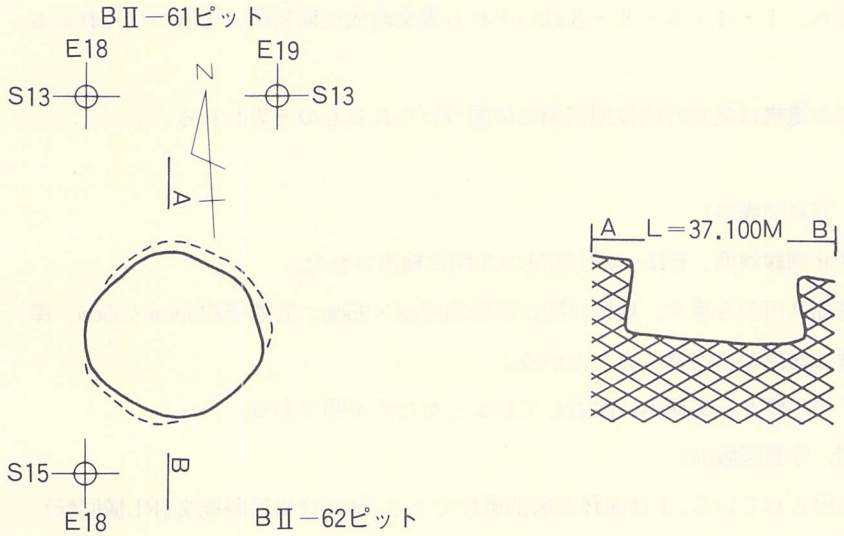
この遺構は調査区北側緩斜面、BII－1住居址の東側に検出された。

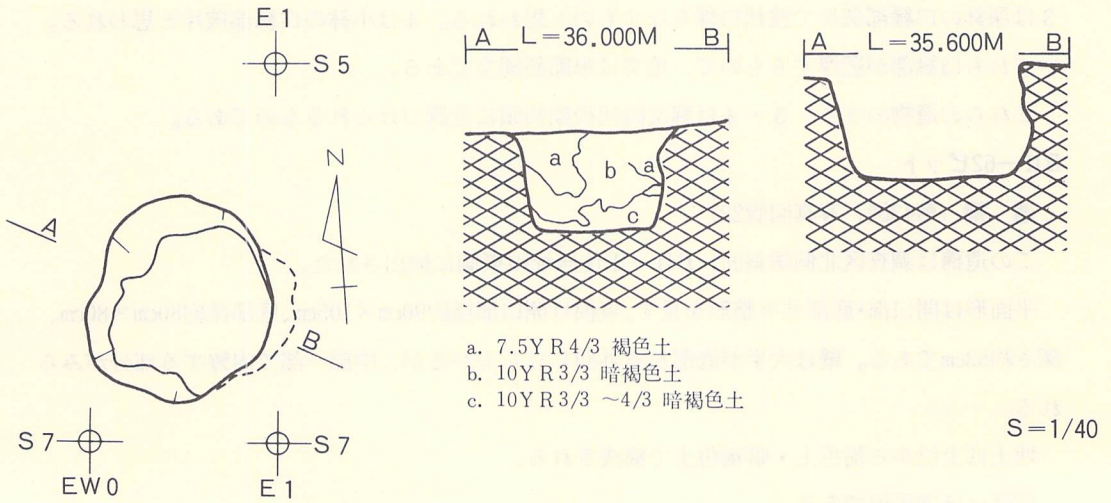
平面形は開口部・底部共不整形を呈す。規模は開口部径約90cm×105cm、底部径約80cm×80cm、深さ約53cmである。壁は大半が底部から外傾し立ち上がるが、中部一部で内彎する部分がみられる。

埋土は上位から褐色土・暗褐色土で構成される。

底面はほぼ平担である。







第43図　BⅡ－60・61・62ピット

出土遺物はない。

CII－51ピット

遺　構（第44図，写真図版22）

この遺構は調査区南側緩斜面、CII－1住居址状遺構の東側に検出された。遺構の東側半分は調査区外にはいる。

平面形は検出された壁から推定して、開口部・底部共楕円形状を呈するものと思われる。規模は検出された部分の計測で、開口部径約143cm、底部径約135cm、深さ約30cmである。壁は底部から外傾し立ち上がる。

埋土は黒褐色土で大半を占める。

出土遺物はない。

CII－52ピット

遺　構（第44図，写真図版22）

この遺構は調査区ほぼ中央部の斜面上に検出された。

平面形は開口部が楕円形状を、底部が円形を呈す。規模は開口部径約140cm×160cm、底部径約75cm×80cm、深さ約55cmである。壁は底部からゆるやかに立ち上がる。

埋土は黒褐色土の単層である。

出土遺物はない。

4．陥し穴状遺構

AII－101陥し穴状遺構

遺　構（第45図，写真図版22）

この遺構は調査区最北端に検出されたもので、長軸をほぼ北東から南西にもつ。規模は開口部が長軸約360cm・短軸約60cm、底部が長軸約290cm・短軸約20cm、深さ約131cmである。短軸断面はほぼロート状を呈す。

埋土は上位が極暗褐色土、中位から下位が暗褐色土で、壁際に褐色土がはいる。

出土遺物はない。

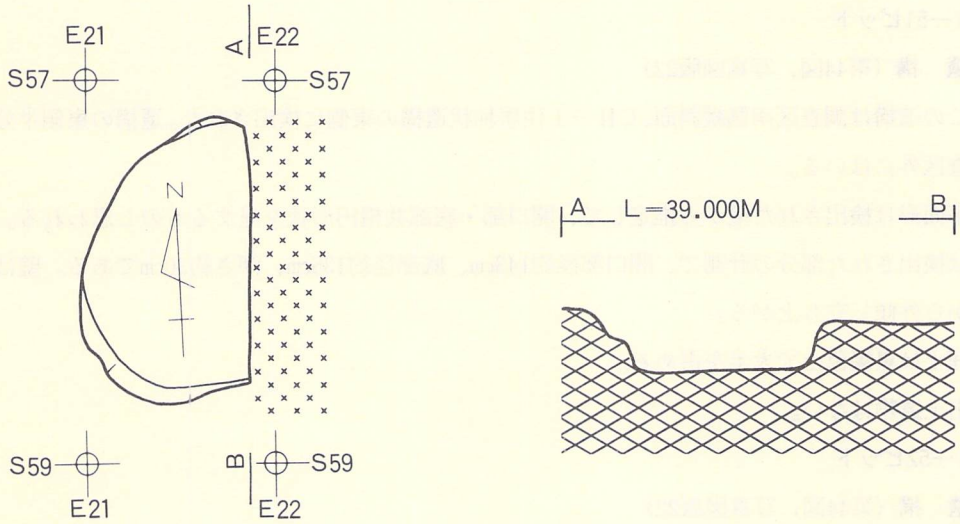
AII－102陥し穴状遺構

遺　構（第46図，写真図版23）

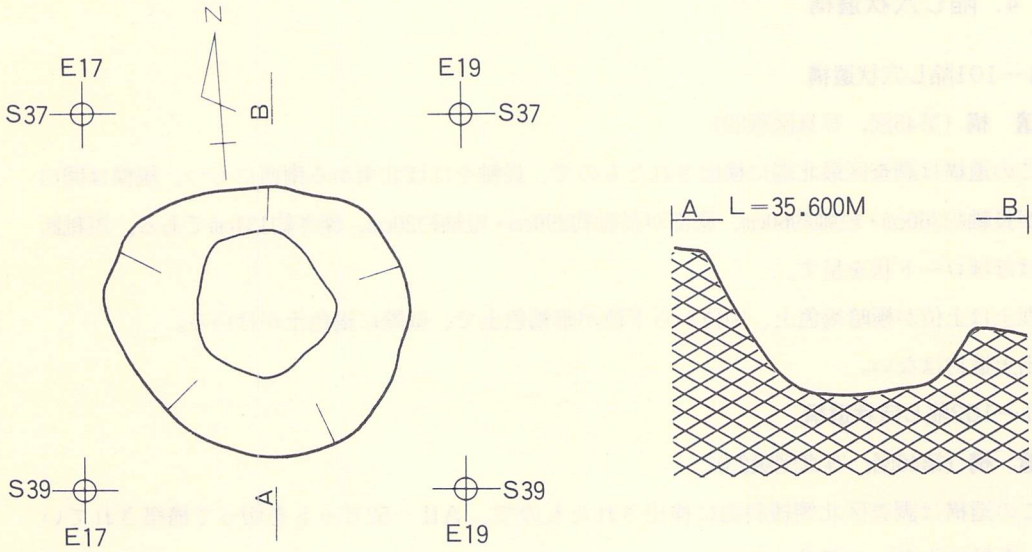
この遺構は調査区北側緩斜面に検出されたもので、AII－52ピットを切って構築されている。長軸は北東から南西にもつ。

規模は開口部が長軸約410cm・短軸約90cm、底部が長軸約390cm・短軸約30cm、深さ約145cmである。短軸断面は細長いU字状を呈す。

CⅡ－51ピット

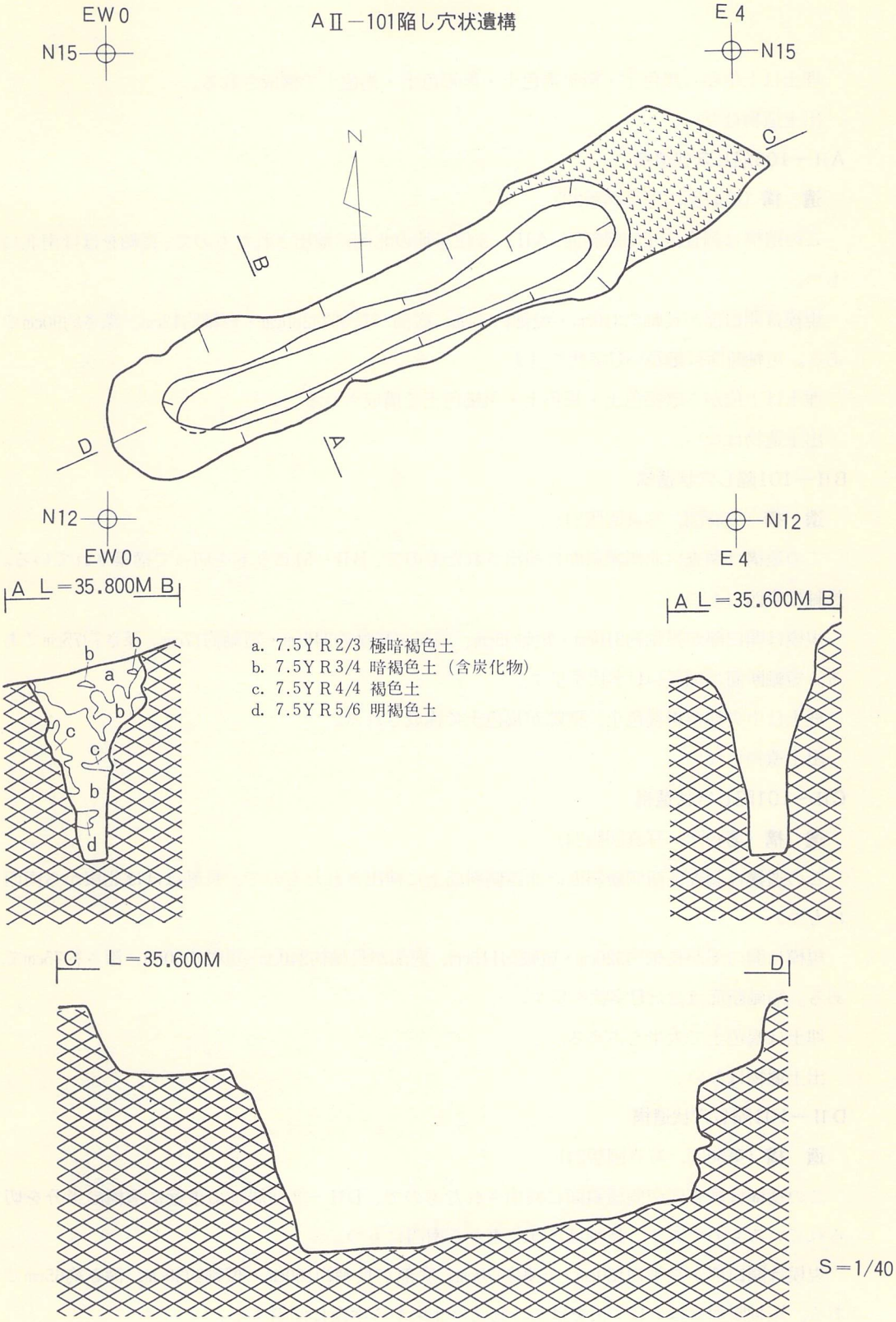


CⅡ－52ピット



S＝1/40

第44図　CⅡ－51・52ピット



第45図　AⅡ－101陥し穴状遺構

埋土は上位から黒色土・極暗褐色土・黒褐色土・褐色土で構成される。

出土遺物はない。

AII－103陥し穴状遺構

遺　構（第47図，写真図版23）

この遺構は調査区北側緩斜面、AII－3住居址の北側に検出されたもので、長軸をほぼ南北にもつ。

規模は開口部が長軸約310cm・短軸約55cm、底部が長軸約280cm・短軸約12cm、深さ約90cmである。短軸断面は細長いU字状を呈す。

埋土は上位から暗褐色土・褐色土・黒褐色土で構成される。

出土遺物はない。

BII－101陥し穴状遺構

遺　構（第48図，写真図版24）

この遺構は調査区北側緩斜面に検出されたもので、BII－51ピットを切って構築されている。長軸は東西にもつ。

規模は開口部が長軸約310cm・短軸35cm、底部が長軸約340cm・短軸約17cm、深さ約75cmである。短軸断面は細長いU字状を呈す。

埋土は中央部が黒褐色土、壁際が褐色土で構成される。

出土遺物はない。

CII－101陥し穴状遺構

遺　構（第49図，写真図版24）

この遺構は調査区南側緩斜面の北西側斜面上に検出されたもので、長軸はほぼ北東から南西にもつ。

規模は開口部が長軸約320cm・短軸約115cm、底部が長軸約240cm・短軸約50cm、深さ約75cmである。短軸断面はほぼU字状を呈す。

埋土は褐色土で大半を占める。

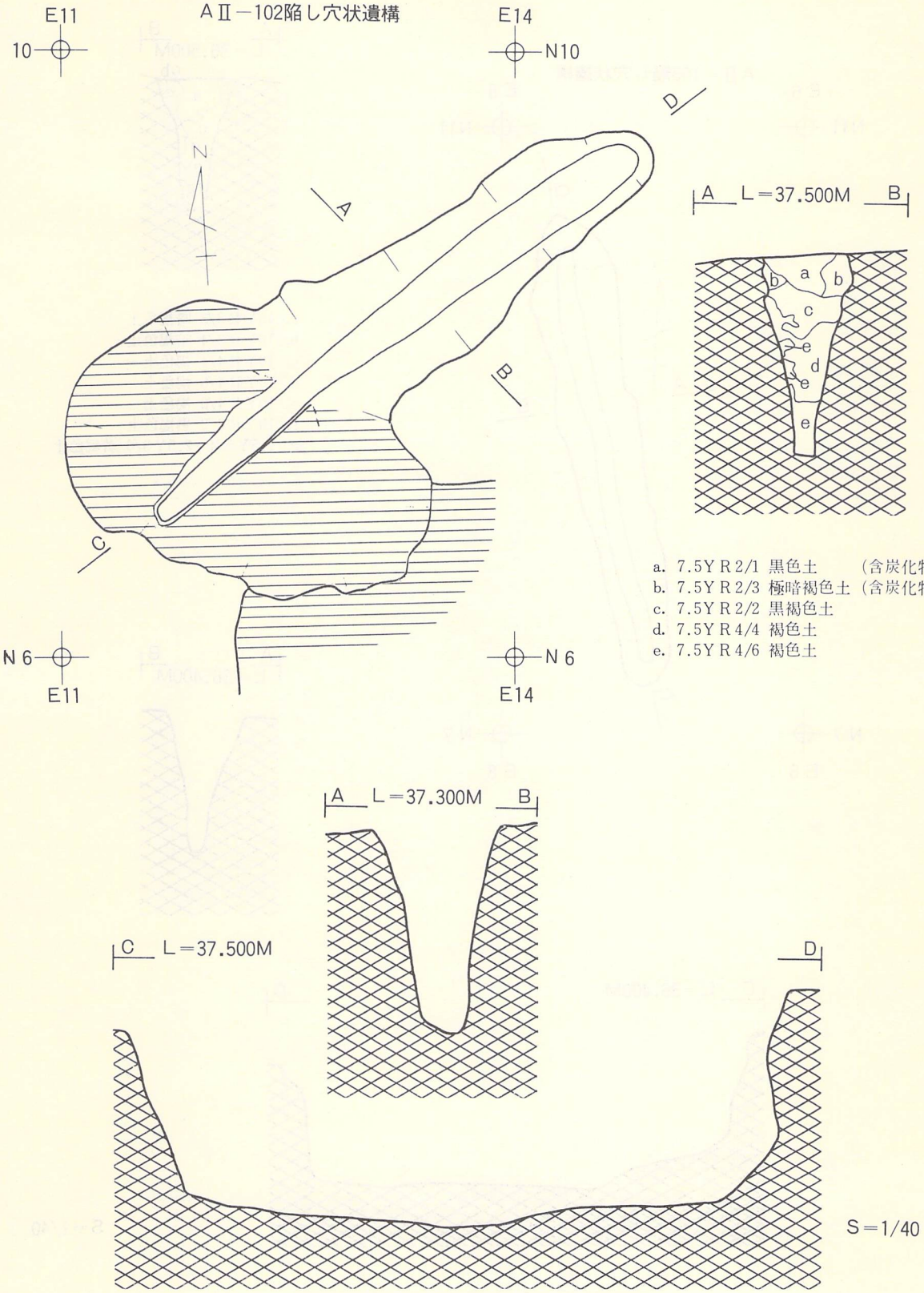
出土遺物はない。

DII－101陥し穴状遺構

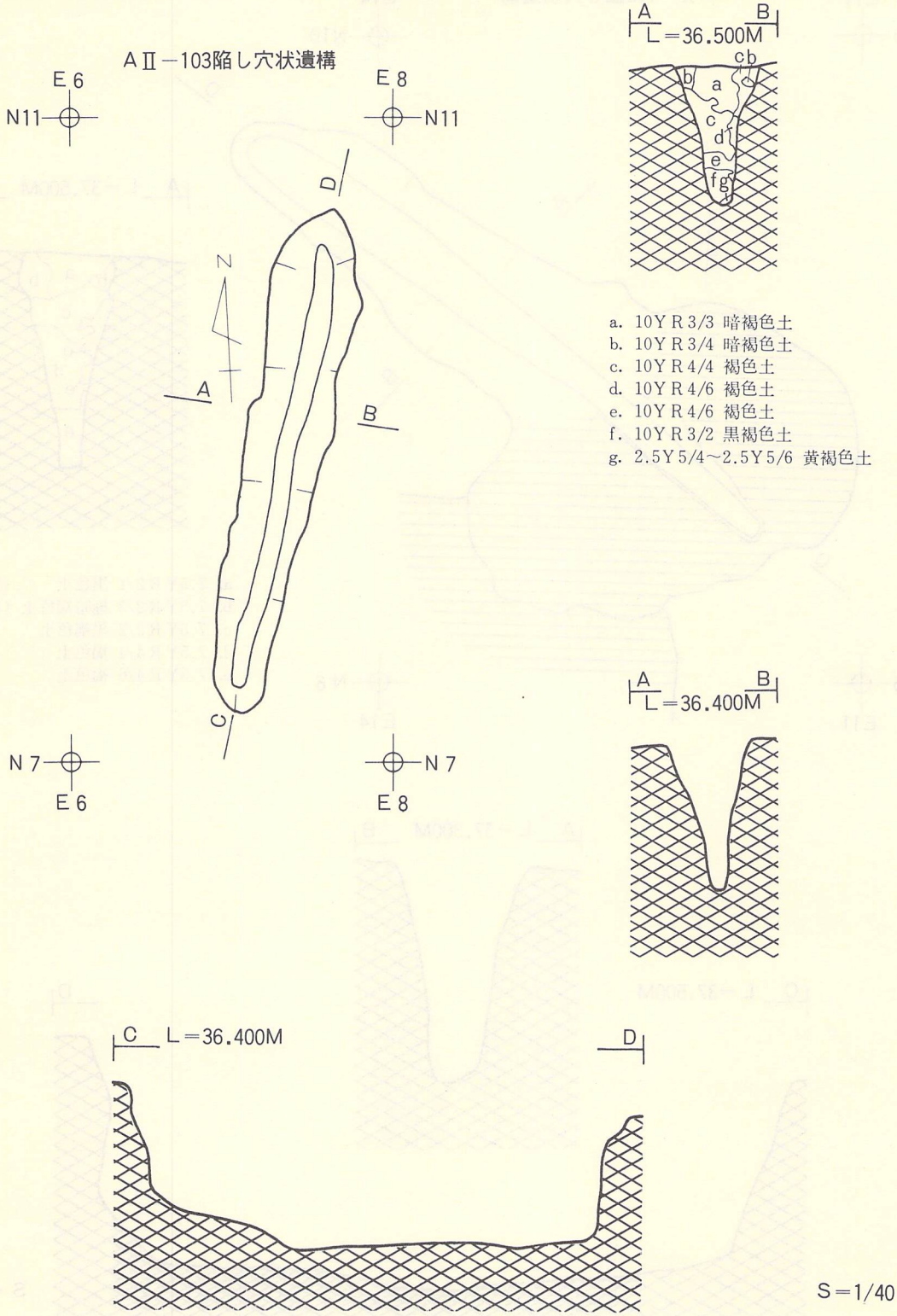
遺　構（第50図，写真図版24）

この遺構は調査区南側緩斜面に検出されたもので、DII－2住居址の東壁に遺構の半分を切られているものである。長軸はほぼ北東から南西にもつ。

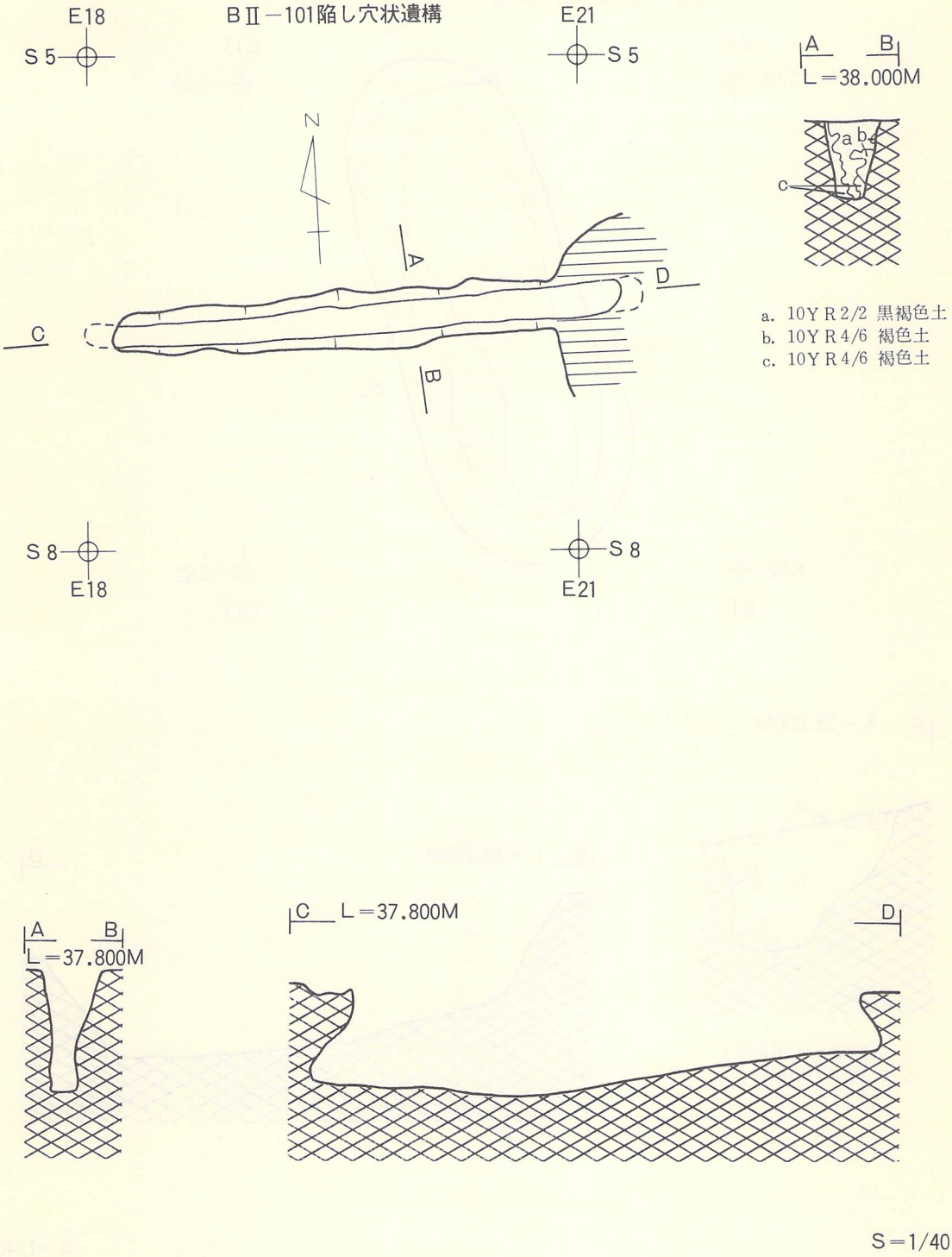
規模は開口部が長軸約180cm・短軸約70cm、底部が長軸約160cm・短軸約30cm、深さ約65cmである。短軸断面はほぼU字状を呈す。底面は北東から南西に傾斜する。



第46図　AⅡ－102陥し穴状遺構

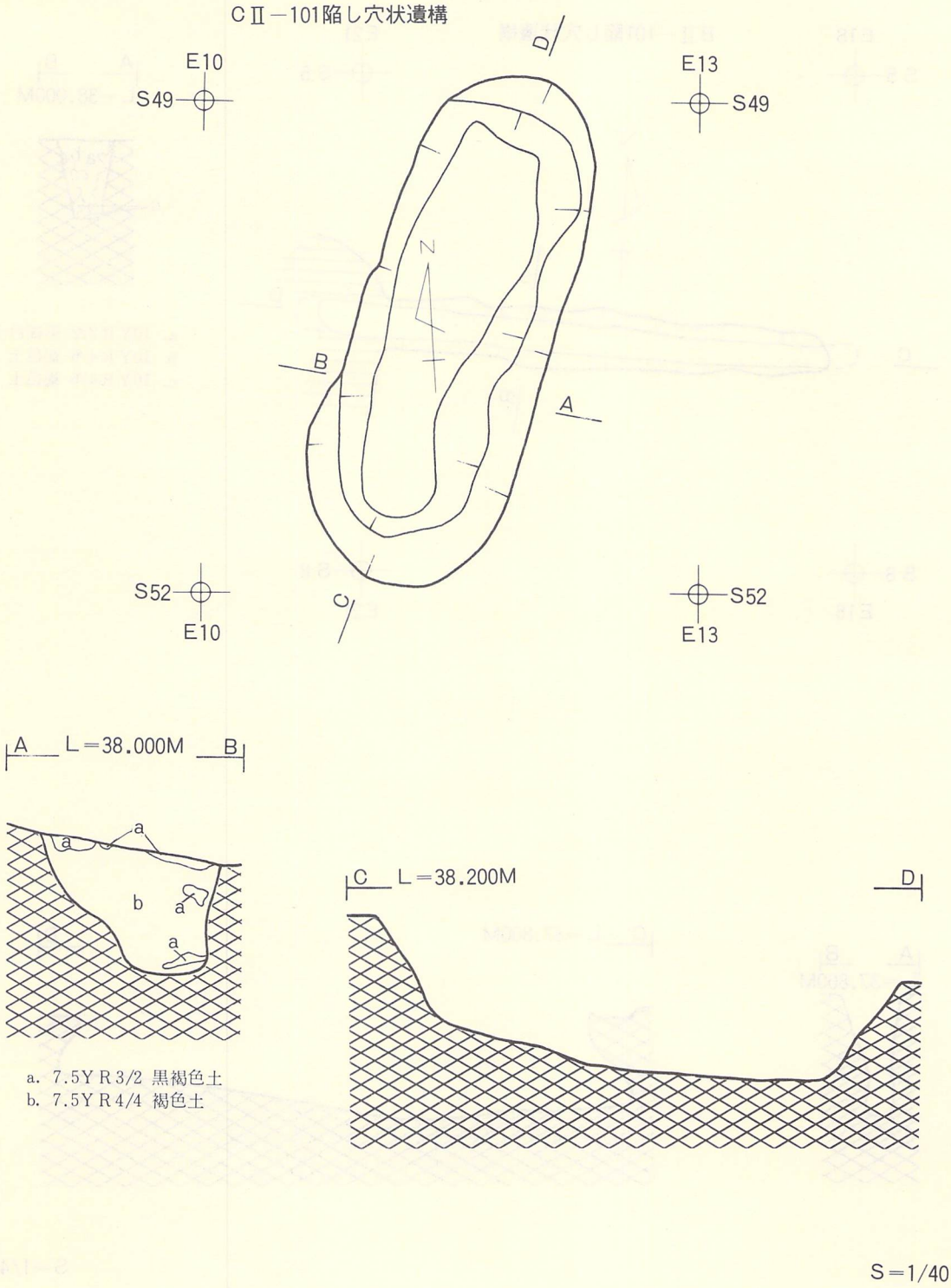


第47図　AⅡ－103陷し穴状遺構

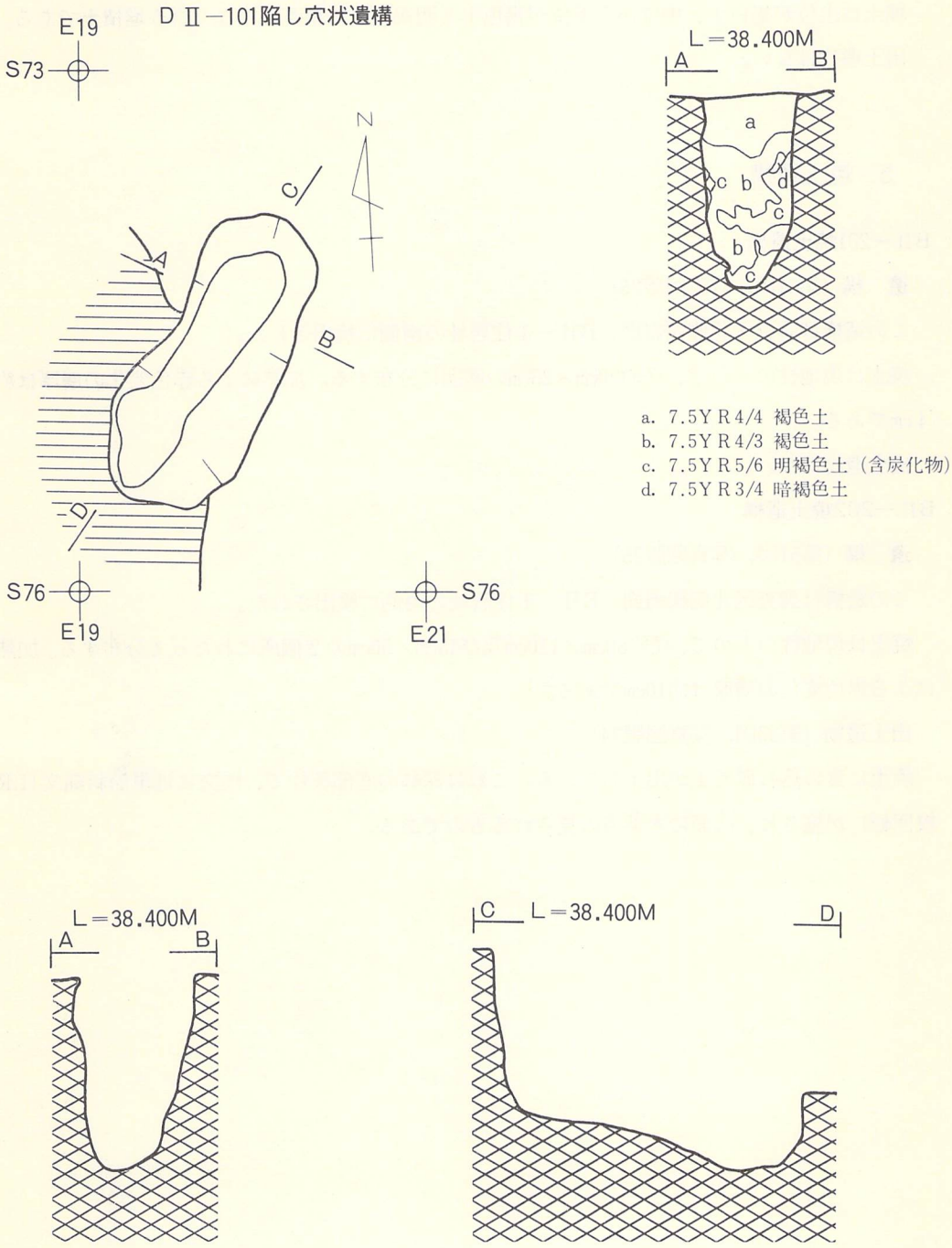


第48図　BⅡ－101陥し穴状遺構

CⅡ－101陥し穴状遺構



第49図　CⅡ－101陥し穴状遺構



第50図　D Ⅱ－101陥し穴状遺構

埋土は上位が褐色土、中位から下位が褐色土と明褐色土が相互に重なり合う堆積土である。

出土遺物はない。

5．焼土遺構

BII－201焼土遺構

遺　構（第51図，写真図版25）

この遺構は調査区北側緩斜面、BII－1住居址の南側に検出された。

焼土は現地性のもので、径約20cm×25cmの範囲に分布する。加熱による赤色変化の層厚は約4cmである。

出土遺物はない。

BII－202焼土遺構

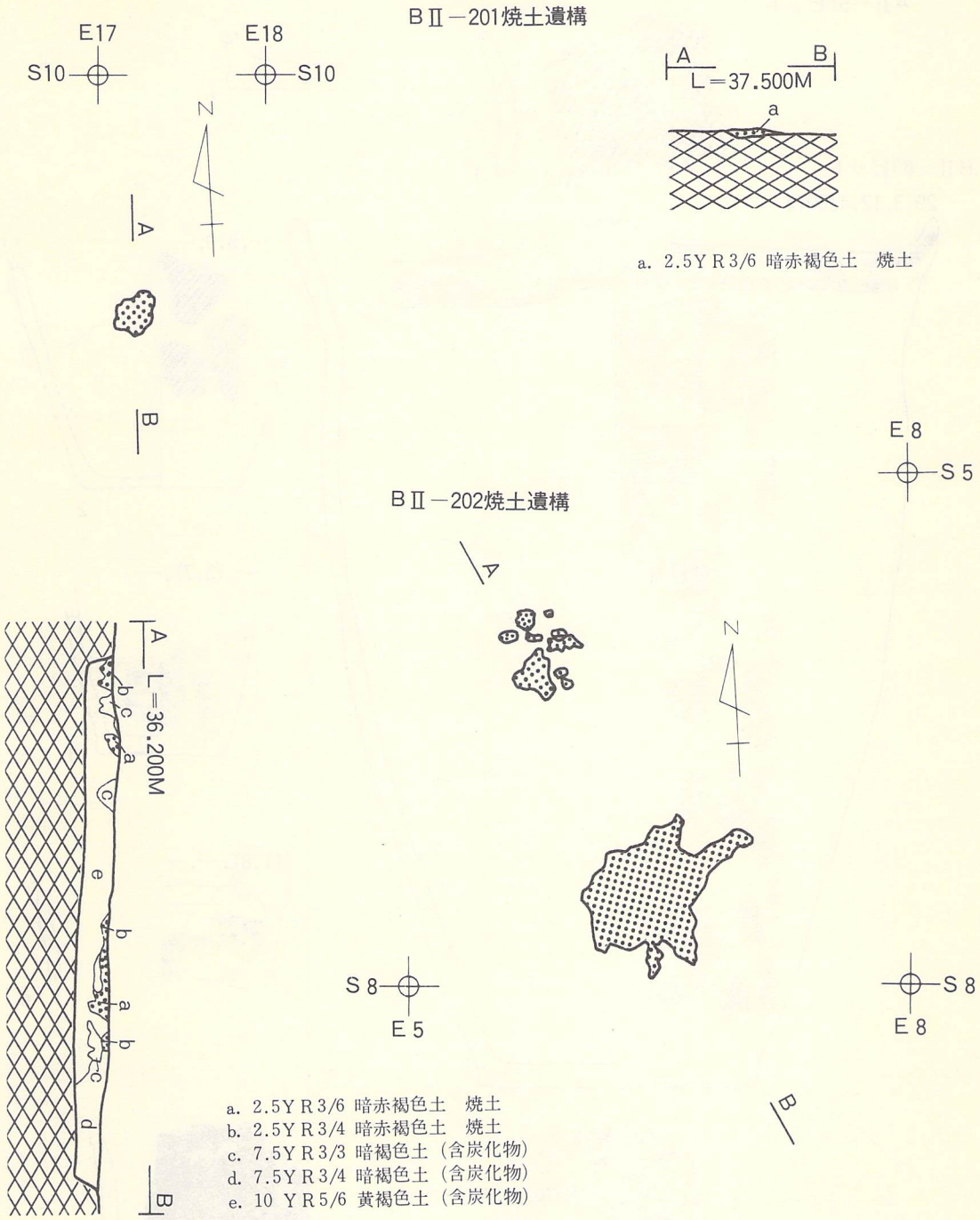
遺　構（第51図，写真図版25）

この遺構は調査区北側緩斜面、BII－1住居址の西側に検出された。

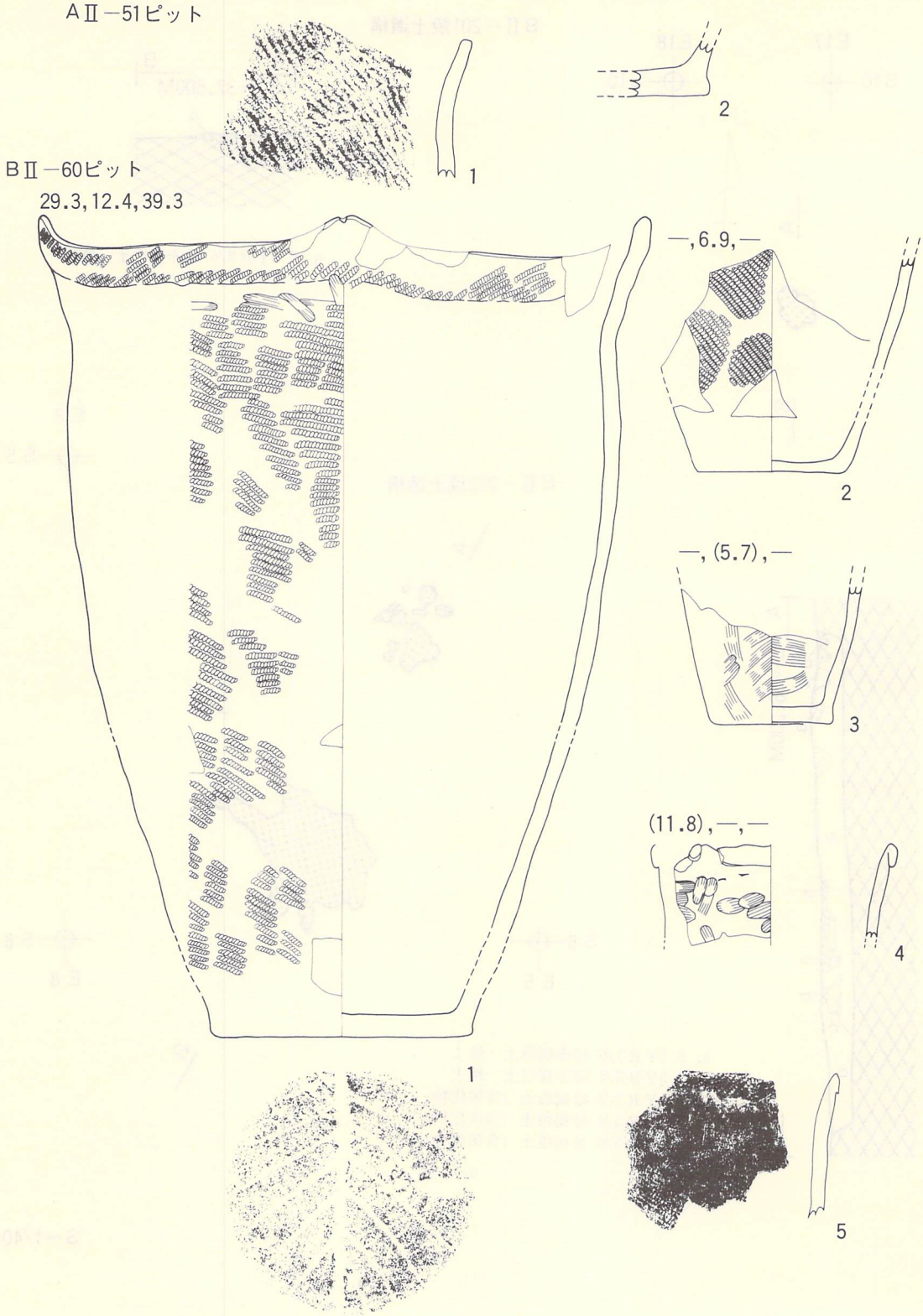
焼土は現地性のもので、径約80cm×110cm及び45cm×50cmの2個所にわたって分布する。加熱による赤色変化の層厚は約10cmである。

出土遺物（第53図，写真図版34）

焼土に食い込む形で1が出土している。これは深鉢の底部破片で、地文には単節斜縄文（LR縦回転）が施され、底面に木葉痕の見られるものである。



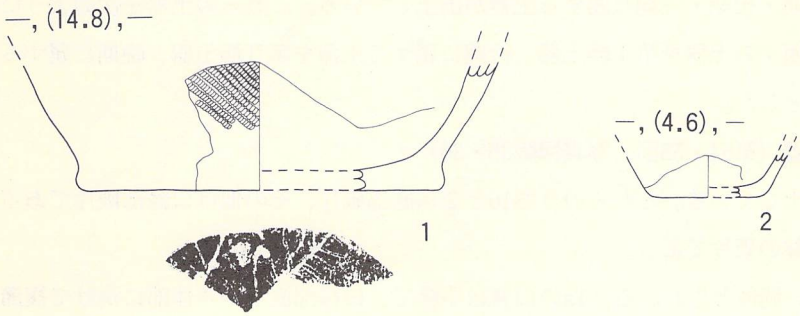
第51図　BⅡ－201・202焼土遺構



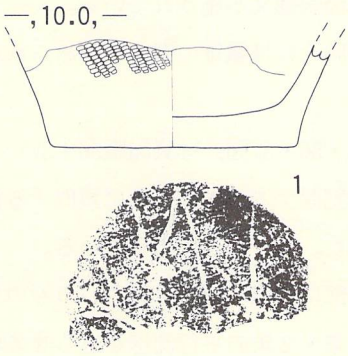
第52図　AⅡ－51ピット 出土遺物
BⅡ－60ピット

BⅡ－60ピット

BⅡ－61ピット



BⅡ－202焼土遺構



第53図　BⅡ－60ピット　BⅡ－61ピット　BⅡ－202焼土遺構　出土遺物

Ⅳ　遺構外出土遺物

遺構外から得られた遺物は、縄文土器・弥生土器と思われるもの・土師器・須恵器・土製品(勾玉)・石器類である。古代竪穴住居址の埋土から得られた縄文土器及び石器は一括してこの項で扱った。

1．土器類

(1)　縄文土器

縄文時代前期・後期・晩期に属する土器が出土している。これらの土器を次のように分類した。前期に属する土器を第Ⅰ群土器、後期に属する土器を第Ⅱ群土器、晩期に属する土器を第Ⅲ群土器とした。

①　第Ⅰ群土器（第54・55図，写真図版35・36）

1～17が出土している。これらのうち16と2は底部破片、その他は口縁部破片である。いずれも粗製深鉢の破片である。

1a・1bは同一個体と思われる。1aの口唇は平縁で、口縁部直下から体部にかけて複節斜縄文が施されている。1bの体部にも同じ施文がみられ、底面には数回の回転が施されている。2はかなり磨滅した底部片で、1と同様複節斜縄文が施されている。3～7の口唇は平縁で施文はO段に綾絡を伴うものである。3aと3bは同一個体である。3と6は波状口縁である。8の口唇は平縁で波状口縁を呈し、口縁部直下から無節の縄文圧痕がみられる。9～13の口唇は平縁、14は丸みをもつもので、施文は1段の縄に綾絡を伴うものである。15～17の口唇は平縁で、口縁部直下から単節斜縄文が施されている。

これら前期の土器群の胎土には繊維の混入が認められる。

②　第Ⅱ群土器

㋑　第1類土器（第55・56・57図，写真図版36・37）

この類には口縁部が肥厚する、またこれに類似する後期初頭に位置づけられると思われる口縁部破片を一括した。18～47が出土している。

18～24は口縁部肥厚部に沈線が施文されているもので、18は無節、19～24は単節斜縄文を地文に施した後、1条・2条の平行沈線を巡らせているものである。18・19・23は波状口縁を呈す。18の肥厚部直下には平行沈線が巡り、帯縄文と磨消のみられるものである。20の肥厚部直下には縦位の、22には横位と縦位の、また、23・24には横位の沈線がみられる。25～27は波状口縁を呈し、波状頂点下にボタン状突起が付く。25は肥厚部・肥厚部下共無

文、26・27は肥厚部に単節斜縄文が施され、肥厚部下は磨消されているものである。28は肥厚部に縦位の突起が付くもので、肥厚部には無節斜縄文が施され、肥厚部下には磨消が施されている。29・30は肥厚部下に沈線で長方形状の区画がなされているもので、29は肥厚部と長方形状区画内に単節斜縄文、区画外は磨消、30は肥厚部・肥厚部下共地文に単節斜縄文が施されている。31～36は肥厚部・肥厚部下共単節斜縄文が施されている。31は波状口縁を呈す。37～40は肥厚部にのみ無節斜縄文が施され、その下位は磨消しているもので、38は波状口縁を呈す。39は波状口縁を呈するものと思われ、肥厚部には無節斜縄文が施され、その下位には1段の縄文圧痕が斜位に施文されている。41は肥厚部・肥厚部下共無節斜縄文が施されている。42～44は肥厚部が無文であり、肥厚部下には42・44が単節、43が無節斜縄文を施している。45は肥厚部・肥厚部下共無文である。

46・47は口縁部がそれほど肥厚してはいないが、文様形態がこれに類似するものである。46は口縁部に無節斜縄文を施した後、平行沈線が施されているもので、その下位は無文である。47は口縁部に無節斜縄文が施され、縦位の突起が付くものである。

この類に属する土器片は、いずれも深鉢・鉢の口縁部と思われる。

㋺　**第2類土器**（第57・58・59図，写真図版38・39）

この類には後期初頭、十腰内I式に相当する口縁部と体部破片を一括した。48～75が出土している。

48～52は壺形土器の頸部破片である。48は頸部に1条の沈線を巡らせ、その上下には三角形状の沈線文がみられるもので、彩色を施している。49～51は隆沈線で、52は沈線で長方形文を主体とした文様が展開されているものと思われる。53～55は深鉢の体部片と思われ、53・55は沈線で三角形上の、54は矢印状の文様が施文されている。58は口縁部と底部が欠損した深鉢である。地文に無節斜縄文を施した後、長方形・円形・矢印状の文様を主体とする沈線文が展開され、磨消縄文のみられるものである。体部下半には区画帯として1条の沈線を巡らせている。56・57・59～61は壺形土器の体部片と思われ、56・57・59・60は直線及び曲線的沈線で文様を構成しているもの、61は渦巻文が施文されているものであり、56・59・61には彩色がみられる。62～70は深鉢の体部片と思われる。62は直線及び曲線的沈線で文様を構成しているものと思われる。63は隆沈線によって方形状の文様が施文され、隆線上には単節斜縄文が施されている。64は地文に無節斜縄文を施した後、沈線で方形状の施文を施しているものである。65は沈線で長楕円状に施文し、楕円内を磨消したもので、地文には単節斜縄文が施されている。66～69は直線的・曲線的沈線で文様を構成しているもので、地文は66・67が無節、68・69が単節斜縄文である。70は渦巻文が施され、内部を磨消しているもので、地文は無節斜縄文である。71～75は隆沈線によって長方

形状の文様が展開されるものと思われ、隆線上に刺突文が施文されているものである。73・74は波状口縁を呈す。

㈥ **第3類土器**（第60図，写真図版39）

この類には、後期に位置づけられる小型土器を一括した。76～80が出土している。76は体部破片で、沈線の文様構成が58に類似するもので、長方形と円形状の文様を主体とする沈線文が展開されているもので、地文には無節斜縄文が施されている。77は沈線で直線及び平行曲線が施文されているものであり、76と同様に十腰内Ⅰ式に相当するものと思われる。78・79は粗製の小型土器で、78は無節、79は単節斜縄文が施されている。80はほぼ完形のいわゆるミニチュア土器で、壺形を呈し、無文である。

㈢ **第4類土器**（第60・61図，写真図版40）

この類には、後期に位置づけられると思われる深鉢の底部破片を一括した。81～86が出土している。

81は体部に単節斜縄文が施されているもので、底面に木葉痕のみられるものである。82は地文に単節斜縄文が施され、体部下半に斜位に走る沈線が認められるものである。84・86は底面に網代痕がみられるものである。83は無節斜縄文、85は単節斜縄文が施されているものである。

③ **第Ⅲ群土器**

㈠ **第1類土器**（第61・62図，写真図版40・41）

この類には、大洞C_1式に相当する土器片を一括した。87～97が出土している。

87は台付鉢か皿の口縁部と思われる。口唇部には三又状の沈刻が施され、器表には雲形文が施文されている。88・89・90は鉢形土器の口縁部である。88は口縁が上端で外反、89は内彎、90はやや外反する。88と90の口唇部には刻目が施されている。口縁部直下にはいずれにも2条の沈線間に刻目が施され、体部には88が雲形文、90が単節斜縄文が施されているものである。91は深鉢の口縁部から体部破片で、口唇部に幅のせまい羊歯状文のみられるもので、体部は単節斜縄文が施されている。92は小型深鉢の口縁部破片と思われ、口縁部直下に2条の沈線間刻目が施され、体部は雲形文が施文されている。93は香炉形土器の台の破片と思われ、透かしの認められるもので、大洞B—CかC_1式に相当するものと思われる。94・95は鉢の口縁部破片である。94はかなり磨滅している口縁部破片で、口縁部に2条の沈線を巡らせ、体部には沈線主体の文様が施文されており、器表全体に彩色がみられる。95は口縁部上端が内彎するもので、口縁部には2条沈線間刻目、体部には雲形文が施文されている。96は壺形土器の頸部片、97は体部片で、97の肩部には隆線が巡り、隆線上にはB突起が配されている。この2片は同一個体と思われ、随所に彩色がみられるもの

である。

㊐　第２類土器（第62図，写真図版41）

この類には、晩期に位置づけられる粗製深鉢土器の口縁部と底部破片を一括した。98～103が出土している。98～101は口縁部破片、102・103は底部破片である。

98は波状口縁を呈し、器表に無節斜縄文が施されている。99は口唇部に縄文圧痕、器表に単節斜縄文が施されている。100・101は器表に単節斜縄文、102は複節斜縄文、103は無節斜縄文が施されている。

(2)　弥生土器（第62図，写真図版41）

弥生土器と思われる破片は、104～111の８点が出土している。これらのうち104～106は口縁部破片、107・108は頸部から体部破片、109～111が底部破片である。

104は口縁部直下に１条の沈線が、また105は口縁部直下に隆沈線を巡らせているものである。106は波状口縁を呈すものと思われ、３条の沈線が口縁部に沿って巡るものと思われる。107は小型壺形土器の頸部から体部片と思われ、頸部に２条の沈線が巡り、体部に沈線文と刺突文がみられるものである。108は壺形土器の頸部破片と思われ、頸部に４条の沈線が巡っているものである。109～111の底部片は器表に１段の縄文圧痕文のみられるものである。

(3)　土師器・須恵器（第63・64，写真図版42）

遺構外から得られた土師器は、甕形土器の口縁部破片３点（112～114）と底部破片１点（115）、坏形土器の底部破片３点（116～118）である。須恵器は119～121の３点が出土している。

土師器

112～114はロクロ不使用の甕形土器の口縁部破片で口縁部は短く外反し器面調整は口縁部が横ナデ調整が施され、体部には内外共ナデ調整が施されている。115は甕形土器の底部で、外面はケズリ、内面にはナデ調整が施されている。

116～118はロクロ使用の坏形土器底部破片で底部切り離しは糸切り無調整のものである。117の内面は黒色処理が施されている。

須恵器

119は長頸壺形土器の頸部と思われ、120は甕形土器の体部破片、121は底部破片で、120、121は内外共ナデ調整が施されているものである。

2．土製品（第64図，写真図版42）

勾　玉

遺構外から土製勾玉２点（122・123）が出土している。平面形はいずれもC字状を呈するもので、長軸に沿って丹念にミガキ調整が施されているものである。

3．石　器

石器は、石鏃・石匙・スクレーパー・剝離痕のある剝片・フレーク・磨製石斧・石核・擦痕のある礫・凹石が出土している。

① **石鏃**（第65図，写真図版43）

出土した石鏃は、124・125の２点である。いずれも基部が突出しているもので、両面に入念な剝離調整が加えられているものである。125は断面形が肉薄である。

② **石匙**（第65・66図，写真図版43）

縦型石匙が126～133の８点、横型石匙が134・135の２点、計10点が出土している。縦型石匙のうち、130は両面、その他は片面縁辺に剝離調整が加えられている。127はつまみ部が、126はつまみ部と先端が、また131は先端が欠損しているものである。横型石匙の134・135は、片面縁辺主体に剝離調整が加えられている。

③ **スクレーパー**（第67図，写真図版43）

136～139の４点が出土している。136・139は不整形を呈し、片面主体に剝離調整が加えられている。137・138は長方形状を呈し、137は片面縁辺に、138は両面縁辺に剝離調整が加えられている。

④ **剝離痕のある剝片**（第67・68図，写真図版44）

140～145の６点が出土している。140は不整形を呈し、片面縁辺の一部に剝離痕のみられるものである。141・143は三角形状を呈し、141は二辺の両面一部に、143は一辺の両面一部に剝離痕のみられるものである。142・145は長方形状を呈し、142は一辺の両面一部に145は二辺の片面一部に剝離痕のみられるものである。144は円形状を呈し、片面一部に剝離痕のみられるものである。

⑤ **フレーク**（第68・69図，写真図版44・45）

146～156の11点が出土している。これらはいずれも加工痕の認められないものである。

⑥ **磨製石斧**（第70図，写真図版45）

157～161の５点が出土している。157・158・160は頭部が、159は体部から刃部が欠損しているもので、161は刃部の破片である。157・158・160は荒い研磨が、159・161は入念に研磨されているものである。

⑦ **石核**（第71図，写真図版45）

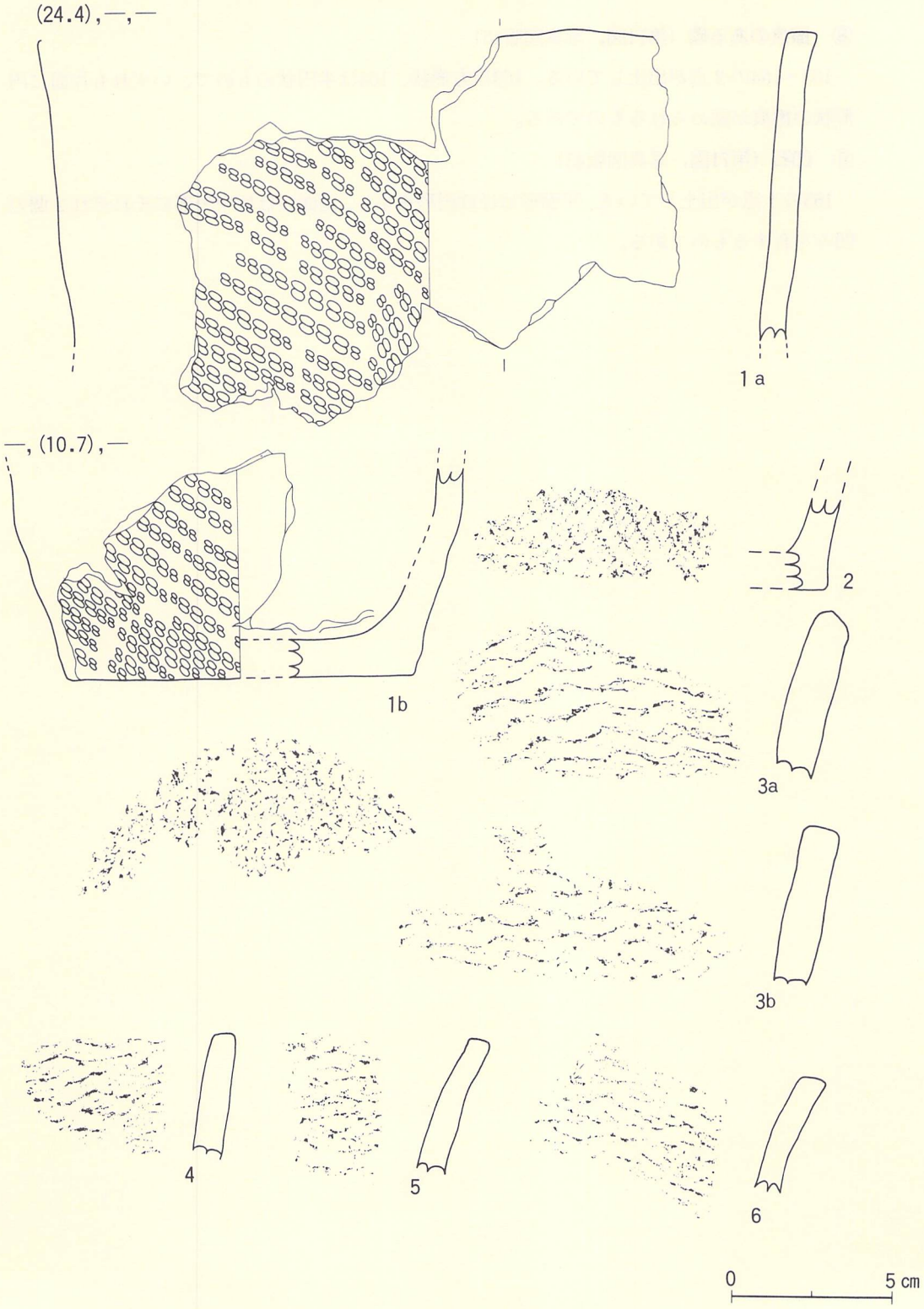
162の１点が出土している。平面形は不製形を呈し、打痕が数個所にみられるものである。

⑧　**擦痕のある礫**（第71図，写真図版45）

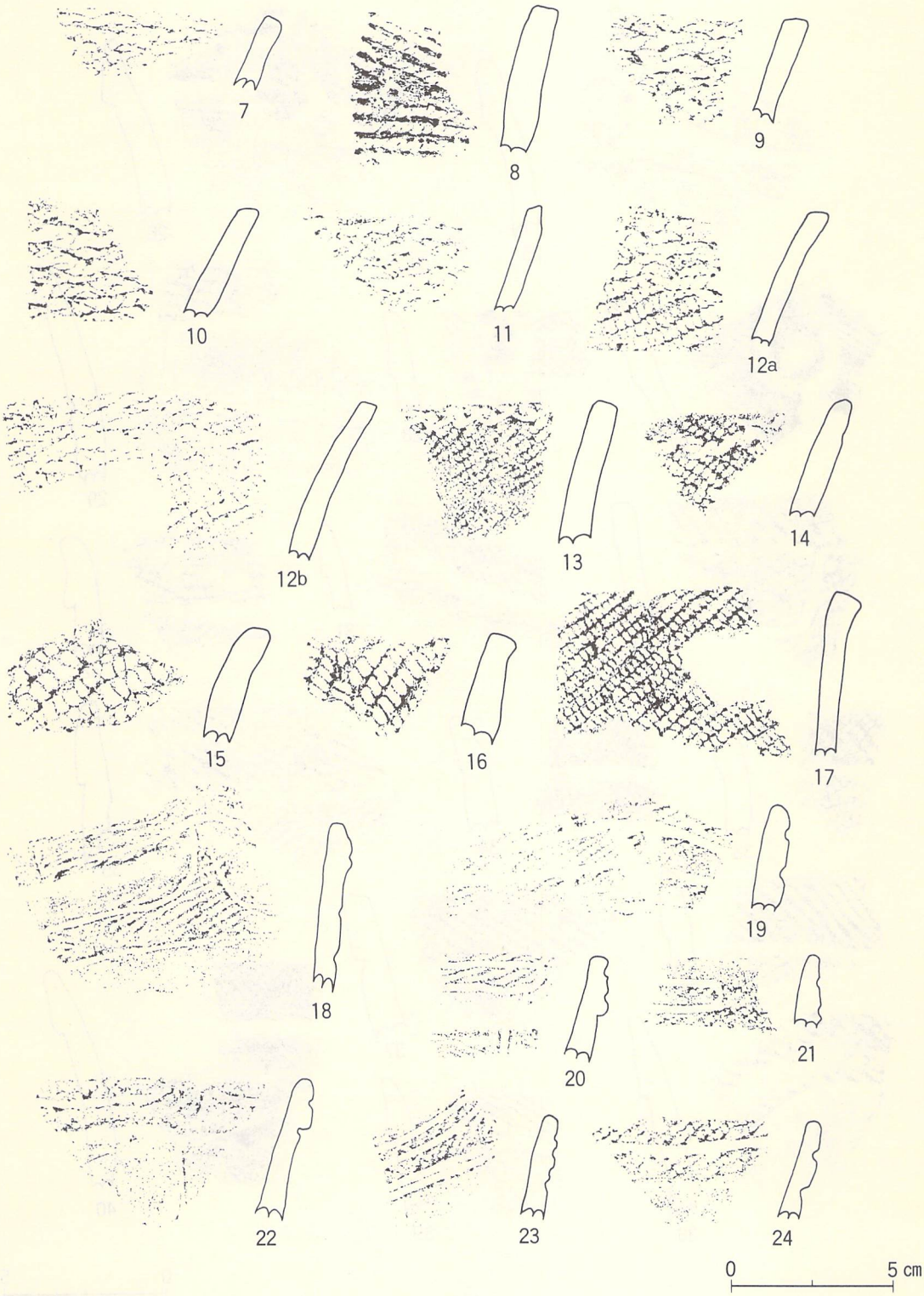
163・164の２点が出土している。163は方形状、164は半円状のもので、いずれも片面に円形状の擦痕が認められるものである。

⑨　**凹石**（第71図，写真図版45）

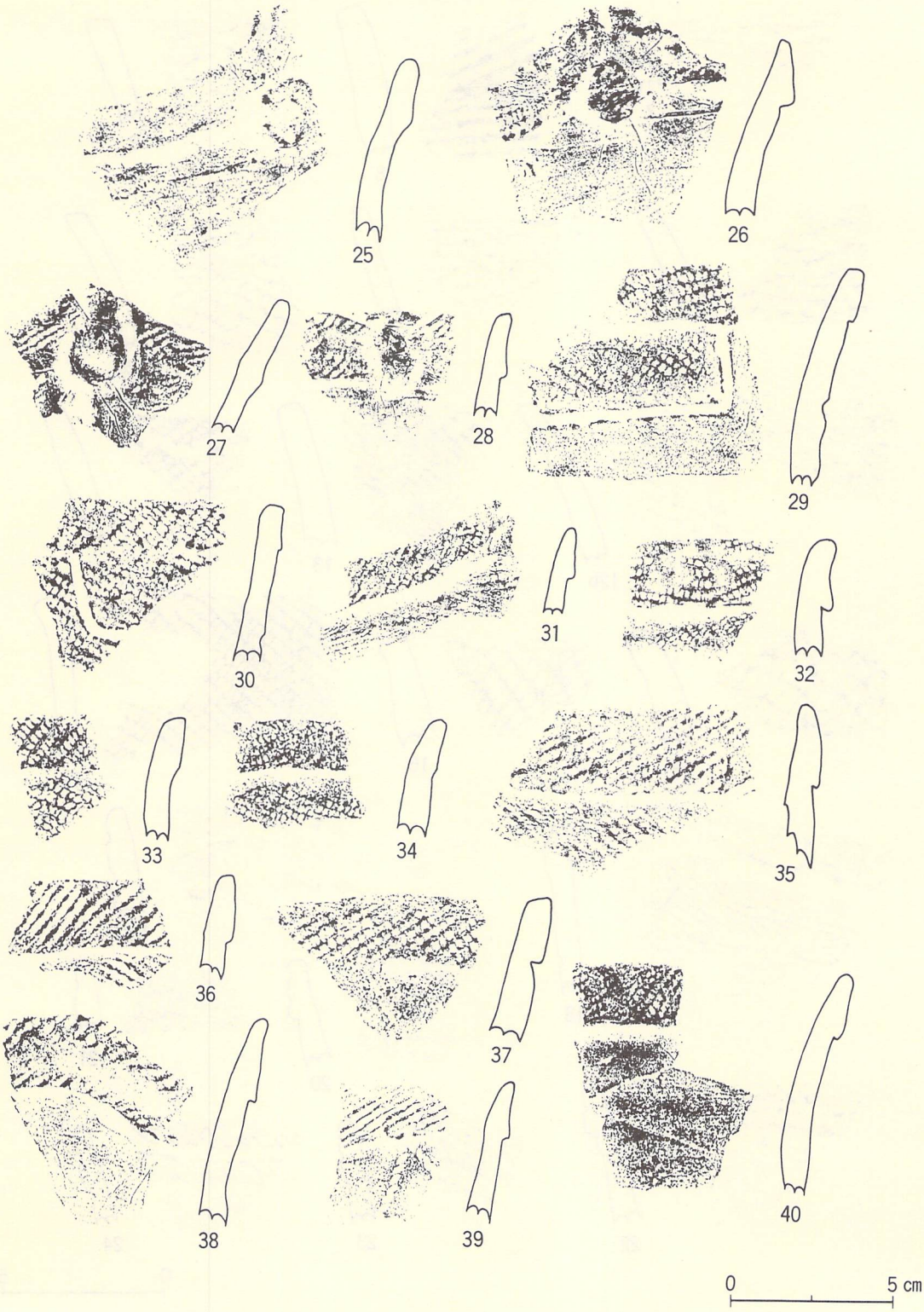
165の１点が出土している。平面形はほぼ円形を呈し、両面のほぼ中央部にそれぞれ２個の凹みを有するものである。



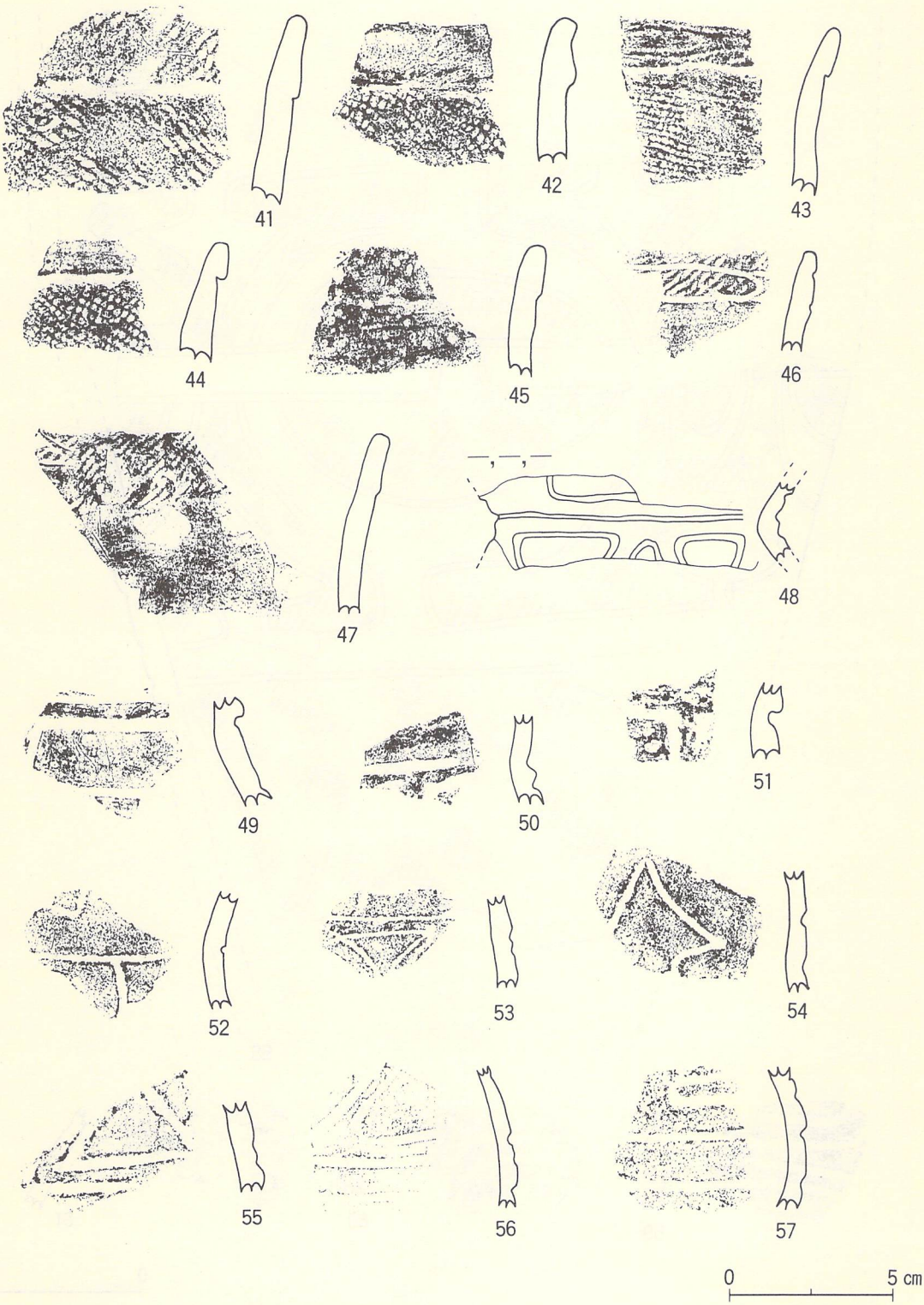
第54図　遺構外出土遺物（1）



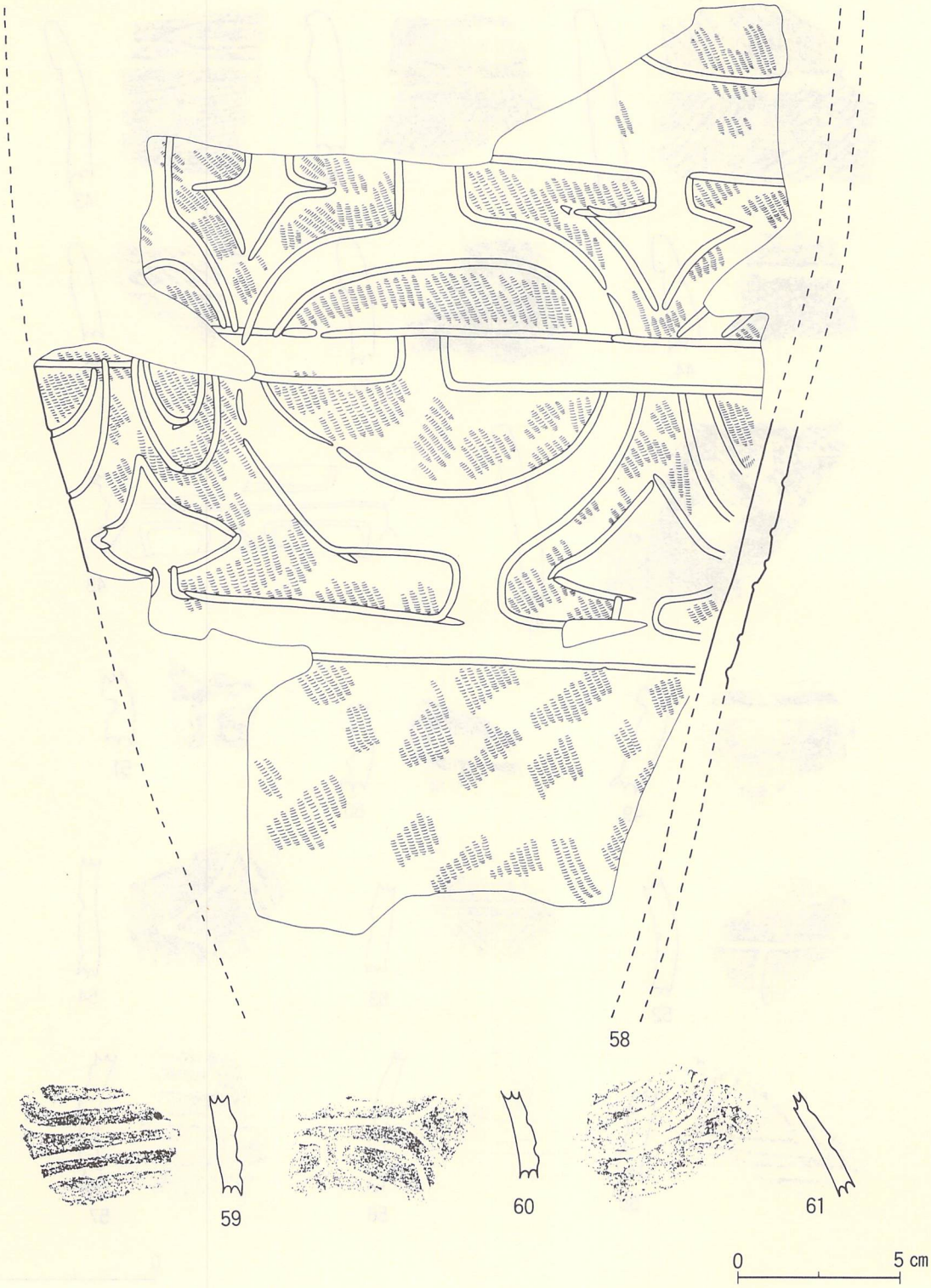
第55図　遺構外出土遺物（2）



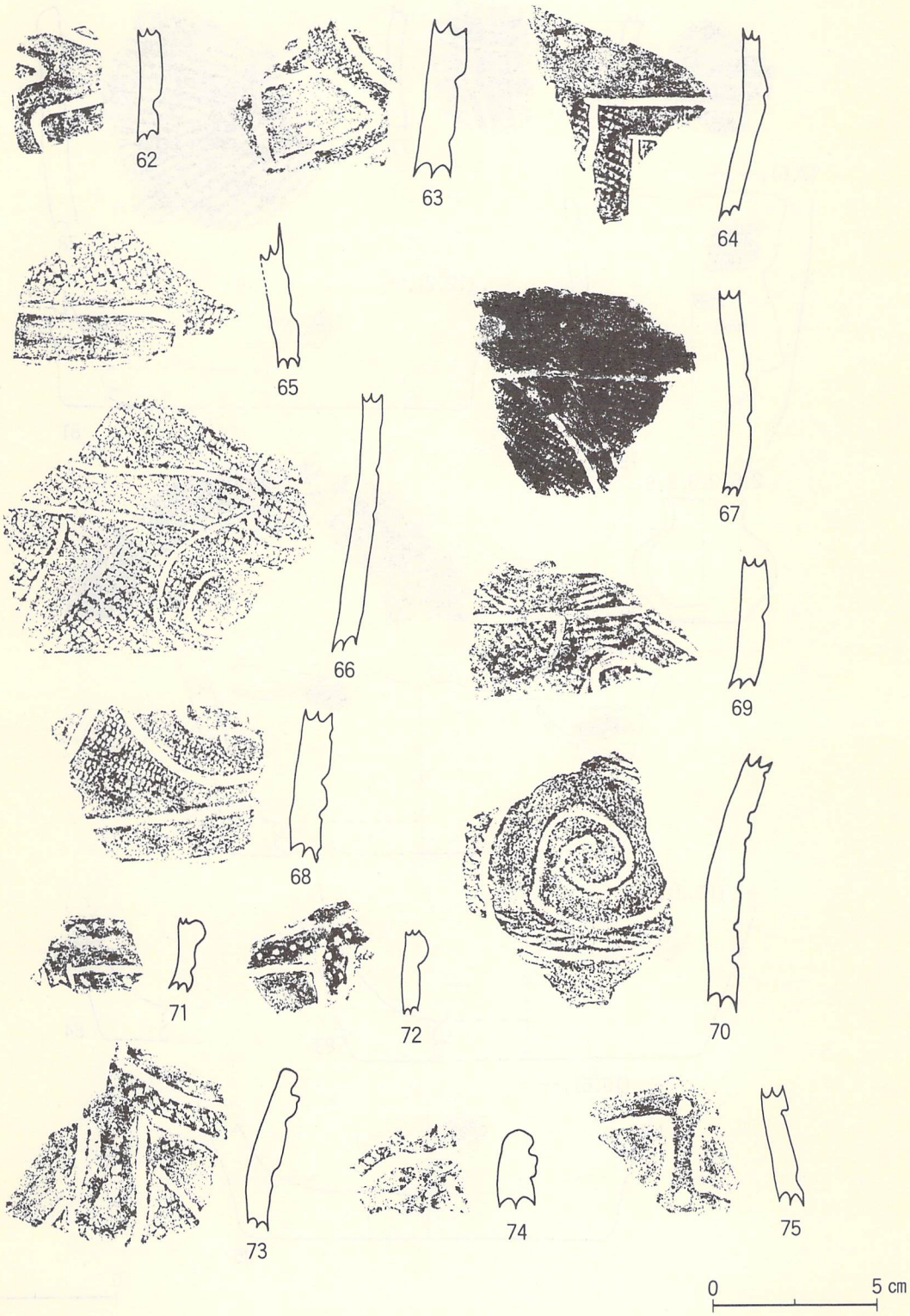
第56図　遺構外出土遺物（3）



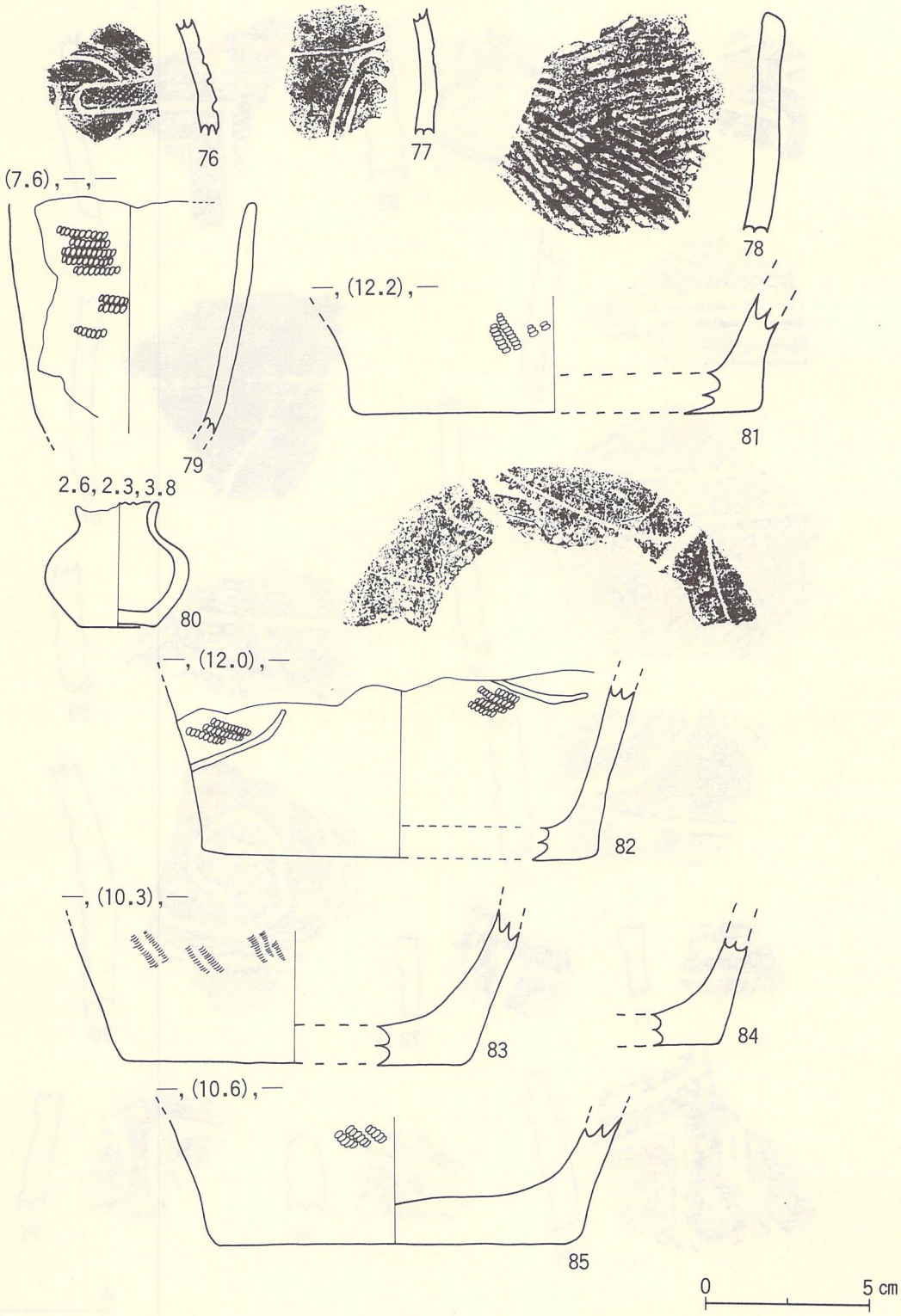
第57図　遺構外出土遺物（4）



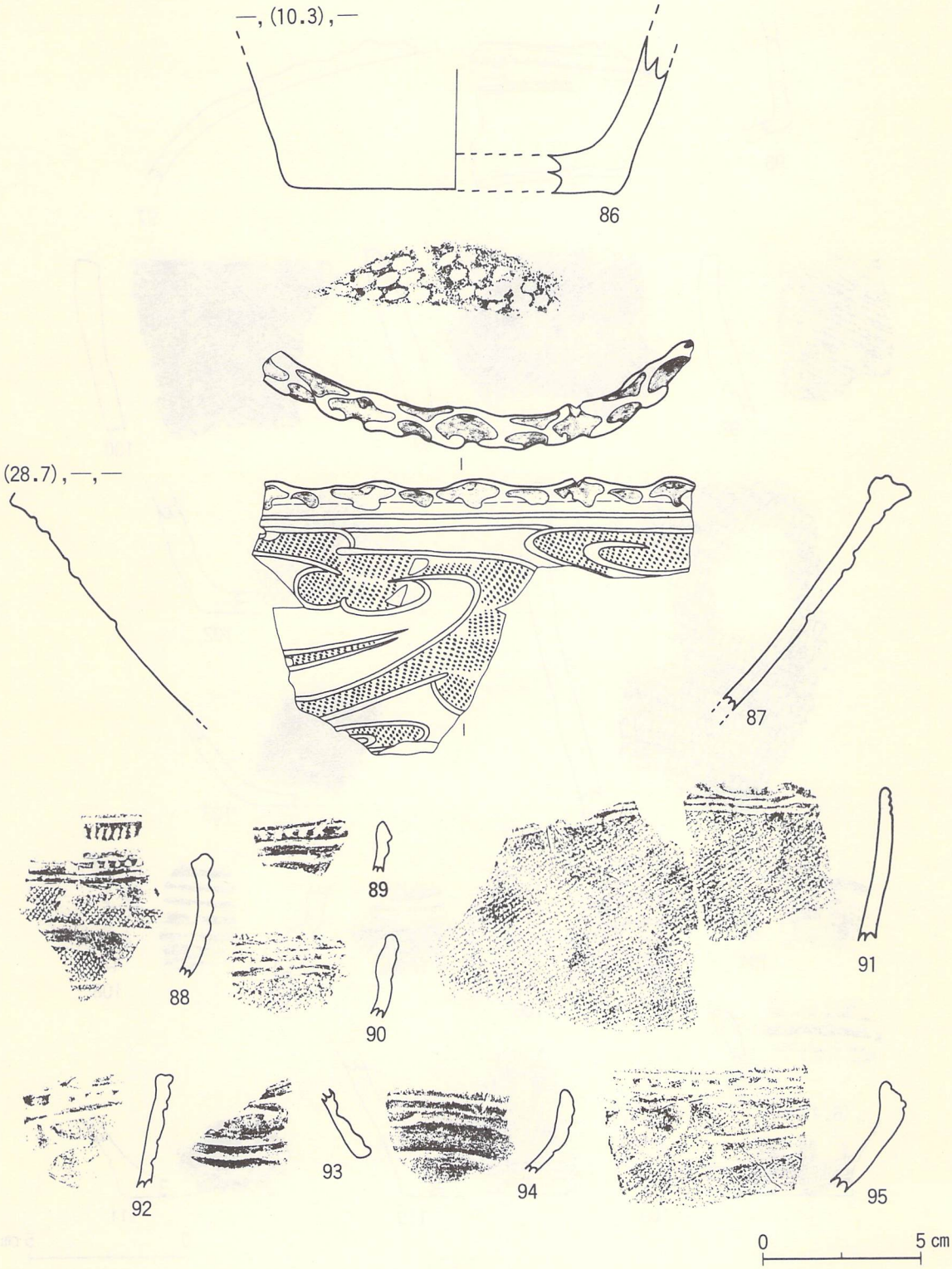
第58図　遺構外出土遺物（5）



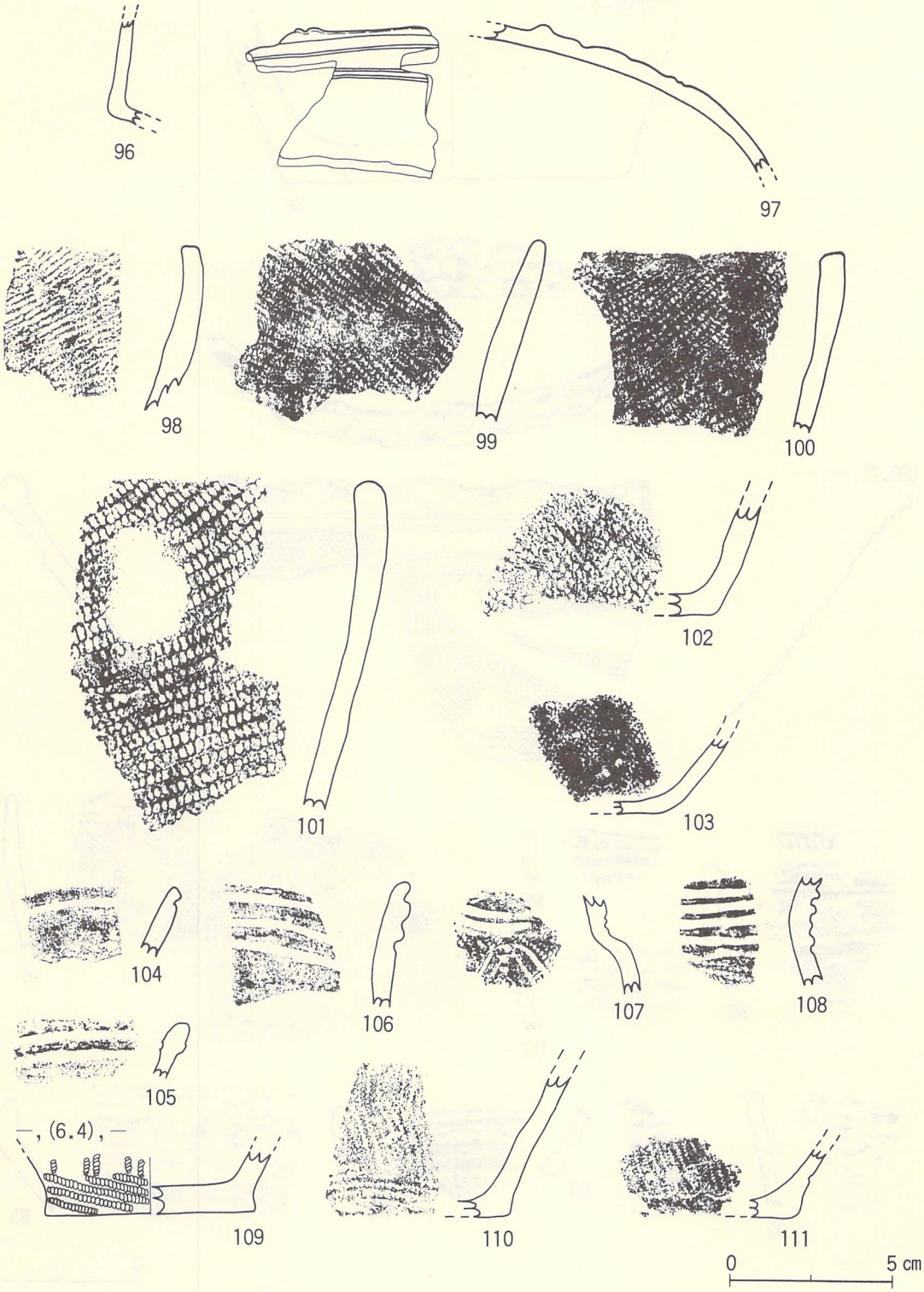
第59図　遺構外出土遺物（6）



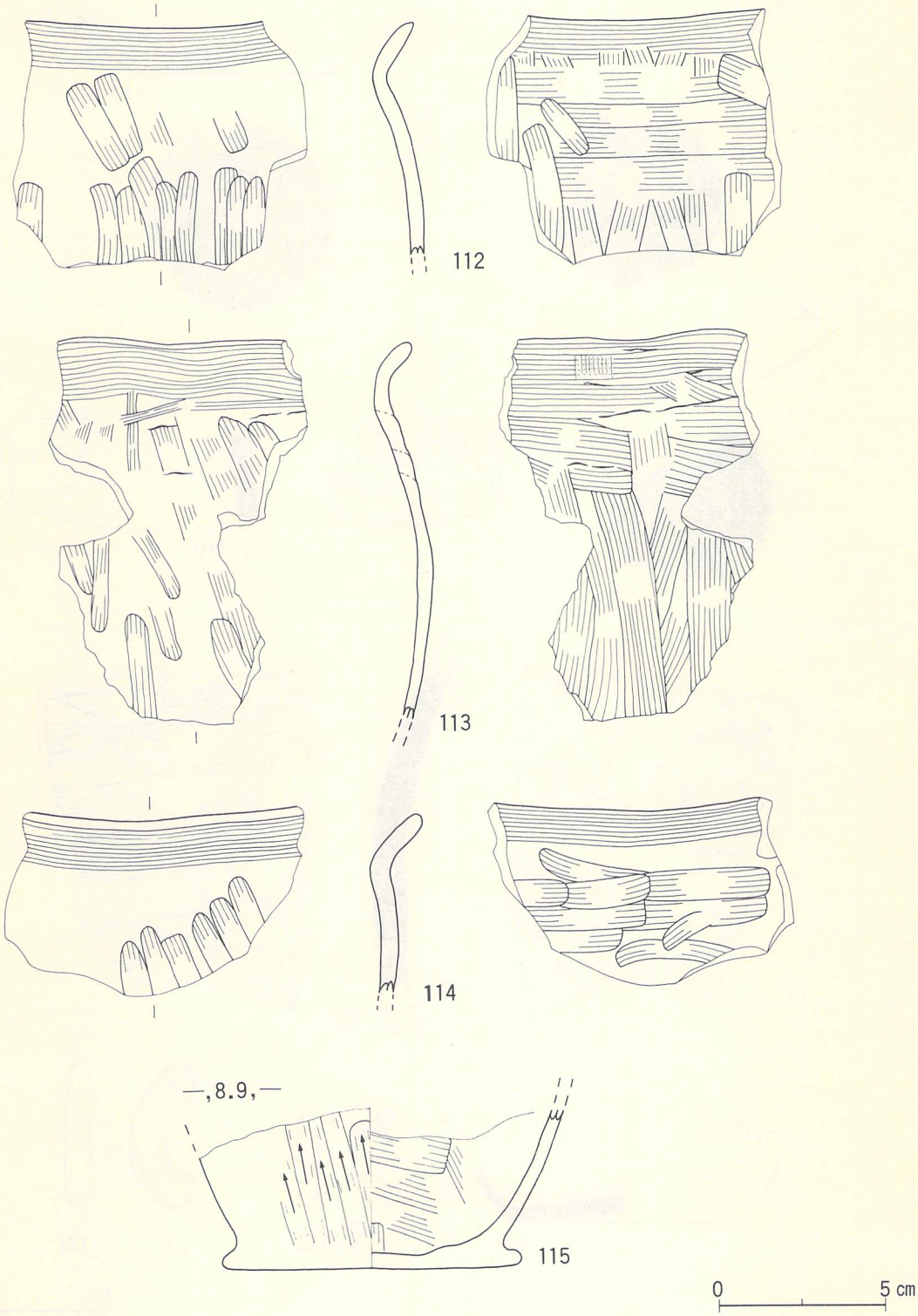
第60図　遺構外出土遺物（7）



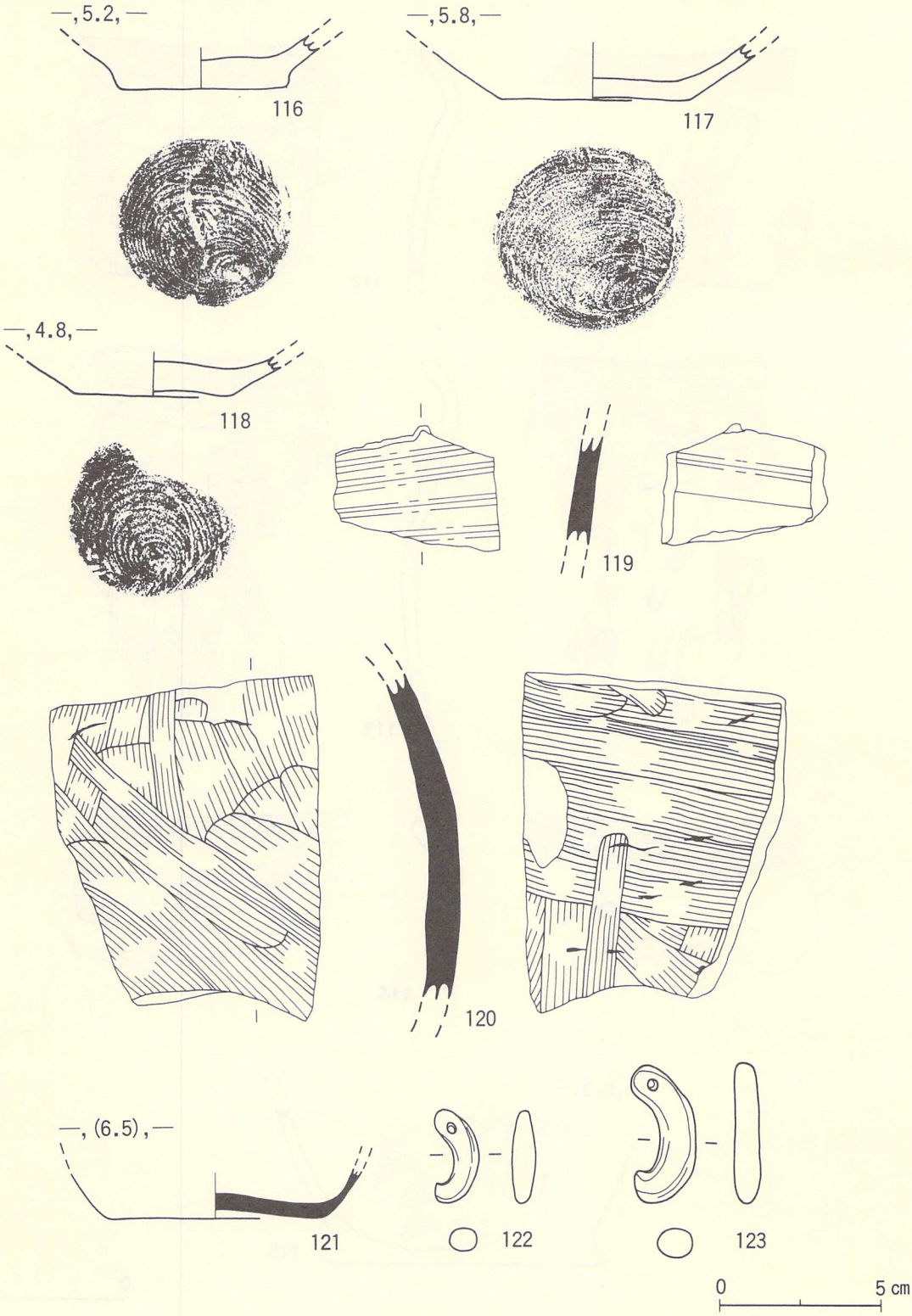
第61図　遺構外出土遺物（8）



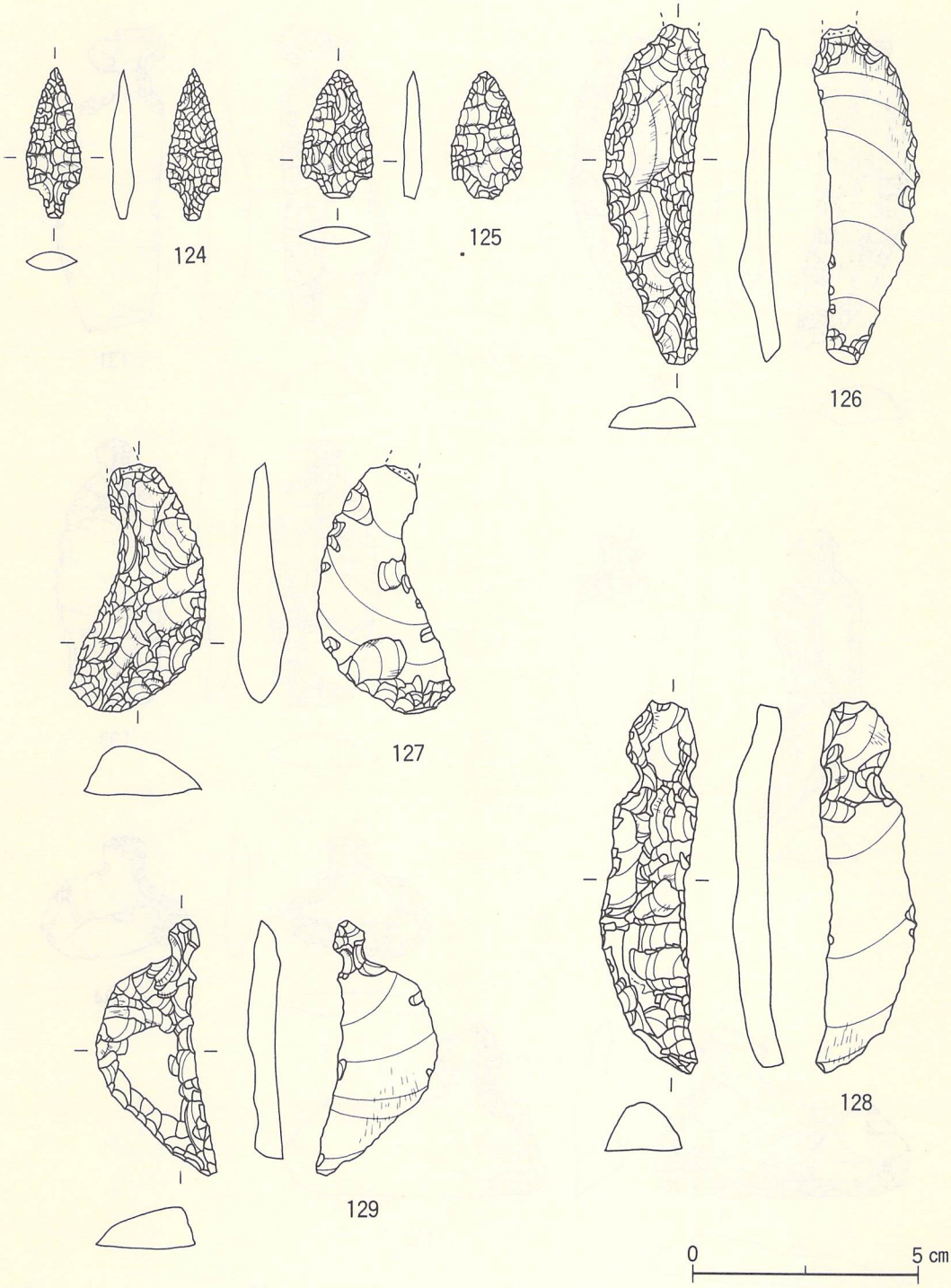
第62図　遺構外出土遺物（9）



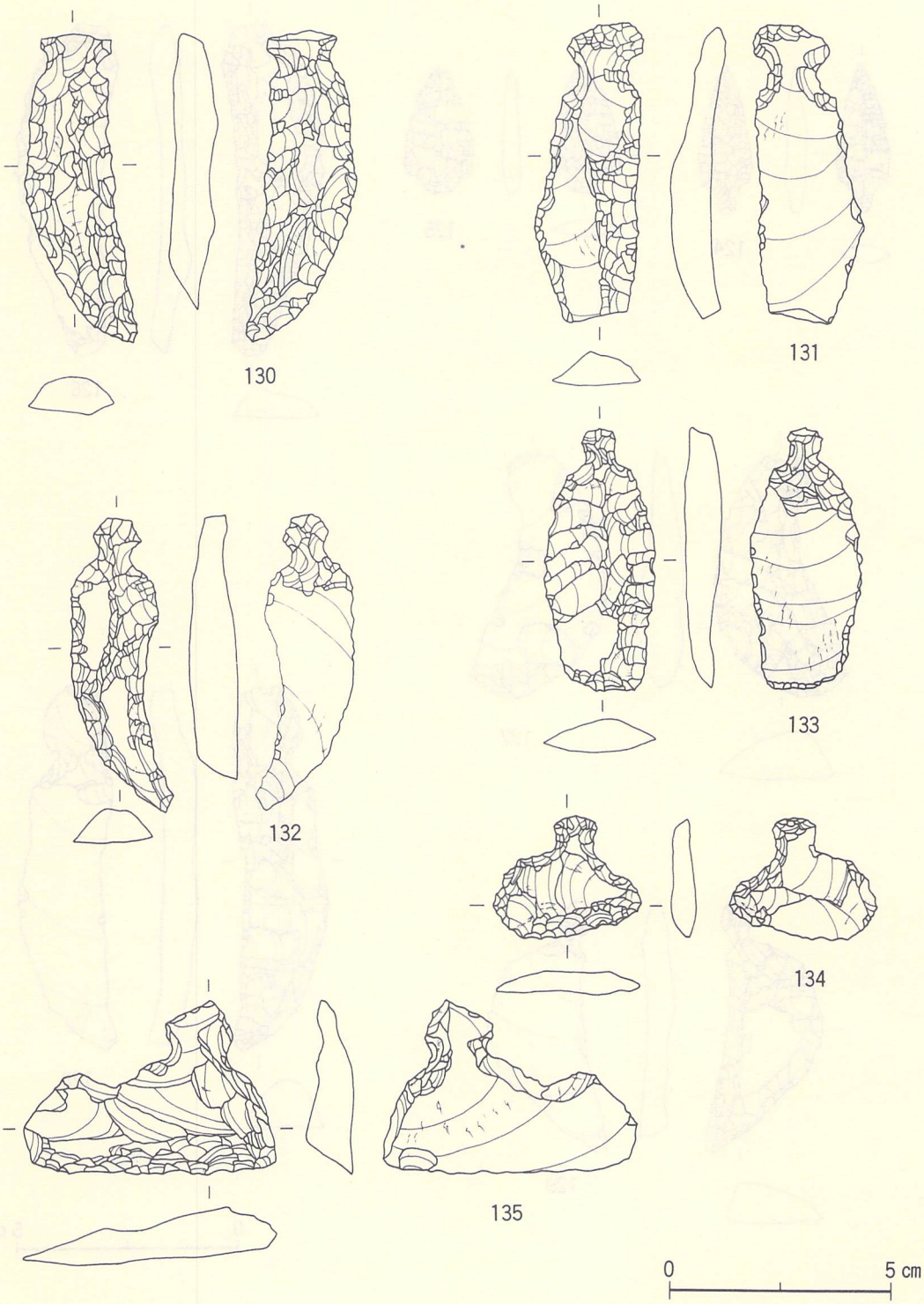
第63図　遺構外出土遺物(10)



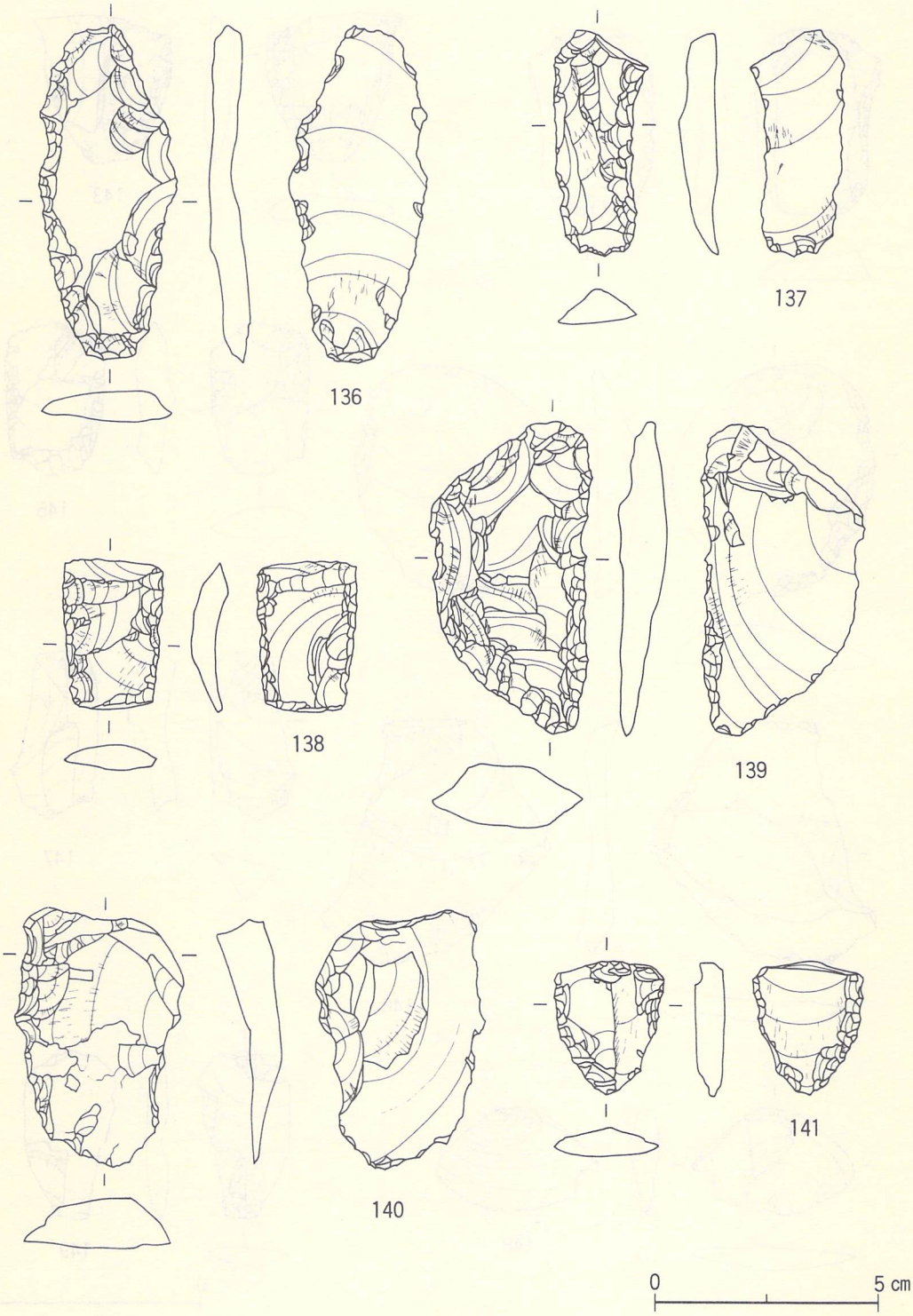
第64図　遺構外出土遺物(11)



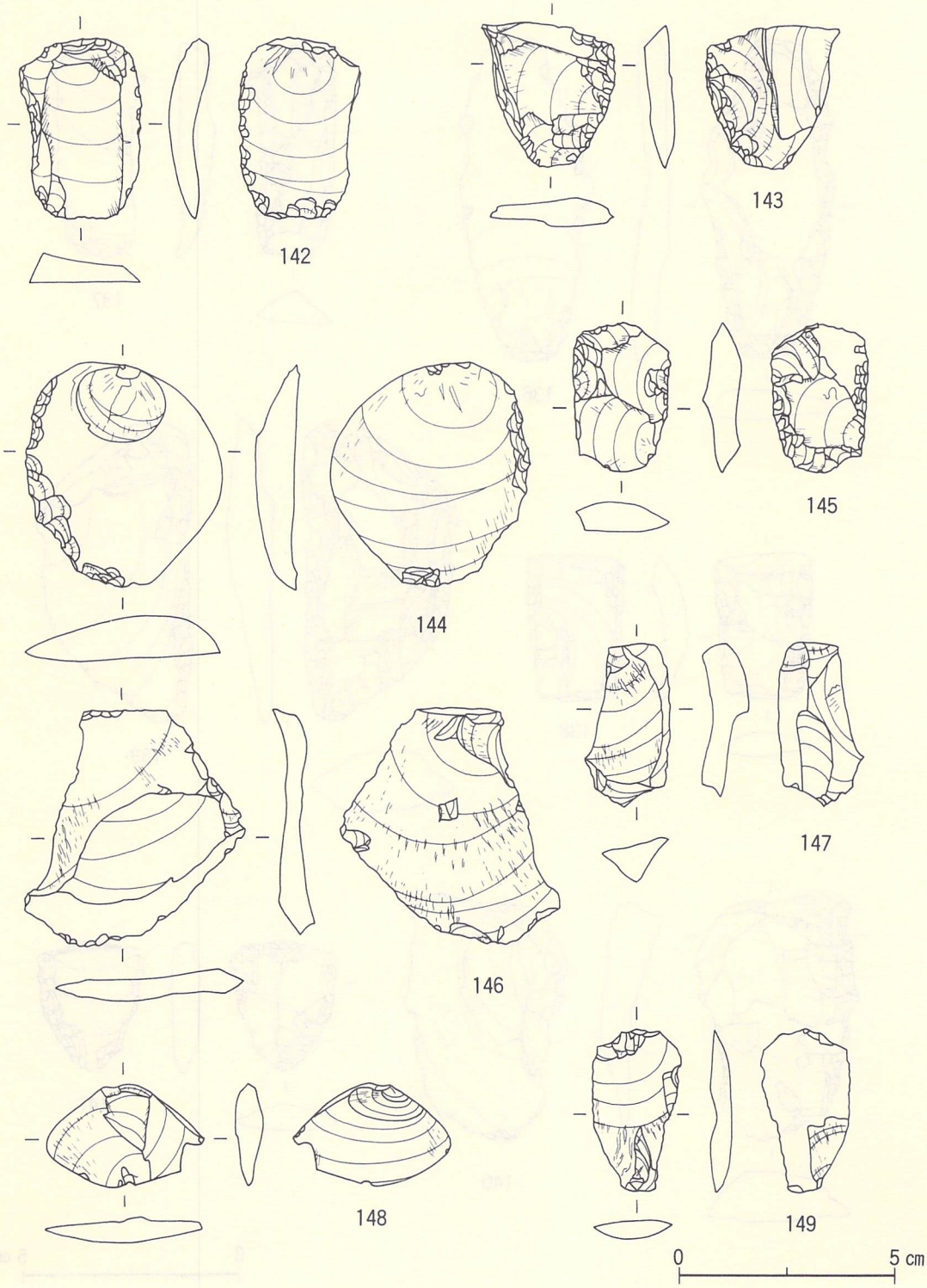
第65図　遺構外出土遺物(12)



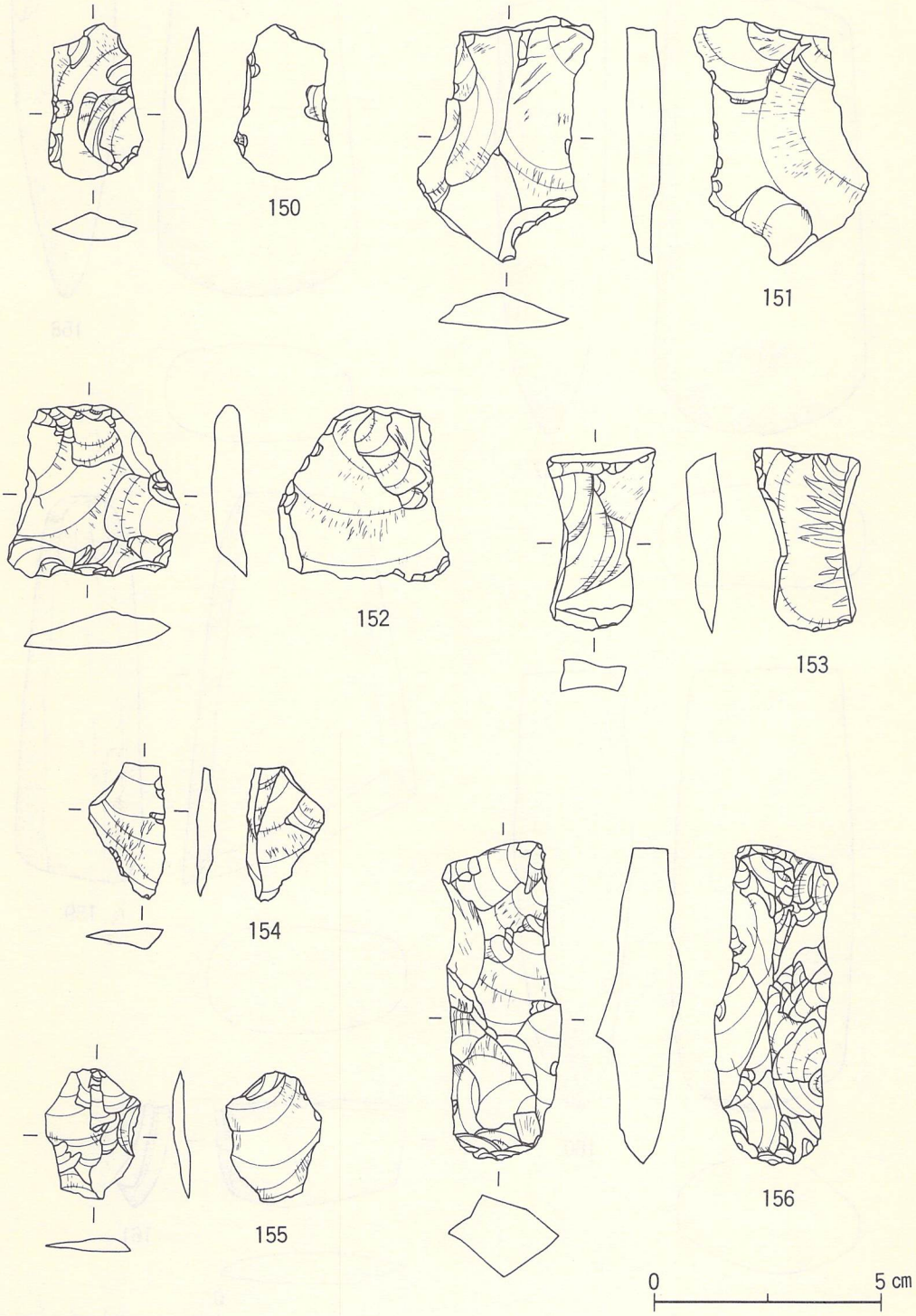
第66図　遺構外出土遺物(13)



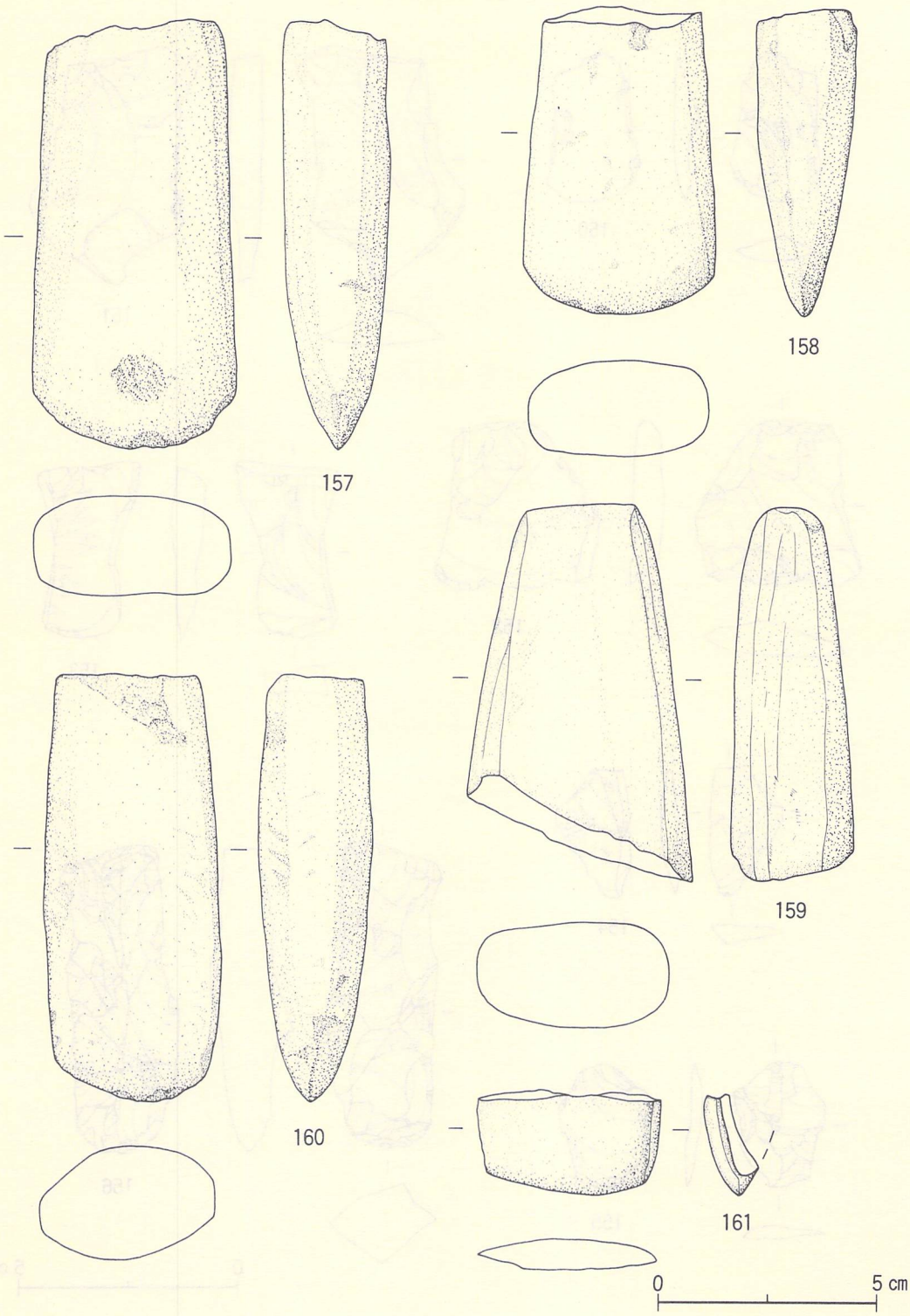
第67図　遺構外出土遺物(14)



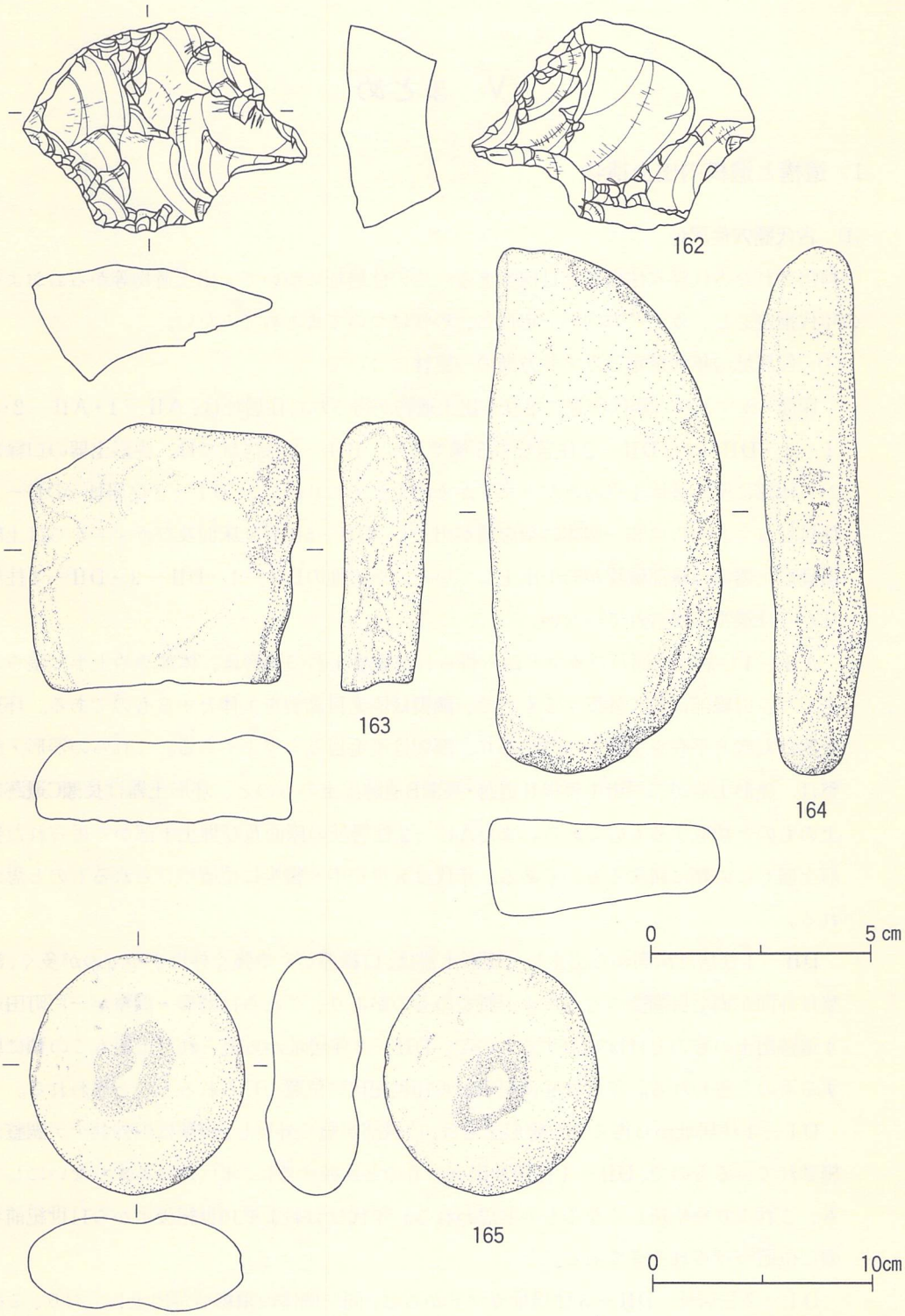
第68図　遺構外出土遺物(15)



第69図　遺構外出土遺物(16)



第70図　遺構外出土遺物(17)



第71図　遺構外出土遺物(18)

V　まとめ

1．遺構と遺構内出土遺物

(1)　古代竪穴住居址

検出された古代竪穴住居址は11棟である。この住居址について、出土遺物等からおおよその年代推定をし、カマド方向の一定性と、形状についてまとめてみたい。

㋑　住居址の年代推定とカマド方向の一定性について

床面・カマドから年代決定に足りる出土遺物が得られた住居址は、AII－1・AII－2・DI－1・DII－1・DII－2住居址の5棟である。BII－2住居址では、甕形土器の口縁部から体部に至る破片1点のみがカマドから出土しており、また、DI－2住居址とDII－5住居址カマドからは同一個体の須恵器が出土し、DII－5住居址床面及びカマドからは土師器甕形土器の口縁部破片が若干出土している。その他のBII－1・DII－3・DII－4住居址からは遺物が得られていない。

AII－1住居址床面及びカマドから得られた甕形土器の器形は、体部やや上半で脹らみをもち、口縁部は緩く外反するもので、調製は刷毛目調製を主体とするものである。坏形土器は丸底と平底を呈するものがあり、調製は刷毛目とミガキである。これらの器形・調整は、甕形土器が二戸市中曽根II遺跡・長瀬B遺跡出土のものと、坏形土器は長瀬C遺跡出土のものと類似するものである。またAII－2住居址の床面及び埋土下部から得られた甕形土器もこの類に属するものである。年代は8世紀中～後半に位置づけられるものと思われる。

DII－1住居址床面から出土した甕形土器は、口縁部がやや強く外反するものが多く、調整は外面が刷毛目調整のものとナデ調整のものがあり、これらは器形・調整が一戸町田中4遺跡出土のものとほぼ類似するもので、DII－2住居址から得られた土器もこの類に属するものと思われる。年代は9世紀末から10世紀代に位置づけられるものと思われる。

DI－1住居址から得られた甕形土器は、口縁部が短く外反し、調整は内外共ナデ調整が施されているもので、DII－1住居址出土のものと比較するに、年代差はあまりないにしても、これよりやや新しくなるものと思われる。年代はおおよそ10世紀後半から11世紀前半頃に位置づけられそうである。

DI－2住居址とDII－5住居址カマドからは、同一個体の須恵器が出土しており、この2棟の住居址は同時期に形成された集落の一部とみて間違いない。この須恵器は体部上半

がロクロ調整、体部下半にケズリがみられるところから、平安時代中頃に位置づけられそうで、DII－1・DII－2住居址とほぼ同じ年代になると思われる。DII－5住居址からはこの他に甕形土器の口縁部と底部破片が出土しているが、これから年代を推定することは困難である。

以上述べた住居址の年代についてまとめると次のとおりとなる。

ⓐ AII－1・AII－2住居址　　8世紀中～後半

ⓑ DII－1・DII－2・DI－2・DII－5住居址　　9世紀末～10世紀代

ⓒ DI－1・BII－2住居址　　10世紀後半～11世紀前半

次に、上にまとめた住居址のカマド方向と出土遺物の得られなかった住居址(BII－1・DII－3・DII－4住居址)のカマド方向についてみると、次のように3つのグループに分類される。

ⓐ AII－1・AII－2住居址は同方向　　→北方向

ⓑ DII－1・DII－2・DI－2・DII－5住居址と
DII－3住居址は同方向　　→北～ほぼ北方向

ⓒ DI－1・BII－2住居址とBII－1・DII－4住居址は同方向　　→東～ほぼ東方向

以上のことから、1集落を形成する場合、カマド方向に一定性があったものとするならば、当遺跡には、ⓐ8世紀中～後半、ⓑ9世紀末～10世紀代、ⓒ10世紀後半～11世紀前半の3期に渡って集落が形成されていたのではあるまいか。

㋺ 形状について

11棟を形状別に分けると次のとおりである。

方形～ほぼ方形を呈するもの→AII－1・BII－1・DI－1・DII－1
DII－2・DII－3・DI－4住居址

長方形状を呈するもの　→DII－5住居址

不正長方形を呈するもの　→AII－2・BII－2住居址

菱形状を呈するもの　→DI－2住居址

これらのうち、対辺の長さ・辺の長さ及びコーナーがほぼ一定している住居址は、BII－1住居址とDII－1住居址のみで、他の住居址はいずれかに一定性を欠くものである。

方形からほぼ方形を呈する住居址のうち、AII－1・DII－2住居址はコーナーの巡りとその角度に一定性を欠き、AII－1住居址の南壁は外にやや脹らむ。DI－1住居址は床面が長方形状を呈し、壁面が歪んでいる。またDII－3・DII－4住居址は対辺の長さが一定ではない。

不正長方形を呈するAII－2住居址は、東壁が曲線的で、南西コーナーにあたる部分が直線的となり、換言すると不正五角形状となるものである。

これら11棟のうち、柱穴が4本検出されその配置が明確になったのは、AII－1住居址とDII－1住居址のみである。BII－1住居址には南壁際に2本、DII－2住居址には床面中央部に1本検出されたが、配置は明確にできなかった。その他の住居址においては検出できなかった。

以上のⓐ住居址が歪む・一定性に欠ける、ⓑ小規模の住居址には柱穴がない、という2つの要因は密接な関連があるのではないかと思われ、屋外に柱穴があった可能性も否定できない。

このような住居址の形状は、上屋構造上の推定は抜きにしても、当遺跡の地域的特徴といえるかもしれない。

(2) 住居址状遺構

検出された住居址状遺構は2棟である。いずれの遺構にも炉址・柱穴は検出されず、「住居址」として認定しなかったものである。AII－3住居址状遺構には、床面中央部に堅い面があり、その上に微量の炭化物が検出されているところから、住居址の可能性も否定できない。いずれの遺構にも出土遺物はなく、時期は不明である。

(3) ピット

ピットは20基検出されている。占地的にみると、調査区北側緩斜面に検出されたもの18基、中央部斜面に検出されたもの1基、南側緩斜面に検出されたもの1基で、大半のピットは調査区北側緩斜面に検出されている。

これらを断面形で大別すると、フラスコ形を呈するもの10基、ビーカー形を呈するもの9基、浅鉢形を呈するもの1基である。規模は開口部が径約90cm～200cmのものであるが、これらのうち開口部径約140cm前後のピットが大半を占める。

出土遺物は、AII－51ピット埋土から縄文土器片2点、BII－60ピット埋土上位から下位にかけて縄文土器10点、BII－61ピット埋土から縄文土器片4点が出土している。その他のピットからは出土遺物はない。

BII－60ピットの埋土は人為的堆積土を示し、最下位には焼土・褐色土・黄褐色土が混入し合う埋土状況であったが、この面まで土器が採集されたことは、このピットと同時期の土器と思われる。これらの土器は縄文時代後期初頭に位置づけられるものである。

AII－51ピットとBII－61ピットから得られた縄文土器の口縁部破片はいずれも後期初頭に位置づけられるものと思われるが、埋土上部から中部にかけて出土したものであり、遺構の時期決定に足りる資料ではない。また出土遺物の得られなかったピットについても時期は

不明である。

(4) 陥し穴状遺構

陥し穴状遺構は6基が検出されている。占地的にみると、調査区北側斜面に4基、南側緩斜面に2基検出されている。北側緩斜面に検出された4基は、短軸断面がU字状を呈するもの、ロート状を呈するもので、断面幅の狭いものである。南側緩斜面に検出された2基は、短軸断面がU字状を呈するものの、断面幅が北側緩斜面に検出された4基に比較して広く、開口部が開くものであり、形態上異なるものである。

以上のことから、北側緩斜面に検出された4基と南側緩斜面に検出された2基は、時期差があるのではないかと思われる。

いずれの遺構にも出土遺物はなく、時期は不明である。

(5) 焼土遺構

焼土遺構2基は調査区北側緩斜面に検出されたものである。いずれも現地性焼土である。AII—202焼土遺構からは、焼土に食い込む形で縄文土器底部破片が出土しているが、この土器から時期を推定することは困難である。

2. 遺構外出土遺物

遺構外から得られた遺物は、縄文土器・弥生土器と思われるもの・土師器・須恵器・土製品・石器類である。これらのうち、弥生土器と思われるもの・土師器・須恵器・土製品・石器については出土量が少ないところから記述は省略し、ここでは縄文土器のみについて若干まとめてみたい。

縄文土器は、前期・後期・晩期に属する土器が出土している。

第I群土器（前期）は17点出土している。口縁部破片をみると、口唇部が平縁のものが多く、波状口縁を呈するものも数点みられる。施文は口縁部直下から施されており、複節斜縄文・綾絡文が多い。胎土にはいずれも繊維の混入が認められる。これらは大木系土器と思われるが、型式については明確にできなかった。これらの土器は主に調査区南側緩斜面のCII区東側のみに限って出土したものである。

第II群土器（後期）は69点が出土している。口縁部破片は口縁部が肥厚するものが多く出土している。また体部破片は沈線文を主体とした文様が展開されているものである。これらはいずれも十腰内I式に比定される土器と思われる。これらの土器は主に調査区北側緩斜面のAII区東側から出土したものである。

第III群土器（晩期）は精製土器11点、粗製土器6点の計17点が出土している。精製土器はいずれも大洞C_1式に比定されると思われるものである。これらの土器は主に調査区北側緩斜

面のAII区東側から出土したものである。

これら縄文土器の出土地をみると、後期・晩期に位置づけられる土器群は調査区北側緩斜面AII区東側に集中して出土し、前期に位置づけられる土器群は調査区南側緩斜面CII区東側に出土している。

以上のことから、これら縄文土器に伴う遺構は、調査区外東側の緩斜面に存在するものと思われ、当遺跡は縄文時代・奈良時代及び平安時代の複合遺跡であると思われる。

《参考・引用文献》

石野公一　1976　北上山系開発地域土地分類基本調査―久慈―岩手県企画開発室

石野公一　1976　北上山系開発地域土地分類基本調査―陸中野田―岩手県企画開発室

照井一明　1982　陸中海岸北部地域の海岸段丘と古流系　岩手県高等学校教育研究会地理部会

村上達夫・佐々木清文　1983　「上野山遺跡発掘調査報告書」　岩手県埋文センター文化財調査報告書第67集

酒井宗孝　1983　「長瀬C遺跡第2次発掘調査報告書」　岩手県埋文センター文化財調査報告書第51集

四井謙吉　1982　「二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書」長瀬B遺跡　岩手県埋文センター文化財調査報告書第36集

高田和徳・桐生正一　1978　「一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」　一戸町文化財調査報告書第1集

高橋信雄他　1982　「岩手の土器」　岩手県立博物館

種市　進　1983　「道地II遺跡・道地III遺跡発掘調査報告書」　岩手県埋文センター文化財調査報告書64集

中村良幸　1979　「立石遺跡」　大迫町埋蔵文化財報告書第3集

草間俊一他　1974　「崎山弁天遺跡」　岩手県大槌町教育委員会

草間俊一　1967　「野田村中平遺跡」　岩手大学教養部報告

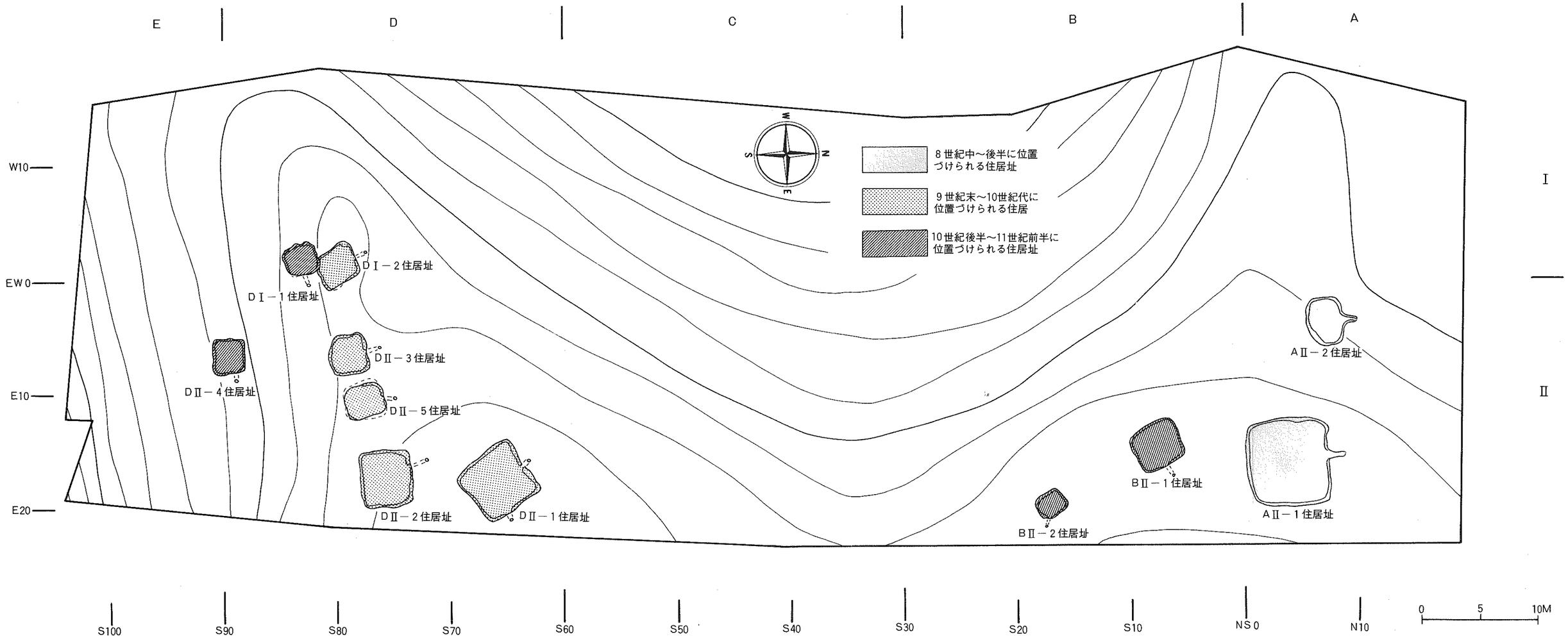
加藤晋平・小林達雄・藤本　強　1982　「縄文文化の研究」3　縄文土器I　雄山閣

加藤晋平・小林達雄・藤本　強　1981　「縄文文化の研究」4　縄文土器II　雄山閣

「縄文土器大成」①・③・④　1982　講談社

加藤晋平・鶴丸俊明　1980　「石器の基礎知識I」「石器の基礎知識II」　柏書房

鈴木道之助　1981　「石器の基礎知識III」　柏書房



第72図　年代別住居址立地状況

表3　　奈良及び平安時代住居址一覧表

項目 No.	遺構名	規模(m)	平面形	カマド		柱穴	図版番号	写真番号
				位置	煙道構造			
1	AII－1	7.7×7.2	ほぼ方形	北壁中央	掘込み式	4	9・10・11	3・4
2	AII－2	4.2×3.1	不正長方形	北壁中央	掘込み式	なし	15	5・6
3	BII－1	3.9×4.1	ほぼ方形	東壁中央	刳貫き式	2	16・17	7
4	BII－2	2.2×2.5	不正長方形	東　隅	刳貫き式	なし	18	8
5	DI－1	2.9×2.9	ほぼ方形	東壁南寄り	刳貫き式	なし	19	9
6	DI－2	3.2×3.1	菱形	北壁中央	刳貫き式	なし	20	10
7	DII－1	5.3×5.3	方形	北西壁中央 北東壁南東寄り	掘込み式 刳貫き式	4	22・23・24	11・12
8	DII－2	5.0×4.5	ほぼ方形	北壁西寄り	刳貫き式	1	27・28	13
9	DII－3	3.4×3.2	ほぼ方形	北壁中央	刳貫き式	なし	31	14
10	DII－4	2.9×2.7	ほぼ方形	東壁北寄り	刳貫き式	なし	32	15
11	DII－5	2.8×3.3	長方形	北壁東寄り	刳貫き式	なし	33	16

ピット一覧表

項目 No.	区名	遺構名	規模 (cm)			形状		図版番号	写真番号
			開口部	底部	深さ	開口部平面形	断面形		
1	A	AII－51	90× 90	80× 80	71	円形	フラスコ形	36	18
2		AII－52	170×170	130×130	71	円形	ビーカー形	36	18
3		AII－53	115×150	90×110	38	楕円形	ビーカー形	37	18
4		AII－54	125×150	115×130	70	楕円形	ビーカー形	37	18
5		AII－55	180×180	160×160	55	円形	ビーカー形	38	18
6		AII－56	190×190	160×160	50	円形	ビーカー形	38	—
7	B	BII－51	130×130	125×125	40	円形	フラスコ形	39	18
8		BII－52	165×190	180×180	50	円形	フラスコ形	39	19
9		BII－53	150×150	70×105	33	不整形	ビーカー形	40	19

表4

ピット一覧表

項目 No.	区名	遺構名	規模 (cm) 開口部	底部	深さ	形状 開口部平面形	断面形	図版番号	写真番号
10	B	BII—54	110×135	140×150	48	不整形	フラスコ形	40	19
11		BII—55	125×140	150×150	80	円形	フラスコ形	41	20
12		BII—56	110×115	—	1時期 100 2時期 50	円形	フラスコ形	41	20
13		BII—57	150×150	125×125	66	円形	ビーカー形	42	20
14		BII—58	115×140	140×140	64	楕円形	フラスコ形	42	20
15		BII—59	140×150	130×130	43	円形	ビーカー形	42	21
16		BII—60	85× 90	110×115	65	不整形	フラスコ形	43	21
17		BII—61	85× 90	90× 95	37	円形	フラスコ形	43	21
18		BII—62	90×105	80× 80	53	不整形	フラスコ形	43	22
19	C	CII—51	143×143	135×135	30	楕円形	ビーカー形	44	22
20		CII—52	140×160	75× 80	55	楕円形	浅鉢形	44	22

陥し穴状遺構一覧表

項目 No.	区名	遺構名	規模(cm) 開口部 長軸	開口部 短軸	底部 長軸	底部 短軸	深さ	短軸断面形	図版番号	写真番号
1	A	AII—101	360	60	290	20	131	ロート状	45	22
2		AII—102	410	90	390	30	145	U字状	46	23
3		AII—103	310	55	280	12	90	U字状	47	23
4	B	BII—101	310	35	340	17	75	U字状	48	24
5	C	CII—101	320	115	240	50	75	U字状	49	24
6	D	DII—101	180	70	160	30	65	U字状	50	24

表5

石器計測表

項目 No.	器種	出土地	図版番号	写真番号	計測値 最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質
1	磨石	DII-2(住) 床面	30- 10	31- 10	9.3	8.9	2.30	310.00	硬砂岩
2	石鏃	AII区 北側斜面	65-124	43-124	3.4	1.2	0.40	1.03	凝灰質珪質泥岩
3	〃	AII-1(住) 埋土	65-125	43-125	2.9	1.6	0.30	1.06	凝灰質珪質泥岩
4	石匙	AII-1(住) 埋土	65-126	43-126	7.5	2.0	0.80	13.03	珪質泥岩
5	〃	AII区 粗掘	65-127	43-127	5.7	2.4	1.10	15.04	珪質泥岩
6	〃	DII区 粗掘	65-128	43-128	8.2	1.9	1.40	20.03	珪質泥岩
7	〃	DII区 粗掘	65-129	43-129	5.8	2.3	0.90	11.03	珪質泥岩
8	〃	DII区 粗掘	66-130	43-130	7.0	2.0	1.10	15.02	玻璃質流紋岩
9	〃	DII-1(住) 埋土	66-131	43-131	6.7	2.5	0.90	13.10	珪質泥岩
10	〃	DII区 粗掘	66-132	43-132	6.9	2.1	1.00	13.03	流紋岩質極細粒凝灰岩
11	〃	AII-1(住) 埋土	66-133	43-133	5.9	2.6	0.80	10.04	凝灰質珪質泥岩
12	〃	DII区 粗掘	66-134	43-134	2.7	3.4	0.60	5.02	珪質泥岩
13	〃	DII-1(住) 埋土	66-135	43-135	3.9	5.8	1.00	19.00	チャート
14	スクレーパー	AII区 粗掘	67-136	43-136	7.5	3.2	0.80	21.04	流紋岩質極細粒凝灰岩
15	〃	DII-1(住) 埋土	67-137	43-137	5.2	2.1	0.80	8.10	凝灰質珪質泥岩
16	〃	DII区 粗掘	67-138	43-138	3.4	2.3	0.70	6.00	凝灰質珪質泥岩
17	〃	BII区 粗掘	67-139	43-139	7.1	3.6	1.40	32.06	凝灰質珪質泥岩
18	剝離痕のある剝片	BII区 粗掘	67-140	44-140	6.1	3.8	1.10	23.06	輝緑凝灰岩
19	〃	BII区 粗掘	67-141	44-141	3.1	2.5	0.50	4.07	凝灰質珪質泥岩
20	〃	DII区 粗掘	68-142	44-142	4.2	2.7	0.75	9.06	流紋岩質極細粒凝灰岩
21	〃	BII区 粗掘	68-143	44-143	3.4	3.1	0.50	6.00	淡緑色珪質凝灰岩
22	〃	AII区 粗掘	68-144	44-144	5.3	4.6	0.90	27.01	流紋岩質極細粒凝灰岩
23	〃	BII区 粗掘	68-145	44-145	3.5	2.2	0.90	6.08	流紋岩質極細粒凝灰岩
24	フレーク	AII区 粗掘	68-146	44-146	5.7	4.2	0.70	15.10	硬質泥岩
25	〃	DII区 粗掘	68-147	44-147	3.8	1.9	0.90	5.04	流紋岩質極細粒凝灰岩

表6

石器計測表

項目 No.	器種	出土地	図版番号	写真番号	計測値 最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質
26	フレーク	AII-1(住) 埋土	68-148	44-148	3.7	2.4	0.60	4.05	輝緑凝灰岩
27	〃	CII区 粗掘	68-149	44-149	3.8	2.1	0.50	4.02	流紋岩質極細粒凝灰岩
28	〃	CII区 粗掘	69-150	44-150	3.5	2.2	0.60	4.00	流紋岩質極細粒凝灰岩
29	〃	BII区 粗掘	69-151	44-151	5.2	3.5	0.80	16.01	粘板岩
30	〃	DII-1(住) 埋土	69-152	44-152	3.6	3.8	0.80	12.10	流紋岩質極細粒凝灰岩
31	〃	BII区 粗掘	69-153	44-153	3.9	2.4	0.65	7.05	粘板岩
32	〃	DII区 粗掘	69-154	44-154	2.9	1.7	0.30	1.09	凝灰岩珪質泥岩
33	〃	CII区 粗掘	69-155	44-155	2.8	2.1	0.25	1.07	凝灰岩珪質泥岩
34	石核	AII区 粗掘	69-156	45-156	7.0	2.4	1.60	28.10	輝緑凝灰岩
35	石斧	AII区 粗掘	70-157	45-157	9.7	4.7	2.60	200.00	硬砂岩
36	〃	AII区 粗掘	70-158	45-158	7.1	4.4	2.30	120.00	輝石玢岩
37	〃	DII-5(住) 埋土	70-159	45-159	8.7	5.0	2.60	180.00	輝石玢岩
38	〃	BII区 粗掘	70-160	45-160	9.8	4.0	2.50	170.00	淡緑色珪質凝灰岩
39	〃	CII-1(住) 埋土	70-161	45-161	2.5	4.2	0.80	11.06	淡緑色珪質凝灰岩
40	石核	BII区 粗掘	71-162	45-162	6.4	4.6	2.30	60.00	輝緑凝灰岩
41	擦痕のある礫	BII区 粗掘	71-163	45-163	6.0	6.1	1.90	100.00	アルコース砂岩
42	〃	DII区 粗掘	71-164	45-164	12.0	5.4	2.20	220.00	輝石安山岩
43	凹石	DII区 粗掘	71-165	45-165	10.6	9.8	4.10	670.00	花崗閃緑岩

写　真　図　版

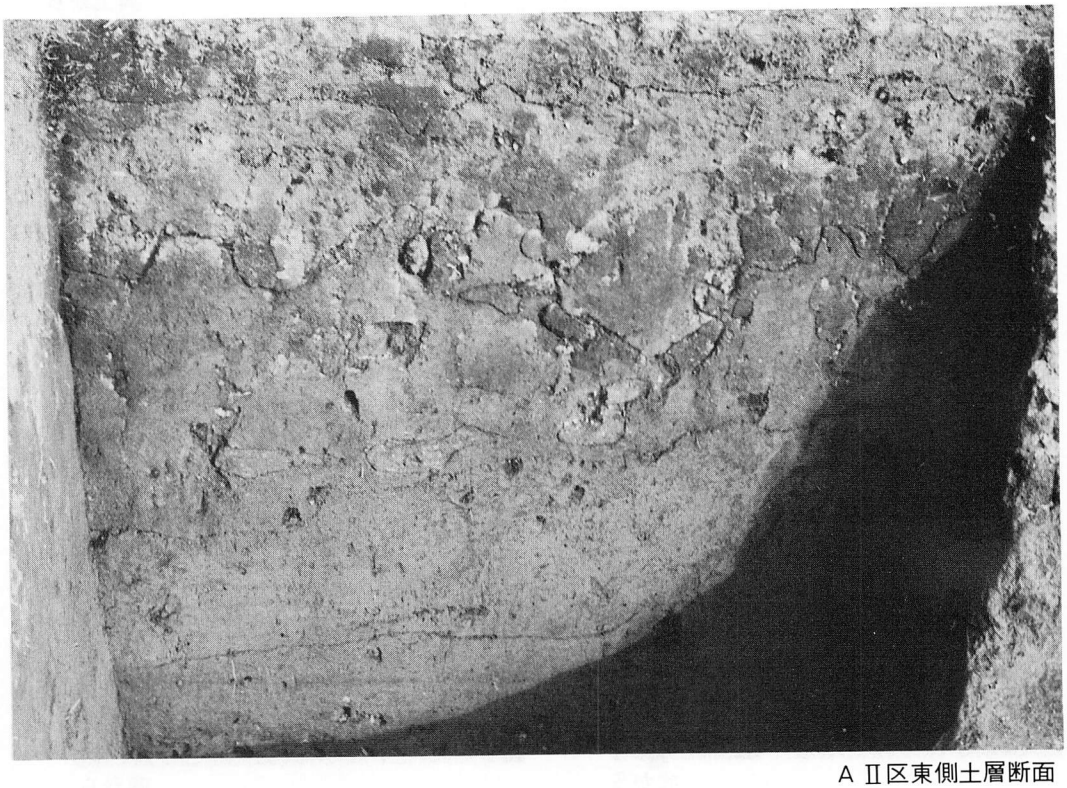
真上から

北から

南から

写真図版1　航空写真

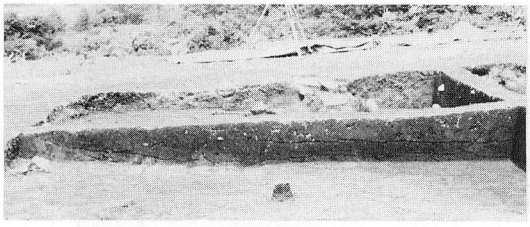
雑物撤去作業風景



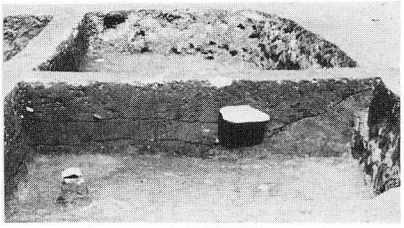
ＡⅡ区東側土層断面

写真図版２　雑物撤去作業・土層断面

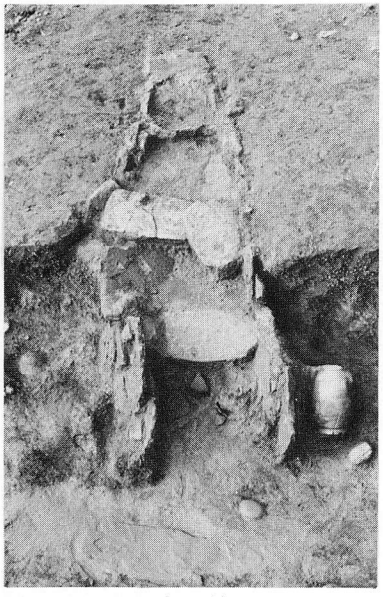
完掘り状況



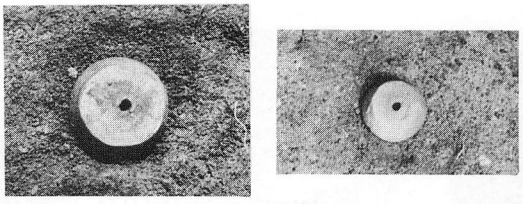
土層断面



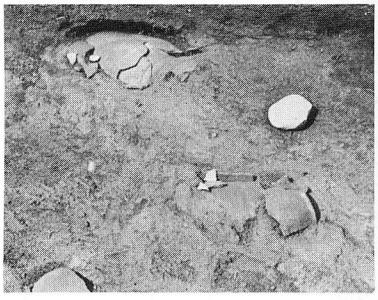
土層断面



カマド



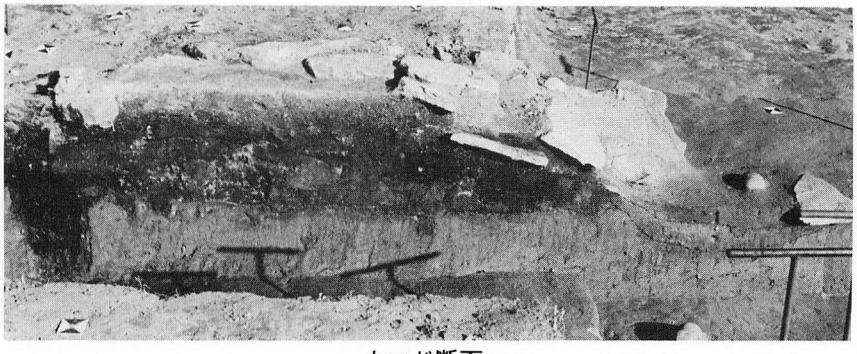
紡錘車出土状況



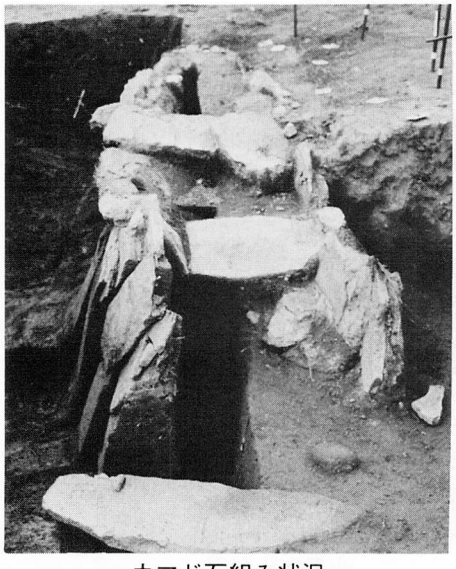
土器出土状況

写真図版 3　ＡⅡ－１住居址（１）

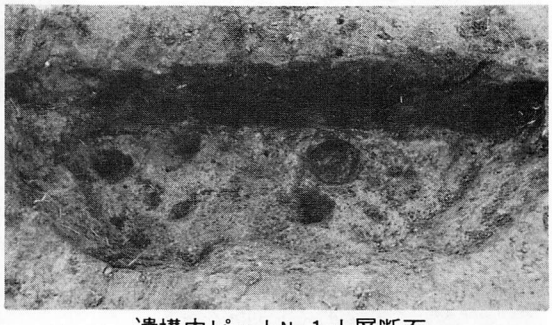
カマド石組み状況



カマド断面



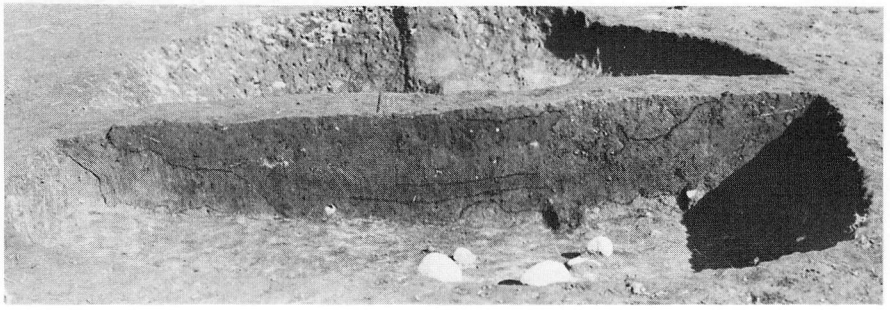
カマド石組み状況



遺構内ピットNo.1 土層断面

写真図版4　A Ⅱ－1住居址(2)

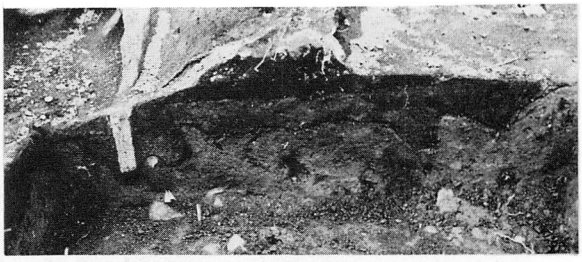
完掘り状況



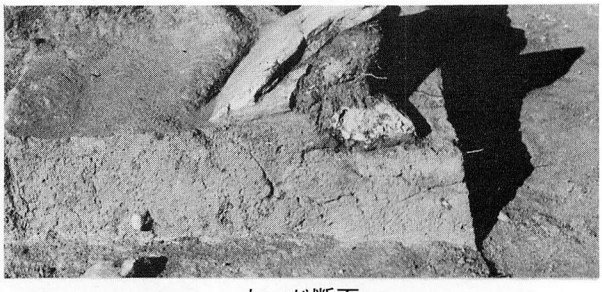
土層断面

写真図版５　ＡⅡ－２住居址（１）

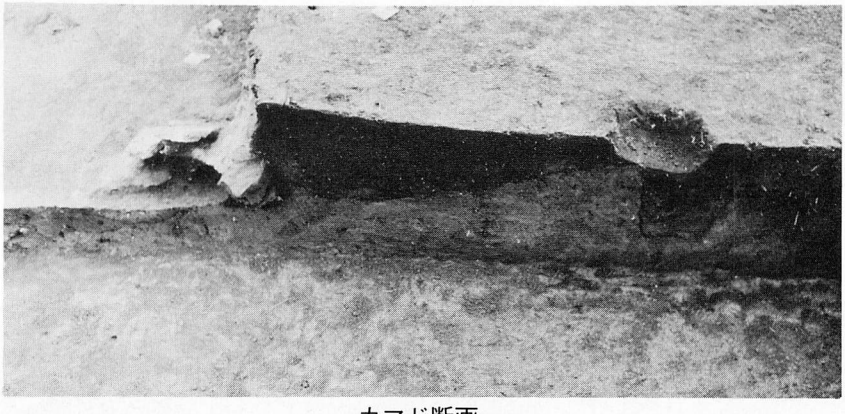
カマド



カマド断面

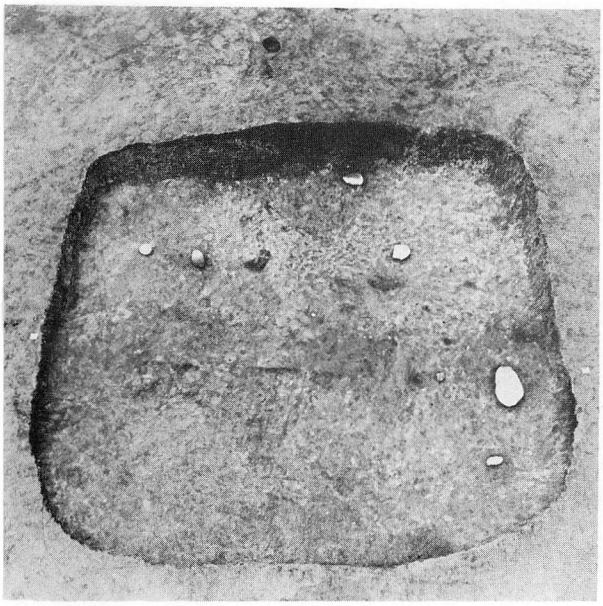


カマド断面



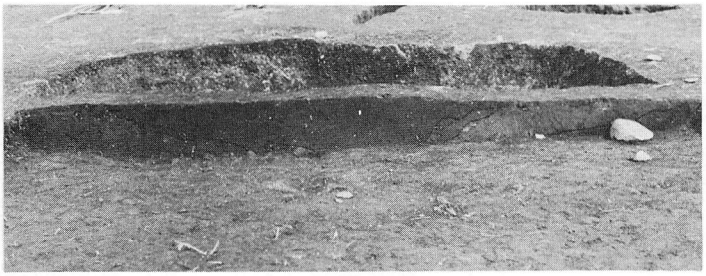
カマド断面

写真図版6　ＡⅡ－２住居址（２）

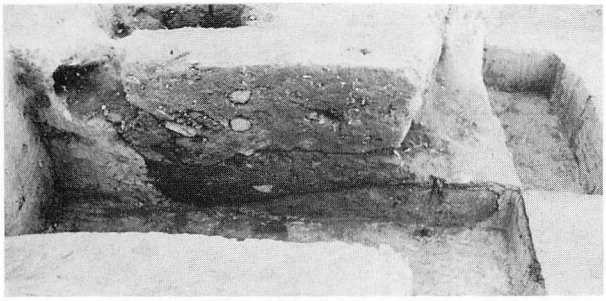


完掘り状況

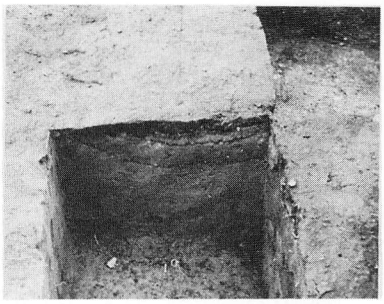
カマド



土層断面



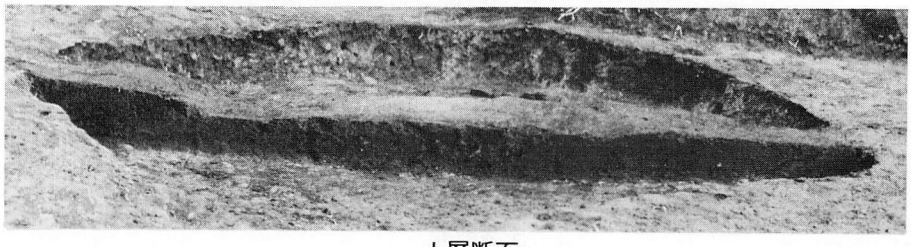
カマド断面



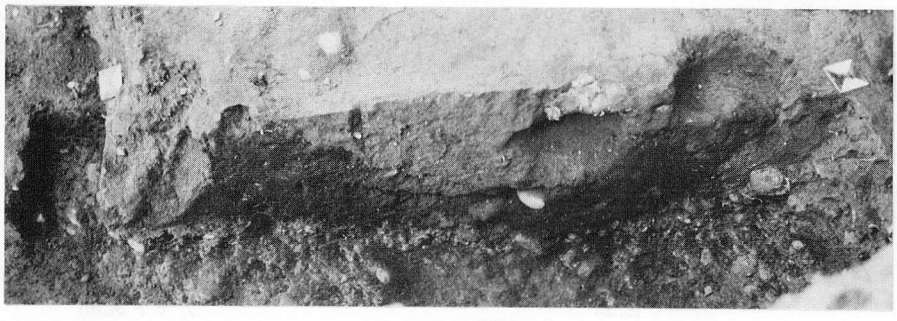
カマド断面

写真図版７　ＢⅡ－１住居址

完掘り状況

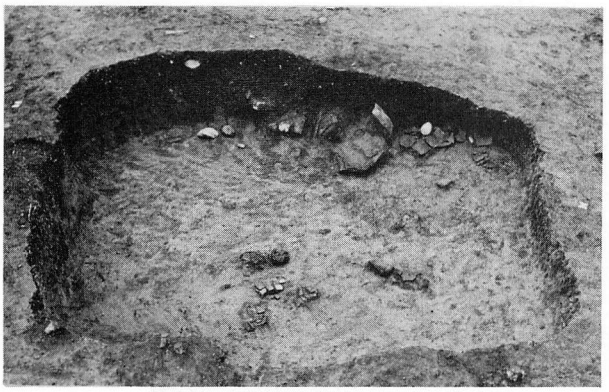


土層断面

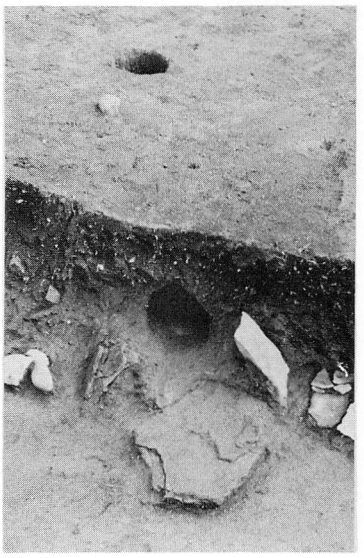


カマド断面

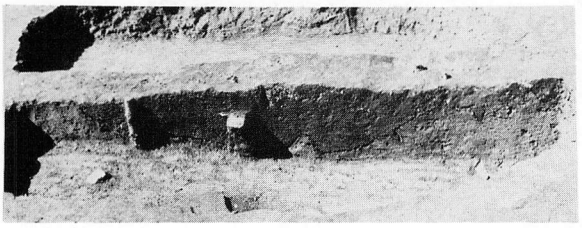
写真図版8　ＢⅡ－２住居址



完掘り状況

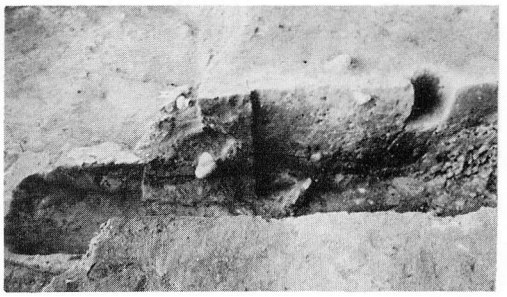


カマド



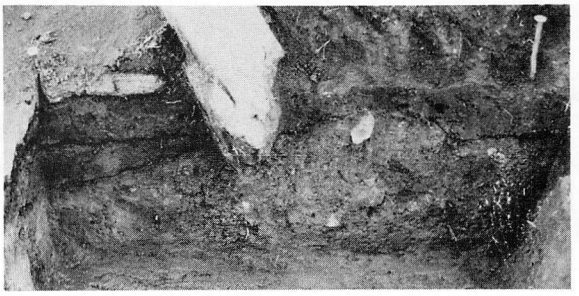
土層断面

土器出土状況



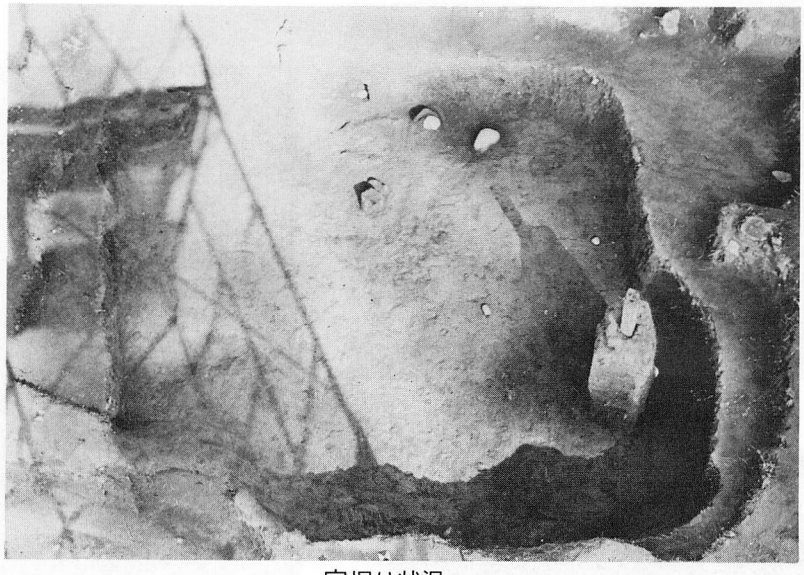
カマド断面

カマド断面

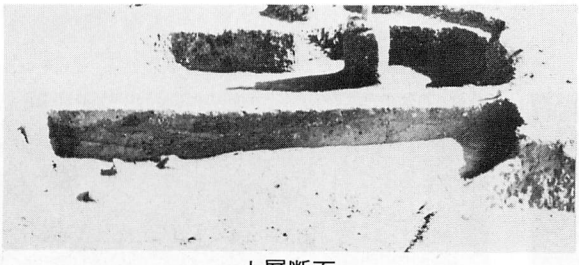


カマド断面

写真図版９　ＤⅠ－１住居址

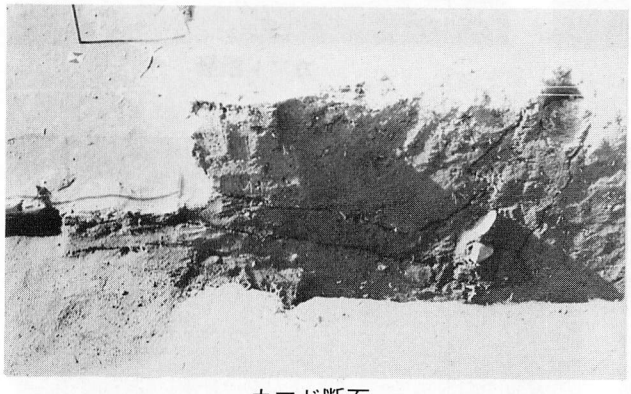


完掘り状況



土層断面

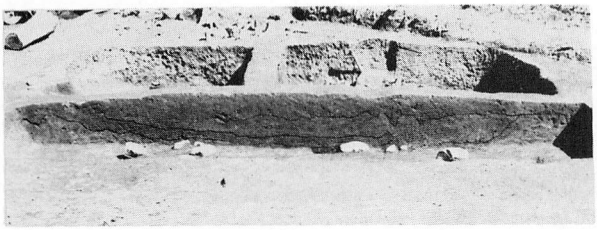
カマド



カマド断面

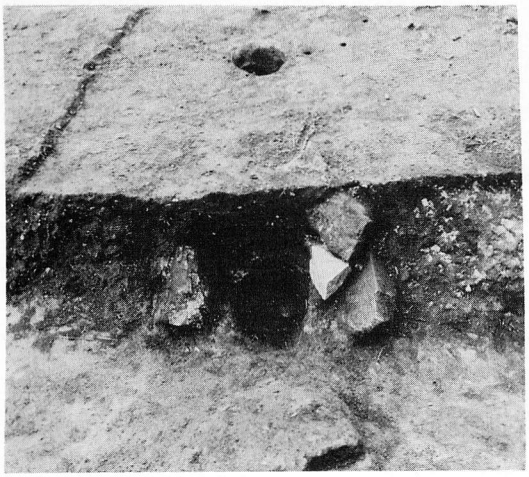
写真図版10　ＤＩ－２住居址

完掘り状況



土層断面

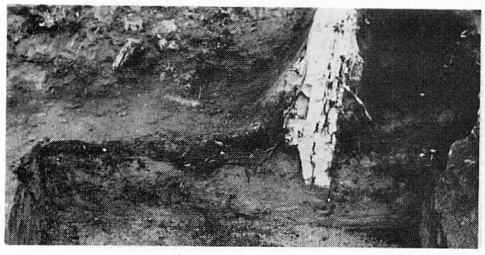
北東壁カマド



北西壁カマド

写真図版11　ＤⅡ－１住居址(１)

北東壁カマド断面



北東壁カマド断面

北東壁カマド断面

北西壁カマド断面

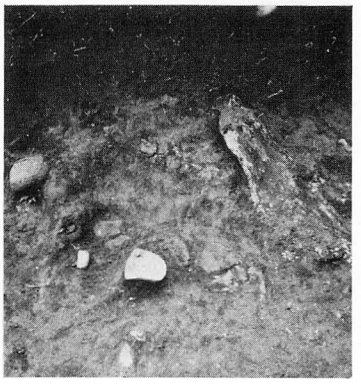
北西壁カマド断面

北西壁カマド断面

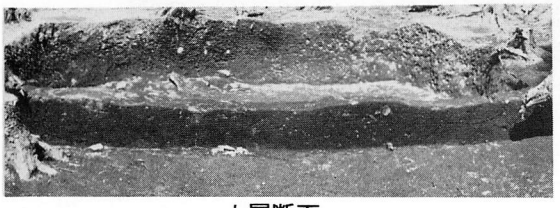
床面下検出カマド断面

写真図版12　ＤⅡ－１住居址（２）

完掘り状況

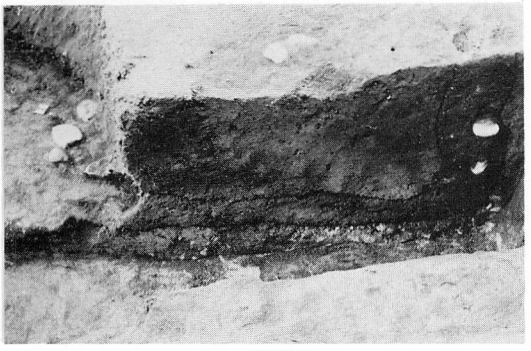


カマド



土層断面

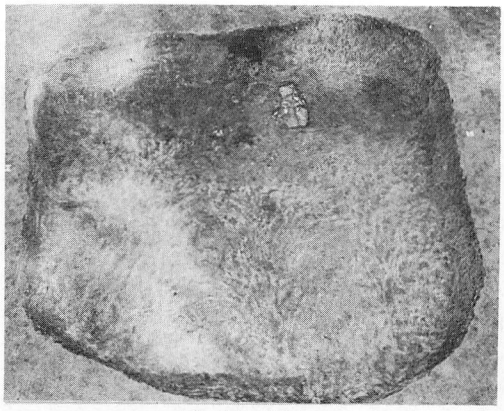
カマド断面



カマド断面

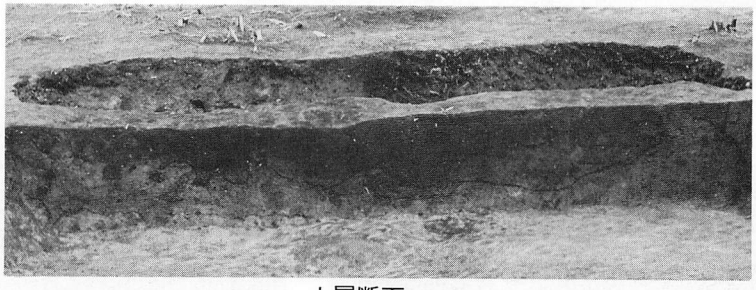
カマド断面

写真図版13　ＤⅡ－２住居址

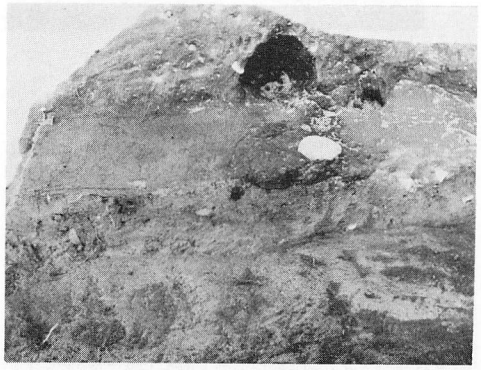


完掘り状況

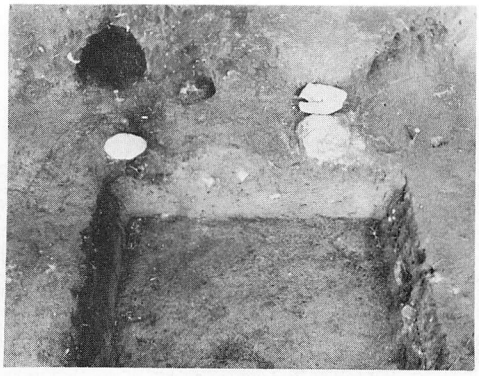
カマド



土層断面

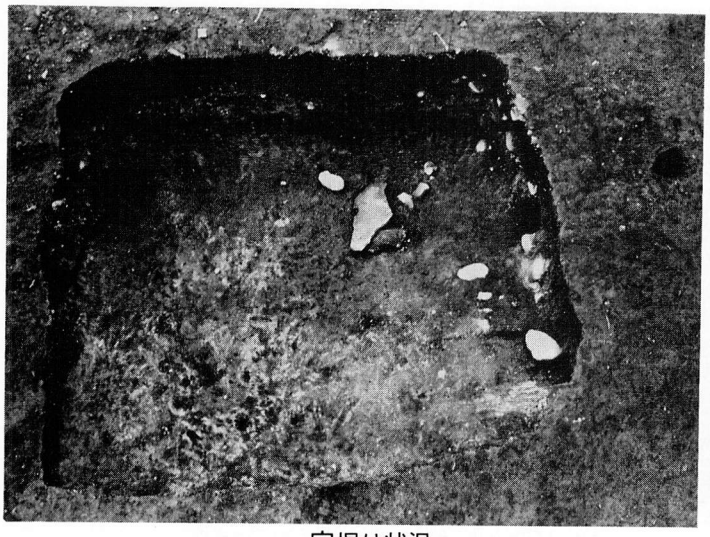


カマド断面

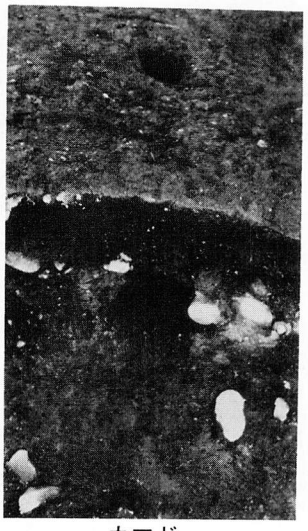


カマド断面

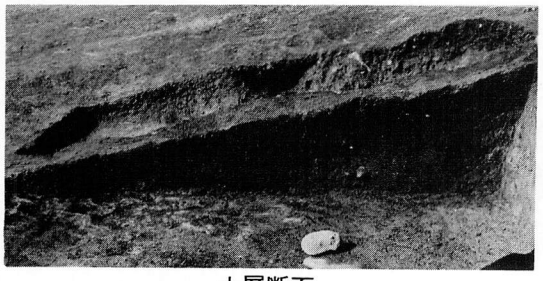
写真図版14　ＤⅡ－３住居址



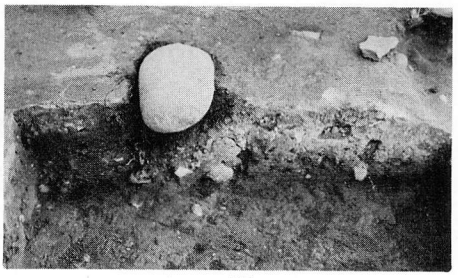
完掘り状況



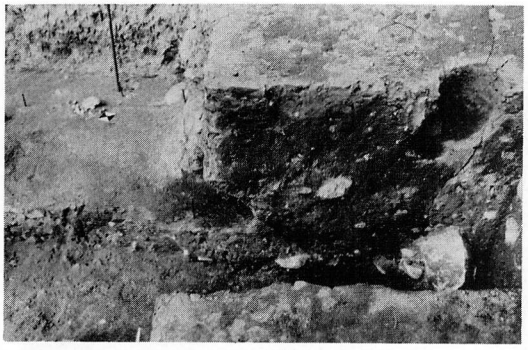
カマド



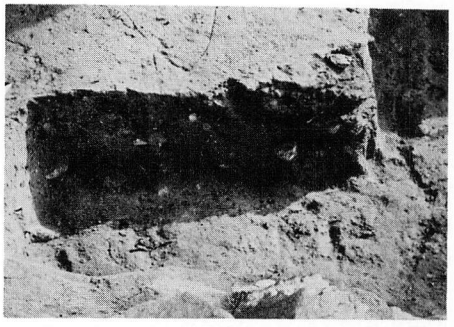
土層断面



カマド断面

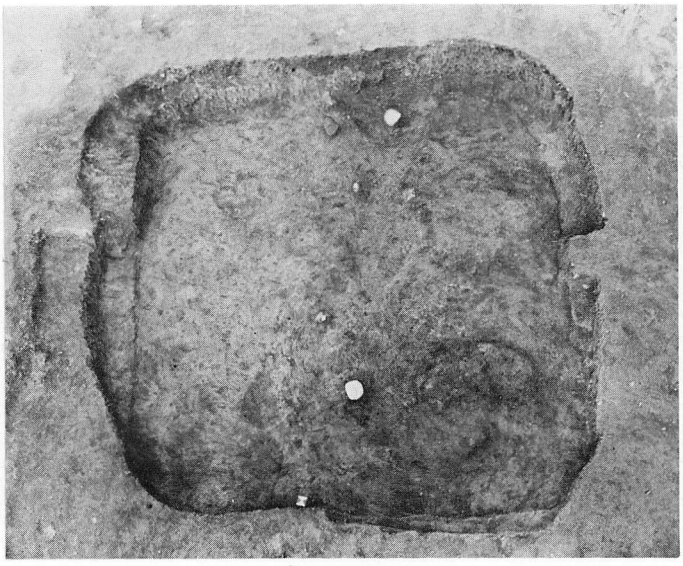


カマド断面

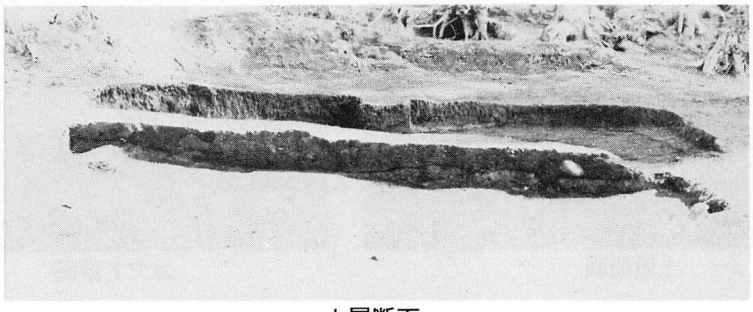


カマド断面

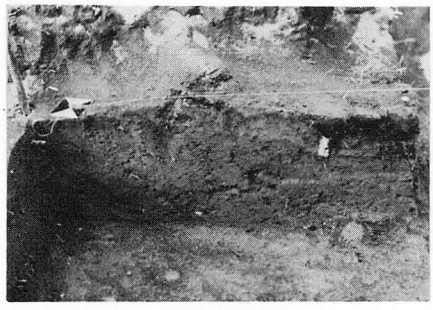
写真図版15　ＤⅡ－４住居址



完掘り状況



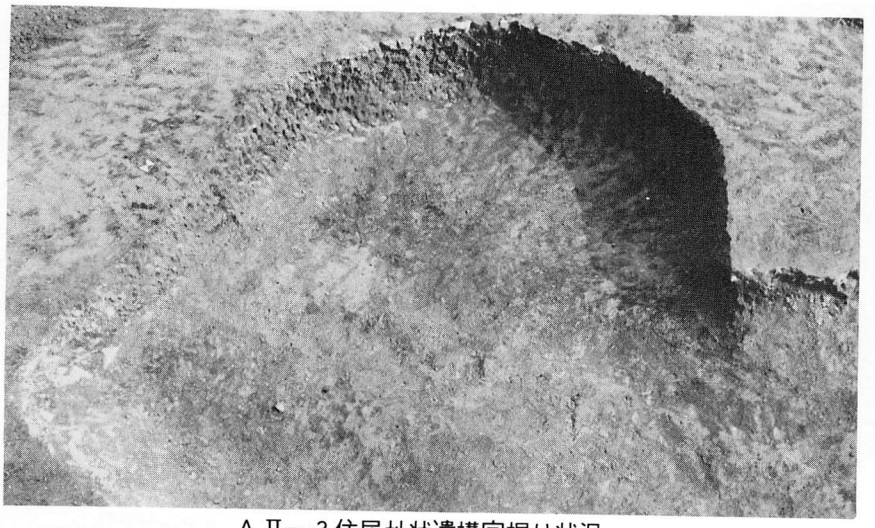
土層断面



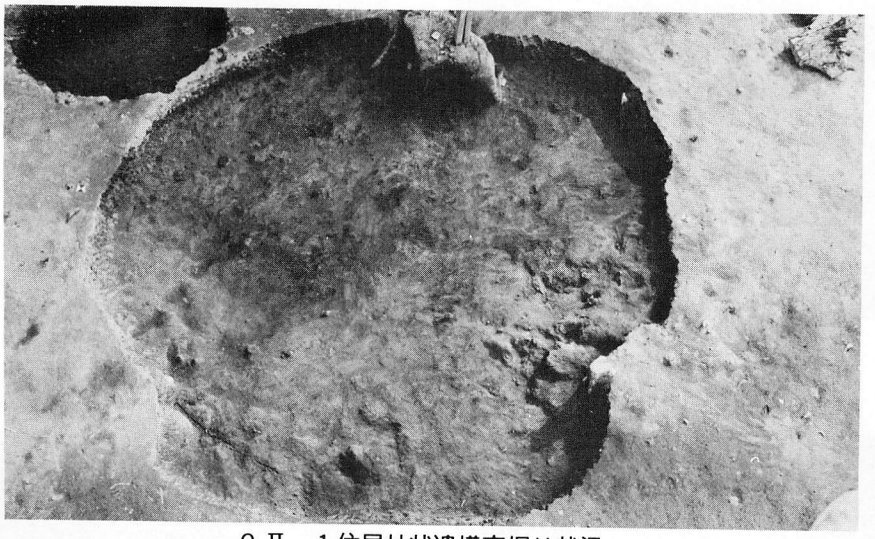
カマド断面

カマド断面

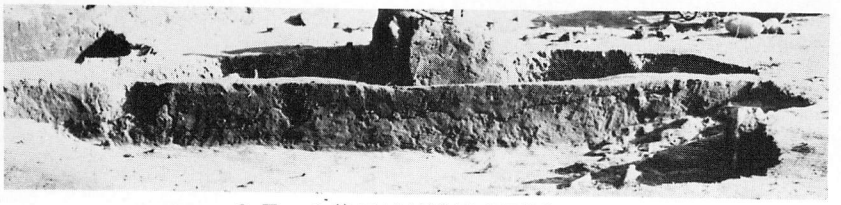
写真図版16　ＤⅡ－５住居址



A Ⅱ－3 住居址状遺構完掘り状況

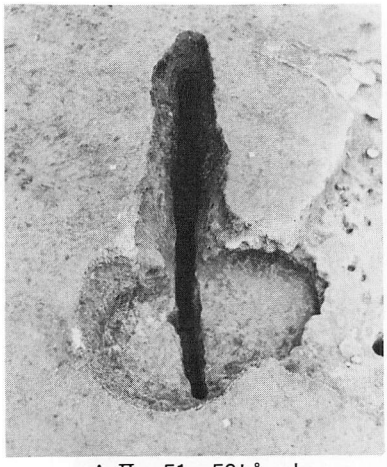


C Ⅱ－1 住居址状遺構完掘り状況

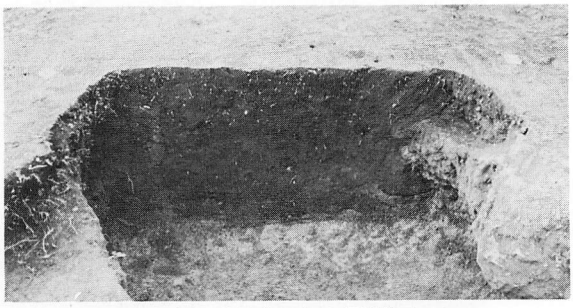


C Ⅱ－1 住居址状遺構土層断面

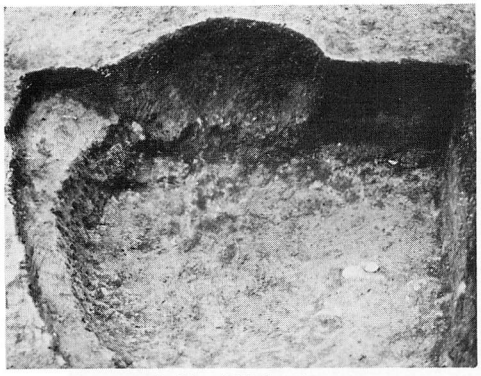
写真図版17　住居址状遺構



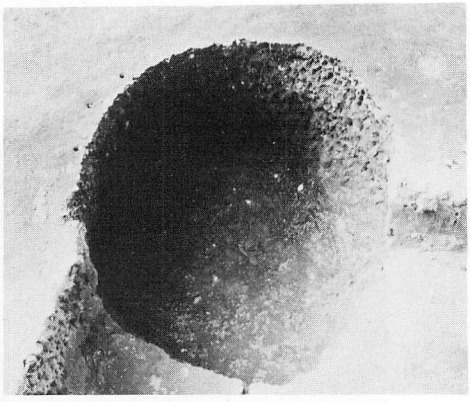
A Ⅱ—51・52ピット



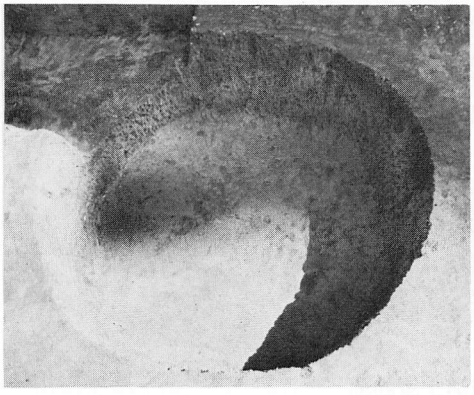
A Ⅱ—51ピット土層断面



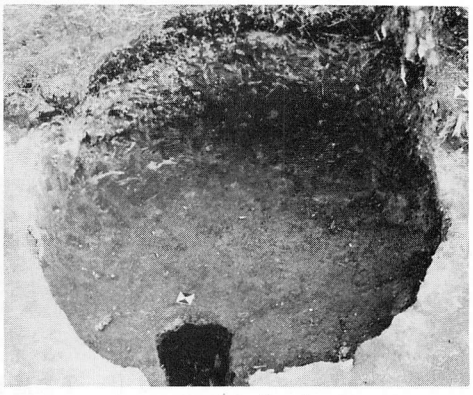
A Ⅱ—53ピット



A Ⅱ—54ピット

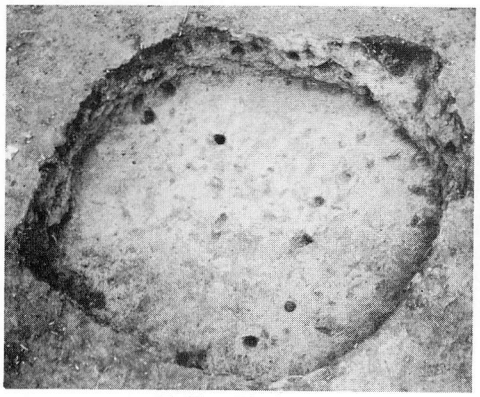


A Ⅱ—55ピット

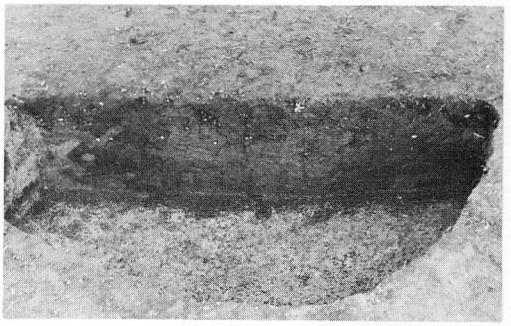


B Ⅱ—51ピット

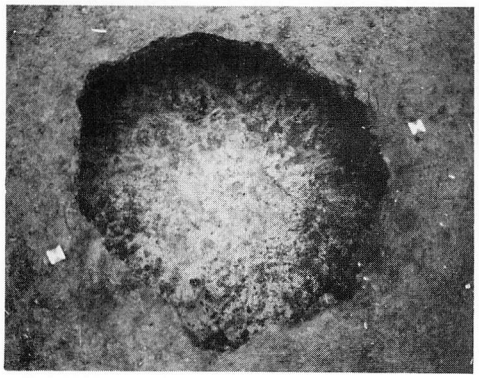
写真図版18　ピット(1)



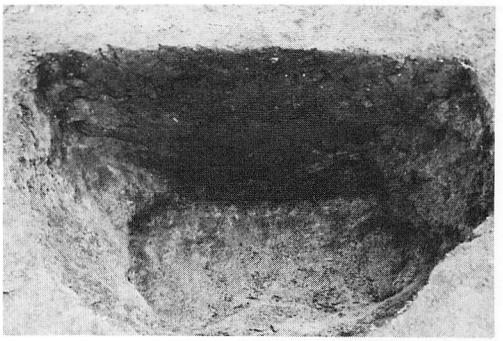
B Ⅱ—52ピット



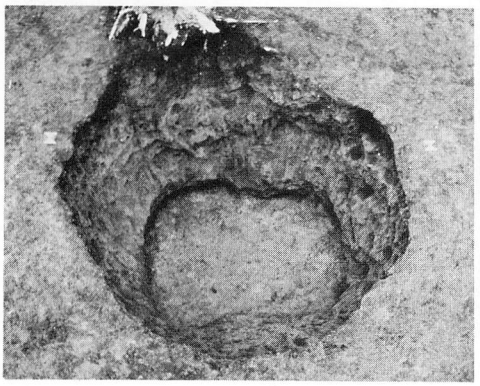
B Ⅱ—52ピット土層断面



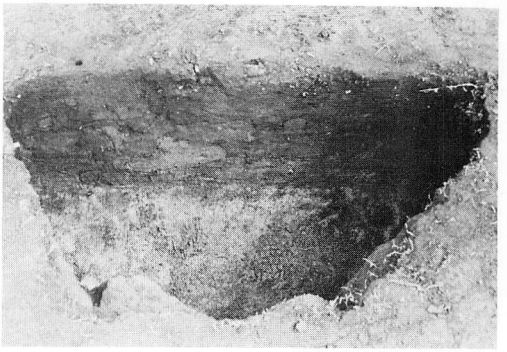
B Ⅱ—53ピット



B Ⅱ—53ピット土層断面

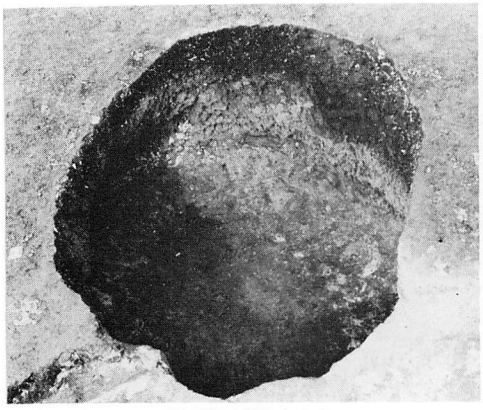


B Ⅱ—54ピット

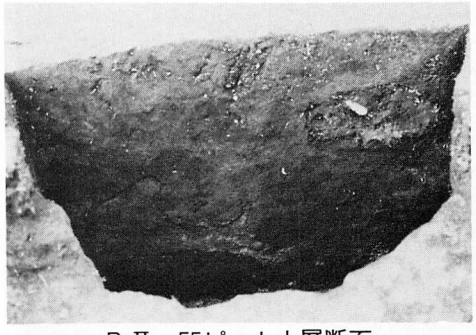


B Ⅱ—54ピット土層断面

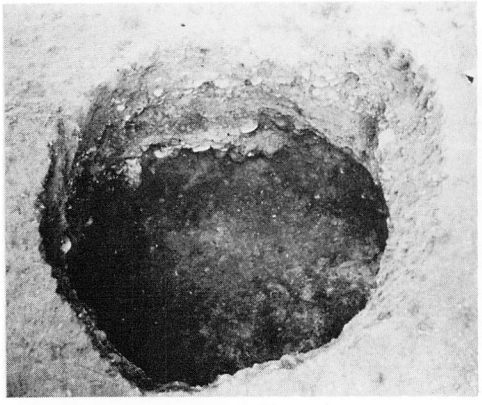
写真図版19　ピット(2)



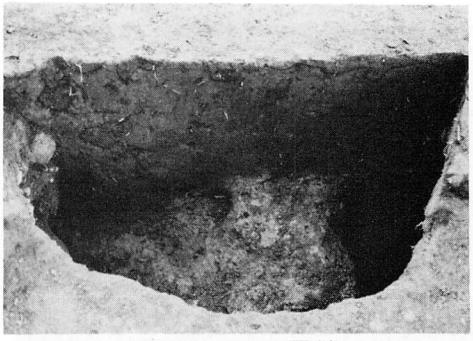
B Ⅱ—55ピット



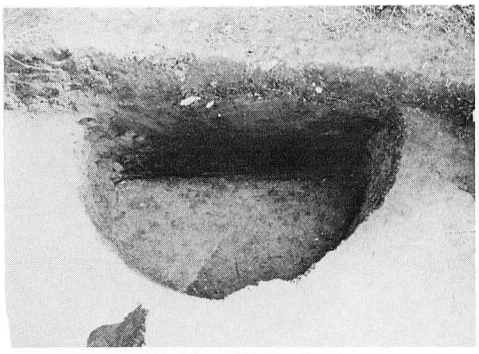
B Ⅱ—55ピット土層断面



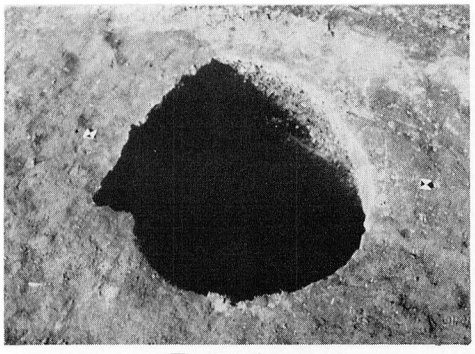
B Ⅱ—56ピット



B Ⅱ—56ピット土層断面

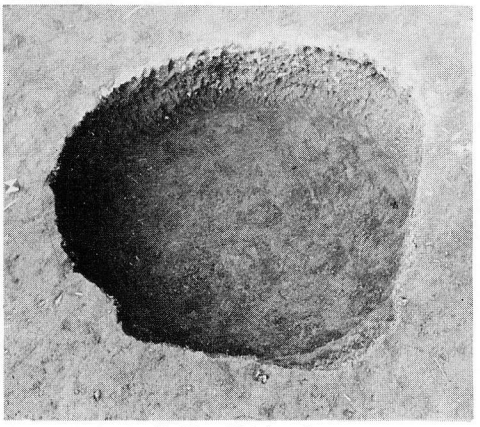


B Ⅱ—57ピット

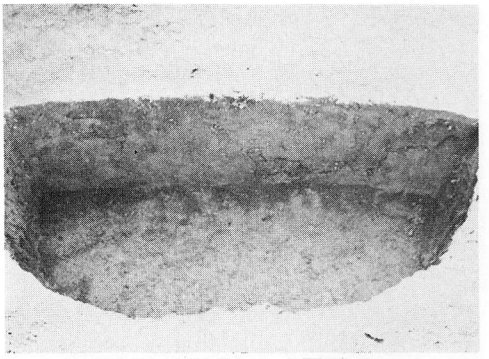


B Ⅱ—58ピット

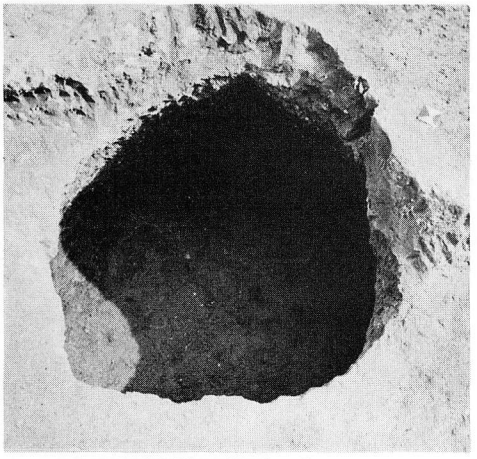
写真図版20　ピット(3)



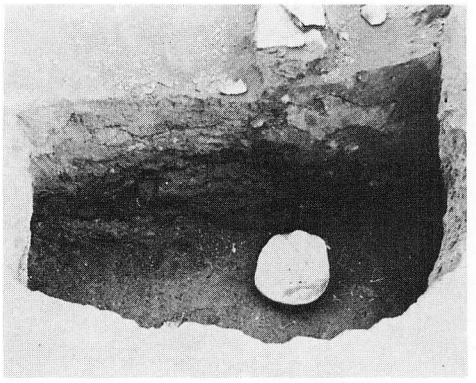
B Ⅱ—59ピット



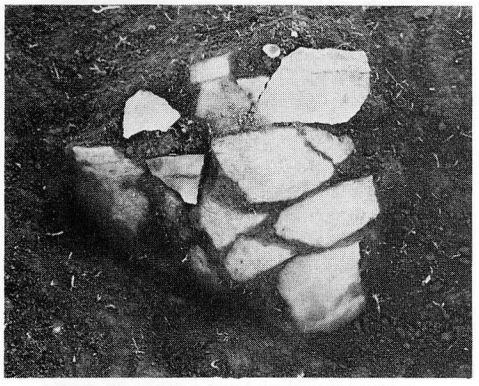
B Ⅱ—59ピット土層断面



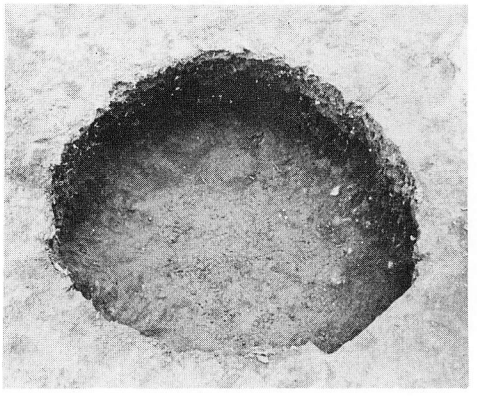
B Ⅱ—60ピット



B Ⅱ—60ピット土層断面

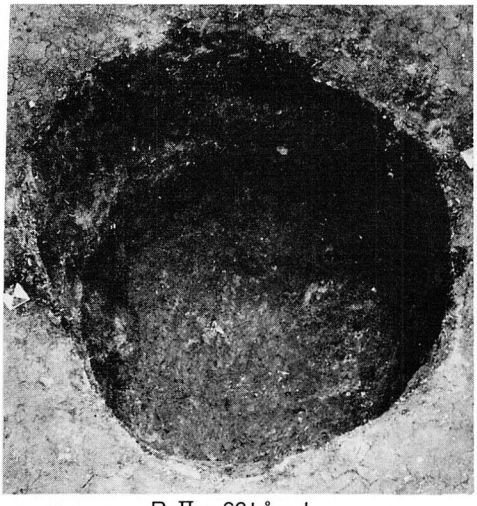


B Ⅱ—60ピット土器出土状況

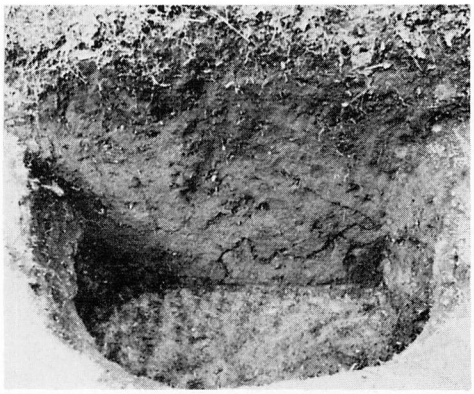


B Ⅱ—61ピット

写真図版21　ピット(4)

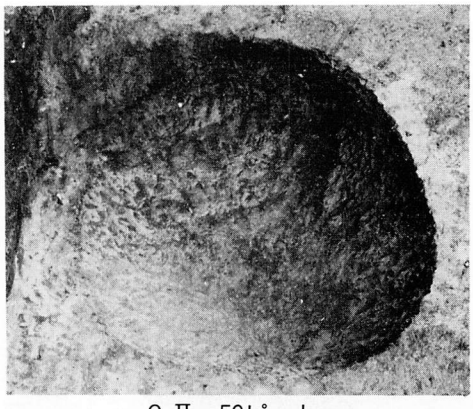


B Ⅱ—62ピット

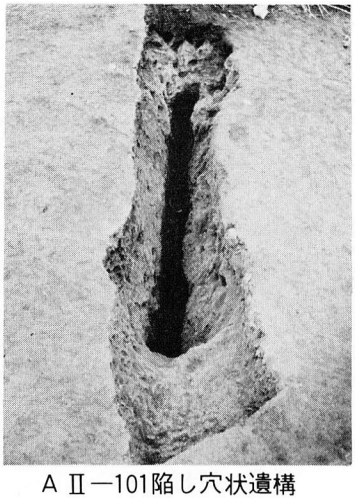


B Ⅱ—62ピット土層断面

C Ⅱ—51ピット



C Ⅱ—52ピット

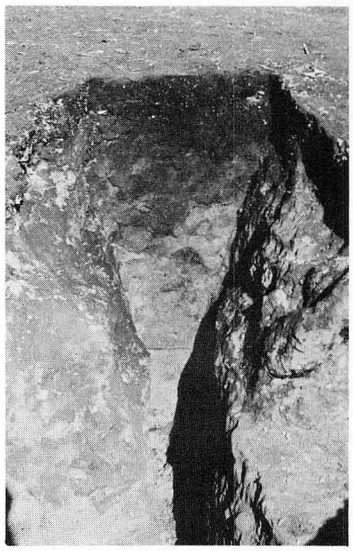


A Ⅱ—101陥し穴状遺構

A Ⅱ—101陥し穴状遺構土層断面

写真図版22　ピット(5)・陥し穴状遺構(1)

A Ⅱ—102陥し穴状遺構

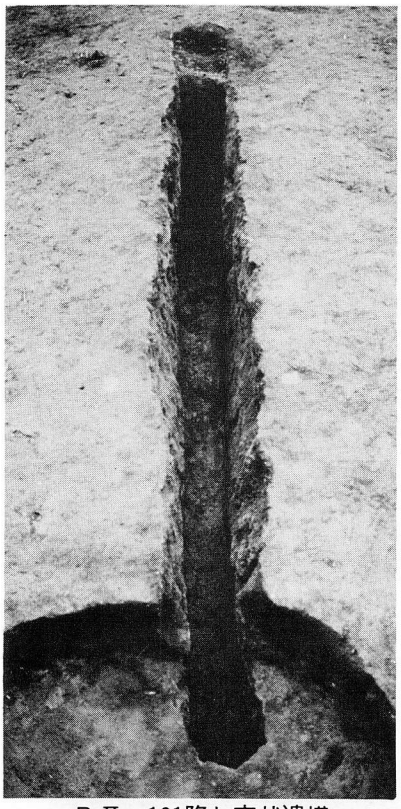


A Ⅱ—102陥し穴状遺構
土層断面

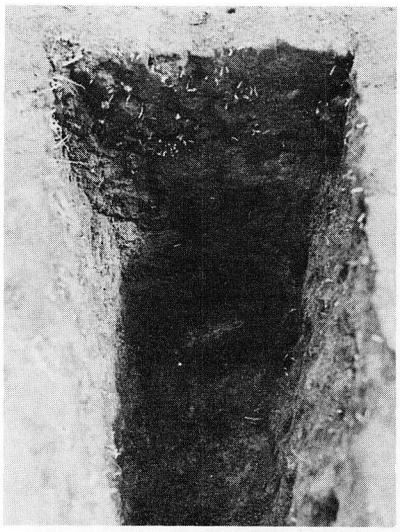
A Ⅱ—103陥し穴状遺構

A Ⅱ—103陥し穴状遺構
土層断面

写真図版23　陥し穴状遺構（2）

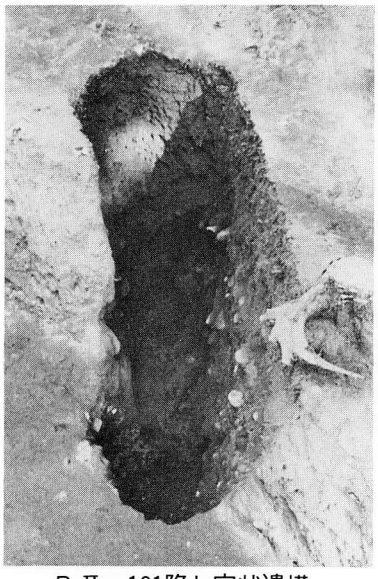


B Ⅱ—101陥し穴状遺構

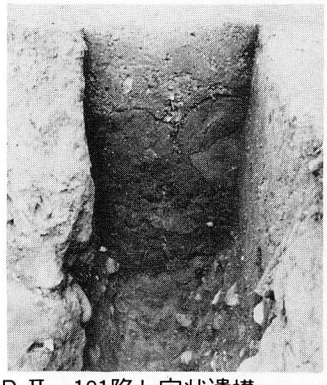


B Ⅱ—101陥し穴状遺構土層断面

C Ⅱ—101陥し穴状遺構土層断面

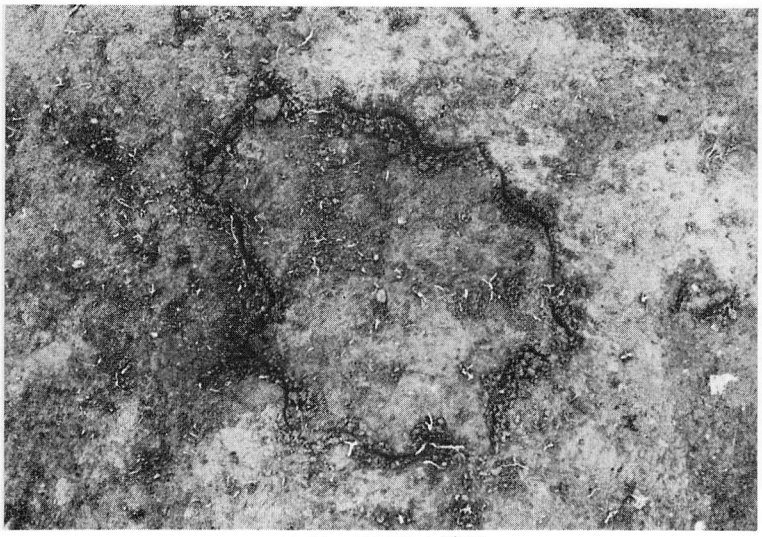


D Ⅱ—101陥し穴状遺構



D Ⅱ—101陥し穴状遺構
土層断面

写真図版24　陥し穴状遺構（3）

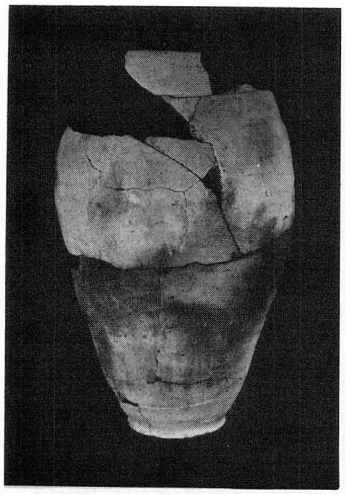


B Ⅱ—201焼土遺構

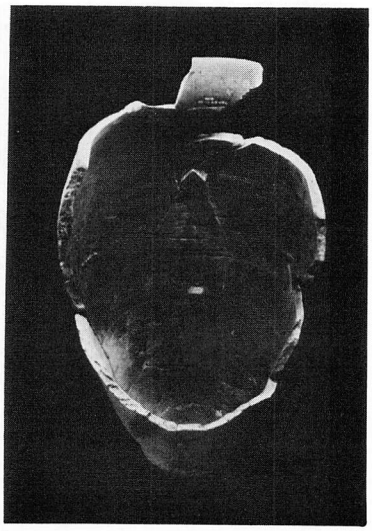
B Ⅱ—202焼土遺構

写真図版25　焼土遺構

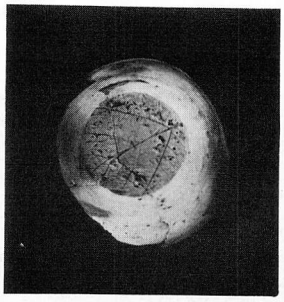
AⅡ－1住居址



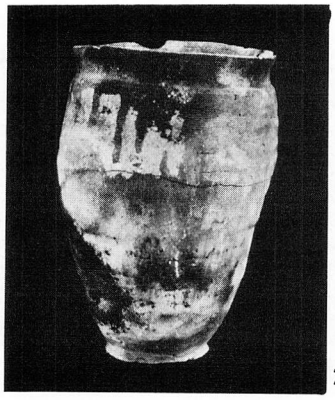
1



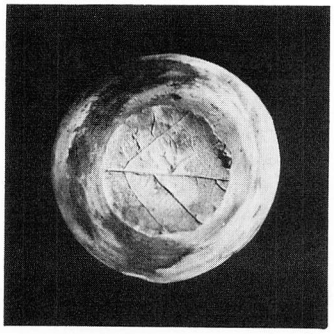
1



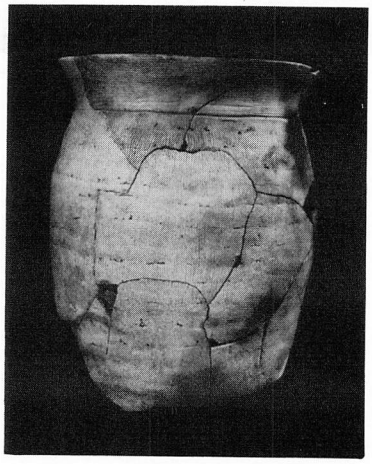
1



2

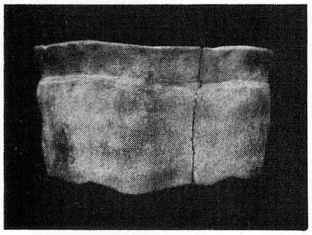


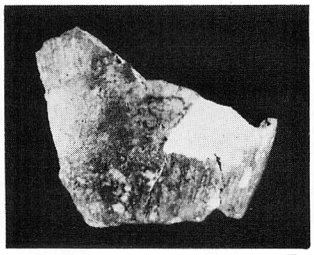
2

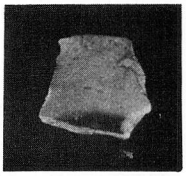


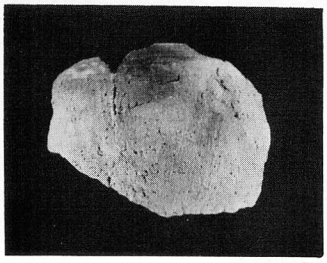
3

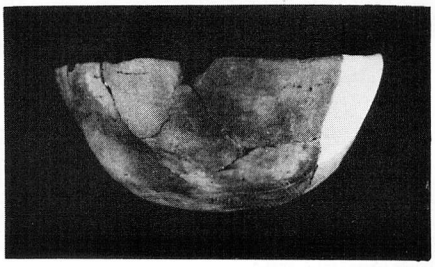
写真図版26　遺構内の出土遺物　AⅡ－1住居址

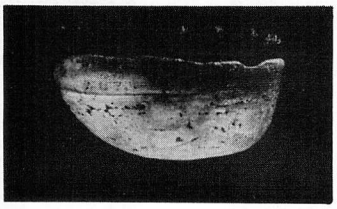

4

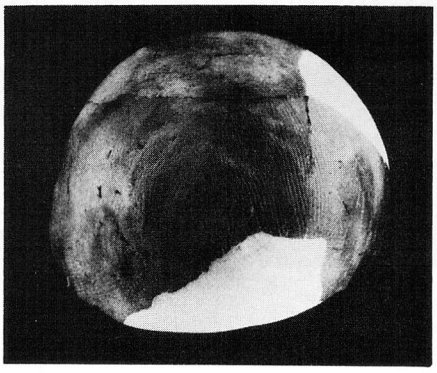

5

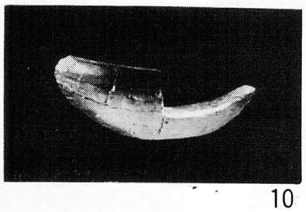

6

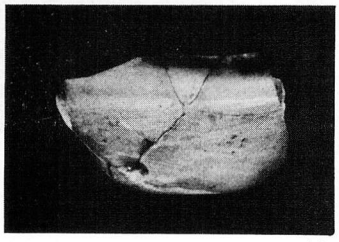

7

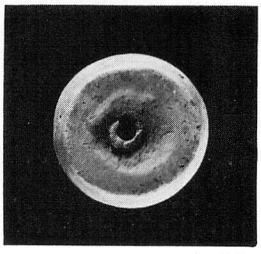

8

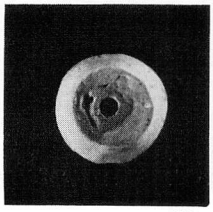

9


8

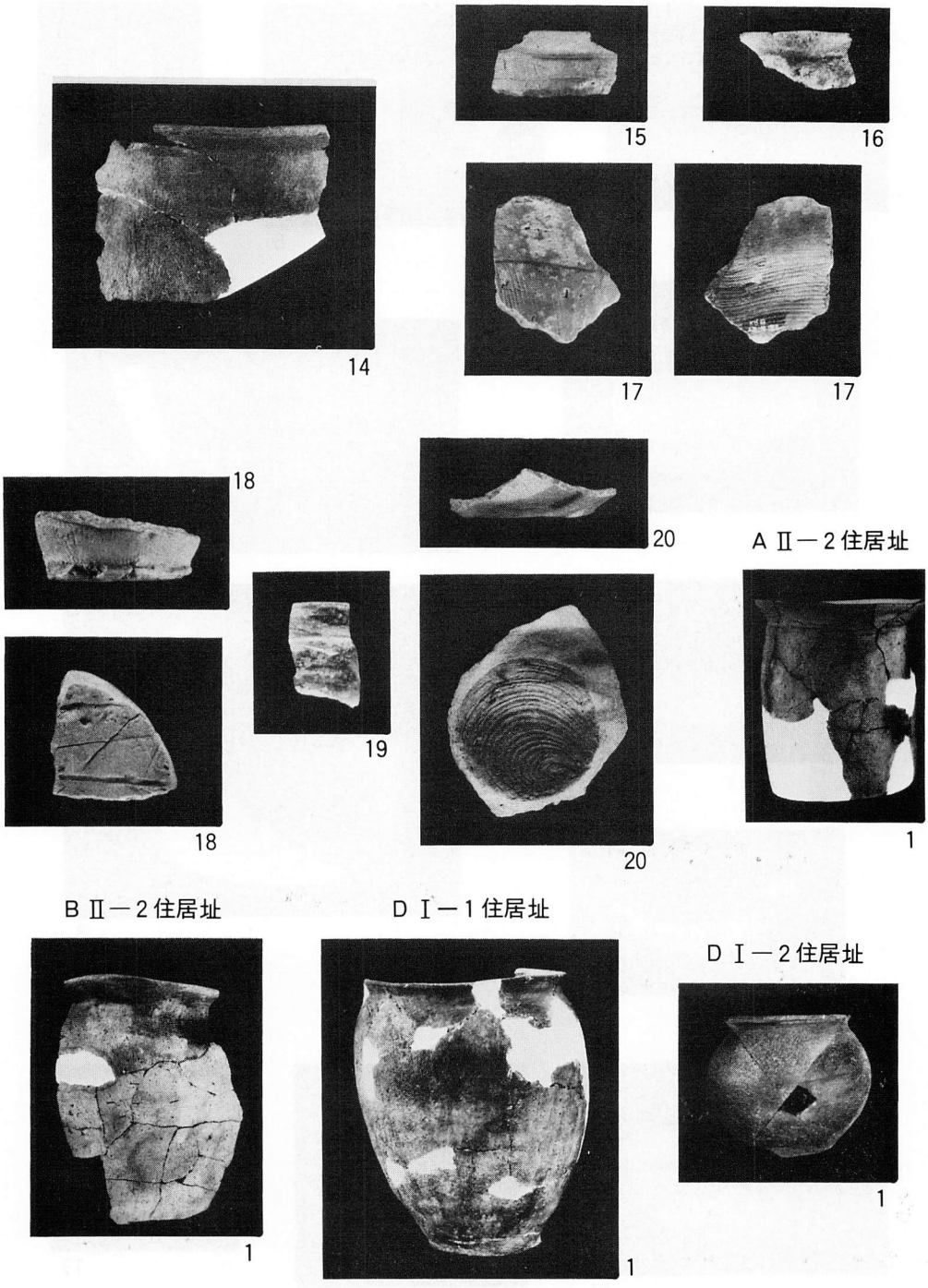

10


11


12

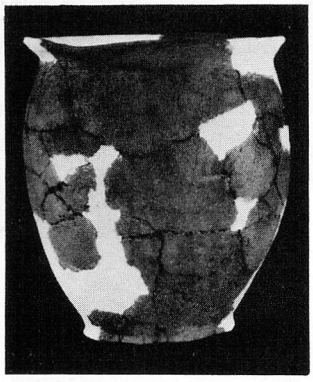

13

写真図版27　遺構内の出土遺物　ＡⅡ－１住居址

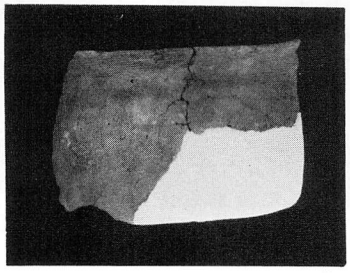


写真図版28　遺構内の出土遺物　A Ⅱ－1・2住居址
B Ⅱ－2住居址
D Ⅰ－1・2住居址

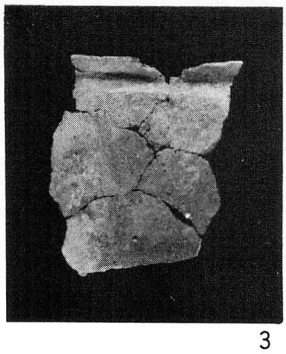
DⅡ－1住居址



1

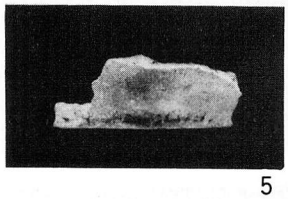


2

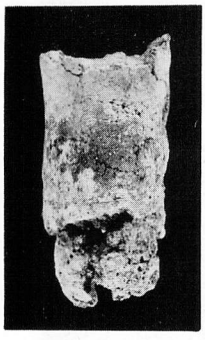


3

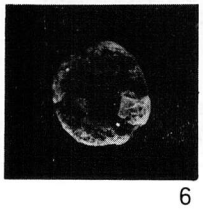
4



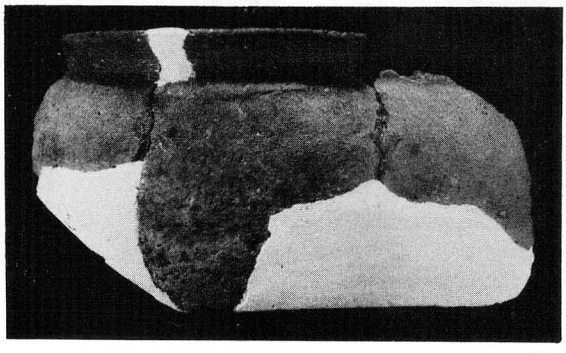
5



6

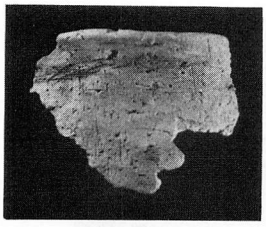


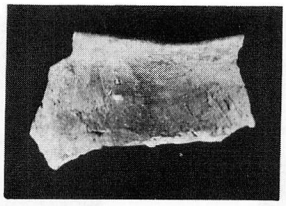
6

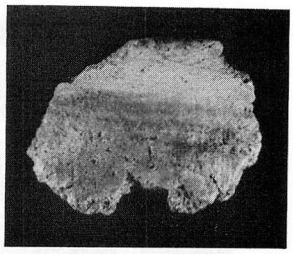


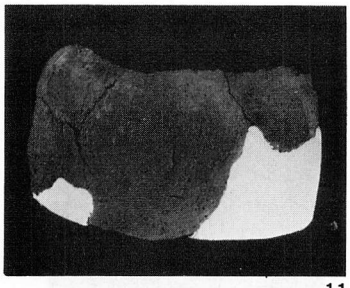
7

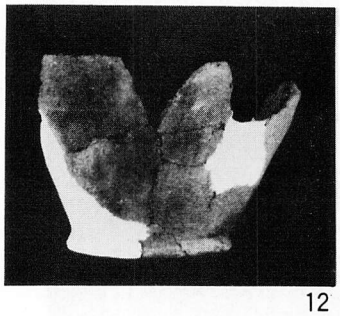
写真図版29　遺構内の出土遺物　DⅡ－1住居址

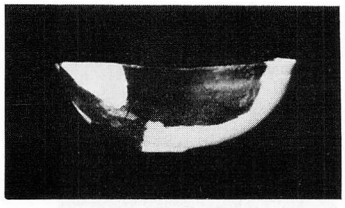

8

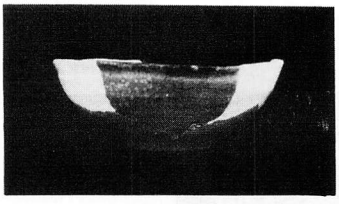

9

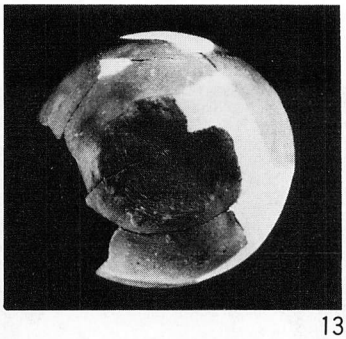

10

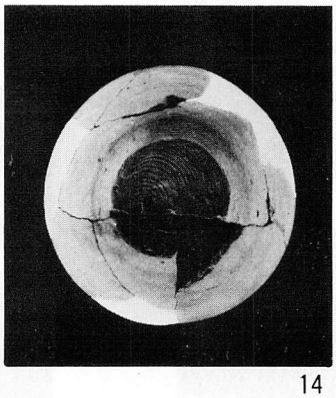

11


12


13

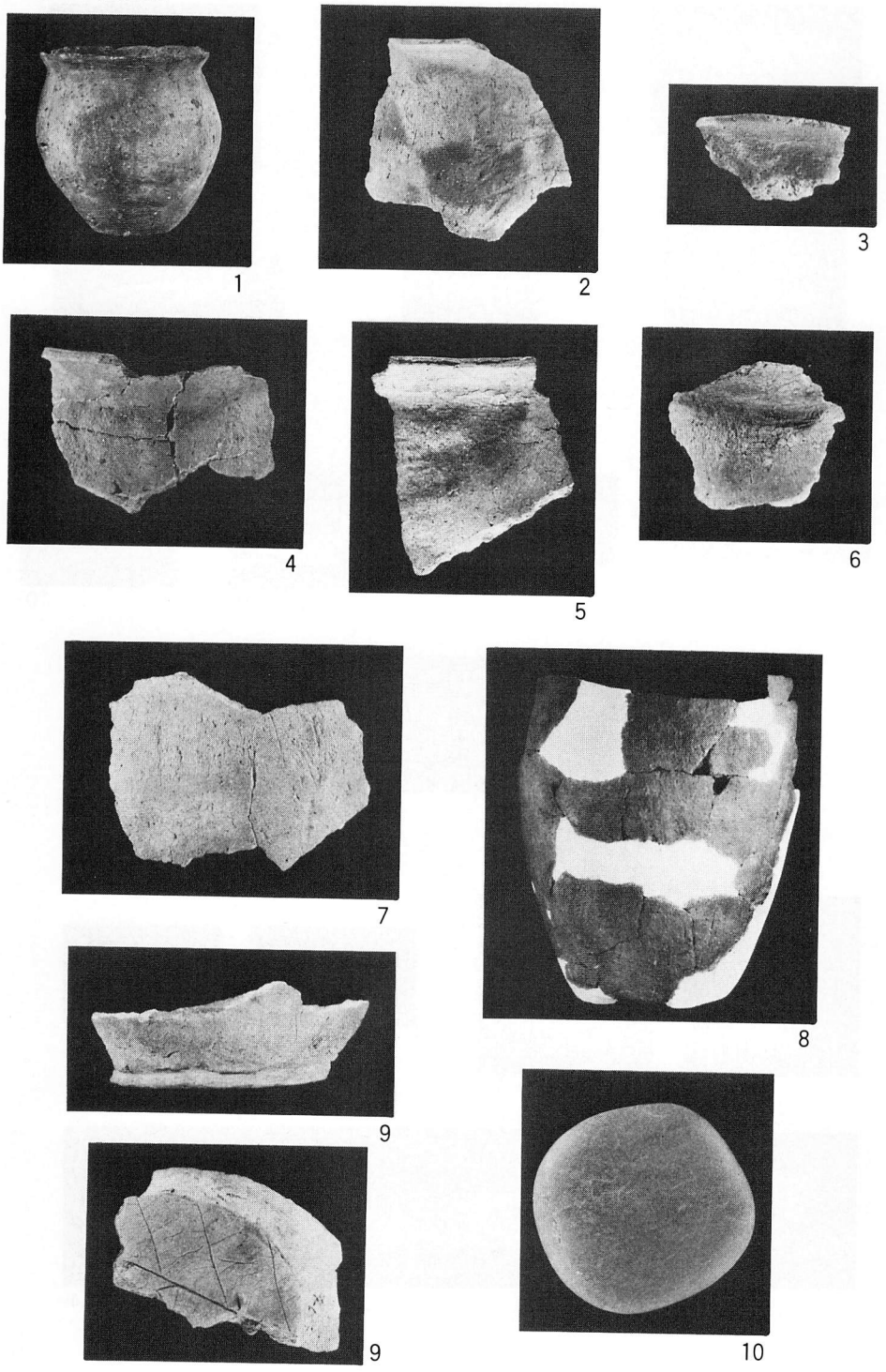

14


13


14

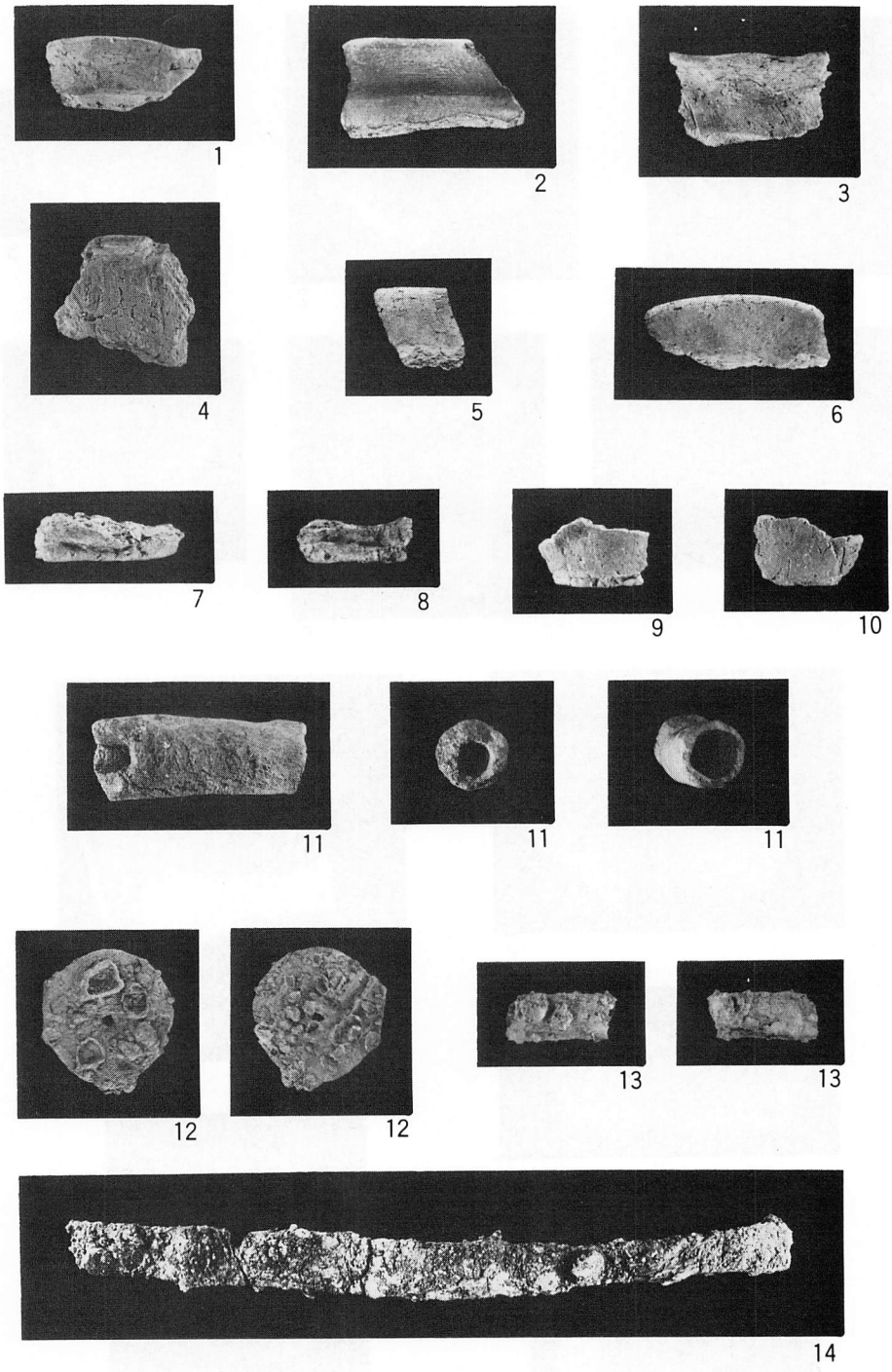
写真図版30　遺構内の出土遺物　D Ⅱ－1住居址

ＤⅡ－２住居址



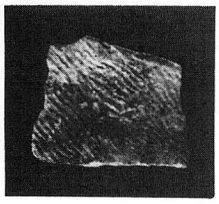
写真図版31　遺構内の出土遺物　ＤⅡ－２住居址

D Ⅱ－5住居址

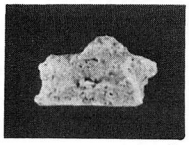


写真図版32　遺構内の出土遺物　D Ⅱ－5住居址

A Ⅱ—51ピット

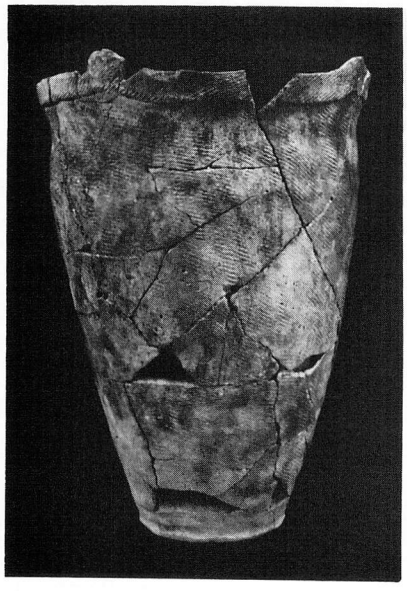


1

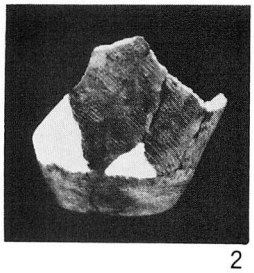


2

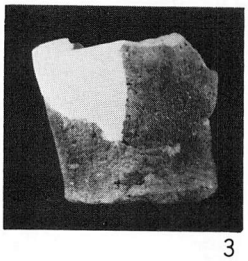
B Ⅱ—60ピット



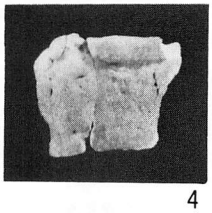
1



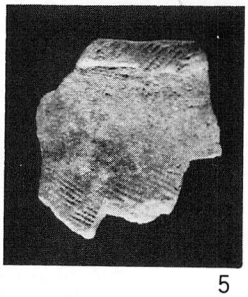
2



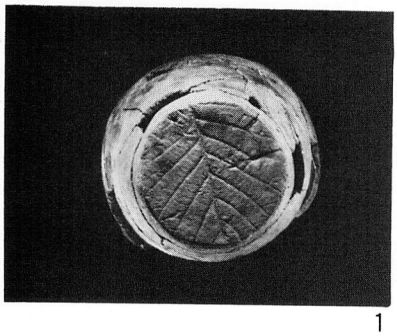
3



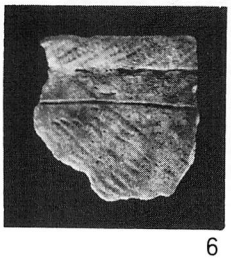
4



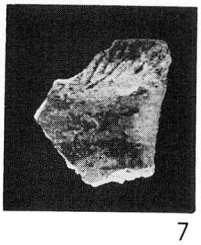
5



1



6

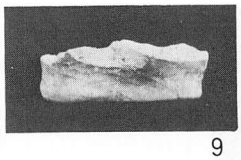


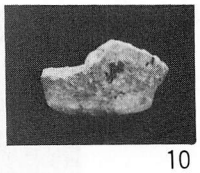
7

写真図版33　遺構内の出土遺物　A Ⅱ—51・B Ⅱ—60ピット

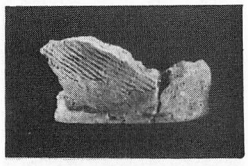
BⅡ－60ピット

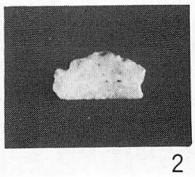
8


9


10

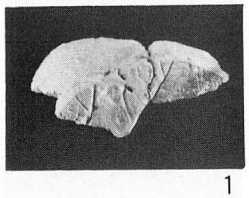
BⅡ－61ピット


1

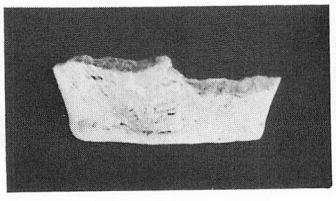

2

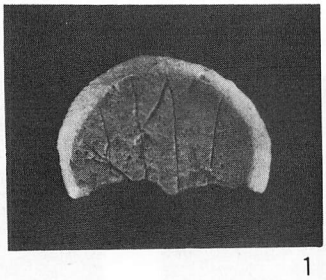
3

4

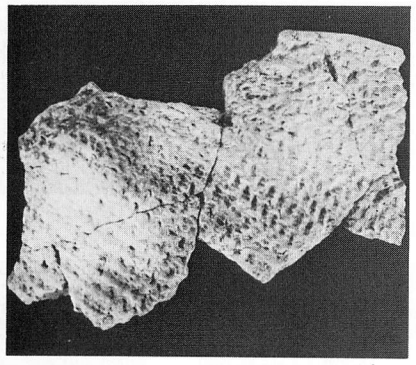

1

B Ⅱ－202 焼土遺構

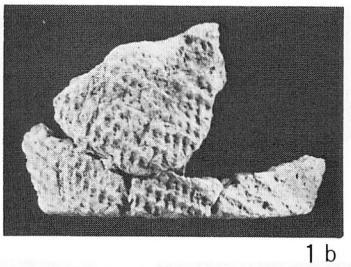

1


1

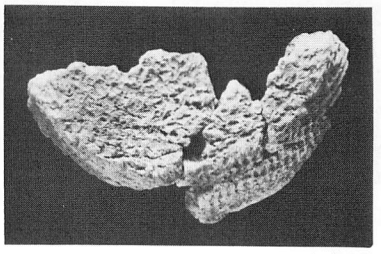
写真図版34　遺構内の出土遺物　B Ⅱ－60・61ピット　B Ⅱ－202焼土遺構



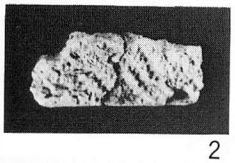
1 a



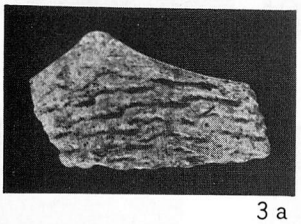
1 b



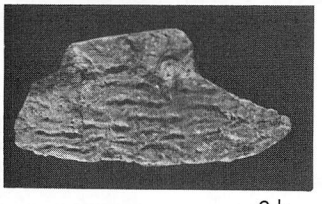
1 b底面



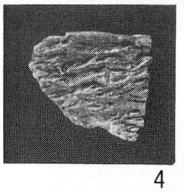
2



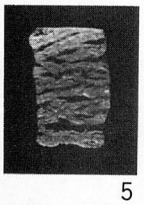
3 a



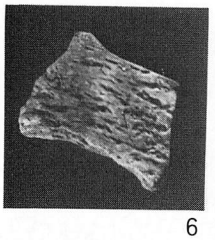
3 b



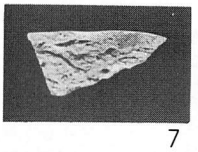
4



5



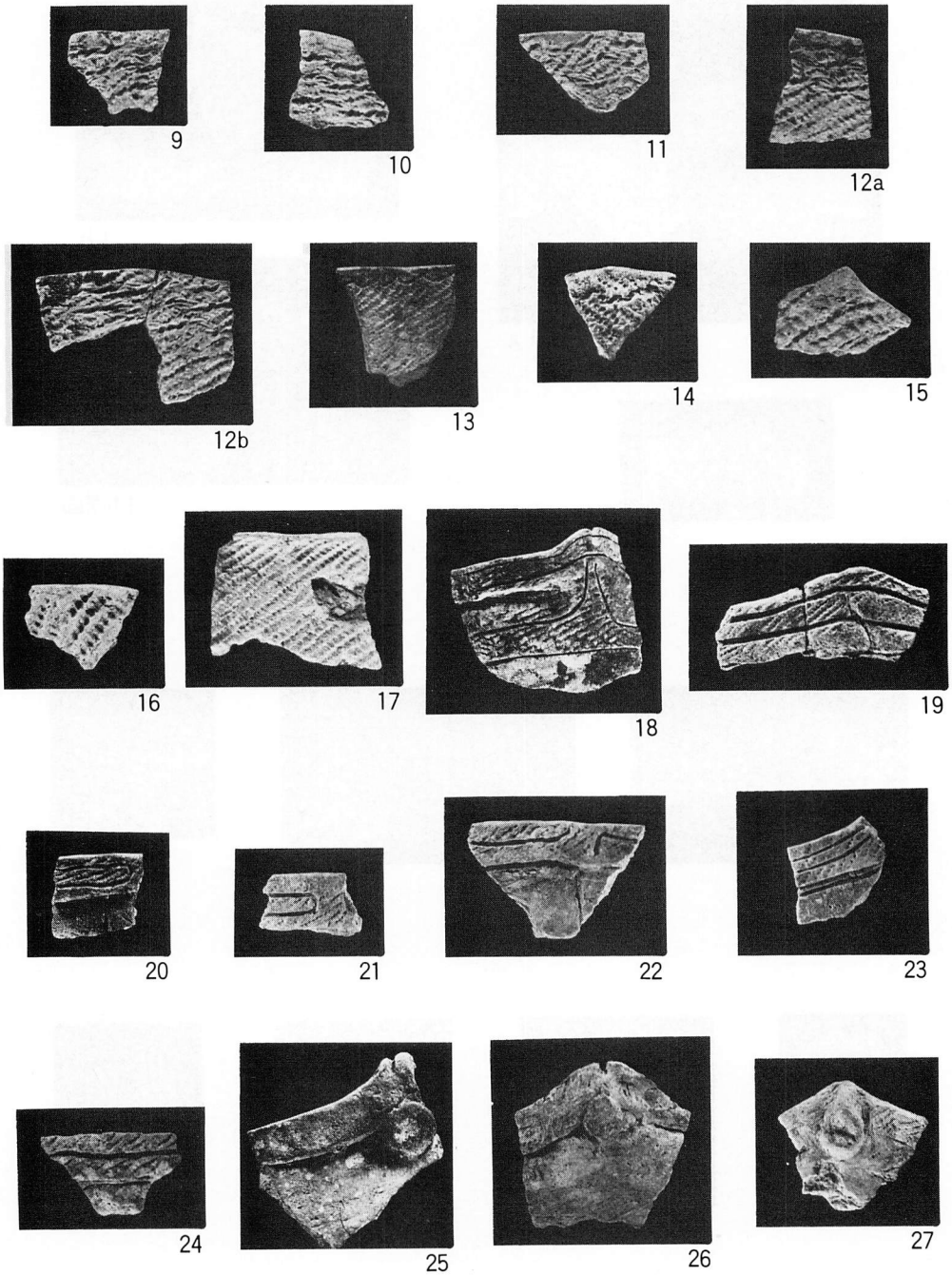
6



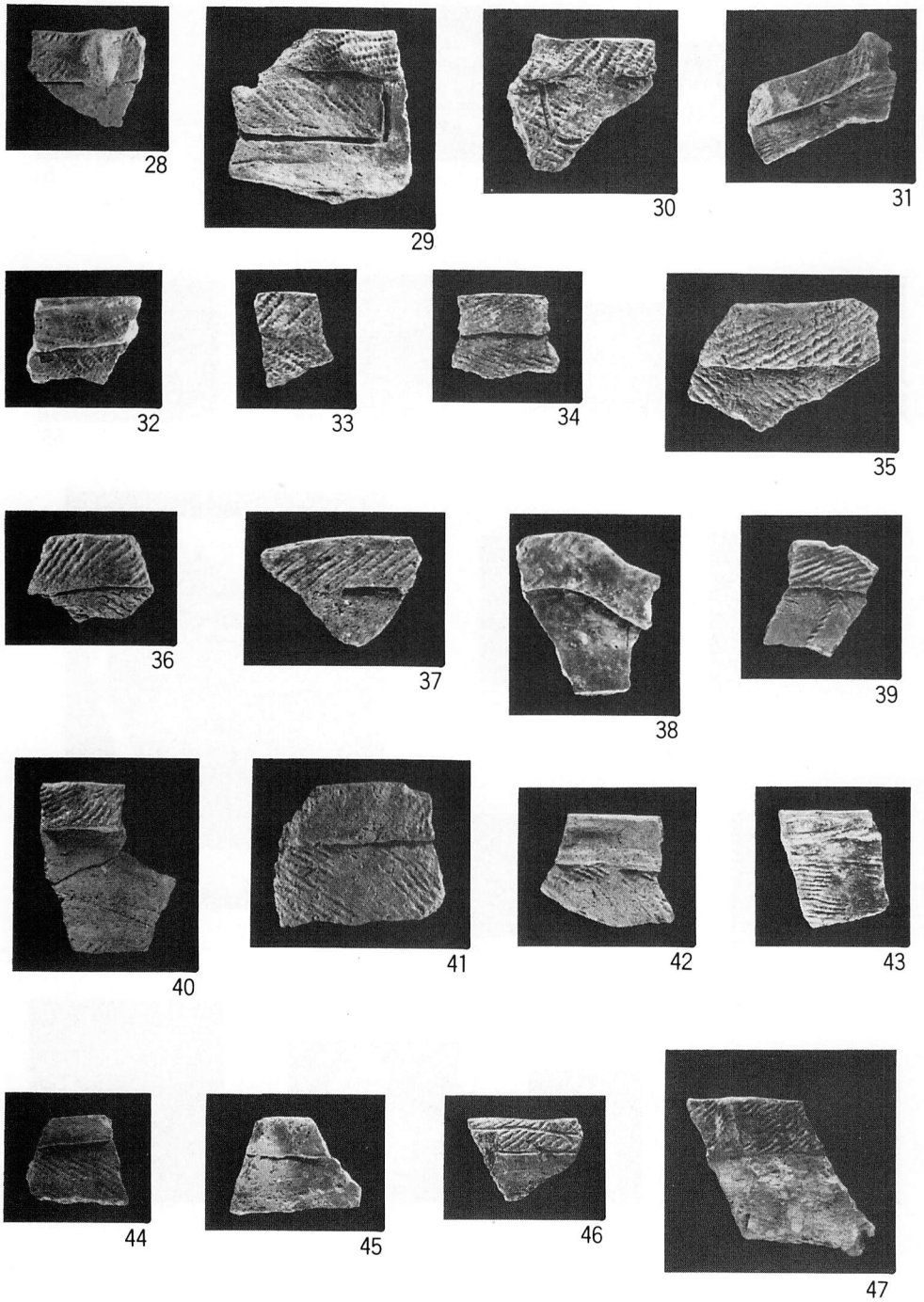
7

8

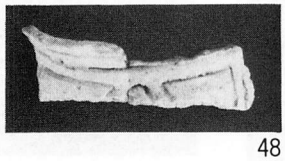
写真図版35　遺構外出土遺物（1）

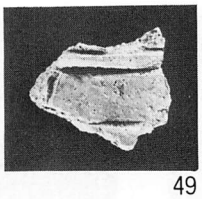


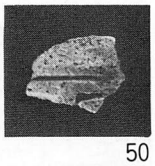
写真図版36　遺構外出土遺物（2）



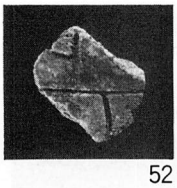
写真図版37　遺構外出土遺物（３）

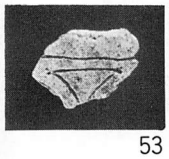

48

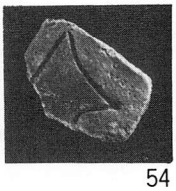

49

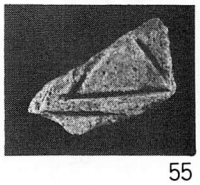

50

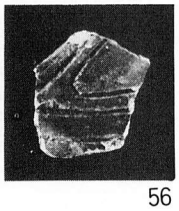
51

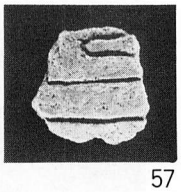

52

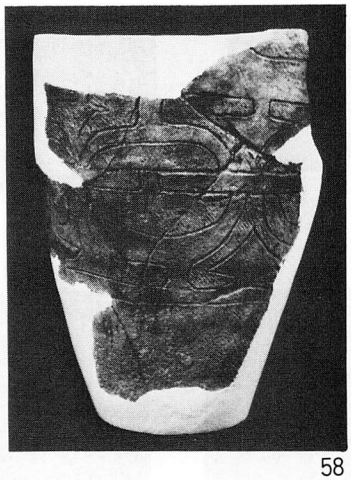

53

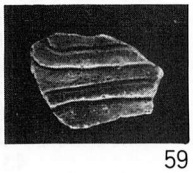

54

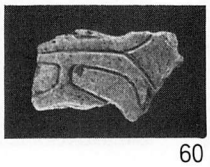

55

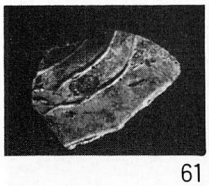

56


57

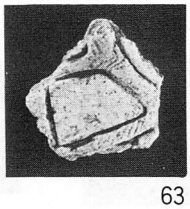

58

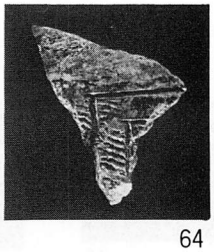

59


60

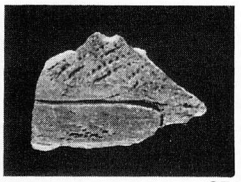

61

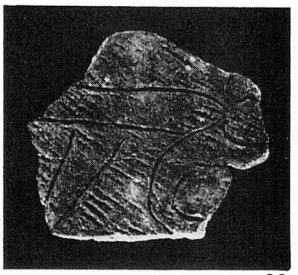
62

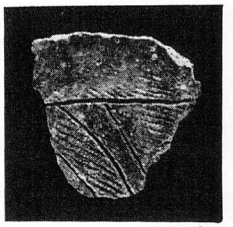

63

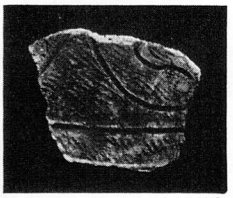

64

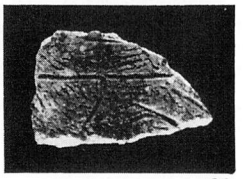
写真図版38　遺構外出土遺物（4）

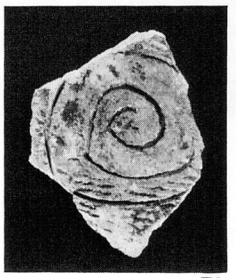

65


66

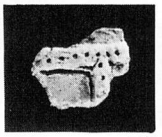

67

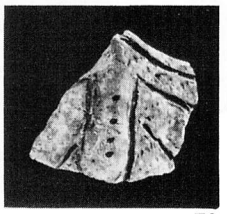

68


69

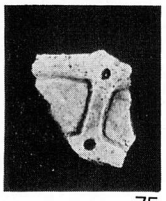

70

71

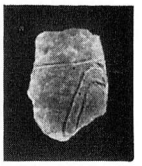

72

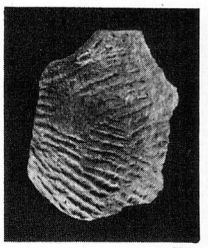

73

74

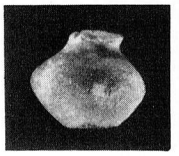

75

76

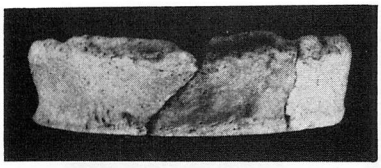

77

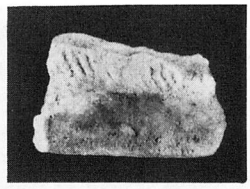

78

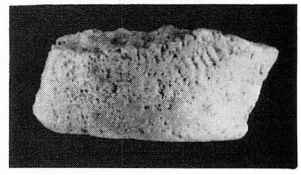
79


80

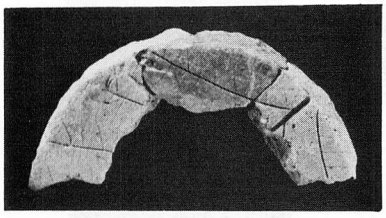
写真図版39　遺構外出土遺物（5）



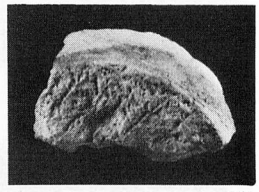




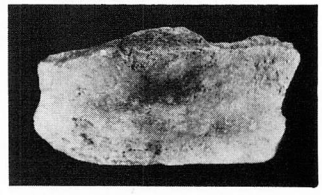
83

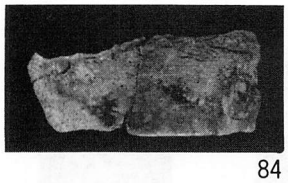


81

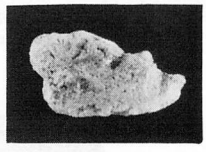


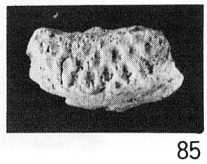
82



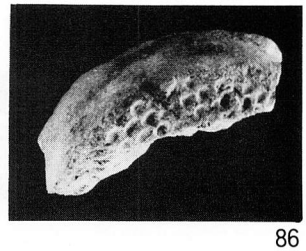


84

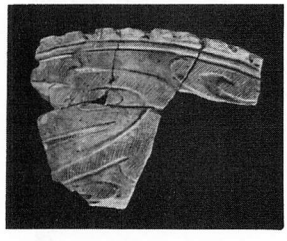


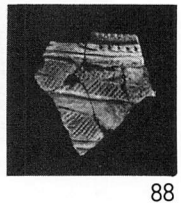


85



86

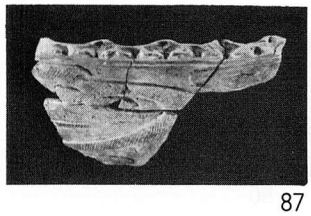




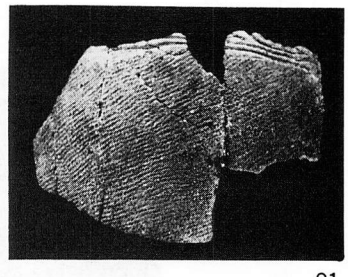
88

89

90



87

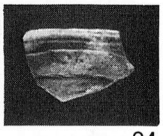


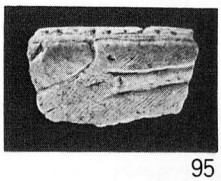
91

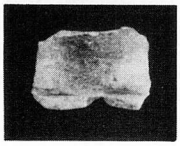
写真図版40　遺構外出土遺物（6）

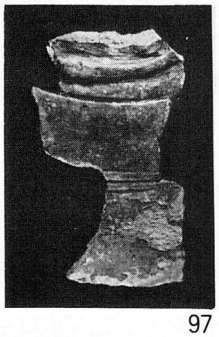
92

93

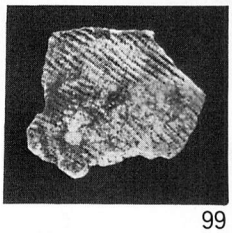

94

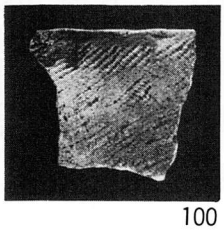

95

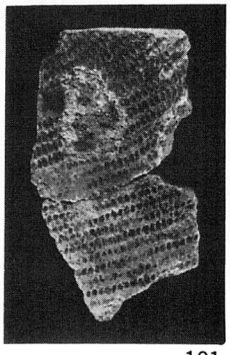

96

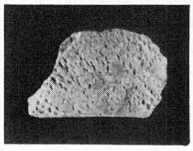

97

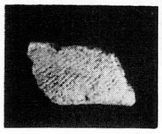
98

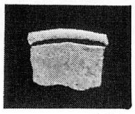

99

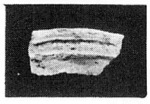

100

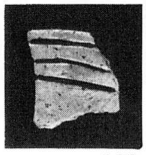

101


102


103

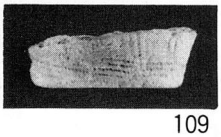

104

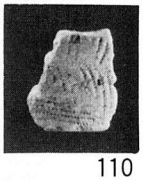

105


106

107

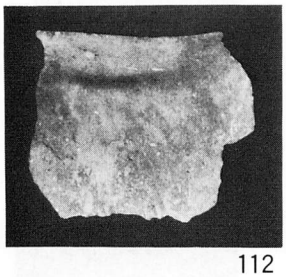
108

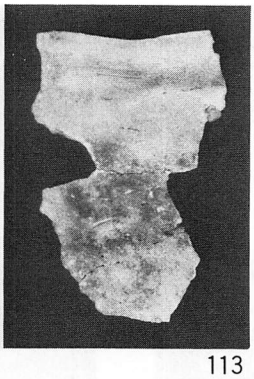

109

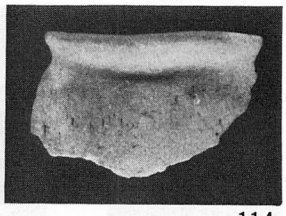

110

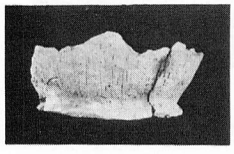
111

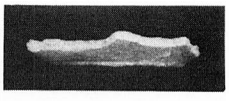
写真図版41　遺構外出土遺物（7）

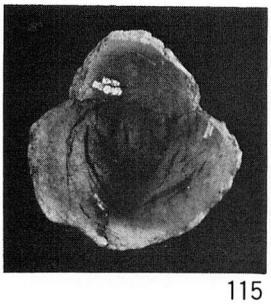

112

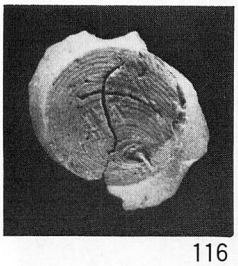

113

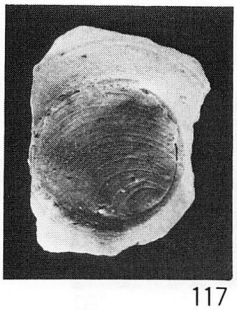

114

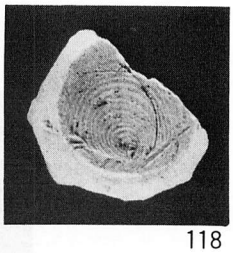


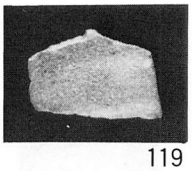



115

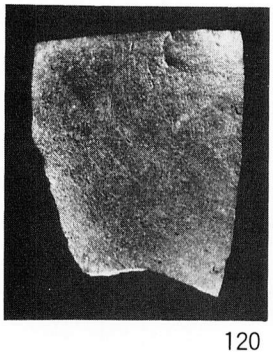

116

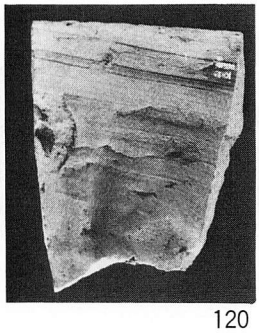

117

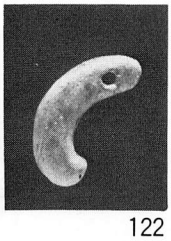

118

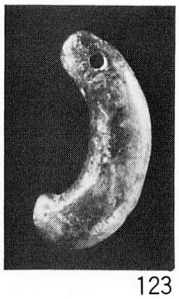

119

121


120


120

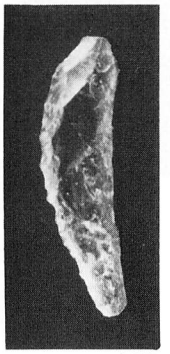

122

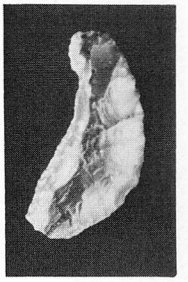

123

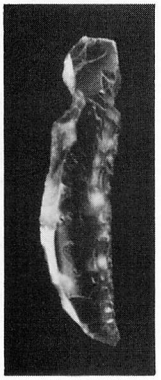
写真図版42　遺構外出土遺物（8）

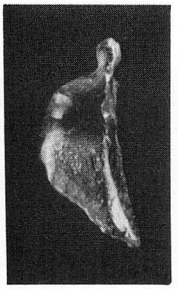
124

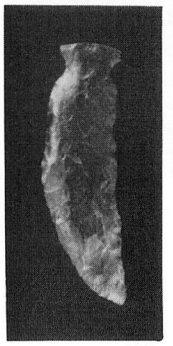
125

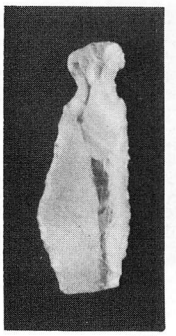

126

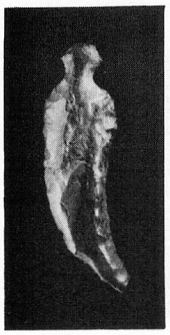

127

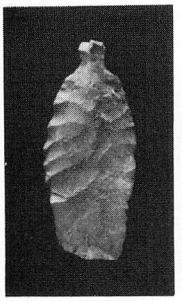

128

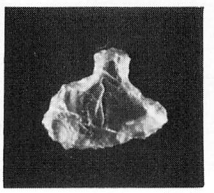

129

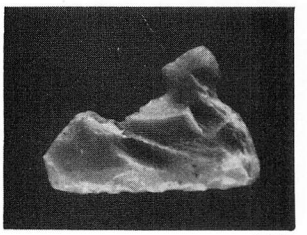

130

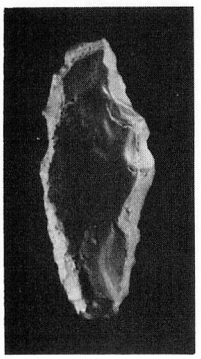

131

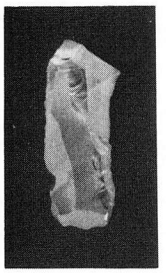

132


133

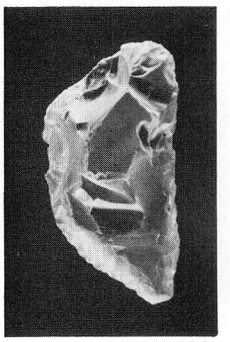

134


135

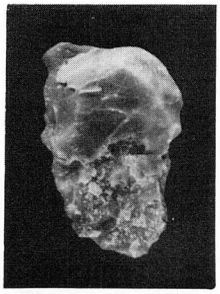

136


137

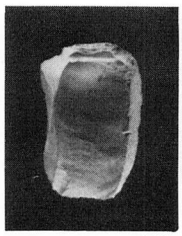
138

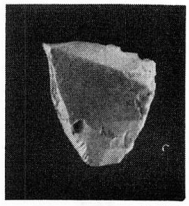

139

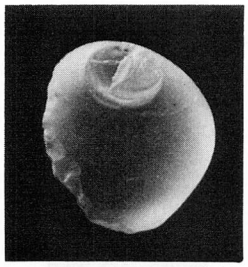
写真図版43　遺構外出土遺物（9）

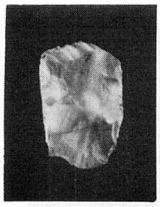

140

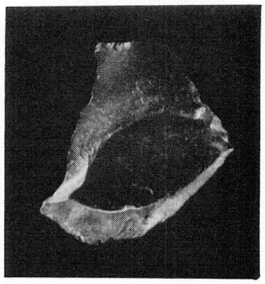
141

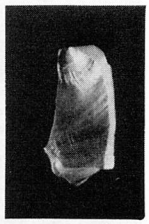

142

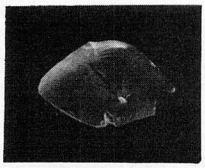

143


144

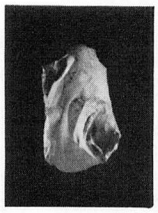

145

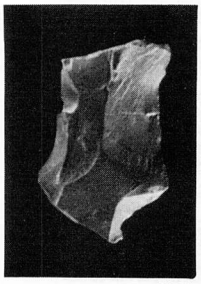

146

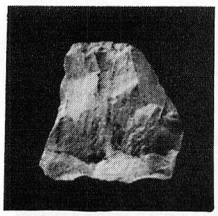

147


148

149


150


151

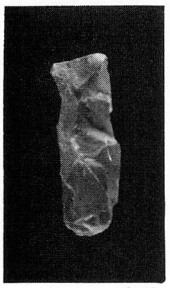

152

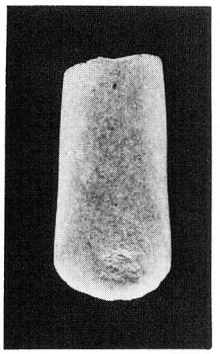
153

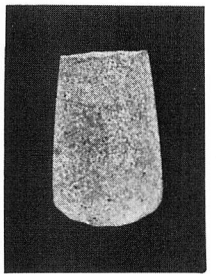
154

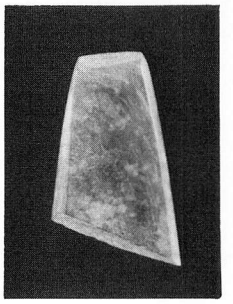
155

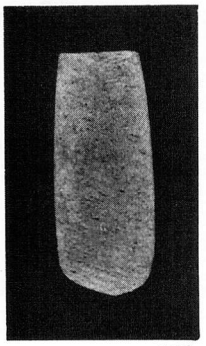
写真図版44　遺構外出土遺物(10)

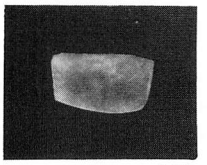

156

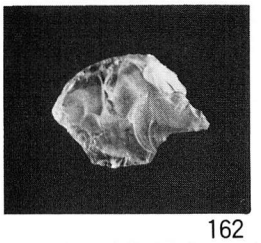

157

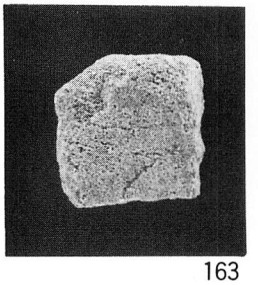

158

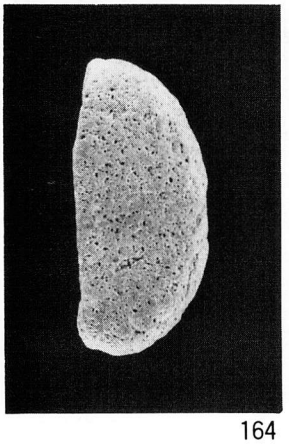

159

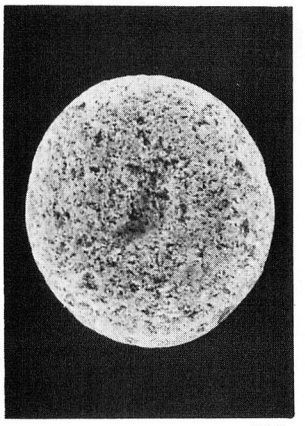

160

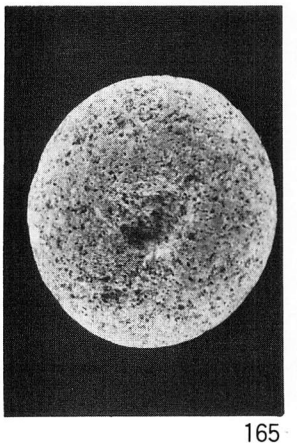

161


162


163


164


165


165

写真図版45　遺構外出土遺物(11)

岩手県埋文センター文化財調査報告書第80集

小屋畑遺跡発掘調査報告書

国道45号線久慈バイパス関連遺跡発掘調査

昭和59年　月　日印刷
昭和59年　月　日発行
発行　(財)岩手県埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡字高屋敷
TEL (0196)38−9001〜2
印刷　株式会社杜陵印刷
〒020-01 盛岡市厨川四丁目2番6号
TEL (0196) 41−8000